

コトタマ学

言霊の会

島田正路

第百号（第百七十三号）会報集成書

下卷

●コトタママ学下巻 目次●

平成八年

会報百号発行に当たって 1

言霊学随想

立春 5 / 言霊は何処にあるか 10 / 救世主の道 13 / 大祓祝詞 16
 大通智勝仏 20 / 手力男の命 21 / 俳句と和歌 25 / 薬師如来 28

平成九年

言霊と世界歴史その一 33 / 言霊と世界歴史その二 42

言霊と世界歴史 その三 51 / 言霊と世界歴史 その四 60

言霊学随想

歴史創造 65 / 太安萬侶の墓再訪 65 / 太安萬侶の墓再訪(その二) 70

平成十年

言霊と世界歴史 その五 77 / 言霊と世界歴史 その六 80

言霊と世界歴史 その七 90 / 言霊と世界歴史 その八 99

神様の戸籍(予告) 108 / 言霊と世界歴史 その九 108

神様の戸籍 その十三 112 / 言霊と世界歴史 その十 117

平成十一年

言霊と世界歴史	その十一	127	／読者の皆様へ	136
言霊と世界歴史	その十二	136	／私と世界歴史	145
言霊父韻について	その一	155	／言霊父韻について	その二
言霊学とは		174		165

言霊学随想

伊耶那岐の大神	185	／神人モーゼ・ロミュラス魂塚	194	／動かざる者(経綸者)	197
---------	-----	----------------	-----	-------------	-----

平成十二年

月と梅	204	／人類歴史と言霊学	213	／君が代	214
ラビ・トケーヤーの本を読んで	217				

言霊学随想

人類開眼(伊勢・石上紀行)	223	／言霊の幸倍へ三題	228		
高天原成彌栄	234	／白と鈴	240	／コトタマノマナヒ	241
神懸かりと沙庭	242	／光の歴史	245		

平成十三年

大祓祝詞の話	その一	247	／大祓祝詞の話	その二	256
--------	-----	-----	---------	-----	-----

平成十四年

言霊学随想

道と器	323	／太初に言あり	327	大祓祝詞の話	その三	266
				大祓祝詞の話	その五	285
				大祓祝詞の話	その六	295
				大祓祝詞の話	その八	313
				／大祓祝詞の話	その四	276
				／会報表題変更のお知らせ	その七	304

言霊学随想

生命	335	／言霊学と信仰	335	／アイエオウ	337	／言葉と生命	338
----	-----	---------	-----	--------	-----	--------	-----

平成八年

●会報百号発行に当たって

「言霊研究」会報が創刊以来百号を迎える事となりました。これもひとえに読者の皆様の御声援のたまものと厚く御礼申上げる次第であります。

「言霊研究」会報の創刊は一九八八年（昭和六十二年）七月であります。爾来今日まで八年余の歳月が流れた事になります。この間、顧みますと日本国内でも、世界全体でも歴史的に重要ないろいろな事が起りました。その変化が余りにも激しいものですから、人々は「近頃の世の移り変わりの一年は昔の百年にも当る」と言つて驚いたものであります。

先ず日本国内の変化から見ることによしましょう。会報創刊の翌年、昭和天皇がなくなりました。百二十四代、二千六百余年続いた神^{かんやまと}倭皇朝がここに終りを告げた事となります。この皇朝創建の目的は、それ以前、言霊布斗麻邇の原理を鏡として日本並びに世界の政治を行つて来た邇々芸・日子穂々出見・鵜草葺不合の三皇朝の精神文明時代に對し、人類のもう一つの文明である物質文明興隆のために、方便として言霊原理を隠し、弱肉強食の競争社会を現出させ、それを基盤とした物質科学文明を発達させる事であり

ました。その皇朝二千六百年の間、各代の天皇の第一の仕事は、言霊原理を器物として表徴した三種の神器を護持し、それを御神体として祭る伊勢神宮の大神主として、国民の国家信仰の対象となる神人天皇たるの座に着くことでありました。

一九四六年（昭和二十一年）一月の昭和天皇が発した詔勅「古事記・日本書紀の神話と日本皇室とは何の関係もない」の宣言は日本肇国の基本法とも言うべき言霊布斗麻邇の原理の象徴である三種の神器の否定・神人天皇への訣別であります。かくて神倭皇朝百二十四代は終りとなり、人間天皇時代、日本の伝統の見地から言えば、天皇空位時代を迎えました。宣言の御本人である昭和天皇の崩御は名実共に人間天皇時代の幕開けとなりました。現在の天皇御一家は民主主義国家の人間天皇御家族としての生活を謳歌なさつていらつしやるように見受けられます。日本のマスコミの皇室御一家のニュースの取材はまるで芸能タレント並みの有様です。皇室と日本国民との関係は今後どうなつて行くのでしょうか。

眼を日本の産業・経済へ転じましょう。会報創刊当時、已に始まつていた日本の産業・経済の膨張はその後一層その

速度を早めることとなります。企業は驚くべき速度で巨大化し、次々と国際企業化しました。その利潤は外貨の蓄積となり、海外への投資の増大となり、日本発のドル貨が全世界を駆け巡りました。日本は米国に次ぐ世界第二の経済大国に押し上がりました。その利潤は国内の不動産への投資となり、土地価格の天井知らずの高騰ともなりました。日本国民は知らず知らずの内に大成金に成り上ったのです。

山あれば谷あり。世の中の景気にも上下があります。天文学的規模で膨張した日本経済もここ数年かけりが見え、たそがれとなり、夜が来しました。人は何時しか、過ぎ去った好景気をバブル(泡)と呼び、下降の一途をたどる景気をバブルの崩壊と形容しました。世の中には企業のリストラによる雇用の停滞、不動産への投資・金融の回収不能というツケが重くのしかかっています。日本経済がここ数年の暗黒のトンネルを抜け出て、朝の光を望む事が出来る時は何時なのでしょう。日本の政治・産業・経済がそれぞれ自主性を持ち自らに課せられた構造改革という課題を克服し新しい前途に力強い第一歩を踏み出す事が出来るのでしょうか。

次に会報創刊以来ここ八年間の外国の状況を見ることにしましょう。そこにも日本国内と変らぬ社会変動を見ることが出来ます。先ず第一にロシアと東欧諸国に於ける共産主義体制の崩壊がありました。世界の二分野の一つを形成して来たこの体制は砂上の楼閣のごとく崩れ去ってしまいました。その結果、世界の超大国はアメリカ一国となり、二大勢力の均衡のためという抑止力がなくなり、世界各地に小中国の民族紛争が起りました。石油資源をバックに興ったアラブ民族諸国家の勢力が石油価格の急落と共に萎み、特に湾岸戦争後はその凋落傾向は顕著となりました。その結果三千年余続いて来たユダヤとアラブとの間の果てしない確執に漸く和解への曙光が見え始めた様にも考えられます。

欧州の不景気傾向の慢性化に対して、今まで貧困に喘いでいた東南アジア諸国の経済興隆は目覚ましいものがあり、来世紀はアジアの時代が来ると言われるようになりました。世界は新しい豊かな国々の勃興有り、また貧困の底に喘ぐ国々あり、それぞれに戦争の危険をはらみながらのこの八年間でありました。

以上近年の日本と世界の状況を駆け足で追って来まし

た。栄枯盛衰は世の習い^なの見方からは、数千年間変らぬ人間社会の姿だと見ることも出来ましょう。ただ現在の状況が昔と違う事は、科学技術の一般社会への普及が徹底化した為に、地球上の如何なる一点に起った出来事も全人類の運命と無関係では有り得なくなつた事であります。戦いの武器は弓矢・剣から鉄砲・大砲・ロケットへ、更に原水爆や種々の科学兵器へと進歩しました。各種情報技術の発達 は世界中の如何なる出来事も直接個人の家の茶の間を直撃することとなりました。各種化学産業の規模の巨大化は地球全面を包む大気汚染その他の公害を生み出しました。その影響は人間を含む地球上の生物の生存を脅かす事となりました。各民族内の精神荒廃は麻薬の蔓延を作り出しています。そして最も憂慮されることはこれ等の危機的状況の進行が従来の東洋の哲学・宗敎心や西欧的民主主義のヒューマニズム精神の救済能力を遙かに越えてしまつていくこととでありましょう。現代の世界の賢人・聖人と呼ばれる人々の精神能力では如何とも為し難い状況に人類は追い込まれてしまつたのです。従来の政治倫理・宗敎道德観・歴史観では捉えることが出来ない人類の危機的状況が現在進行しつつあります。その事に気付き愁える人々がこの様相を

人類の終末と呼ぶ所以です。

この様な状況に到つた世界の過去の歴史と現在の地球上に生きる人間としての責任をどう考えたらよいのでしょうか。私達が幼い時から学校で教えられ、新聞・テレビ等のマスコミの情報に啓発されて来た学問と経験知識が、この世界の窮状の打開には殆ど役に立たない事、また各宗敎が唱える「幸福への福音」が、この人類の危機の救済という問題に対しては如何に無力であるか、をいやと言う程知らされて来たのです。それら従来の主張に変わる根本的解決の方法が求められる現代なのです。

言霊の会はこの世界の終末的状況の解決のために会報を通じて種々の提言を発表して参りました(「古事記と言霊」歴史編参照)。「蟹はその甲羅に似せて穴を掘る」と言われます。人間社会もその甲羅に似せて歴史を創造します。その人間の甲羅とは実際には何なのでしょう。日本民族の数千年にわたる伝統の学問である言霊布斗麻邇の原理がその甲羅の全容を明らかに教えてくれます。それは人間が人間としての種(species)を持続する限り変ることのない人間の根本性能の全体構造のこととあります。この根本性能の見地に立つならば、人類の歴史の真相は自らの掌を指さ

す如くに明らかにすることが出来、従つてこれからの人類が進む将来がどう展開して行くかも、またその実現のためにどうしたらよいかの対処法も明々白々知ることが出来るようになります。すべては「人間とは何か」の自覚による当然の効用と言う事が出来るであります。創刊百号を迎えました「言霊研究」会報の記事を今後益々充実して行く必要を感じております。

最後に「古事記と言霊歴史編の中の「歴史創造の心」の一節を要約引用して、会報百号記念の言葉を締めくくり度いと思ひます。「度々言う事ではあります、世界の各地でんでばらばらに営まれる人々の行為の合計がそのまま世界の歴史となるではありません。私達日本人の大祖先である霊知りの天皇の計画された世界文明創造の経緯、言い換えると、人間を人間たらしめている言葉コトバそれ自体の発展が人類の歴史であります。それ故、人間それぞれが受け継いでいる人間という種の究極の精神原理である五十音言霊布斗麻邇の自覚に立つならば——人間の心の住家であるアオウエイ五母音の宇宙の実在を知り、その実在から現われ出て来る一切の現象の原動力である八父韻の認識を完成する言霊イの立場に立ち、言霊アの大慈大悲の心から人類の

歴史を見るならば、我とは人類であり、人類の歴史とは我の歴史に他ならず、それ故に世界の歴史の流れの中で過去にあり、現在に起りつつある歴史の出来事は全て、人類という種の生命を受け継ぐ我自らが《そうあれ》また《かくあれ》と決定し創造して来たものであることが心の中に明らかに了解されて来ます。それ故にまた世界人類の全ての声を自らの全生命で聞き、これに新しい生命の息吹を与えて、《かくあれ》と決定し、それを実現することが可能なのであります。この創造行為を我即人類、人類即我であるおんみま大身の禊祓と呼ぶことを古事記の神話は明らかに教えて呉れます。新しい世紀の開拓、人類待望の恒久平和世界の建設はこの原理に則つて初めて可能となります。」「
読者の皆様の今後共変らぬ御声援・御協力をお願い申し上げます。

一九九六年十月十日

言霊の会

読者の皆々様

【収載】第百号(平成八年十月)

言霊学随想

●立春

今年の暦を見ると節分二月三日、立春二月四日と記されている。辞書を引くと「節分」せつぶん。古代に於てはせちぶ・せちぶん。季節のうつり変わる時。立春・立夏・立秋・立冬の称。特に立春をいう。とある。

以上のことから、節分とは立春を含んで一年の内の四つの季節の移り変りの日の事を言つたものである事が分る。元日を過ぎてもうすぐ節分を迎えることとなるので、言霊布斗麻邇の学間を踏まえて節分と立春についてのあれこれを書く事としよう。

二月三日の節分には神社・仏閣で「鬼は外、福は内」と呼びながら豆をまく行事がある。魔除け・招福の祈願であろう。ところが、大本教とその流れを汲む宗教団体ではこの「豆まきの行事を行わない事になっている。その理由は次の通りである。鬼は外、福は内」の鬼とは鬼門の神である良の金神（神音の神）、言い換えると国常立の神の事であり、

福とは腹霊、腹に住む霊即ち物質欲望の霊のことである。昔、真正直な神様である国常立の神が治める道德政治の行きわたった平和な時代があった。それがあつた時代から人間の心の中に「自分だけ良ければよい」という欲望が強くなり、遂に正直な国常立の神が居ては目障りとなり、煙たがるようになった。世の中の大勢には止むを得ず、国立の神は「妙り豆に花の咲く時再び姿を現わして世直しをするぞ」と言つて、丑寅（良）即ち東と北の間の方向に隠れてしまわれた。人々は自分達の欲望を達成するためには、この神様に出て来てほしくないといい、丑寅の方向に門を立てて、これを鬼の門（鬼門）と呼び、神様を封じ込めてしまった。その時以来、欲張りの人が甘い汁を吸う不正直者の天下の世が続くようになった。「鬼は外、福は内」即ち「鬼門の神である国常立の神は外におれ、欲望の腹の霊よ、内に入って働け」と叫び、「妙り豆に花など咲くものか」と豆を投げつけるのだ、というわけである。これが大本教その他の宗教が節分に豆をまかない理由である。明治の時代に世の建て替え、建て直しの時の到来を世の人に告げるために現われた皇道大本のこの主張はそれなりに意義深いものと言えるであらう。

二月三日節分の豆まきの行事に対する大本教の主張は右の如くであるが、アイウエオ五十音言霊学の立場から見れば良の金神である国常立の神とは如何なる内容の神なのであろうか。

そもそも国常立の神という神は大本教々祖出口ナホ氏に憑いて多くの御神示を告げた神である。その第一声は有名である。「三千世界、一度に開く梅の花、梅で開いて松で収める神の代が来るぞ。」また次の様なお筆先もある。「いろは四十八文字で世を治めるぞ」

以上のお筆先に見られるように、国常立の神とは五十音言霊の原理と関係の深い神であることが理解されるであろう。「梅で開いて松で収める……」とは心の宇宙の初発の活動であるウーアーワの先天構造の事を譬えた事であり、「いろは四十八文字で世を治めるぞ」とは五十音言霊原理に基づいて世界の政治を建直す事を言ったものなのである。それならばアイウエオ五十音言霊の原理の教科書である古事記・日本書紀に於て国常立の神は如何に説かれているのであろうか。

今回は日本書紀を取り上げて見よう。日本書紀の神代上巻(かみよのかみのまき)の冒頭に次の文章がある。

「古(いにしえ)に天地未だ判(わか)れず、陰陽(めお)分れざりしとき、混沌(まろか)れたること鷄子(とりのこ)の如くにして、ほのかにして牙(きざし)を含めり。それ清陽(すみあきらか)なるものは、たなびきて天となり、重濁(おもくにご)れるものは、淹滞(つつ)みて地と為るに及びて、精妙(くわしくたえ)なるが合えるは構(むら)がり易く、重濁れるが凝りたるは場(かたま)り難し。故(かれ)、天先づ成りて地後に定まる。然して後に、神聖(かみ)、其の中に生(あ)れます。故曰わく、開闢(あめつらひら)くる初(はじめ)に、洲埭(くにつら)の浮れ漂えること、譬(たと)えば游魚(あそぶい)とつもの水上に浮けるが猶(ごと)し。時に、天地の中に一物(ひとつもの)生れり。状(かたち)葦牙(あしかび)の如し。便(すなわ)ち神と化(な)る。国常立尊(くにとこたらのみこと)と号(もう)す……」

右の日本書紀の文章を要約すると次の様になる。

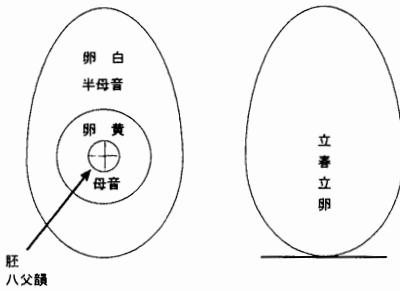
「心の宇宙の初発の時には混沌としていて譬えて言えば一度一つの鶏卵のようなものである。そこに活動が始まり、先ず天地がわかれ、その中に神が生れた。それは天地の中

のただ一つのものとして生れた。国常立尊といわれた……」
 文章の言霊学的意味の詳細は他の機会に譲るが、日本書紀がその冒頭に於て人間の心の活動の始めを一つの鶏卵に譬え、その混沌の状態の中に国常立尊という神が生れ出て来る事を述べているのに御留意願ひ度い。この宇宙の始めを卵に譬え、その唯一つの宇宙をお祭りする行事が中国に伝わっているのを御存じであろうか。立春立卵の行事がそれである。

春の節分である立春の朝、食卓に卵を一つ縦に立て、その廻りに家族が坐つて宇宙の一つであることを心に刻むお祝いをする。
 立春立卵という(詳しくは会報十九号「立春立卵」参照)。現在では中国は勿論我が国に於てもそのお祝いの意味は不明になつてしまつてゐるが、右に挙げた日本書紀の文章がそのお祝いの意義を見事に解き明かしているのである。立春立卵のお祝いとは何のお祝いなのであろうか。

宇宙は一つである。心の宇宙も一

図 092-A



つである。誰彼の区別はない。この誰彼区別なく唯一つの心の宇宙から自分達の心が現われて来るという事実を心に刻みお祝いをする。そのお祝いが立卵の行事であるのだが、それなら何故卵なのかという疑問が起る。一つの宇宙を一ケの卵(鶏の子)に譬えたのである。それは何故か。その理由は中国でも不明である。唯一つ日本書紀に示された日本の言霊学の原理がそれを教えてくれる。

卵の中には卵黄と卵白がある。これを母音と半母音に見立てる。母音・半母音だけでは現象は起らない。卵黄と卵白だけでは無精卵となり、雛は生れない。卵が雛に孵(かえ)るためには卵子が精子を受けた胚子(はいし)がなければならぬ。書紀はこの卵の胚子を父韻に譬えているのである。この父韻の働きを国常立尊という。胚子が育つて卵黄・卵白を栄養として雛に孵える卵の状態を、父韻と母音(半母音)が結ばれて子音を生む言霊学の原理に譬えたわけである。

ならば時期が何故立春なのか。この事に関して科学的研究の手がいろいろ差し延べられたらしい。中央气象台も卵を立てるのに立春の季節

の氣候が關係があるか、どうか調べたらしい。その結果は不明という事になったそうだ。ならば何故立春立卵なのか。

卵を立てるといふ作業に立春といふ氣候が物質科学的に關係がないとすれば、立春立卵の行事は精神的な言挙げと言つて差支えあるまい。そこで先に挙げた日本書紀の文章の意味が登場する。卵を立てるといふ事の意味は、卵の構造によつて示された人間の心の構造の法則・原理が明らかに真理であることが立証され、世の中に承認される事を指している。これが「卵が立つ」事の本当の意味である。

立春とは日本古代曆の正月元日に當る。元日は政治・經濟・庶民生活等すべてのものの事始めの日である。元日に事の一切が新たになる。卵が立つ日、卵に表徴される人間の心の原理であるアイウエオ五十音の言靈の原理が世の中に承認される日、その日を期して世界中の、人類全体の政治・經濟・宗教・教育……の制度・機構等がすべて新しい世紀の文明として生れ変わる事となる。かりそめの世の方法が人間精神の根本原理に基づいた人類の新しい恒久平和の世の中の制度に吸収されて行く事になる。立春立卵の立春とは毎年廻り来る立春だけではなく、三千年を一年とする人類文明の歴史の元日の立春をも表わした行事であつたの

だ。

立春立卵の中国の行事の意義が日本語の語源の学であるアイウエオ五十音言靈学によつて初めて示される事は以上の様であるが、實際に卵は板の上に立つのだろうか。立春立卵研究家・獣医師津野正朗氏はガラス板の上に、生れてから三日乃至十日の生卵を使つて一九八六年三月、百個の卵を同時に立てるといふ世界記録を樹立し、この前人未踏の記録はギネスブックに載つており、その記録は未だ今日まで破られていないそうである。えらい事をする人もあるものである。

立春立卵に於ける卵の構造、言い換えると五十音言靈の原理は二千年以前の太古にあつた姿そのままに復元完成され、私達の目の前にある。これを人類の住む地球上の檢舞台の上に實際に立てることが出来るか、否か。人類の命運は一にこれに懸かっている、といふ事が出来よう。けれど心配はいらない。立卵の卵の構造の詳細は勿論のこと、それを立てる方法手段も言靈布斗麻邇の原理が明らかに示して呉れる。人類は大船に乗っているのであり、万々が一にも破船はない。

長き夜(世)の遠のねふり(眠り・音振り)の皆目覚め、
波のり船の音のよきかな(古歌)

なのである。

以上、節分・立春に因んで「豆まき」や「立春立卵」の行事について思いつくまゝを述べて来たのだが、考えてみるとこれ等の行事は或る物事に託した歴史の予言であることである。「豆まき」は国常立神の出現の予言であり、「立春立卵」もまた同じ国常立神に代表される言霊原理による歴史転換の予言なのだ。予言であるから「近い将来かくかくの事になる」という前触れである。予言の半分はすでに的中した。国常立神即ち言霊原理は予言通り復活した。残るは原理による世の建直しであり、その実行であろう。

そこで次のように宣言することが出来る。「予言の時代は過ぎた。今よりは予言実現のための実行の時に入る」と。予言の時代から実行の時代へ、それは「どうなるか」の時代から「どうしたらよいか」の時代への移行ということであろう。

言霊百神の古事記文章の最後の章、伊耶那岐命の言葉を思ひ出して頂き度。

「吾は子を生み生みて、生みの終に、三柱の貴子を得たり」と詔りたまひて、すなはちその御頸珠の玉の緒ももゆらに取りゆらかして、天照大神に賜ひて詔りたまはく、「汝が命は高天原を知らせ」と。言依さして賜ひき。かれその御頸珠の名を御倉板挙の神といふ。次に月読の命に詔りたまはく、「汝が命は夜の食国を知らせ」と、言依さしたまひき。次に建速須佐の男の命に詔りたまはく、「汝が命は海原を知らせ」と、言依さしたまひき。

父君、伊耶那岐命が三貴子に与えた三権分立の統治の中で、天照大神(言霊王)にのみ言霊原理(御頸珠)の活用を許された。言霊原理は言霊王、即ち「今・此処に於て如何に対処するか」の実践智にのみその活用が可能なのである。

予言の時代が終り、実際の建設の時代が到来した。予言の使命は終り、人間が言霊原理を学んで世の建直しに責任を持ち、自らの手によって新しい世界を創造する時が来た。神に代って生きた人間が主役となる時代となった。

予言の神ではなく、私達自身が「いろは四十八文字で世を治める」時代となったのである。

【収載】第九十二号(平成八年二月)

●言霊は何処にあるか

今日まで言霊布斗麻邇と呼ばれる日本伝統の学問について大勢の方々にお話をして来たが、「言霊って何処にあるんだね」という質問を受けた事がない。「言霊は何処に存在するか」は言霊学にとつて最も大切な問題なのだが私の話を聞いて下さる人は勿論、話をする私自身すらこの論点から意識が離れてしまふ時が多いのは何故なのであろうか。

言霊学は数千年以前からこの日本に伝わる「人間とは何か」「日本語の起源とは」の問題を根底から解明した学問なのであるが、世界の物質科学文明進歩促進のため、約二千年の間、世の中の人々の意識の表面から全く隠されてしまつて、現代に至つて初めてその全貌が明らかとなり、不死鳥の如く復活して来たものなのである。そのため、言霊学は古くて然も非常に新しい学問であるから、今の世の人々にとつては全く耳新しいもので、話を聞いても、聞く事全てが今迄一度も聞いた事がない事ばかりなので、言霊学の核心である「言霊とは何処にあるのか」などの質問は思いもよらぬものであるためであらう。

更に言霊学を社会に普及させようと務める私自身の話も

「言霊とは何か」の説明に自然片寄つてしまひ、「言霊の所在」という最重要の問題がいついつい等閑に、という事になつてしまふ事によるためであらう。

それなら言霊は何処にあるのか。更めて考えてみることにしよう。問題は先ず学問的立場から、次に実践的な見地からの二つに絞つて考えてみよう。

人間の心は五段階の界層をなす宇宙に住んでいる。初めは五官（眼耳鼻舌身）の感覚の宇宙。次に五官感覚によつて得た経験相互の関係を法則化して行く経験知の宇宙。次に五官感覚による認識や経験知とも違う人間の感情の宇宙。第四番目は物事に対処するに當つて五官感覚認識や経験知や感情というものを如何に取り込んで生きて行けばよいか、を決定する実践智の宇宙。そして最後に人間性能の最も奥にあつて他の四つの次元の宇宙を下支えしている生命創造意志の宇宙である。言霊学は以上の五界層の宇宙にそれぞれ五つの母音を当て、ウオアエイの宇宙と呼んでいる。最後に挙げた創造意志の次元について一言検討しておこう。人間の創造意志（言霊イ）は五官感覚（言霊ウ）によつては決して捉えることは出来ない。だから五官認識による欲望の仕事、例えば商売にのみ関心を持つ商人には関係のな

い話である。また言霊才の経験知・学問によってもこれを理解することが出来ない。言霊という存在が経験知の認識を越えた所にあるためである。

第三番目の言霊アである人間の感情に根ざした宗教・芸術の世界ではどうであろうか。宗教的に種智とか、摩尼とか、生命の城とか呼ばれているものが純粹に存在する精神の最奥の世界が各宗教で高天原・天国・極楽として説かれて来た。高天原は天の彼方に、極楽は西方十萬億土の向こうに、あこがれと信仰の対象として説かれて来た。そのため宗教に於ても言霊そのもの、摩尼そのものを自らのもの、人間の側のものとして捉えることは不可能な事であり、その事に言及する事が神仏への冒瀆ぼうとくと見なされ勝ちであった。同じく言霊アに属する芸術活動に於ても「言霊の幸福ふくふ国」と言われるその言霊自体を創造の対象とする作品は見る事が出来ない。

言霊はそれ程に遠い存在であり、単にあこがれの対象としてだけ求められるものなのであるのか。決してそうではない。言霊とは信仰の対象でもなく、学問の永遠の未来にある目標なのでもない。現実私達人間の内奥にあって毎日毎日の生活を、そして人類文明の創造を一瞬も休むこと

なく導いて呉れている清浄無垢な生命の力動なのである。言霊は「大道廃れて仁義あり」といわれる第四次元の道德の宇宙にも存在せず、ただ最後の第五のイ言霊の宇宙に、珠玉の如き円満な姿で存在し、活動しており、他の四次元の如何なる思惟も想像からも隔絶しているのである。

言霊は何処に存在するのか。第五次元の人間の創造意志の世界にそれのみ純粹に存在している。それは他の第四次元までのウオアエ即ち五官による感覚・経験知・感情・道徳観では捉えることは不可能である。けれど逆に生命最高にして最奥の力動である言霊イの世界の言霊が、第二次的に人間の意識として自らを顕わして行く働きがウオアエの四智である、ということが出来る。人間の第五の最高智であり、すべての活動の根元である言霊は過去二千年間、人間の自覚した姿で活動することがなかった。その言霊の学が二千年前あったと同じ姿で、この人間社会に復活を遂げた。今では言霊は現実の社会に、現実に生きた人間の自覚の下に、人間の第五の生命創造意志の次元に存在している。であるから、先に指摘した五官感覚認識の宇宙は言霊ウ、経験知の宇宙は言霊オ、感情の宇宙は言霊ア、実践智の宇宙は言霊エという名前も、言霊イの生命創造意志の次元に

立つて初めて命名されるものなのである。言霊イの次元以外に言霊五十音は存在していない事から来る当然の結論と
いうことが出来る。

さて以上お話しした事で言霊学という学問上で言霊が何処に存在しているかは分った。言霊は第五次元の言霊イの界層に存在する。そうしたら人間はどう対処し、勉強したら良いのか。今迄の話がただこれだけで終わってしまえば、言霊は何処に存在するか、という知識で終わってしまう。知識から実践へ進むにはどうしたら良いのか。言霊というものがある、という事から出発して、言霊の原理を自らの心全体で捉え、その原理によって自らを見つめ、社会を見、人類文明の創造に寄与するためにはどうしたら良いのか。知識から実践への道は如何。言霊についての知識を身につけることと、生きた言霊、自分自身を一瞬の休みもなく導いてくれている言霊に現実接することとは全く違うことである。

いとも平々凡々たる人間が一瞬の休みもなく言霊に触れ、言霊によって生きている所と時は何時・何処か。言霊学を知っている人も、全く知らない人も、生きている間、常に言霊によって生きている時と場所は何れか。

言霊が常に生きて活動している所、それは私達が生命を燃焼し、現実自らの生活や社会や人類文明を創造しつつある所であり、古神道はこれを「中今」と呼ぶ。中今とは常なる此処・今のことである。言霊五十音は常にこの中今の中で活動し、生命を創造している。アイウエオ五十音言霊とはこの今・此処即ち中今の内容なのである。生きた言霊に接している自覚を持ちたいならば、言霊が活動している地点、中今に帰ればいい。方法は唯一つ、これだけである。人は常にこの中今に於て生きている。常にそこに生きていながら、それを自覚する人は少ない。中今を自覚する次元を言霊アという。その中今の内容である言霊が活動して、生活を、文明を創造して行く次元を言霊エという。五十音言霊の原理は「今此処に於て物事に対処して何かをしようとする瞬間」即ち実践智の働く瞬間に於て操作することが出来るものなのである。

古事記百神の総結論である三貴子(みはしらのうづみこ)天照大神・月読命・建速須佐の男の命の誕生に際して、父の神伊耶那岐の命が天照大神(言霊エ)にのみ御頸珠(みくづたま) (言霊原理)を授け、他の二神には許可することがなかった所以である。言霊原理は言霊エの実践智に於てのみ操作活用が

可能なのである。

因みに、わが先師小笠原孝次氏の「言霊百神」の冒頭の文章を抜粋して参考に供することにしよう。

天地は今此処で絶えず開闢しつつある。古事記が説く「天地のはじめ」とは天文学や生物学や歴史の上の観念で取り扱うところの事物の初めを言っているのではない。古事記神代巻は必ずしも過ぎ去った大昔の事を取扱っているわけではない。今が、そして此処が、すなわち nowhere が恒常に天地の初めの時であり場所である。すなわち天地は実際に今、此処で絶えず評判し開闢しつつある。その今を永遠の今と言う。そしてその場所が常に宇宙の中心である。この今、此処を「中今」（続日本紀）と言う。

この始原である中今から天地は瞬間に剖判して、忽然として森羅万象を現出する。言霊麻邇はその瞬間に活動する生命の知性の内容でありその原律である。この恒常の天地の初めである「中今」を把握することがあらゆる事物をその根源から理解する上の正規の出発点である。仏教、キリスト教、儒教等の古来の哲学宗教の修証である「空」「悟り」「救われ」「天」などと言われる宗教上の体認は全ての中今を把握することに他ならない。そしてこの中今と言う天地の初めの把握が神道に入る門であり、神道の出発点

である。布斗麻邇とはこの「空」である中今の精神的大宇宙の自覚内容のことであり、並びにその原理原律を人間の自覚と自主律性の下に社会国家に活用して行く方法を言うのである（文章一部省略）。

【収載】第九十三号（平成八年三月）

●救世主の道

「私、死に度くて仕方がないんです」

ある晩、見知らぬ人から突然の電話である。驚いて極力先方が興奮しないよう宥めながら話を聞いて見た。自殺したくなる原因は間違った信仰心による自分の行為を極度に悩んでの事である事が分って来た。心情は分らないではないが、同情を抜きにすれば、その心理は滑稽でさえある。そうも言っていられないので、懸命な一問一答を繰り返し、やっと「よく考えてみます」という相手の言葉を引出し、電話を切った。「ホツ」とすると同時に余り気色よい気分ではなかった。話の合間に知った事だが、紹介したのは言霊の会に出席した事のある人からという事であった。

アイウエオ五十音言霊は生きた人間の今・此処（中今）の内容として存在する人間の精神生命の構成要素である。言

靈はまた一音で靈と呼ばれる。その活動が靈馭り、即ち光である。常なる今・此処を把握するための修行をすすめ指導したのが従来の儒仏耶の宗教であり、そこで説かれる「空」「救われ」「天」「宇宙」「光」等々の把握と自覚が言靈布斗麻邇の学問に入る門だ、ということが出来る。言靈布斗麻邇はその光の内容と活動の法則である。

当言靈の会では、古事記・日本書紀の神代卷に則つて言靈布斗麻邇の学問を解説する一方、その学問に入る要諦として今・此処の自覚を得るための宗教信仰心理の説明や、私達の大先祖の靈知り達が言靈原理隠没の二千年間、人々の心の支柱として樹立した宗教の意義等についても合わせて解説を試みている。

そうした事の半面の影響と思われるが、ともすると言靈の学問の話は影が薄くなり、信仰心理の解説が個人の生活上の悩みの相談・救済の話の方に片寄ってしまう事が無きにしもあらず、という事態を招来し、果ては前述の如く「自殺一〇番」の役目を負わねばならぬ破目に陥ることもなりかねない。

そんな誤解を招かないために、一言はつきりとお話して置く事にしよう。

言靈五十音布斗麻邇の学問とは日本民族並びに世界人類全体に恒久平和、物質科学文明との調和ある道徳政治を行う為の基本原理となる完成された精神の学問であります。

旧約聖書ヨハネの黙示録二十一章「視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と共に住み、人、神の民となり、神みづから人と偕に在して、かれらの目の涙をことごとく拭ひ去り給はん。今よりのち死もなく、悲歎も号叫も苦痛もなかるべし。前のもの既に過ぎ去りたればなり」の予言を完成させ得る人類唯一の真理であります。

「神みづから人と偕に在して、かれらの目の涙をことごとく拭ひ去り給はん」と言ひましても、この原理によって人類一人一人を教化し、幸福に導き、その結果、恒久平和の世界を築いて行こうとする個人救済の所謂宗教の真理ではありません。現在の世界の各宗教が行っている個人救済とは直接には何ら関係のない学問であります。

現在地球上には約六十億の人が住んでいると言われています。これを五官感覚認識の言靈ウ次元の見地から見ると、六十億の人々が各自でんでばらばらに五官感覚を働かせ、それぞれ違った認識の下に生活している事は間違ありません。次に経験知である言靈オの観点に立ちまして

も、また人々はそれぞれの経験知を生かして生きています。言霊アの感情の次元におきましても同様別個の生活が繰り広げられている事を見ることが出来ます。

ところが、人間の生命創造意志である言霊イと、その原理を活用して人類文明を如何に創造して行くか、という言霊エの次元から見る時、六十億人で構成された人類はただ一つの生命体であり、その見地からする人類の歴史はただ一筋の生命の流れであることが明瞭に看取されて来ます。人類は一つなのです。文字通りただ一個の生命体なのです。それは理論的に明瞭であるばかりでなく、実際にその通りに動いている生命体なのです。

言霊布斗麻邇の原理とはただ一個の人類という生命体の頭脳活動の根本法則であり、人類という生物がこの宇宙に生き、自らの生きて行く究極の目的を決定し、そこに向う筋道を切り拓いて行く英智の発信所でもあります。

でありますから、この地球上で一人乃至二人、三人が言霊布斗麻邇の原理を勉強し、それを理解し、自覚して、その原理の灯を高くこの世の中に掲げることが出来るならば、その時を期して人類は布斗麻邇の原理による最高の行動指針の指導下に置かれることになります。謂わば人類と

いう名の人間の頭脳中枢に良心という灯が輝き始めた事になるのです。

一生命体である人類の頭脳中枢に生命創造意志の原理の自覚の灯がともったということは、取りも直さず地球上の人間一人一人の頭脳中枢に創造意志の原理の活動が動き出した事でもあります。たとえその一人一人がその事実を知ることなく、またそれを自覚することがなくとも、頭脳中枢にともった灯は現実とその潜在意識に影響を与え始める事となります。その力は眼には見え、耳にも聞えず、新聞・テレビ・ラジオ等のマスコミにも一切報道されることはありませんが、その隠れた力は徐々に力を増し、世界の人々がそれに気が付いた時には、已に世界情勢の根幹は大きな変革の途上にあることに驚くこととなります。

こんな事をお話すると如何にも空想じみた、神懸かりじみた事のように思われるかも知れません。けれど今後行われるであろうところの、暗黒より光明世界への転換は文字通りそのように一点の光が現実を照らし、現世界を照らし始めた時より、一瞬にして世界はその転換が開始されることとなります。神懸りといえば、これ以上神懸った事はありません。と同時に現実としてはまたこれ以上現実的な

こともあり得ない事なのです。

仏教に撰取不捨という言葉があります。仏の救世ぐせの徳の力は善人も悪人もそれそのままの姿で地獄から極楽に救い上げて一人も捨てる事がない、と説かれます。それは一人一人を得度させて安養浄土に導く事ではなく、人々それぞれのままの姿で、地獄世界に大法輪を転じ、極楽浄土に化す、ということなのです。それは近い将来、言霊布斗麻邇の原理がこの世を恒久平和の世に転換することの予告として説かれたものに他なりません。

光が差せば暗黒はすべて一瞬にして消え去ります。光で闇の一つ一つを消して行くわけではありません。言霊の原理が世の中を照らす状況もこれと全く同様です。言霊布斗麻邇の原理が、ある時、ある人の前にその自覚の光を輝かす時、世界の歴史の根底に、そして全世界に瞬時にして転換の歯車を廻し始めることが出来ます。救世主の降臨とはそういう事なのです。

アイウエオ五十音言霊の学問とは、人であり同時に神である人間を救世主たらしめる光の構造の原理であります。

【収載】第九十五号(平成八年五月)

●大祝詞

時々、言霊学の立場から神道の大祝詞おほはらひありこの意味・内容について解説せよという注文を受ける事があります。その折は「では」と乗気になるのですが、考えてみると大祝詞には現代人が理解し難い文字や言葉が数多くありますので、その一つ一つの意味を説明して行ったのでは全体の解説の話が余りにも長くなります。その難解の言葉や文章の大半は言霊学の原理の表徴として書かれたものでありますから、言霊学の大要をざっとでも吞込んで頂いた後でないと、大祝の意味の理解は仲々骨が折れることとなります。そんな理由から未だに注文に応じていないのが実状であります。

そこで将来大祝詞全編の解説を始めるための予告編として、祝詞に関する二・三の感想を随想の形でお話することにしましょう。

大祝詞とはどんな事が述べられているのか。辞書を見ると「祝詞のりと、上代神に対して宣り申す言葉。古代独特の文章で、延喜(九〇〇年)式、巻八に収められている二十六編をその代表作とする。近世以降は神式の葬儀靈祭にも用いられる」とあります。

読者の皆様も神式の結婚式・地鎮祭・葬儀などで一度や二度は見聞した事があるかと思いますが、神主さんが人々の前に立ち、神様の方を向いて祝詞を読み上げます。辞書にありますように「神に対して宣り申す言葉」という意味を実際に行っている事になります。

果して辞書の説明が真実であるのか、どうか、言霊学から見た大祓祝詞の概要を述べることにしましょう。先ず大祓祝詞の冒頭の文章を載せます。

六月晦大祓

集あつ付なはれる、親みこ王おほなみ、諸あま王つかき、諸あま臣つかき、百官人達もものつかさびと諸あま聞つ召ませ
と宜なる。天皇すめらが朝廷みかどに仕へ奉る、比ひ礼れ挂かくる伴男とものを、
手た極すき挂かくる伴男とものを、靱ゆき負おふ伴男とものを、劔たち佩はく伴男とものを、伴男とものをの八
十や伴男とものをと始はめて、官つかさ々に仕へ奉る人達の、過あやら犯とし
けむ雑くさ々の罪とがと、今年ことしの六月晦むつきの大祓おほなみに、祓あはれ清きよめ給たまふ
ふ事ことと、諸あま聞つ召ませと宣のたまふ……

以上が序文に当ります。では大祓祝詞の本文はどうか。祝詞独特の美文調で、日本並びに世界人類の歴史に関する、現代人が夢にも思わない重要な事柄、特に予言が述べられています。一見ただの美辞麗句とだけに見える文章が、ひ

と度言霊学という日本語の語源の学問の飾かざりにかけられますと、祝詞の真実とそれを制定した私達日本人の祖先の高遠な歴史に対する洞察の素晴らしさが理解されて来ます。ではその内容はどんなものか。全編の詳細はまたの機会に譲り、その内容を簡条書きにすると次のようになります。

- 一、日本人の祖先が初めて日本国家を建設した時の歴史
- 二、国を肇めるに当たっての精神的基本原理
- 三、歴史の進展の途上、建国の基本原理が一時隠没する事となる時以後の、世界に起つて来る社会の矛盾と混乱についての精神上並びに現象面での解説
- 四、その国難の時代の末に、人々が長かった罪穢つみじがれの状态から目覚め、本来の肇国の原理に立返り、恒久平和な世界に転換するための方法の教示
- 五、その結果樹立される平和・繁栄の世界を経営・維持するための方策

等々のことが簡潔に述べられています。

言霊学という学問のあぶり出しによって以上のような、神社の神主さん、国学の先生方でさえ驚倒するような事柄が現われて来ます。煩雑を避け今回は大祓祝詞の真実の内

容と現代人の常識との間にどんなに大きな隔りがあるか、その二・三について感想を述べてみましょう。

先ず最初に気付く事は祝詞を読む仕方との相違であります。現在では先に辞書の説明にありましたように、神主さんは人々の先頭に立ち、神様の方に向い、神様に祝詞を奏上しています。これは神社神道が創設されて以来、仏教の読経の形式を取り入れた結果であります。言霊の原理が実際に世の中の政治に活用されていた古代にはどうだったのでしょうか。事は全く逆でありました。「天子南面す」と言われます。天皇は北より南に向い、中臣氏が天皇の前にあつて南を向き、その前に参集した文武百官が北を向き、中臣は天皇の代理となり祝詞を天皇の御言葉として読み上げたものであります。

右の如く大祓祝詞は霊知りの天皇から朝廷の文武百官並びに国民に向つて発布された勅語であり、命令であり、歴史の予言でありました。決して見えない神を対象にして国民が物事を祈願する言葉ではありませんでした。古代に於ては人々が物乞いの対象とする神は存在しなかつたのであります。

第二に取上げるのは大祓祝詞の作成年代についてであり

ます。現代に於ては、辞書にありますように延喜年間（約九〇〇年頃）の制定が常識になつてゐるようではありますが、実際にはその作成年代は遙かに古く、今より四千年乃至四千五百年以前と推定されることあります。竹内文献その他の古文書には鶺鴒草不合葺皇朝三十八代天津太祝詞子天皇が大祓祝詞を作成したと伝えてあります。不合葺皇朝六十九代神足別豊鋤天皇の時、ユダヤ民族の王モーゼ来朝、天皇モーゼに十戒を授けた事が記されています。その上、十戒と共に大祓の祝詞の一部もモーゼに伝えられた事が明瞭に推察されます。旧約聖書の出エジプト記並びに利未記をお読み下さい。その中に大祓祝詞の一部分の文章と聖書の中のそれとが「よくもこう似たものだ」と思う程同一の意味の箇所が見えます。お読みになれば明らかに理解されることですが、これはもう偶然と言う域を遙かに越えた相似点であることから、モーゼ来朝の事実並びに大祓祝詞が少なくとも四千年以前に制定されていた事を物語っていると断言出来ましょう。

その後大祓祝詞の言葉は幾多の変遷を経て、柿本人麻呂（七百年頃）の修辭によつて最終的に現在見る如き美文調の祝詞となつたと伝えられています。

感想の最後に大被祝詞の内容の中で現代の世界文明の大転換についての予告と、それを可能にする方策が述べられた部分について触れておくことにしましょう。

大被祝詞の中に次の様な文章があります。

「斯く出でば、天津宮事みやうじ以らて、大中匠、天津金木と、本打切り、本打断らて、千度の置座おきざに置足らはして、天津菅麻すがまと、本刈断ら、本刈切りて、八針はちはりに取辟とくさきて、天津祝詞の太祝詞事を宣れ。」

以上の祝詞の一節の意味については、従来種々の憶説がなされて来ましたが、けれど言霊の原理がすべて解明された現在では、天津金木・天津菅麻・天津太祝詞の意義・内容が明らかとなり、文章の内容はすべてその謎が解き明かされることになりました(図096-A参照)。金木・菅麻・太祝詞はそれぞれ言霊ウ・イ・エを中心に据えた心の構造を表わす五十音図であります。

図 096-A

麻 菅 津 天									
ワ	ナ	ラ	マ	ヤ	ハ	サ	カ	タ	ア
ヲ									オ
ウ									ウ
エ									エ
キ	ニ	リ	ミ	イ	ヒ	シ	キ	チ	イ

木 金 津 天									
ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
キ									イ
ウ									ウ
エ									エ
ヲ									オ

詞 祝 太 津 天									
ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
キ									イ
エ									エ
ヲ									オ

す。またそれら三つの五十音図はそれぞれ天津金木は言霊ウの五官感覚に基づく人間の欲望の産物である産業・経済を、天津菅麻は言霊イである人間天与の精神要素に基づく生れながらの自然主義を、天津太祝詞は言霊エに基づく人間の選択実践智から発展した道徳政治を実行する基本の心構えを表わしています。

さて、祝詞の文章の「斯く出でば」とはその文章の前に書かれている世界の中に現れ出て来る天津罪・国津罪の事を言っています。世界の文明のドン詰まりの時代に於て、人間が犯す様々な罪穢つみけがれが堆積し、このままでは人類の生存が覚束おぼろふなくなつた時、言霊原理の立場に立つてどのようにすれば死より生

へ、暗黒より光明の世界に転換することが出来るか、の方法を明示しているのが、抜粋した祝詞の一節であります。「天津金木を、本打切り、本打断ちて……天津菅麻を、本

刈断ち、末刈切りて」の「本打ちり……本刈断ち」とは共に金木と菅麻の音図の本である向って右側の母音の行を、「末打ち断ち……末刈切りて」とは両音図の向って左の半母音の行を、それぞれ音図の本体から切り離す、ということ。す。「八針に取り辟きて」とは母音・半母音を切り離して残った本体は縦に八行ありますから、その行の並びを一行づつバラバラに裂いて、ということ。具体的に言えば、天津金木のカサタナハマヤラの八行、菅麻のタカサハマヤラの八行の配列の繋がり（つな）を裂いてバラバラに一行づつに分けて、ということ。あります。

「天津祝詞の大祝詞事を直れ」とは一列づつバラバラにした八つの父韻の列の並びを天津大祝詞音図のタカマハラナヤサに宣り直せ、ということになります。ということはどんな事を意味するのでしょうか。父韻の八つの並びは物事を実現するための心の手順を表わします。この三千年の弱肉強食の物質万能の世の中の基本原理であった天津金木、またそれに対向して精神の汚れない生れたばかりの人間の心に帰れと叫ぶ自然主義の天津菅麻の両原理に代って、昔ながらの言霊原理に則った生命理想の創造力に満ち溢れた大祝詞の手順に国家・世界の政治の方法を切換え、採用せ

よ、の命令であります。

以上、大祝詞詞について二・三の感想を書いて来ました。一見お祭りや儀式に少々色どりを添える位にしか思われぬ神主さんの読む祝詞が、ひと度言霊の学問の眼で見られる時、世界人類の命運を左右する古代日本人の聖達（ひじり）の大事言であることが理解されます。

【収載】第九十六号（平成八年六月）

●大通智勝仏

禅宗無門関第九に次の様な公案がある。

興陽の譲和尚に一人の僧が質問した。「昔、大通智勝という仏は十劫という長い間、道場で坐禅をしたが仏法を成就することがなかった、と聞いていますが、その成仏しない時とはどういう事なのでしょうか」

譲和尚は答えた、「それは良い質問だ」

するとその僧は更に質問した。「既に道場で長いと坐禅をしているのに、どうして仏道を成就することが出来ないのですか」

譲和尚が答えた。「彼が、成仏しないからだよ」

私は言霊学の門に入るために見性の坐禅を始めてから長

い間、右の公案の意味が分らなかつた。大通智勝と言われ
る仏となる人が何故坐禪しても仏道を成就することが出来
なかつたのか、質問した僧と全く同じ事を考えていた。今、
公案の意味を解することが出来た。高慢・強情で一人よがり
の私は自らの業に翻弄されて心の放浪を続けて来た。し
かしこの私も仏の子であり仏である、という。公案の不得
成仏道の大通智勝仏とは誰でもない、この迷つて来た私自
身なのだ、という事を。こんな平々凡々の私でも、考えて
見ると、数千年否計り知れぬ長い間、生き通しに生きてい
る一個の人間であり、仏なのである。幸い機縁によって私
は言霊学によって仏の何たるかを知ることが出来た。人間
とは悟ると否とに関わらず人間であり、また仏なのだ。仏
は悟る以前も、悟った後も人間であり、仏である。
だから私が仏に、霊知りの祖先である皇祖皇宗に向つて
掌を合わすという事は、仏が、そして皇祖皇宗が煩惱具足
の私に向つて「恒久平和の世界の建設を宜しく頼むよ」と掌
を合わせて下さっている事なのだ、と知つた。

【収載】第九十八号(平成八年八月)

●手力男の命

手力男の命という神様は古事記の神話の「天の岩戸」の章
の中に見ることが出来る。先ず古事記の文章を記すことに
しよう。

ここに須佐男の命……天照大神の忌服屋にましまして
神御衣織らしめたまふ時に、その服屋の項と穿らて、天の
斑駒と逆刺ぎに刺ぎて墮し入るる時に、天の衣服女見驚き
て椽に陰上と衝きて死にき。かれここに天照大神見畏み
て、天の石屋戸を開きてさし隠りましき。ここに高天原皆
暗く、……ここに方の神の声は、サ蠅なす満ら、方の妖
悉くに発りき……

余り長く引用するのも退屈でしょうから、続きの文章は
現代語で端折って書く事にします。

天照大神は弟の須佐男の命の乱暴を見るに耐えなくな
り、天の岩戸の奥に隠れてしまいました。高天原は暗くな
り、日本の国も世界も暗黒の世となり、いろいろな神の声
が入り乱れ、諸々の禍事が起つて来ました。困り果てた高
天原の神々は天の安河原に集り対策を協議し、高御産巢日
の神の子、思金の神に思案させ、天の岩戸の前に神樂の

準備をし、天の宇受売の命が神懸りして岩戸の前で裸踊り
をしました。その有様が可笑しいと神々が皆笑い出しまし
た。

岩戸の中の天照大神は、岩戸の外の世界は皆暗く、人々
は困り悲しんでいる筈であるのに、笑いざざめいていると
はどういう事かと不審に思い、岩戸を少し開けて外に身を
乗り出された時に、岩戸の脇に隠れて立っていた手力男の
命が大神の手を取って引出したてまつりました。天照大神
の再現で、高天原と世界は明るくなり、元の平和な姿に戻
ったのでした。

以上が手力男の命という神様にまつわる古事記の神話の
概要であります。神話を単に神様が登場する古代人の空想
物語として読むだけならば、現代のSF小説やおとぎ噺と
何ら変ることがないでしょう。けれども古代の人々が神々
を主題として作った物語であり、しかも古事記の神話が奈
良朝廷の勅命による官僚の太安万呂おほのやすまろの撰であることを思う
時、その神話は単なるおとぎ噺などではなく、日本民族並
びに世界人類全体に関係する歴史とその予見についての深
い洞察を含んでいるものと見るのが妥当のように思われ

ます。

そうだとしたら、この随想文の主題である手力男の命が
天の岩戸の中にいらっしやった天照大神の手をとって外へ
引き出し申し上げたという神話は実際にはどんな事を表徴
した物語なのでしょう。まさか伊勢神宮本殿の扉を開け
て、天照大神の御神体である八咫の鏡を外に持ち出し、そ
の鏡で世間を照らし出す事ではありません。または靈感
の強い女性を多勢養成して、天照大神の神懸かりを世の中
に普及させることも思われません。

では神話の指示する実際の意味は何なのでしょう。古
事記の神話の意味は、また古事記の神話を唯一の教科書と
する言霊の学が明快な答えを提供して呉れるのです。

先ず日本神道が最高神と称える天照大神とは如何なる神
か。その精神構造を明らかにしたのが天津太祝詞ふとことわざと呼ばれ
る五十音音図であります(図099、A参照)。この精神構造の
神を岩戸から引き出すという事は如何なる行為であるの
か。筆者は言霊学を勉強し始めてからずっとそのことを考
え続けて来た期間がありました。その思案の旅に終止符を
打つ時が来ました。その時の状況は今も忘れることが出来
ぬ鮮烈な記憶として残っています(会報二十九号、神様の

戸籍その四参照)。

筆者が家内と共に観光を兼ねて戸隠・御岳への旅に出発したのは今から丁度十年前の昭和六十一年八月二十五日の事であった。手力男の命を祀る戸隠神社は長野市の西北方十八キロ、長野駅前よりバスで約一時間の所にある。戸隠神社奥社前で下車、鳥居をくぐり参道は真直に延び、徒歩

三十分で奥社に着く。参道の高原の空気が涼しい。参道の広く長いのに比べ奥社々殿はそれ程大きくはない。参拝を終え、社殿脇の立札に本殿祭神は手力男神、別社祭神は戸隠大神と九頭竜大神と書いてあった。

別社の祭神、戸隠大神と九頭竜大神の意味・内容は言霊原理に照らして直ちに分った。天照大神が天の岩戸の中に隠れた姿が戸隠大神であり、その天の岩戸隠れの期間、天照大神の代行とも言える神、大神を太陽に喩えると、その十拳の剣の判断力の光の反射である月を表わす哲学・宗教の神、月読命の九拳剣の判断力が九頭竜大神である。別社の祭神の意味は分ったが、肝腎の戸

図 099-A

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
ヰ									イ
エ									エ
ヲ									オ
ウ									ウ

隠神社の主宰神、手力男の命の現実的意味、天の岩戸を開くという事が言霊の原理の何処を解明する事を意味しているのが未だ不明なのである。

奥社を後にして戸隠高原の遊歩道を中社に向った。中社は古い寺の本堂のような質素な大きい社であった。参拝を終え社の側面に廻ると古い立札が眼にとまった。中社祭神

「天の八意思金命」とある。眼が立札に釘づけになった。出発前に読んだ神社案内には戸隠神社の中社祭神は単に思兼命とあった。思兼命は古事記の「天の岩戸」の章に手力男命と共に出て来る神名である。今、参拝して中社神名「天の八意思金命」なるを見て、手力男命の意味を明瞭に理解することが出来たのであった。

天の八意とは明らかに言霊学に於ける八つの父韻を指している。八心と書かず、八意と意の字が使われているのは人間の創造意志の原律動である八つの父韻である。思金とは思う神音のことであり、「神音である言霊三十二個の子音を思う」の意である。

中社祭神の名前が奥社祭神天の手力男神の言霊学上の意味を明らかに指し示している事が理解出来た。手力男命が

天の岩戸を開き、天照大神を外にお出しするという神話の現実的・歴史の意味は、人類の歴史的転換の時が到来した今、人間の精神の鏡、神名で言う天照大神の精神構造を表わす五十音言霊図の中の、八つの父韻を理解した上で、その父韻である人間の創造意志の原律に基づいて、現象の究極要素である三十二個の子音の内容を究明する(思い神音)事実を呪示・表現したものである事が筆者の胸中に明らか

に自覚されたのであった。

今より二千年の昔、神倭朝第十代崇神天皇が三種の神器に表徴される言霊布斗麻邇の原理を政治・道徳の鏡として活用する同床共殿と呼ばれる制度を廃止し、その原理を伊勢神宮の本殿の奥深く信仰の対象となる神として祭ってしまわれた話は何度も話して来ました。天照大神の岩戸隠れとはこの原理隠没の事を指した神話です。

この事実の意義を本殿中央の床下に建てられた長さ五尺の真四角の心柱(念柱)と呼ばれる白木の柱が明瞭に教えて呉ます。心柱は下の二尺が地中に埋って建てられているという事実です。言霊学は人間の心を天与の人間性能である五つの界層構造で表わします。アオウエイの五母音です。母音アは人間の感情の次元です。オは経験知、ウは五官感

覚に基づく欲望性能です。エは人間の実践智を、イは生命創造意志を表わします。言霊布斗麻邇の原理は言霊イの次元に存在し、その活用とは言霊エの実践智を指します。心柱五尺の内、下の二尺が地中に埋められているということ

は、言霊原理の隠没とその活用の停止という歴史的事実を心柱自体が教えて呉ているのです。この政策の結果、日本は、そして世界は弱肉強食の競争社会を現出し、その社会土壌を基盤として物質科学が興隆し、反面精神的頹廢の結果を招来することとなりました。人間天与の五性能の内、その五分の三の言霊アオウの三次元の自覚しか持たぬ人間社会が辿る当然の帰結ということが出来ましょう。

現在、(一九九六年八月)言霊講習会では古事記の神話を教科書とした言霊学の話が大事忍男神(言霊タ)より大宜都比売神(言霊コ)までの三十一神が示す三十二の子音言霊(神音)誕生の章を説明し了えた所です。この事は二千年間隠没していた言霊原理がこの世界に不死鳥の如く蘇った事を教えています。この人間五段階性能の自覚の復活は、新しく興った物質科学原理と共に車の両輪となり、精神的豊穡と物質的繁栄を二つながら備えた文明の第三時代の建設を可能とする快挙という事が出来ましょう。

神話手力男命による天の岩戸開きは此処に完了したのであります。

【収載】第九十九号(平成八年九月)

●俳句と和歌

心と言葉に関する我が国独特の芸術に俳句と和歌があります。先に会報誌上この俳句と和歌と言霊学との関係について二度程文章を載せた事がありました。今、更に第三回目の文章を掲載してこの関係の内容を深めることにしよう。

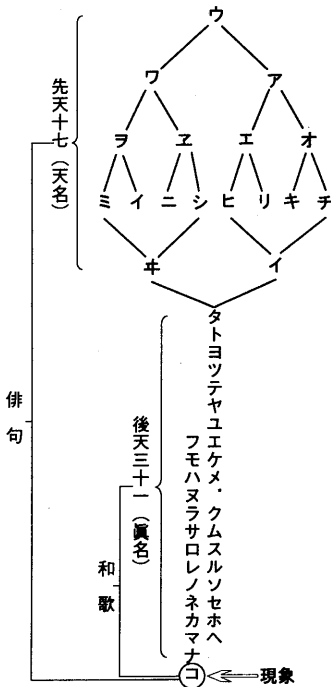
古事記の「子生み」の章を御覧下さい。物事は全て頭脳中の心の先天構造十七言霊の活動によって始まる。この先天の活動が直ちに後天の三十二の子音で表わされる行程、タトヨツテヤユエケメ・クムスルソセホへ・フモハヌ・ラサロレノネカマナコの手順を踏んで言霊コである現象を生む(図101・A参照)。全部で三十二個を数える生み出された子音が、同時にそれを生み出す頭脳内の手順・行程でもある、という「言霊の幸倍えさばえ」について幾度もお話ししました。

右の子音で示される子音創生の手順について考えて見よう。先天の活動によって起こされた思いが現実はどういうものであるのか、を決定するのがタトヨツテヤユエケメの十行程である。最初の言霊タは宇宙全体がそのまま現象として現われる現象子音である。次に決定された一つのアイデアを如何なる言葉で表現したら良いかを決める手順がクムスルソセホへの八言霊で示され、言葉に組まれ、口腔より発声される。次に続くフモハヌの四音は声が空中を飛ぶ現象である。飛んだ声は人の耳で聞かれ、復唱され、「こうか、ああか」と考え煮つめられ、「あゝ、こういう内容なのだ」と了解される。この作業がラサロレノネカマナの九行程である。最後の言霊コは全内容である言霊ナまでの三十一言霊に示される手順を経て、聞く人の心に了解された現象の結論ということが出来る。「あの人はこういう事を告げ度いと呼びかけたのだな」と心に印画された事実である。声を聞いた人の心に一定の事実を植え付けるために後天現象の三十一の子音の作業手順が必要である事が分かる。言霊コが生まれる事によって発声者と聞く人との交流の作業が完結するのである。

翻って先天十七言霊が示す宇宙剖判の構造を検討して見

よう(同図101-A参照)。精神宇宙の一点(中今)に意識の始まり(言靈ウ)が芽生える。「これは何か」の思考が加わると同時に言靈ウの宇宙は言靈アとワ、主体と客体に分れる。次に今迄の経験世界(言靈オ・ヲ)とこれからどうするかと言靈エ・エの知恵の世界が登場し、言葉を創造する根本知である八つの父韻の作業が起り、それによって一旦分れていた主体と客体(言靈イ・キ)は結合しその活動によって現象子音を生み出す。心の先天構造とは以上の十七の天名で

図 101-A



ある母音・父韻であり、これ等十七の天名の活動によって現象を生むという事が分る。現象を生む事によって先天構

造に於けるアとワ、主体と客体の感応同交の作業が終る。先天十七の天名言靈の活動によって現象子音(言靈コ)を生み、後天三十一の真名言靈の作業手順によって同じく現象子音(言靈コ)がもたらされる。先天十七言靈の活動と後天三十一の言靈の作業とは結局、先天・後天の別はあっても同じ事なのだから出来る。

仏教の般若心経にある「色即是空、空即是色」という言葉は右の事を説いたものである。空(先天宇宙)の内容十色(現象)の内容は三十二の言靈であり、空も色もその内容は右の数だけであり、それ以下でもそれ以上でもないものであり、その双方の活動が今・此処に於ける同時進行である事を考えるならば、先天(空)十七の言靈の活動を後天現象に於て三十一の言靈が同時反復の形で活動するのだという事を理解することが出来る。仏教の色即是空を日本の古神道言靈学は色と空の内容に立ち入って更に詳細に説いている。そしてこの事実が日本固有の文化である和歌と俳句の起源とその相互の關係に明らかなる解答を与えて呉れる事となる。

御承知のように普通俳句は十七文字、和歌は三十一文字で作られる。この俳句と和歌の字数は前に挙げた先天と後天の言霊数と一致する。果してこの数の一致がどの様な意味を持つのであろうか。それを考えるために、人々によく知られている俳句三句を選び、そのそれぞれの俳句と内容が同じになるような三首の和歌を筆者が作って、俳句と和歌との比較を試みる事にした(和歌に堪能な方はもっと上手な和歌を作って見て頂き度い)。

古池や 蛙飛び込む 水の音 (芭蕉)

暮れなずむ池の辺りに佇めば 蛙飛び込む水音さびし

菜の花や 月は東に 日は西に (蕪村)

菜の花のいよよ色増す夕間暮 月は東に日は西の空

夕立の あとと小草に 入る日かな (極堂)

夕立の止みて静けき丘の上の 小草の陰に入日落ち行く

右の芭蕉、蕪村、極堂の三句共みな大きな句である。芭

蕉は「古池や」に澄み切った静かさと時間・空間の無限さを人の心に映し出す。蕪村は夕空の月と日の運行に宇宙の無

限性を示し、極堂は夕立の止んだ静かさと雄大な入日に大
自然の無限大の情景を演出する。そしてその無限大の無言
を背景として、それに小さな小さな出来事(現象)―芭蕉は
蛙の飛び込む「ポチャン」という水音、蕪村は菜の花のクッキ
リと浮かび出るような黄色、極堂は名もない一本の小草を
対比させて、今・此処(中今)の一期一会という俳句の醍醐
味に人を導いてくれる。出来事が小さければ小さい程、宇
宙の、大自然の無限性が際立つのである。それは五七五の
十七文字が表徴する十七の言霊から構成される精神宇宙の
「神鳴り」が、小さい人間の営み(言霊)を今・此処の中今
に生み出す一瞬の神韻さを表現する日本独特の芸術、俳句
の持つ厳粛さを教えてくれる。いわばそれは一瞬のシャッ
ターチャンスにすべてを賭ける写真芸術の心と似ている。
和歌はどうであろうか。和歌の三十一文字は明らかに子
音創生のタトヨツテヤ……ノネカマナまでの手順の数霊と
一致している。俳句が中今における大自然宇宙と一個の現
象との間の消息を表現する芸術であるのに対し、和歌は色
である人間の意識の動きの手順を辿りながら一つの情景を
写生して行く抒情・叙事の芸術である。俳句が神の営みと
呼ぶなら、和歌は人の生活であり、俳句が神韻を事とする

なら、和歌は情緒纏綿・実相描写の業ということが出来よう。いわば和歌は映画的手法の芸術なのである。それは三十一文字の心の描写によって、子音創生の三十一言霊の幸倍えの原理を物の見事に人に訴える文字通り言の葉の誠の道の芸術なのだと言うことが出来る。

以上、言霊学の立場から俳句と和歌についてお話をして来た。御了解頂けたでありますようか。先天十七言霊の原理を古神道は天津磐境と言う。三十二の後天現象の子音を明らかにして、人間の心の全貌を表わす原理を天津神籬と呼ぶ人間心理の発端と結論の法則である。この人間精神の二大法則が感情の次元に流露して出来た芸術が俳句と和歌だというわけなのである。最後に誰でも知っている俳句と筆者の訳した和歌を更に登場させ、その描写の俳句と和歌のニュアンスの相違について重ねて参考にして頂く事しよう。

梅一輪 一輪ほどの 暖かさ (嵐雪)

梅一輪咲き初む庭を吹く風に 一輪ほどの暖かさ見ゆ

水底の 岩に落ちつく 木の葉かな (文草)

一片の木の葉舞い来て水底の 岩に落ちつく秋の夕暮

俳句と和歌の問題を単に仏説の「空」と「色」の関係ではなく、その空と色の究極の内容である先天十七の天名と後天三十二の真名として捉える事が出来るならば、問題は俳句や和歌という芸術(言霊ア)の域を遙かに越えて、宗教の所謂神人合一、仏心一如の世界に飛躍・昇華することが出来る。そこは神が喜ぶから人が楽しみ、仏が悲しむから人が涙する事の境地である。その境地に到って人は初めて世界の歴史を即自らの歴史と見、世界の歴史を人類即私の立場で創造することが可能となるのである。 (おわり)

【収載】第一百一号(平成八年十一月)

● 法師如來

また大なる声の御座より出づると聞けり。曰く「視よ、神の幕屋、人と偕にあり、神、人と偕に位み、人、神の民となり、神みづから人と偕に在して、かれらの目の涙とこごとく拭ひ去り給わん。今よりのら死もなく、悲歎も号叫も苦痛もなかるべし。前のものに過ぎざりたればなり」

(新約聖書ヨハネ黙示録二十一章三―四節)

私は右の聖書の文章が好きで、自分で書く原稿に時々引用します。キリスト教の信者でもない私がこの文章に心を引かれるのは何故でしょうか。多分幼い時虚弱体質で親に心配をかけ、青年時代を戦乱の中に過ごし、また貧困・災厄の悲惨さを多く見て来て、自然そのような苦しみのない世界の実現に憧られる気持が強くなった為でありましょう。現在、日本民族伝統の言霊の学問に勤しんでいるのも同じ心情からでありましょうか。

私は昨年大病を患い、半年間の入院生活を送りました。幸い九死に一生を得たのですが、入院生活を余儀なくされて初めて分った事は、生に対する執着の余りにも強い自分だという事でした。毎日の病状に一喜一憂し、生きたいという気持の高ぶりに、自分ながら驚いたものです。ベッドに横になって病室の天井ばかり見て過す毎日は、自分に生死というものを自らの心に見つめる時間を与えてくれました。そして生死の問題の彼方に、仏教の薬師如来という仏様の事が心に浮び上って来ました。爾来私は薬師如来を心の焦点に置いて自らの心を見つめる生活を送っています。薬師如来を信仰して自分の病気が再び起らないようにして

頂く祈願をするためではありません。言霊布斗麻邇の学問を基準として自らの心を見つめ、仏説の薬師如来という仏様の真実の姿を明らかにする試みのためであります。

薬師如来とはどういう仏様なのでしょうか。

「仏教でいう薬師瑠璃光如来の略。十二の大願をおこし、衆生の無明煩惱を照破して菩薩道に入らしめ、病苦・災厄を除き、ついに成仏して東瑠璃世界に住すという仏。左手に宝珠又は薬壺を持ち（薬師瑠璃光如来本願経）」と辞書にあります。瑠璃とは特有なあい色の宝石またはガラスの古名であります。

私というものを心の中にじっと見て来ますと、二人の私があるという事に気付きます。一人の私は生れて以来七十年余、食べ、眠り、人とおしゃべりし、勉強し、稼ぎ、曲りなりにも成長し、自己を作り上げて来た私個人です。もう一人の私とは、個人としての私が生きている社会・国家・人類の一員としての私です。この私は人類の歴史というもののが考えられる期間という長い長い年月にわたり生き通しに生きている私です（会報九十八号「大通智勝仏」参照）。

個人としての私は老年期に入り、体力も衰え、病後の体調に一喜一憂して煩惱の海に沈み、生死の問題から抜け出

事が出来ず、毎日足掻いて「地獄は一定住家ぞかし」と諦めざるを得ない人間です。一方人類社会としての私はどうでしょうか。豊かな物質文明社会の恩恵に浴しながらも、それに伴う地球規模の公害、核汚染の増大、飢餓・貧困人口の激増、麻薬被害の蔓延、人心の荒廃等々、どれをとって見ても確実な解決法を見出すことが出来ない人類全体の生存の危機が叫ばれる状況に追い込まれています。個人としての私も、人類としての私も共に今日現在という時点でのつびきならぬ生か死かの断崖に立たされているのです。

目先の仕事に心を奪われることなく、真正面に自我と人類の危機状況を見つめる時、現代人の行き着く処はどうなるのでしょうか。従来の宗教や国連・国家機関の活動が全て付焼刃的で、事態の全面解決には何の力も持っていない事は世間周知の事実です。このままでは人間社会は正直に言えば「絶望」です。

人類の潜在意識の底から不死鳥の如く目覚めた、人間精神の究極の原理であるアイウエオ五十音言霊の学は、何故人類がこの様な危機に陥ったかの原因を明らかに教えてくれます。それは人間精神のアイウエオ五次元の全性能の中

から、ウなる欲望の言霊が他の次元との協調を離れ、独走を始めて（天の岩戸閉め）以来の三千年間の歴史の結果であります。ウ言霊の独走は豊かな物質科学文明と共に人類滅亡の危機をもたらしました。

言霊の原理は、危機の根本原因と共に、死から生への転換の方策をも明らかに教えてくれます。それはウ言霊の独走の成果である科学文明の利点を殺すことなく、その独走の汚点である人類の危機を救済する方法です。古事記は言霊原理に則る禊祓の操作として、大祓祝詞は「天津金木を本打切り末打断ちて、……天津菅麻を本刈断ち末刈切りて、八針に取辟きて、天津祝詞の太祝詞事を宣れ」と具体的に示しています。禊祓も大祓祝詞も人間の心の構成要素である五十音言霊の根本的操作の方法です。

それなら人類の死を大乗的に生に転換する操作を実行することが出来る人となるにはどんな方法があるのでしょうか。従来の宗教が予言するように救世主の降臨とか、仏陀の下生とかの超現実的現象が起るのでしょうか。否。その方法は極めて現実的に唯一つ、人間個人の深い反省であります。前に挙げました二人の自分の、個人としての「我」の生を望む心の矛盾を自らの真正面に捉え、その業因の行き

着く所を正直に発見することです。欲望と経験的知識を自我と想う自らの終着点には煩惱と偽瞞しか存在しない地獄だけなのだ、という事を確認し、絶望を予感することです。個人自らの絶望を知ることによって、人類全体の絶望の運命をも知るであります。

悪とは人が善とは何であるか、を知る為のみ存在しませぬ。現代の人が自らと人類全体が営む幸福追求の心の中に救われる事のない悪を発見した時、初めてその人は自らの知恵とは比べることが出来ない大きな力によって生かさされ、その生命に厳格な法則があることを知り、同時に人類文明創造の祖先である靈知りの天^{すめらみこと}皇、即ち皇祖皇宗の経綸の中に包まれている事を知り、またその栄光ある担い手として、新しい生命に生れ変わることが出来るのです。それは新しい時代の始まりです。新しい時代創造の魂の誕生です。混迷する現代の人類全体の魂の奥底に人間本来の光が輝き渡る時です。

文章の題名に戻ることしましょう。薬師如来は衆生の無明煩惱を照破して菩薩道に入らしめ、とあります。煩惱を照破するとは個人の煩惱を一つ一つなくして行く事ではなく、生きとし生ける衆生である人類の心の暗黒（人類の

原罪）を光明によって消し去ることでありませぬ。菩薩道に入らしめる、とは衆生一人一人の欲望追及の日々を否定することなく、その生活そのままにそれが新しい世界の建設の担い手（菩薩）であることが自覚出来るよう世の中の精神的・制度的仕組みを變えることでもあります。それによって人々は精神的・肉体的ストレスから解放され、病苦・災厄の原因が根底から除去されることとなります。

薬師如来とは、新しい時代建設・運営の基本原則である五十音言霊原理の内容の治療面に期待される効用の呼名です。如来は左手に宝珠と薬壺を持っています。宝珠とは摩尼宝珠即ち五十音言霊のことであり、薬壺とはマニ壺の事に他なりません。

如来の声が聞えて来るではありませんか。「今より後、病苦も災厄もなかるべし。前のもの過ぎ去りたればなり」と。

（この随想は「薬師如来」という題名の文章の予告編としてお読み下されば幸いです）
（おわり）

【収載】第二百二号（平成八年十二月）

平成九年

●言霊と世界歴史その一

先月号にて古事記の上つ巻の言霊百神を教科書にしました言霊学のお話を終了しましたので、今月号からその解明されました言霊の原理の観点に立って世界人類の歴史とその将来についてお話を進めて行きたいと思ひます。と言ひましても世界歴史のあらましは已に「古事記と言霊後編の歴史編」として皆様にお伝えしてある事でありませぬ。この度再びその歴史についてお話いたしますのは、以前の「歴史」の何処かを訂正しようとするのではありませぬ。訂正の必要があるどころか、その「歴史」で述べました話は最近の世界情勢の推移が益々その真実性を証明していることでもあります。その「歴史」をお読み下さり、その真実性に気付かれた方は、世界の歴史を知りその将来を占う上での言霊原理の立場の重要性を認識して頂けるものと意を強くして居るところなのであります。

それなら何故再び歴史の話をするか、と申しますと、最近会報誌上にてお伝えした事なのですが(会報百四号「随想」)、その歴史の中の将来の展望の箇所に歴史を考へる上で誠に重要な欠落のある事を指摘したいからであります。

そしてその欠落に読者がお気付きになられるならば、その方の歴史観が全く変つたものになるであろう事を強調したいからであります。

「古事記と言霊」の歴史編には言霊原理から見た世界と日本の歴史を過去一万年程以前から現代までの歴史の流れの筋道が明らかに示され、その上で人類待望の第三文明時代が建設されるためには如何なる経路を通り、どの様な事柄が達成されねばならないか、が書かれています。重ねて申しますが、この歴史の筋道について訂正の要はありませぬ。けれど、その上で記述に欠落がある、と申しますのは次の事なのであります。「その歴史の筋道通りに歴史を進行させるために、何時、何処で、如何なる人物が、どの様な方法で、どんな行為をすることになるのか」——が書かれていない事なのであります。

人々が歴史の進行に関わりを持ち、歴史を創造して行くという事は人為的な行為です。自然の営みではありませぬ。日が落ちれば夜が来て暗くなります。朝が来れば太陽が上り明るくなります。これは大自然の営みによります。人がどの様に思おうと、または願おうとも、朝は来るし、日は暮れます。けれど人間社会の歴史というものは人間の思い

のあるなしに関係なく進展して行くものではありません。そこには人間の意志による行為が関わりを持つ事になります。歴史が創造されるのは人間の行為の集積の結果なのだということが出来ましょう。

けれど次の様にも言えましょう。人類が創造して来た現代の社会は人間の想像を越えて巨大化して来て、人間一人一人の意志や願望や努力ではどうしようもない恐ろしい怪物の如きものとなり、巨大なエネルギーの加速によって自転を始め、その中にいる人々が「自分はどうなっているのか全く分らなくなった」様に深い谷底に転げ落ちるか、または宇宙の中に爆発して消えて行ってしまいかも知れない異様な恐怖に戦^{おび}き、考えれば考える程気が狂いそうになるとも言える状況に立ち到りました。人類の歴史は已に人間の意志の可能性の範囲を遙かに越えてしまった様にも思えます。

現在の人類の課題を少し取上げて見ましょう。例えば地球を取り巻く大気汚染の問題があります。環境破壊があります。大気の温暖化が叫ばれています。核分裂の廃棄物の増大の心配があります。数億千万人とも言われる人々の飢餓の問題もあります。人心の荒廃の問題も退^{ひき}引ならぬ

ところに来ています。これらのどの問題をとって見ても、それがもう長年にわたって人類の懸案になっていながら何一つとして決定的な解決法が見つかってはいません。人類が生を享けている地球という一つの天体の環境の将来が人間の意志と頭脳の及ぶ範囲を越えてしまったのでありましようか。とするならば人類の歴史というものが人間の自由な処理能力の域を越え、大自然である天体の運行のように、地球上の人類の運命を完全に握ってしまったのでしょうか。

右に挙げましたような事態は人類の歴史の上で全く異状と言えるものなのですが、それより何よりも異状なのは、地球上の各国の政府をはじめ産業経済界、宗教・教育・マスコミの社会の人々が右のような地球上の人類が直面している絶望的危機に対して余りにも無頓着であり、全身全霊的危機意識を持つ事が出来ないでいる、という事であります。この事が何よりも人類の危機という事が出来ます。地球上の誰もが人類の明日のことを意識することがないままにその日その日を過ごしているのです。

銀座四丁目の交差点のポリス・ボックスへ行つて、お巡りさんに「私の行く処何処でしょう」と尋ねたら、多分直ぐ

に救急車が呼ばれ精神病院へ直行ということになるでしょう。これは笑い話ですが、事が現在の人類とそれを取り巻く環境の問題となり、「私達人類は何処へ行くのでしょうか」となりますと笑い話では済まされません。それどころか、人類のために救急車を呼んで呉れるお巡りさんも、人類が乗る救急車(もう一つの天体)もないのですから。

何とも殺伐としたお話を続けて申し訳ない事ですが、もう少し御辛抱下さい。右のような話をしますと、よく聞く答えに二つのパターンがあります。その一つは比較的年とった人に多いのですが、「地球が公害や核汚染で人間が実際に住めなくなるまで私は多分生きてはいない。可哀想だがこの問題は若い人に委せればいいんだ」という事です。この答えは無責任極まりない話ですが、その人にとっては精一杯の答えなのかも知れません。答えを裏返せば「打つ手は全くなし、絶望」という事なのです。

もう一つのパターンはこうです。「人間はそれ程馬鹿ではない。いざとなったら衆知を集め、英智を働かせて、必ず有効な対策を立てて危機を乗り切って行くに違いない」という楽観論です。この答え通りに事が運ばば誠にお目出度い限りであります。この答えは正に単なる楽観論で終

ってしまいましょ。何故なら提起された各環境問題はもう已に提起されてから十年乃至数十年経っていて、然もその間に何一つ改善の徴候すら望み得ないどころか、むしろその公害の汚染度は年々増大して行くばかりなのです。そして決定的な改善の方策は何一つ見つかってはいません。物質的にも精神的にも汚染がある一線を越えたなら、もう引返すこと、改善することが全く不可能となります。「いざとなったら」と言いますが、それこそその時は遅ればせながら今であり、将来のある時なのではありません。人類は何処へ行くのでしょうか。

何故人類はこの様な事態に追い込まれてしまったのでしょうか。人は青年期には希望に胸をふくらませて、自分の一生はかく送ろう、こういう仕事をしよう等々と考えます。所謂青雲の志です。また結婚当時は「私達は力を合せて、こういう家庭を築こう……」等と抱負を持ちます。けれど大部分の人が、そして家庭が、目先の事の解決に追いかけてられてその日その日を暮すのに精一杯で、青春の希望など遠く過ぎ去った夢としか思えなくなり。更に年老いると、先のない身のはかなさを思い、「私はどうなるのだろうか」の感慨に一日一日を過すこととなります。若しそれが

現実であり、真実だとしたら、現代の人類全体も完全な老年期に入り、目先のことばかりにかまけて、自らの将来を語ることが出来ない年令に達してしまつた、としか考えられないのではないでしょうか。若しそうなら人類には死だけが残されている事になるではありませんか。

以上「言霊と世界歴史」という話が何とも殺伐で憂うつな事柄から始つてしまいました。御免なさい。とは申しましたも、世界の現状を有りのままに見つめますと以上挙げましたような結論に導かれてしまふ事になります。木(氣)が箱の中に閉じ込められると困るという字が出来ますが、全く困つた状況になりました。それでも困つた困つたでは何も始まらないのですから、事態を更めて「初め」である第一歩に帰つて再検討をして見ることにしましょう。道に迷つたら、そしてどうしても目的地に行く道が見つからなかつたら、出発の原点に帰るより他に方法はありません。出発点に戻るといふ事は、我武者(がむしゃ)らに前に突進するより時には勇気を要します。此処は私の話に乗つて頂いて、出発点に戻つて考えて見て下さつては如何でしょうか。

では歴史の大きな流れの中に生きている人間が歴史というものの原点に帰るといふ事は実際にはどんな事なのでし

ようか。いろいろな複雑な理屈は後廻しにして、素朴に出発点を考えて見ましょう。

先ず第一に人間の歴史とは何なのででしょうか。「人間社会の変遷・発展の経過とその記録」と辞書にあります。

第二に人間は行動し歴史を創つて行き、そしてその経過を記録にまとめますが、そのすべての主体である人間とは何なのででしょうか。「人間とは何か」と言つたつて、それこそ永遠の謎で全部が分る筈はない。結局は我々人間なんだなどと訳の分らぬお叱りを受けるかも知れません。けれど人間社会が絶体絶命のピンチに遭遇してしまつた現在、いよいよ勇気を以て原点に帰らなければならぬその原点とは、正にこの「人間とは何か」なのではないでしょうか。そして奥深い人間といふものの内容の正しい認識の中から現代のピンチを切り開く糸口が見つかるかも知れません。

第三に、これは途轍(とつ)もなく奇妙な言い方に聞えるかも知れませんが、歴史とは何処にあるのでしょうか。「歴史とは単なる物ではないのだから、何処にあるのかなんていう奇妙な事は遠慮して呉れ」と言われるでしょう。けれど人類の歴史というものが厳然としてある以上、その所在を確かめることの中に事態解決の鍵が秘められていとも考え

られるではありませんか。

そして最後の方法として、人類の歴史とは何時から始つたのでしょうか。「歴史の始まりとは人間という生物の始まりの時であること以外に何が考えられるか」と言われる方が多い事でしょう。果してそういうだけで全てを尽してしまつているのでしょうか。実はこの問題こそが歴史の原点に帰ることなのではないでしょうか。

以上の四点について私達人間社会の歴史とその将来のことを根本的な観点から考へて行つて、今迄の人類の二十世紀から新しい世紀への移り変わりを光輝あるものとするこゝとが出来るか、どうかを確かめることとしましょう。

先ず第一問の歴史とは何なのでしょうか。辞書にありますように「歴史とは人間社会の変遷と発展の経過とその記録」です。けれどその変遷と発展の経過を記録する、という時、何を基準に記録したら公平な歴史が出来上るのでしょうか。例えば一人の人間の歴史を作る場合、その人が誕生した時から死ぬまでの毎日、その人がどんな事をしたか、どんな表情をしたか、を余す所なく書き記せば、その人の歴史と言えるのでしょうか。その人が八十才迄生きたとしたら、一年を三六五日と数えて八十年、約二万九千二百日

間の毎日の行動の羅列がその人の歴史ということになります。一日の記録に五枚の用紙を必要としたら約十五万枚を必要とします。そんな膨大な人生記録は人が読む事が出来ないばかりでなく、若しそれを全部読んだとしても、その人の全てを理解出来るかどうかとも疑わしく思われます。何故なら如何に一人の人間の行動と外見を詳細に観察して記録したとしても、その人の全てを描写した事にはならないからです。人には表面には現われない複雑な心理があります。行動の正面にある目的が実は全くの見かけに過ぎない物である事さえあります。ですから人の一切を描写するななどという事は全くの不可能事という事が出来ましょう。

私の学校の先輩に数々の賞をとつた有名なFという小説家がいきました。生活上のいろいろな出来事等の原因を男女の性欲という立場で捉え描写する文章を得意としていました。その小説家が同じ性欲の見地から「忠臣蔵」を書いたのです。読むとまことに面白い小説となつてはいますけれど、江戸幕府初期の時代風潮を背景とした仇討ちの記録としては余りにもユニークで突飛な作品でありました。歴史とは程遠い記述です。これに示されますように、歴史の記録にはそれを描写する人物の思想というものが多分に影響

を持つこととなります。

例えば先の大戦の戦前と戦後の日本の歴史の記述の相違を考えて見ましよう。戦前の日本の歴史は正に神武天皇以来百二十四代昭和天皇までの天皇中心の記録の歴史でありました。そしてその天皇が日本の君主であるとする根拠を古事記・日本書紀の天照大御神が皇孫邇々芸の尊に与えた神勅(神の命令の言葉)に置きました。日本書紀の中のこの神勅を挙げましよう。

天照大神、乃ら天津彦彦火瓊々杵尊に、八坂瓊の曲玉及び八咫鏡・草薙劍・三種の宝物を賜う。又、中臣の上祖天兒屋命・忌部の上祖太玉命・妹女の上祖天鈿女命・鏡作の上祖石凝姥命・玉作の上祖玉屋命、凡て五部の神を以て、配へて侍らしむ。因りて、皇孫に初して日はく、「葦原の千五百秋の瑞穂の国は、是、吾が子孫の王たるべき地なり。爾皇孫、就てまして治せ。行矣。宝祚の隆えまよむこと、当に天壤と窮り無けむ」とのたまふ。

「葦原の千五百秋の瑞穂の国は、是、吾が子孫の王たるべき地なり」、これを文字通りに取りますと、この日本は天

照大神の子孫が天皇となって治める国である、という神の命令に基づいて正統な血統の天皇が君臨し、その統治の下に政治が行なわれるのだ、という事です。そしてそれが憲法で制定されました。明治憲法の「大日本帝国は万世一系の天皇これを統治す」という条文がそれであります。

国の統治者を信仰の対象である神の命令、言い換えますと人間とは超越した神という存在によって規定し、それを国家の大法である憲法に明記したのですから、この事は国家が成立する以前からの定まりであり、議論の余地のない運命的なもの、と思う事だけが許された立場です。「惟神言挙げせぬ国」、即ち天皇の命令は神の命であり、それについて理論は不要だ、と言われました。この神懸りの強権の立場から旧日本帝国は国を滅ぼす程の戦争に突入して行ったのでした。

次に敗戦後の日本の歴史観について検討して見ましよう。信仰的君主体制の下に、不敗の信念をもって戦い、惨敗を余儀なくさせられました。信仰に基づく国家観の憲法は廃止され、「主権者は国民である」の民主憲法に変わりました。天皇中心の歴史記述は昔語りとなり、国民主権の歴史、文書・出土品による実証主義歴史観に移行しました。

その結果はそれ程遠くはない過去の史実について幾通りも
の学説が乱れ飛び、一貫した国家・国民の歴史は消えてし
まい、一般国民には理解し難い純学問としての、言換えま
すと、大学・高校の受験生だけが関心を持ち、国民の好奇
心だけに訴える歴史が編成されて行きました。歴史が国民
の伝統を育むものではなくなつたのです。国民全体の生活
感情・風習・生き甲斐等がそこから生じ、またそこに帰つ
て行く国民全体の関心の的である歴史ではなくなつてしま
いました。

以上、戦前と、戦後の日本の歴史を対比してみました。
どちらが正しいかどうかは別にして、歴史というものがそ
の観点が違ふとどんなにか變つたものになつてしまふ事
にお氣付きになられた事と思います。いわば、戦前の歴史が
国民の感情性能に訴える歴史であるのに対して、戦後の歴
史は専門の経験知識に基づく学問の歴史という事が出来ま
す。戦前の歴史は余りにも感情的に過ぎて、国際間の理論
的・論理的な歴史は無視した為に、国家は亡国の道を辿りました。戦
後の歴史は国民感情から余りにも懸け離れた学問的・知識
的歴史である為に、国家伝統から遊離してしまい、若者の
心を根無し草の如く、糸の切れた奴隷の如く、自由という

不自由の風潮の中にさ迷い出させる結果を招来していま
す。戦前の歴史も、そして戦後の歴史も、双方共日本民族
というものの真実あるべき姿を捉える事が出来ない、ゆが
んだ歴史と断定して差し支えない代物と言えるのではない
でしょうか。そして日本だけでなく、世界人類全体の歴史
もまた原点に帰って見直さねばならぬ時が来たという事が
出来ましょう。人々が歴史的に真実を見る目を取り戻す時
が来たようです。

過ぎ去つた歴史的現象はただ一つです。いくつもあるわ
けではありません。にも拘らずその歴史を書き留める記録
は、十人いれば十色の記録が生れてしまいます。それは何
故か。戦前・戦後の歴史の相違に見られるように、歴史を
記録する人のよつて立つ観点の相違によります。観点の違
いで歴史の解釈が十の中で八、九が同じで一、二が違ふと
いうならまだしも、十中八、九が違つてしまい、一、二だ
けが同じだという事が往々にして生じて来ます。どうして
この様な観点の相違が生じるのでしょうか。真実でなけれ
ばならない歴史観がこんなにまで夢遊病者のようにさ迷う
のは何故なのでしょう。そこで思考を原点に戻すための
第二の問題、「人間とは何か」に入ること致します。いろ

いろいろな理由が挙げられるでしょうが、つまるところ、歴史を作り、また歴史を記録する主体である「人間そのもの」とは何ぞや」という肝腎な答えが出ていない為であります。「人間とは何か。人間の全局とは何か」が不明であるために、歴史学者がそれぞれ自分の経験的な知識を観点として歴史の記録を書く為であります。歴史の真実の記録は人間という種の持つ全性能が明らかにならねばならないでありましょう。そこに人間の精神の構造とその機能の全てを明らかにした日本伝統の学問である言霊布斗麻邇の原理が登場することとなります。

その言霊学については会報の先月号まで二十数回にわたってその全貌をお話申上げて来た処でありますので、此処で多くをお話することは省きまして、歴史を記録する立場・観点に係る事だけを簡単に申し述べることにします。

人間にはさまざまな思い、さまざまな言葉、さまざまな行動があります。それこそ千差万別です。けれどその幾多の思い、発言、行為を起す人間の心がどの様な場・次元段階に於て現象となつて現われるのか、という事になりますと、大層簡単な事になります。それはたった五つの場(次元)しかありません。日本伝統の言霊学はこの五つの場に

五つの母音の名を付けました。ウオアエイの五母音です。言霊ウとは人間の五官感覚に基づく原識の現出して来る元の世界、欲望性能の次元、その心の発展したものが産業・経済社会です。言霊オは人間の経験知の世界、これが発展して広く物質・精神の科学・学問を形成します。言霊アは人間の感情が出て来る場です。ここから芸術・宗教が成立して来ます。言霊エは人間の実践智・選択智の世界、これより道徳・政治の分野が成立します。最後の言霊イは人間の創造意志の次元、この次元を観点として人間精神を考え、その究極の構造と機能を解明したのがアイウエオ五十音言霊布斗麻邇の学問であります。またこの言霊イの実際活動である八つの父韻(人間の根本知性)が、言霊ウオアエの四母音に働きかける事によつて種々の人間の精神現象が生み出されて来ます。

以上言霊学のさわりを少々お話いたしました。この様に人の心はウオアエイという五段階の宇宙次元を住家として活動します。人の心は五重(いえ)の次元を住家としますことから、人の住家をいえ(家)と呼ぶわけです。心は五層構造を持っており、歴史を記録する場合にもこの五段階界層全体の見地から、人間社会の営みをまた五

段界層全体の営みとして観察し記録しなければならぬ筈です。にも拘らず、過去の歴史観が五つの界層の中のどれか一つ乃至二つだけに注目し、他の界層性能を無視してしまつた結果が、まことに偏頗な歴史を作り上げてしまひました。人間社会全般の営みの真相を把握し表現することが出来なかつたのであります。先に挙げました日本の戦前・戦後の歴史が共に極端な程偏頗なものだ、と申し上げた意味を御理解頂けたのではないのでしょうか。戦前の歴史は言霊アの見地から主に書かれたものであり、戦後のそれは言霊ウ・オ偏重の歴史であります。

歴史を考える原点に戻ろうとして、第一に歴史とは何か、第二に歴史の主人公である人間とは何か、について検討して来ました。次に第三の問題である歴史とは何処にあり、何時・何処で作られるのか、の検討に入ることとします。歴史とは何処にあるのでしょうか。歴史は歴史書の中に書かれています。ですから歴史は書物の中にあると言つても間違ひではないでしょう。けれど全くの真実とは申せません。書物として書かれた歴史も、それを読む人がいなくなつたら、全くないのと同じ事になります。歴史とは何処にあるのでしょうか。人間は見たもの、聞いた事、言つた事、

行つた事の全てを記憶として頭脳中に保存します。それを忘れてしまひ表面意識から消えてしまふと、潜在意識に保存されます。こうしてすべての記憶は子孫へ遺伝されて行き、現代の人間の頭脳には人類始つて以来の出来事の総量が記憶として印画されているという事が出来ます。何百、何千年前の昔の記憶が神懸かりという形式で現代人の頭脳に浮かび上つて来る事さえあります。人間はそれらの記憶の中から現時点(今・此処)に必要なものを現実に思い出し、それを材料として考え、思い、発言し、行為しております。そういう点から言えば、人間は人類発生の時から生き通しに生きている一人の人間である、と言つても言い過ぎではありません。

右の事に思いが行きつきますと、問題の「歴史とは何処にあるか」の答えは容易です。歴史とは常に人間の一瞬々々の思いの中にあります。この一瞬々々の「今・此処」を言霊学は中今(続日本紀)と呼びます。日本の、そして人類の歴史とは、実は人間の中今にある、と言ふことが出来ます。この過去の歴史が全て詰っている現代に生きる人間の心の中今、人間はそこから自分に必要なものを取り出し、それを材料として料理することによって一瞬々々を生きていま

す。その行為によって一瞬々々人は歴史を創造して行くのです。
(次号に続く)

【収載】第百十一号(平成九年九月)

●言霊と世界歴史その二

前号に於て危機的状況にある二十世紀末の世界の歴史を光輝ある希望と繁栄の二十一世紀に転換する方策はあるのか、を検討するために四つの点について考えて来ました。

そして第一に、歴史とは毎日々々起つて来る出来事を単に記述することではなく、その出来事の原因・結果・意図した目的・周囲の状況・その影響等々、また連続する多くの出来事の底を流れる時代精神等複雑な問題も視野に入れなければならぬ事が分りました。更にそれ等の記述は書く人の経験知識の相違によって全く正反対の歴史が主張される可能性がある事も分つて来ました。

第二に、歴史を書く人の経験知識によって記述された歴史そのものが違つて来る事から、歴史を創つて行く人間、そしてそれを記述する人間とはそもそも何であるかが検討されました。偏つた歴史観は偏つた経験知識から来るのであり、そのために「人間とは何ぞや」の問題を余すことなく解明し

た言霊学によって初めて真実の歴史が提供される事が確かめられました。人間の心はウオアエイの五つの母音で示される次元宇宙を住家としており、偏つた歴史はその五つの次元の一つ乃至二つ程の次元を観点として書かれたものであり、真実の歴史は人間精神の全体である五つの次元全部の総合体を観点としてのみ解明されることが明らかとなりました。

第三の問題として歴史書に書かれた歴史は眠つた歴史であり、一瞬々々創造される生きた歴史は人類一人々々の意識の今・此処(中今)にある事が分りました。人間の心には、人類始まつて以来の出来事の記憶が全て印画・記録されており、人間は今・此処に必要なものを現実思い出し、それを材料として思い、考え、まとめて言葉として発言し、行為して生きています。その行為によって人は一瞬々々歴史を創造して行きます。生きた歴史は人類一人々々の今・此処の瞬間に創造されます。

一般に歴史といひますと歴史書や学校の教科書に書かれた「世界や日本、またはそれぞれの社会の過去に於ける発展とその経過の記述」と思われて来ました。歴史書はそれを読む人に「貴方が住んでいる世界、日本その他地域社会

はこういう経過で発展して来たのだよ」と教えて呉れます。「古事記と言霊」後編に書かれた日本と世界の歴史もそうではありません。そしてそれを読んだ人は「あゝ、そうだったのか」で終ってしまう人が大部分です。偶にはその記録を商売の参考にしたり、学問の手法の、また芸術創作の参考にしたりする人もいますが、いずれもその参考とする歴史的事実というものはその人の対象として考える客体的なもの、外のものである事です。それを読み、学習し、覚え、内容を参考にします。この様に読まれる歴史は言霊オの次元の歴史と考えることが出来ます。謂わば学習する歴史です。

歴史と言えば当然右の様な歴史を人々は思い浮べるでしょうが、歴史にはもう一つの歴史があるのです。それは歴史を創造しようとする立場の歴史です。「自分は現代の歴史状況の中にいて、どう対処し、どういう社会に变革して行つたらよいか」という立場に立たれた時の歴史です。これは言霊エの歴史という事が出来ます。現在の状況に対処し、自分はどうしたらよいか、と歴史を自らの責任として創造する主体的な歴史の立場です。

この言霊エの立場で考える歴史というものを突き詰めて

考えて行きますと、先に少しお話した所ですが、次の様な結論に到達することになりましょう(「古事記と言霊」歴史編「歴史創造の心」参照)。人間の頭脳には人類始まって以来の出来事の全ての記憶が印画されています。謂わば人間とは人類発生以来生き代り、死に代りしながら生き通しに生きている一人の人間なのです。ですから現在の自分の頭脳に詰っている歴史の出来事の記憶の全ては、実は生き通しに生きている自分自らが責任を以て創造して来た歴史の全内容なのだ、という事なのです。この事が言霊エの歴史の立場であります。「言霊と世界歴史」という題で更めて歴史のお話を申し上げます。意図もここにあるという事が出来ます。「古事記と言霊」の歴史編の中の「歴史創造の心」の章の最後の一節を引用しておきましょう。

度々言う事であるが、世界の各地でてんでばらばらに営まれる人々の行為の合計がそのまま世界の歴史であるのではない。天津日嗣天皇(靈知り)の文明創造の経綸即ち人間を人間たらしめている言葉の限りなき発展が人類の歴史である。それ故に天津日嗣である人間という種^{スチー}の究極精神原理である布斗麻邇の自覚に立つ時、言い換えるならば人間精神の実在体であるアオウエイ五母音の重畳する構造

を確認し、その实在より発現する諸実相の色相変化の原律である八父韻の認識を完成する言靈イの創造親神の立場に立ち、言靈アである大慈悲の心より人類の歴史を見る時、我とは人類であり、人類の歴史とは私の歴史に他ならず、それ故に世界の歴史の流れの中で過去にあり現在に起りつつある歴史現象のすべては、永遠の生命を受け継ぐ我自らが《そうあれ》又《かくあれ》と決定し創造し来たったものであることが明らかに了解されるのである。それ故にこそ又世界人類のすべての声を自己の生命全体で聞き、これに新しい生命の息吹を与えて言靈原理に則り《かくあれ》と決定し宣言しその如く実現することが可能である。宣言は当為であり、宗教に於ける基本要求などではないからである。以上の如き世界歴史経綸の大慈悲の心を天津日嗣の大御心と呼ぶのである。（「古事記と言靈」歴史編三四六頁九行より三四七頁五行まで）

「註」右の天津日嗣の人類歴史創造の経綸實際の方法・所謂ノウハウが古事記の禊祓であります。

さて此処で少々本筋をそれて駄弁を弄してみたいと思います。右に書きましたように経綸、天津日嗣天皇、ロゴス

だとか、または大御心や禊祓等の言葉を使いますと、読者の中には「そんなどえらい事と私とは全く関係のない事だ。歴史を創造するなどという事は社会的に小さな力しかない私にとつては夢の話だ。私はそんな偉い人間ではないし、そんな力を持つてはいない」とお思いになる方もいらつしやると思えます。そんな感想をお持ちになる方に一言申し上げたいのです。

「そんなど偉い事を私に出来る筈がない。私はそんなに偉くはないし、力もない」と言われます。それは歴史のお話をしていて私と同様です。徒手空拳、政治的にも経済的にも何らの力も持つていない私です。けれど「力のない私だから歴史創造なんていう大それた事には関係ない」という言葉には賛成出来ませんし、また別の考え方も持つています。「私はそんなに偉くはないから」と言われる方に私は何時も次の言葉で答えています。「偉くないから歴史創造には関係ない、と言われますが、実は自分にも何処か取り得がある、と思つていらつしやるから人類の歴史創造などには関係がない、と言われるのです」と。

人はそれぞれ大かれ少なかれプライドを持つています。「その位の事なら自分にも出来る」という自負を持つていま

す。その「その位の事なら」と思う範囲から見ると歴史創造とか、責任とかいうものが大きく外れているから「関係がない」と断定するのです。人間誰しも自らの持つ「守備範囲」の力、言い換えますと、自らが生れて以来苦労して積み上げて来た経験知識の力だけで世界の歴史を創造する事など出来るものではありません。世界唯一の経済的・武力的大国となったアメリカ合衆国の大統領だって不可能な事です（彼自身は出来ると自負しているかも知れませんが）。

私が今、この「言霊と世界歴史」のお話の中で申し上げている「歴史創造の心」と由しますのは、偉大な経験知識を持ち、絶大な金力・権力を誇示することによって世界を変えて行こうとするような歴史の心のことではありません。特に人類の滅亡が云々されている現在の歴史の趨勢を迎えては、たとえ一国を支配し得るような権力と金力を唯一人で持つ人がいまいしょうとも、その世界の死を転換させて恒久の生の歴史に甦えらせる事など出来るものではありません。大層大きな金力・権力を持っていると思っている人から、「それ位の事なら私にだって」というささやかなプライドを持った人に到るまで、言い換えますと心の片隅に何らかの「持っている」と思っている人は誰方も皆、この「歴史

創造」という事の意義を理解出来ないのだと言う事が出来ます。理由を次にお話しましょう。

「学者と金持が天国に入るのは、ラクダが針の穴を通るより難しい」と聖書に書かれています。人が対象となる何かを見る場合、「実相」という言葉が使われます。真実の姿の事 (reality) です。仏教では諸法空相、諸法実相などの言葉があります。実相とは分った様でいて仲々分らない言葉なのかも知れません。昔から富士山を写した写真はプロから素人の写真家を併せて数限りない程あります。誰の写真を見ても、それが富士山だという事は一目で分りましよう。けれど真に富士山の美しさ、神々しさ、崇高さを写し出した写真となりますと、それ程数多いとは言えないでしょう。何故同じように富士山を撮影しながら、どうしてこうも違う写真が出来上がるのでしょうか。その理由は沢山挙げられます。第一にその美しさの真実相を見る眼の相違が挙げられるのではないのでしょうか。結論的に申しますと、人間の経験知識が混ざった眼と、その経験知識を超えた眼との相違に起因しているのです。五官感覚では同じように見ているのですが、その美しさを捉える心に次元の違いがあるからと言う事が出来ます。そして経験知を超えた眼で

見る対象の姿を真相(真真相)と呼ぶのです。

神神カミカミしという言葉の語源は「神がみし」の音便だと言います。「神神し」とは偶然にも「神が見し」とも受取れます。人の目で見るのではなく、言い換えると人間の経験知識の眼鏡をかけた目で見るのではなく、眼鏡をはずした天性の目で見ることで、即ち神が見ることによって物事の真真相(真相)が写し出されて来るのです。神の目それは宇宙の目とも言われます。写真ばかりではなく歴史的に現出して来る一切の社会的な出来事も、その真相を見る為には人間の経験知識を超えた目で見なければなりません。

人が社会生活を続けて行く上で経験知識は大切なものです。それは生きて行く為の手段・方法を提供してくれます。それ程大切な経験知識ではありませんが、それを取扱う心構えによつては魔物と化す恐れがあります。それを御存じでありましょうか。

人々は経験を積み、知識を集めることによつて物事をより深く正確に捉え、理解することが出来ると考えます。そう考えることによつて人は自らの可能性を信じます。この事はまた大切なことなのですが、同時にそこに落とし穴がひそんでいる事に気付く人は少ないようです。人はややも

すると、その可能性、言い換えるとまだ実現してはいないその可能性の自己を自分だと錯覚してしまうことです。現在の自分の能力ではない、自分が希望している可能性としての能力を自分だと思ひ込みます。その結果、現実の自分(の真相)を常に見失ってしまい、何時も自分の真相、ひいては物事の真相を捉えることが出来ないこととなります。

そこで物事の、そして自分の現在の実相をありのままに見る為には可能性としての自己を「それは真実の自分ではない」と否定しなければなりません。可能性の自己を否定するといふ事は、その可能性を心中に描き出させる原因となる経験知識を、自我を形成している経験知識を「自分ではない」と否定することです。この作業を禅では「退歩の学」と呼んでいます。

「天津日嗣だ、経綸だ、大御心だなどと言われても、私はそんな偉い人間ではないから、勘弁してくれ」という心理が、実はその人の心の片隅に宿る強固な自尊心に由来している事、言い換えると「私は偉くないから歴史的経綸などという事に関係出来ない」のではなく、「私でもその位の仕事は出来るというプライドがある為に『関係がない』と決め込むのだ」といふ事を説明しようとして思わず長々と駄弁

を弄して来ました。しかしこの駄弁もそろそろ終りが見えて来ました事、また人類歴史の真実を知って頂く為には、どうしても避けては通れない道でありますので、もう少し御辛抱の上お聞き下さい。

かくて人はそれまで自我だと思い込んでいた種々の経験知識の一つ一つの内容を調べ、その知識が人生を生きて行く上での能力の限界を知り、それが自分自身ではなかつた事に気付いた時、一つの知識を否定し得た度毎に言い知れぬ解放感を味わい、すべての知識（これをサンスクリット語でカルマと言います）を否定することが出来た時、束縛に押し縮められていた自我から解放され、広い広い、限りなく広い宇宙に飛び出す事が出来ます。その飛び出た宇宙は実は自らの生命の本体であり、あらゆる自我の出来事がそこから起つて来る元の宇宙であることを知ります。と同時に心の束縛の原因となっていた経験知識にがんじがらめになつていた自我を、それにも拘らず此処まで生かして下さつた大きな力（空・神・仏）の存在を知ります。それまで自分と思ひ込んでいた自我は芥子粒の如く小さく、その自我を育んでくれた宇宙は限りなく大きい事が実感されま

す。仏教はこれを見性成仏と呼んでいます。プライドは心の片隅から幻の如く消え去り、新約聖書の所謂「心貧しき者」の磐石の如き安堵で心は満たされます。

そして実は、天津日嗣とか、大御心とか、歴史的経綸と云われるものの原動力となるのは、人間個人の心の中のプライド、積み重ねて集めて来た経験知識の力ではなくして、そのささやかなプライドを自我自身と思ひ込んでいる人間を大きく包み込んで生かさせている廣大無辺な力、所謂神・仏・空と表現される存在に属する力なのであるという事なのです。歴史的経綸の原動力となる心とは、個人の経験知識を超えた所の、しかもその経験知識が自我だと思ひ込んでいるために、その存在が無視されて来た生命本然の心の領域に属しているものなのです。「私はそれ程偉くはないから」と思う立場は個人の経験知識の立場、言霊学で謂う言霊ウ・オの次元であり、その自我を包み込んでい

る大きな力、神・仏・空とはそれを超えた言霊アの次元という事なのであります。「私はそれ程偉くないから」歴史的経綸に關係がないのではありません。「私にもそれ位の事は出来る」という心中の自負心が世界人類の歴史的経綸への責任感を曇らせている、と言う事になります。

長いこと人類歴史の流れの本筋に関与する人間心理についてお話しして来ました。その歴史の流れの今・此処の時点に立つて歴史を創造して行く心とは自我を超え、自我を包容して育んでくれる言霊アの次元の大きな心、空・神・仏の心だと申しました。しかし正確に申しますと、歴史創造の心とは言霊アといわれ、宗教で空・神・仏等と呼ばれるものの事なのではありません。それに関与するのは、宗教でいう神・仏・愛・慈悲と呼ばれる心ではなく、その神・仏と呼ばれるものの《内容》、言霊学でいう言霊イとエの次元の心の事なのであります。

経験知の柵しらみを離れて、広い広い宇宙に飛び出します。そこは愛と慈悲の世界です。世界中の人々の生命がそこを根っ子として育まれている事を知ります。人々は全て兄弟姉妹であり、神の、仏の子であるのです。人はここで神仏の実在を知り、自らが神仏の子として一切の矛盾が消え去って一日一日が喜びと感謝の心で暮すようになりま

す。先日亡くなられたインドのマザー・テレサの如く「神が私を育てて下さった如く、人を愛しよう」と心掛けるようになります。この心は言霊アの心です。個人的な如何なる苦しみをも越えて「愛は強し」です。けれどそこに重大

な死角があることに気が付かなければなりません。愛と慈悲の心は、それだけでは個人的な悩みに打ち勝つ事は出来ても、人類全体の危機の問題に立ち向う事は出来ません。

熱心な信仰者は「地球上の人々が一人でも多く神の子として愛の行為の輪を広げて行けば、やがて地球の上の平和は達成されるに違いない」と信じているでしょう。愛と慈悲の心は何時までも必要です。けれど愛と慈悲の心だけでは、人類の危機という問題に直面する時、否でも応でも自らが以前苦しみ喘いでいた経験知のカルマの中に逆戻りしなければなりません。「核軍備反対、環境破壊絶対反対、平和憲法死守」と、形はどうあれ戦わなければなりません。若し戦う事を避けて、社会の体制側に対する大人しい提言や「世界の平和を祈りましょう」位でお茶を濁すとしたら、忽ちマルクスの所謂「宗教は阿片あへんなり」となりましょう。

何故そうなるのでしょうか。神の実在を知り、神の子となつた人が、愛の行為だけで済む事の範囲でいる間は神の子でいられます。けれどそれだけでは済まされない問題に行き当つたならば、嫌応なく自分が以前苦しんでいたカルマの対立の世界に後戻りを余儀なくさせられるからです。この様にして信仰者は神の国を求めながら二千年とい

う長い年月を暮して来たのです。

神のこの死角の原因は何処にあるのでしょうか。世界でただ一つ、その解決を五十音言霊布斗麻邇の学問が教えて呉れます。自らの小さな生命を包容して育んでくれる大きな力を単に神・仏・宇宙という概念で捉える信仰者としての言霊アの次元から更に進んで、その神といい、仏というものの内容を見極めなければならぬ時代が来たのだという事に気付かねばなりません。世界の全ての宗教書は神の子の自覚への道は説いても、神自体を説いてはくれませんでした。「神とは何か」を言霊学は言霊イとエの人間の心の次元として明らかに教えてくれます。神や仏の神聖性を少しも失う事なく、その内容を示し、更に志す人全てに其処に到る道筋を平易に指し示して呉れます。言霊学による「靈知り」への道は然程に困難なものではありません。心中の自負心を越えて行くならば……。

神という観念を超え、神の内容を言霊五十音によって明らかにした言霊学は人間の生命の内容とその機能を精神の側から百パーセント明らかにしました。その観点に立てば、人々は皆、その心の構造と機能の下に平等であり、そしてそれらの人々の集まる協議とは、人間性の構造と機能の原

理に基づく協議であり、従ってその結論は自ら一つです。

それは希望される基本要件などではなく、当然達成さるべき当為となりましょう。言霊エに基づく歴史観の成立です。

更に言霊五十音布斗麻邇の原理に基づくならば、人とは人類発生以来生き通しに生き続けている神であり人である人間です。人類歴史上のあらゆる出来事は、人であり同時に神である人間が「かくなれ」と欲して出現させたものでもあります。それ故に神であり、また人類である人間が自らの存続の危機に直面した時、その拠って来た原因を明らかにし、人類として生きるべき将来を創造する手段を発見し、実行して行く事は容易な事でありましょう。人類の恒久平和の二十一世紀を建設する力は、「祈りの彼方」から降臨して来る神ではなく、私達平々凡々たる人間の心の内にある事です。人間が自らの真実の姿を発見すること、それが人類自らを救済する鍵であります。

前後二号にわたり人類の歴史的危機を乗切る手段を検討しようとして、歴史の原点に戻るためのお話をして来ました。第一に歴史とは何か、第二に人間とは何か、第三に歴史とは何処にあるのか、でありました。その結論として「過去の歴史はこうなって来た」という言霊オの歴史だけでな

く、「歴史をかくの如く作って来た。今後の歴史はかくかくのように創造して行く」という言霊エの英智の歴史を浮彫りにすることが出来ました。

かくて言霊エの歴史観に立って人類史のお話をする事になるのですが、それは当然「歴史の原点に立つための四つの検討」の内、まだ検討されていない第四の問題、「人類の歴史とは何時始まったのか」に出会う事となります。この事に触れて置く事にしましょう。

人類の歴史の始まりの時とは人類が発生した時と言つて間違ひあるまい、という説があります。そして最初の人が卵生動物の如く土の中から生れ出て来る様を靈感によって主張する人もいます。またキリスト者の中には旧約聖書創世記のアダムとイブを人類の祖と信じている人もいます。それ等の説はそれと受けとめて置いて、言霊学の視点より見た人類歴史の始りについてお話しすることにしましょう。

人類はその種の発生以来今日に到るまでに二つの事業、たった二つの事業を完成させて来ました。一つは古代に於ける精神文明の完成であります。人間の心とは何ぞや、の解明です。そしてその完成体をアイウエオ五十音言霊の原理といます。もう一つは物質科学文明の完成です。物質

とは何ぞや、の解明の結論が出るのはもう間近でありますこの第二の物質科学文明の完成体としては現代に見るような物質の原子核内研究の成果や、生命の物質科学的解明の成果としてのDNA等の研究結果が挙げられましょう。

以上のことを踏まえて考えるならば、人類の歴史の始まりが何時であるか、は明らかであります。即ち人類がこの二つの事業(精神文明と物質科学の文明の創造)を意図し、その仕事を始めた時、という事が出来ます。そして、その時とは約一万年以前と推定されます。以上簡単に人類歴史の始まりをはっきりと定めた上で、歴史の本筋に入つて行く事にしましょう。

言霊学に基づく人間性全体の見地からの人類歴史は、過去の歴史書の如く栄枯盛衰、人生の転たた果ない様相を写し出す歴史ではなく、人間性のロゴスの限りなき自己発展、布斗麻邇の原理に則つた人類最高の芸術ドラマとしての栄光と歓喜の歴史です。来月号より始めさせて頂く予定です。ご期待下さい。ドラマのプレリユードが聞えて来るではありませんか……。

「なかきよの とおのねふりの みなめさめ なみのりふ

ねのおとのよきかな」(古歌)

(次号に続く)

【収載】第百十二号(平成九年十月)

●言葉と世界歴史 その三

先々月と先月の二号にわたり「歴史とは何か」のお話を致しました。今月号より言霊学の原理より見た人類の現実の歴史についてお話を進めて行く事となります。先月号にて歴史の始まりを「人類が意図的に人類文明の創造を始めた時」と規定しました。そしてその時を今より八千年乃至一万年前と推定しました。

この時を更に遡る事数千年前、その当時も人間はいろいろな営みを続けていた事でしょう。その営みの中から人は何時しか自らには心というものがある、という事に気付いたのです。「心とは何だろう」と考える人が次第に多くなって来ました。何時しかそれらの人々は地球上の一箇処に集まり、話し合い、研究を続けるようになりました。

彼等は自分達人間の心の内容とその動きについて検討すると同時に、その心を表現し他に伝える方法としての言葉や記号や図形を考え出して行きました。そしてその研究は心と言葉との関係として成果を挙げて行ったのです。

そもそも文明とは何なのでしようか。簡単に言えば「人間が大自然の内容・性質を解明し、その解明した成果を応用することによって人為的に人間のために役立つ精神的・物質的な表現物を創造して行くこと」と言うことが出来ましよう。そして文明の基礎となるものは言葉と数と文字であります。中国の古書「老子」に「無名は天地の始め、有名は万物の母」とありますように、物の名という言葉がなければ、物事について他人に伝えることが出来ません。文化の発展とは物の名である言葉そのものの発展という事が出来来ます。

次に物事の内容の変化、また大きさや量の変化というものの表現には数という観念を欠くことは出来ません。言葉は文明の母(いろは)であり、数は文明の父(かぞ)であります。更に物事を正確に遠方に、また後世に伝えるためには文字が必要です。物事の伝達手段としての言葉を保存するものとして文字は人間社会の営みに不可欠のものであります。

以上言葉と数と文字の創造ということ为基础として、人類の文明は始まったのでした。その創造は幾多の成果を生み、地球上の各地に伝えられて行きました。そして研究は次第に心の心髄にまで追求の手が入り込んで行きました。飽く

なき研究にどの位の年月を要した事でありましょうか。多分、人類が現在の世界に見る如き物質文明の開発・創造に費やした年月と同様の永い歳月を要した事でありましょう。人々は「人間の心とは何か」について余すことのない百パーセントの解答を手にすることが出来、その原理に則つて理想的な言葉と数と文字を創造することに成功したのでした。

その研究に従事した人々の集つていた処は何処であつたのでしようか。その正確な地球上の場所は今後の研究に俟たねばなりません。けれど古事記や日本書紀がその形而上の(精神上的)場所として高天原と呼んでいる事から考えますと、その地球上の場所としてはチベット・パキスタン・アフガニスタン等の高原地方ではなかつたか、と想像されます。また研究の結果、「人間の心とは何か」の完全な結論を手にしたのは何時であつたのか。多分今より八千年乃至一万年程前と推定されます。古代のスメール文化時代と呼ばれた時代より更に古い時代のことであります。

ここで歴史の本筋を少々離れたお話を挿入することにしてしましよう。人間の心とは何ぞや、の結論を得たのが八千年乃至一万年前と申しました。これに対して「その主張する

根拠は如何」と反論の気持を持たれる方もあらうかと思ひます。そのお答えとして少々お話をしたいと思つてあります。人間の心の完全な原理の発見が今より八千年乃至一万年前である、と断定する事が出来る程の論拠が見つかつてはいるわけではありません。その証拠の発見は今後の研究に俟たねばならない事は先にお話した所であります。それなら全くの根拠のない当て推量なのか、といひますと、そうではありません。その事についてお話しして見ようと思ひます。

日本の古事記・日本書紀の神話のみならず、世界各民族にはそれぞれの神話が遺されております。北歐神話、ギリシャ神話を初めその他ベルシャ・エジプト・印度・中国・朝鮮等の神話があります。またキリスト教の旧約聖書、インドのマヌの法典、中国の老子・荘子・列子等の古典並びに伝説等もあります。これ等の現代人の目から見ると「おとぎ話」のように思える記述を、アイウエオ五十音言靈布斗麻邇の学問に則つて検討してみますと、それらの記述の大部分が人間の心の奥の奥の真理・法則を根拠として書かれた比喩的な表現による真実の書である事が証明されて来ます。言い換えますと、現代人の想像を越える人類の古代

に於て、人間の心に関する学問的真理・法則が已に発見され、世界の各民族に流布・熟知されており、それがある理由により真理そのままの姿ではなく、比喩的な神話・伝説・宗教的信仰書の形で遺されて来た事が明らかに証明されて来ます。

例を一つ二つ取り上げましょう。世に知られるスフィンクスの像の事であります。スフィンクスとは頭が人間で体がライオンの姿をした像のことで、古代エジプトやアッシリア等で王宮や神殿、貴人の墳墓の前に飾られていました。またギリシャ神話の怪物であり、上半身は女で下半身は翼のあるライオンの形をしており、岩上に居て通る人に「朝は四足、昼は二足、夕は三足のものは何ぞ」と謎をかけ、解き得ないものを殺した、と伝えられています。またこの巨大なスフィンクスの像がエジプトのピラミッドの前に向しる向きに観光客に向って置かれてある光景は誰方でも知っています。スフィンクスは前を通る人間にその謎をかけ、その正しい答えは「後(うしろ)の正面だーれ」とピラミッドを指しているのです。スフィンクスの問の答えが「人間」であることは已に有名です。ピラミッドの四角錐の構造が日本の古代に於て高千穂の奇振嶽と呼ばれ、「心とは何ぞや」

の総結論として天照大神が活用して理想の政治を行う根拠となる言霊の構造体であることが分りますと、単なる民族の神話・伝説と思われているものが、重大な歴史的事実を教えている事に気付く事となります。

エジプトのピラミッドは紀元前三千年乃至二千九百年前の建造物です。その構造の意味は今でも謎であり、論争的になっていますが、言霊学からは容易にその意義を解明することが出来ます。細かい議論は抜きにして、はっきりと「言霊の原理は五千年前には已に世界に流布・熟知されていた事」が分るではありませんか。

第二の例となる話を取上げましょう。中国に易経(えいけい)という書物があります。皆さん御承知の八卦で運命を占う易断の原理を書いてある中国の古書であります。この易占いの成立に関して次のような言い伝えがあります。「易の成立に關しては、古来相伝えて、伏羲が始めて八卦を画し、文王が象辞(せんじ)を作り、周公が爻辞(こうじ)を作り、孔子が十翼(じゆよく)を作ったと称せられている……」とあります。文王と周公は古代中国の国家であつた周の王様のことであり、周は紀元前千二百年頃興つた国です。三千二百年前という事になります。

ところが易を作つたといわれる伏羲とは何時の時代の人

なのでしうか。中国の伝説を含め歴史に記されている王朝を検討してみましよう。周が興つたのが、紀元前千二百年、周の前の殷王朝が紀元前千五百年、それより昔、黄河文明が約紀元前三千年、その時代に夏という王朝が続き、五帝（黄帝・帝顓頊・帝嚳・堯・舜）の聖王が政治を行っていたと伝えられています。始めて易の八卦を画したと伝えられる伏羲という王はその夏という王朝の更に昔、三皇（燧人氏・伏羲氏・神農氏）の一人といわれます。としますと、伏羲という王は今より五千年より更に古代の人という事になります。

以上の歴史年代の事を頭に入れておいて、伏羲が八卦を画し、文王が彖辞を作り、周王が爻辞を作り、孔子が十翼を作ったと伝えられている「易の数五十、その用四十九」と謂われる易の構造と体系を調べて見ると、言霊学に於ける天津磐境といわれる先天十七言霊、天津神籙と呼ばれる後天三十二言霊の構造と全く同一であることが判明します。しかも唯それだけではなく、言霊学の天津磐境、天津神籙が人間の精神要素そのものである言霊を以て構成されているのに対し、易はその説明としての概念（太極・両儀・四

象・八卦……）と数を以て構成されています。

この言霊学と易経との両者の相違の事実から導き出される結論は明瞭です。簡潔に言えば、言霊布斗麻邇の学問が原本であり、根源の原理であり、易経は写しであり、翻訳であるということでもあります。この事実を裏書するように竹内家に伝わる古代史には「鶉草葺不合皇朝の御中主幸玉天皇の御宇、伏羲来る。天皇伏羲に天津金木を教う」と記されています。

以上の事から易の八卦を始めて画した伏羲に日本の言霊学の原理の一部が伝えられたのは、今より五千年を更に越えた昔の時代のことであり、それより更に遡る時代に、言霊の学は日本に於て活用され、実用に供せられていた事が明らかとなります。

以上ピラミッドと易経を例に引いて言霊原理成立の年代の証明を試みました。この他に言霊の原理・法則の立場から他の民族の神話の記述を調べる時、その神代と謂われる時代の神々の行為という形で示された人間の心理の深層の法則や将来への予言の意味などが明かとなり、それらの神話と言霊学との関係、またその神話が形成された年代などが解明されて来ます。それ等の事柄からも言霊の学問が発

見・完成された時代が縄文式文化の早期（紀元前五千年）、エジプト・メソポタミヤ・インダス文明（同四千年）より以前であつた事が示される事となります。

以上人類が言霊の原理を発見・完成した年代の真実を証明する事柄についてお話して来ました。次にその発見された言霊原理について簡単にお話しておきましょう。詳しくは「古事記と言霊」をお読み下さい。

人間の心は、もうこれ以上分析出来ない究極の要素五十個で構成されています。その内訳は現象として現われる以前の、所謂先天の構造要素十七、後天の現象の要素三十二、それらを文字化する要素一、合計五十個であります。それぞれにアイウエオ五十音の清音（語音としてこれ以上分析されない音）の一つ一つと結び合わせて五十個の言霊（ことたま）と呼びました。また麻邇（マニ）、霊（ヒ）とも謂います。言霊とは心の究極要素であると同時に言葉の究極要素でもあるものであります。人の心はこの五十個の言霊によつて構成されており、人という種が続く限り変ることのない構成要素であります。

この五十個の言霊を発音される音による働きの区分けを述べましょう。アイウエオ五母音（主体となる宇宙の実在）

・ワキウエヲ五半母音（客体となる宇宙実在）、五母音・五半母音を統轄する母音・半母音イとキ（親音）、親音の働きであり、アオウエ母音に働きかけて三十二の現象子音を生む原動力となる人間の根本智性チイキシリヒニの八個の父韻、以上四十九個（母音ウと半母音ウは実は同一のものであるため一個と数える）を文字で表わすン音、以上五音であります。

原理は更に五十個の言霊の運用・活用する方法、その活用によつて人間の社会を建設・創造する理想の精神構造の完成まで、言霊の一切の典型的運用法をも明らかにしました。その方法も丁度五十個あります。言霊の数五十、その運用法五十、総合計百個の原理であり、これを布斗麻邇（ふとまに）と呼びました。

五つの母音は人の心が住む五層の次元宇宙の実在です。ウオアエイの順に人間の欲望・経験知・感情・実践智・創造意志がそこから現われ出て来る元の宇宙を表わします。原理はその五母音のそれぞれから現出する人間の五つの各性能に即した精神構造を言霊五十音の配列によつて明らかに示す事に成功しております。先の五母音の順に天津金木、赤珠、宝、天津太祝詞、天津菅麻の五つの五十音言霊図

であります。

原理は次に人類が自らの文明社会を創造して行く上で主役となる三つの分野を決定し、それぞれの分野の三権分立の制度を決定しました。この決定を示す古事記の神話を少々引用することにしませう。

この時伊耶那岐の命大く歎ばして詔りたまひしく、「吾は子と生み生みて、生みの終に三柱の貴子と得たり」と詔りたまひて、すなはちその御頸珠の玉の緒ももゆらに取りゆらかして、天照大御神に賜ひて詔りたまはく、「汝が命は高天の原と知らせ」と言依さし賜ひき。かれその御頸珠の名と御倉板拳の神といふ。次に月読の命に詔りたまはく、「汝の命は夜の食国と知らせ」と、言依さしたまひき。次に建速須佐の男の命に詔りたまはく、「汝が命は海原と知らせ」と言依さしたまひき。

以上が人類が文明を創造・経営して行く上での人間精神の三分野の決定(三権分立)を明らかにした古事記の神話の一節です。この三権分立された三つの精神分野が、時には調和し、時には相反発することによって人類文明創造の歴史を推進する大きなうねりを生ずることとなります。古

事記の天照大御神が統治する高天原とは、形而上的には言霊原理の働く人間精神の頭脳中枢のことであり、形而下的には言霊原理によって統治される日本のことであります。月読の命の統治である夜の食国とは、人間精神の全機能の中から言霊の原理だけを取り除いた心の活動の全形であり、また後世精神文化が発生して来る東洋地域のことでもあります。建速須佐の男の命の治ろしめす海原とは言霊ウである五官感覚に基づく欲望世界の分野(ウの名の原)のことであり、地域的に言えば後世物質科学文明が栄えて来る西欧・アメリカ等の国々のことであります。

以上の三権の精神領域の相違を言霊を以て表しますと、高天原は言霊イとエ、夜の食国は言霊アとオ、海原はウとオという事になります。そして言霊原理の運用・活用は高天原に於てのみ許されることとなり、夜の食国と海原の統治には言霊原理はその活用を許可されなかつたのであります。そして八千年乃至一万年前、言霊原理を発見・完成させ、その原理を把持している賢者(聖・靈知り)の集団の代表名を古事記は伊耶那岐の大神と呼んでおります。

以上人類の歴史の揺籃期に於て、人類が「人間の心とは何ぞや」の問題に取り組み、その完全な解答を獲得した状

況とその人類の最初の代表者が保持・運用することになったアイウエオ五十音言霊布斗麻邇の概略についてお話いたしました。

言霊(ことたま)のことを麻邇(まに)または靈(ひ)とも呼びます。言霊原理に精通した人を靈知り(聖・ひじり)といえます。人間の精神の究極の構造原理が発見・完成されて後、高天原の靈知りの集団の中から選ばれた人達が言霊原理に則って人間が住むための理想社会を建設する目的を持って、地球上の適当な場所に向って出発することとなりました。今より少なくとも八千年以前のことと推定されます。理想の社会とはどんな内容の社会をいうのでしょうか。

それは古事記の神話が明らかに教えてくれます。高天原である高原地帯から平地に下って行った集団の代表者の名を古事記は邇邇芸命(にぎのみこと)と呼びます。邇とは二または次の意です。物事の始めは名前です。名前の始めは言霊です。言霊こそ物事の最初であります。聖書ヨハネ伝の冒頭に「太初に言あり」とあります。その言とは言霊のことです。最初の、第一次的なものが言霊です。邇邇芸です。最初の言霊に次いで第二次的なものと言えば、五十音

言霊を二つ、三つ……と繋ぎ合わせて物事の実相に合うように名付けた名前のことです。日本語の物事の名前は一言の言霊が実相の単位ですから、それを繋いだ名前は即その事物の実相を表わします。邇邇と二つ続きますので、その実相の名前の次の第三時的なもの、とは何なのでしょいか。それは物事の実相を表わす物事の名が、そのまま人と人との間の交流にも実現されて誤り乱れることのない社会や国家の事となります。そのような人間社会や国家を創造建設すること、言い換えると政治が人間の最高の芸術でありましょう。そういう理想的な人間社会・国家ひいては人類世界を創って行く事、それが邇邇芸の意味であり、その目的を持って出発した靈知りの集団の代表者の名が邇芸の命と呼ばれる所以なのであります。

また言霊原理を把持して理想世界を創造するために高原地帯より平地に邇邇芸の命が下って来る事を古事記は天孫降臨と呼んでいます。天孫の孫とは子のまた子の事です。邇邇芸の邇邇と同様の意味となります。古事記の神々の系譜によれば、天照大御神の子が天忍穗耳の命(あめのおしほみのみこと)、その子が邇邇芸の命となります。天照大御神は言霊原理による人類文明の創造神であり、その孫

ですから邇邇芸の命は天孫となるわけであり、日本民族のことを天孫民族と呼びます。

古事記の神話が天孫降臨などと書いてありますと、人ややもすると宇宙の何処かから人の眼には見えませんが、何か万能の神といわれるものがこの地球上に舞い降りて来て、ど偉い事をするように連想し勝ちであります。現代に於てもある宗教や霊能集団の中にはそんな事を信じ、まことしやかに触れ廻しているのを度々聞く事です。そのような事を信じるのは、現代の人类的危機に直面しながらその危機を回避し、完全な救済の道を見出す事が出来ない為に、心中に空想する心の避難所であり、慰安所であるに過ぎません。信仰の対象となる神は、一見空の彼方から手を差し延べてくれるように感じられる事がありますが、実際に眼前の宇宙の彼方にいらっしやるわけではありません。人を、そして人類を救う事の出来るのはただ一つ、人以外にはありません。神が降臨するということは心理的・芸術的表現としては結構でありますが、その神が広い広い眼前の宇宙の何処かからこの地球上に舞い降りて来ると思うのは全くの空想であり、神話に対する誤解に過ぎないのだ、という事を御理解頂き度いと存じます。先月号で説明いたしましたし

たように、人とは人類発生以来生き通しに生きている神であり人である人間なのであります。この神をおいて他に神がいるわけではありません。

霊知りの邇邇芸の命の集団が言霊の原理を把持して平地に下りて来た事を古事記はどう表現しているのでしょうか。それを天孫降臨に際して天照大御神の天孫邇邇芸の命に授けた「神勅」として記しています。

ここに天照大御神高木の神の命もらて……「この豊葦原の水穂の国は、汝の知らさむ国なりとことよさしたまふ。かれ命のまにまに天降りますべし」とのりたまひき。……ここにその招ぎし八尺の勾珠、鏡、また草薙の剣、と賜ひて詔りたまはくは、「これの鏡は、もはら我が御魂として、吾が御前と拝くがごと、奇きまつれ。次に思念の神は、前の事を取り持らて、政まをとしたまへ」とのりたまひき。

右の「神勅」(神のお告げ)の意味を要約してみましよう。

「この豊葦原の水穂の国はお前が治めるべき国であると定めた。行きなさい、と申しました。……そして八尺の勾珠、鏡、草薙の剣をお与えになり、この鏡は心專一に私をお祭

りするごとくに私の魂としてお祭りしなさい。次に思金の神は、私の御子の治める種々の事を取扱ってお仕えしなさい、と仰せになりました。」

右の古事記の文章の中の勾珠・鏡・劍の三種の神器の中で勾珠とは言霊五十音を示し、鏡とは人間の理想精神構造を五十音の言霊の配列で示した人類文明創造の規範であり、劍とは人間の根本的判断力の事を示したものであります。五十音言霊によって構成された文明創造の規範に照らし合わせて、理想の世界を建設する為に出発せよと言ったのであります。

先に挙げました天照大御神、月読の命、建速須佐男の命の三神による人類文明の三分野の三権分立の決定と、右の邇邇芸の命への「神勅」による文明創造上の鏡(規範)の命令とは、ここに文明創造が開始される時より人類史を貫く大動脈となり大眼目となって行く事となります。俗に「蟹はその甲羅に似せて穴を掘る」といわれます。文明創造という穴を掘って行く人類の甲羅とは何なのでしょうか。それが右の五十音言霊の原理の結論として決定された文明創造のための三権分立と、三種の神器、特にその中の鏡によって示される文明創造の最高規範である天津太祝詞音図の

精神構造のことでもあります。

人類の歴史とは一見地球上の各個人個人の行為の総合のように思われ勝ちです。けれどそれだけではありません。実際には右に挙げた人類文明の三分野の三権分立と邇邇芸の命霊知りの集団が護持する文明創造の鏡を中枢神経とし、背骨とし、大動脈として、世界人類をそれぞれの人体器官・各神経・各細胞とする人類という人間が織りなす歴史模様、言い換えると日本人の祖先である霊知りの集団、皇祖皇宗が言霊布斗麻邇に基づく歴史創造の大経綸の歴史なのであります。

人類の歴史を創造して行く上で最も重要な原則である三権分立の法則と、八咫の鏡に示される人類文明創造の手法(鏡)を持って霊知りである邇邇芸の命集団の高原地帯より平地への「天孫降臨」の移動が開始されました。事実の上での人類歴史の始まりであります。言霊原理に則って人類の理想の文明社会を建設する旅路への出発でありました。その門出の状況を古事記は次の様に伝えております。

かれこゝに天の日子^み番の邇邇芸の命、天の石位^{いはし}と離れ、

天の八重多那雲たなぐもを押し分けて、稜威りやうゑいの道別みちわかき道別みちわかきて、天の浮橋うきはしに、浮きじまり、そりたたして、竺紫つくしの日向ひなたの高千穂たかちほの靈たまじふる峰たけに天降あちりましき。

(次号に続く)

【収載】第百十三号(平成九年十一月)

●言霊と世界歴史 その四

先月号会報の終りに引用しました古事記の文章を再び書いてみましょう。

かれここに天の日子ひこ番ばんの通通つうつう芸ぎの命いのち、天の石位いしゐと離れ、天の八重多那雲たなぐもを押し分けて、稜威りやうゑいの道別みちわかき道別みちわかきて、天の浮橋うきはしに、浮きじまり、そりたたして、竺紫つくしの日向ひなたの高千穂たかちほの靈たまじふる峰たけに天降あちりましき。

右の文章について、現代の古事記の注釈書の一つを見ますと、「稜威の道別き道別きて」を「天から御座を離れ雲をおし分け威勢よく道を別けて」と解釈し、また「天の浮橋に、浮きじまり、そりたたして」を「天の階段から下に浮渚うきしほがあるってそれにお立ちになった、と解されている」と書かれています。この様な解釈が行われますと、当然天孫降臨というものが天空から神様が舞い降りて来て、そこからわが日

本の国家の歴史が始ったという神懸りのな歴史が考えられることとなります。しかし古事記の右の文章はその様な美際には有り得ない荒唐無稽かうとうむけいな内容を伝えているのではありません。邇邇にに芸命ぎのみこと靈知たまり集団しゆたいが高原地帯より理想の文明社会を建設するために平地に下って来る時、その集団が保持し、それに則って政治を行って行く精神原理の活用の内容について述べたものであります。

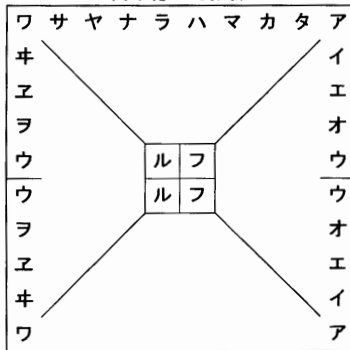
日本の古代に於ては、思想上の概念というものが使われませんでした。そのため精神上の内容を伝えるのにその内容によく似た自然物が謎の形で用いられたのです。その事を頭に置いて古事記の右の文章を読むと次のようになります。

「天の石位いしゐを離れ」とは、大祝おほむすひ祝詞いのちにある「天の磐座いはくら放ち」と同意義であります。天の石位とは古神道で謂うところの天津あまの磐境いはまかと同じ言葉であり、人間精神のまだ現象となつて現われる以前の心の働き、言い換えるると心の先天構造のことであります。十七の言霊アイウエオ(母音)、ワヰウヱヲ(半母音)、チキシヒミリイニ(八父韻)から構成されています。「放れ」とは「そこから始めて(出発して)」の意です。「天の八重多那雲たなぐもを押し分けて、稜威りやうゑいの道別みちわかき道別みちわかきて」とは同

じく大祓祝詞に「天の八重雲を巖いわきの千別ちわかに千別ちわかて」とあるの
 と同意語です。どういう意味かと申しますと、天孫降臨と
 いわれる邇邇共命集団が平地に下る以前には、まだ完成さ
 れていない物の考え方、主として須佐男命、大国主命の主
 宰する弱肉強食の霸道思想が世界に蔓延まんえんしていた事であり
 ます。人々各自が自らの欲望そのままに生き、強い者優先
 の世の中であります。この世の中の考え方を言霊によって
 表わす精神構造を天津金木と呼びます。また出雲八重垣と
 も言います。それに対し天の八重（多那）雲とは人間生命の
 最高理想の合理的な精神構造を指す
 言葉です。父韻で表わしますと（ア
 行を例にとつて）、出雲八重垣はア
 カサタナハマヤラワとなり、天の八
 重雲はアタカマハラナヤサワとなり
 ます。
 「天の浮橋に、浮きじまり、そりた
 たして」とは、右に述べました出雲
 八重垣カサタナハマヤラという八つ
 の父韻（主体であるア行の母音と客
 体であるワ行の半母音の間を結ぶ創

図 114-A

高千穂の奇振嶽



造意志の八つの父韻の働きを天の浮橋といひます。その活
 動によって現象が生れます（を天の八重雲の父韻タカマハ
 ラナヤサに結び換えて締め、その上に立脚する、という事
 です。またその作業を「道別ちわかき」と言ひます。
 「笠紫の日向の高千穂の雲くもじふる峰たけに天降りましき」とあり
 ます中の高千穂の雲くもじふる峰たけとは、次のような意味があり
 ます。（図114-A参照）。天照大神の精神構造の五十音図を
 天津太祝詞の音図といい、音図の母音はアイエオウ、父韻
 はタカマハラナヤサと並びます。この五十音図を上下に取
 ると図の様な百音図が出来上ります。こ
 の百音図の中心にフルフルの四音が入り
 ます。フル（振る）とは昔の言葉で運用す
 る・活用するの意です。このフルフルの
 所を指で挟んで上に引き上げるとしまし
 よう。するとフルフルを頂点とする四面
 五段の角椎が出来上がります。この形を
 古神道で高千穂の奇振嶽といい、言霊原
 理に則つて社会に理想の政治を敷く精神
 構造図形となります。エジプトのピラミ
 ッドなどもこれを原型とした精神の表徴

物であります。言霊原理を活用した政治の仕方を表わしたもので、理想政治の結論という事が出来ませう。

以上、先に挙げました古事記の文章「天の石位を離れ、

天の八重多那雲を押し分けて、稜威の道別き道別きて、天の浮橋に、浮きじまり、そりたたして、竺紫の日向の高千穂の靈じふる峰に天降りましき」を節を区切って説明して参りましたが、文章全体を続けて解釈しますと次の様になります。「邇邇芸命集団は高地より平地に文明創造の目的で下つて来るに当り、先ず精神の先天構造の原理である天津磐境を世の中に知らせる事から始め、それまでの世の中で行われていた不合理な混乱の状況の中に整然とした八つ父韻の並べ方の方法を適用して道理の通つた世の中に切り開き、吾と彼との間の関係を合理性ある態度で臨み、最終的に竺紫の（全体が）日向の（言霊の原理の示す方向に沿つて）高千穂の奇振嶽と呼ぶ理想の政治体制が敷かれるように言霊原理を活用して行つたのでした。」

以上、天孫降臨に當つて邇邇芸命集団のつた精神内容についてお話して来ました。原理的な説明で固苦しいお話になり恐縮であります。古事記が人類文明創造の歴史の始めに当り、先ずその天孫降臨に際し、単に歴史的事実から

始めずに、その前に精神内容を示しました事は、その後の人類史が単に地球上の人々の行為の寄せ集めとして出来上つた歴史ではなく、人間が人間であるべき根本原理に則る高度な計画の下に創造される歴史なのだ、という事を強調したものであると推察されます。

では古事記に天孫降臨と謂われた靈知りの集団の平地への移動は、実際にはどの様に行われたのでしょうか。それは古事記の次の文章に見ることが出来ます。

ここに詔りたまはく、「此地は背肉の韓國に向い竺紗の御前にま來通りて、朝日の直刺す國、夕日の日照る國なり。かれ此地ぞいと吉き地」と詔りたまひて、底津石根に宮柱太しり、高天原に氷樺高しりてましましき。

背肉の、とは古語で背筋の肉のことで、背には肉が少な
いことから、豊かでない形容に用いられます。韓國を別の書では空國と書いてあるのもあります。韓国または唐國とありますから外国、特に中国か朝鮮の事と推定されましよう。竺紗の御前とは鹿児島県にある岬と謂われます。以上の文章から天孫降臨とは西方より中国か韓国を経て最終的にこの日本に下つて来た事が推定されます。

右の古事記の文章にある「朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり」の言葉が日本という国名の起源と謂われます。

しかし「日本」言い換えますと「日の本」が国名となるまでには数千年の歴史の変遷の結果なのであり、「ひのもと」の最初の内容は天体の一つである太陽の「日の本」ではなく「霊の本」であります。即ち言霊(ひ)の原理を保持し、それによって人類文明創造の中心地・発信地の国の意でありました。その意味が「日出ずる国」の日の本となったのは数千年の歴史を経過した後の事なのであります。

以上で古事記の天孫降臨の歴史的内容についてお話して参りました。そしてこれから日本の地に下つて来た日本人の祖先である邇邇芸命霊知りの集団の日本及び世界に於ける文明創造の活動が開始されることとなりますが、一言お間違いないよう申上げておき度い事があります。その事に關して簡単にお話を申し上げます。今までの人類の歴史が比較的細部にわたり歴史学的、考古学的な研究によって各民族の栄枯盛衰の営みを明らかにして来ましたのは紀元前一千年より現代までに到る三千年間程のことです。それより以前の事は、正直に言つて「これこれであつた」と事実と断定するには物証が少なすぎる事です。つまり

はつきりしてはいないのが現状です。一万年間の人類の歴史の事実の解明は、人間が人間であるべき根本原理「布斗麻邇」の完全な解明と、学問法則としての世界的承認を待って、人類歴史の眞実の筋道が解明された後で、世界人類の総力を挙げての学術的調査に依つて始めて明らかとなる事です。

ところが、ここ三千年間より以前のまだ明らかでない人類の歴史に關心を持たれる方々が、古事記神代卷(上つ巻)の記述をあたかも現実の歴史であるかの如く解釈して、その記述を以て不明・あいまいな古代歴史の穴を埋める為の材料に用いようとする試みがあると聞きます。この様な試みは、まぐれ当たりはあるかも知れませんが、その殆ど大半は眞実とは遠いものになる事です。何故なら古事記の神話は初めより最後まで人間精神の究極の言霊的構造とその基本的運用法、それに次いでその原理に依る人類の歴史的な営みが起る根本法則を述べたものであつて、實際の歴史ではないという事を知らなければなりません。人類社会の歴史の営みの根本法則でありますから、人類歴史の画期的な變動が起る如何なる時代にもその法則は当てはまるという事が言えます。とは言え、その歴史の中

の或る特定の時代の歴史的事実を指して言っているのでは決してない事を知って頂き度いものであります。

それだけではありません。言霊原理の応用問題であります古事記上つ巻の述べる歴史創造の法則は、言霊の原理(言霊イ)に則って歴史を自らの手で創造して行くための主体的な法則(言霊エ)であります。人類歴史を客観的な《それ》の問題として「こうなるであろう」と予言するのではなく、歴史を飽くまで自分が責任を持つ歴史創造の主体者としての立場から、《かくなれ》或は《かくする》という創造的決断の歴史を述べているのです。でありますから種々の歴史書や考古学的遺物または遺跡を集めそれらを自らの経験的概念知識に従って歴史を編集して行く方法(言霊オ)に於ては到底計り知ることの出来ない境地に属しているものなのだという事に御留意なさって頂き度いものであります。古事記の歴史観と現代的手法のそれとの相違についてお話し申し上げた次第であります。

地球の高原地帯から人間精神の究極の原理に則って理想の社会を創造する地球社会の中心となる土地、それは風光明媚で気候温和であり、四季の変化が繊細でしかもはつき

りしている風土豊かな土地を目指した邇邇芸命霊知り集団の最終的に到着した土地はここ私達が現在住んでいる日本の国土でありました。

(次号に続く)

【収載】第百十四号(平成九年十二月)

言靈學隨想

●歴史創造

当会発行の「古事記と言靈」の中の「歴史編」をお読み下さい。言靈学の立場より見た日本と世界の過去より現在・未来を通じる歴史と今後の見通しが事細かく書かれています。それは人類が今世紀以後、福祉と恒久平和の世界を築くために許された唯一一つの筋道です。ところが、その記事には重要な欠落があります。何時、何処で、誰が、または誰と誰が、如何なることをしたらその実現を成し得るか、が書かれていません、その事について時々質問を受けますので、ここにお答えすることにしませう。

その「誰が」に質問者御自身を当てはめて下さい。書かれた歴史の筋道の中で「私だったらどうしようか」と考えます。そしてその考えを煮詰めて行くと、当然の帰結として「我今・此処で如何にすべき」が明かとなります。と同時に歴史の将来の展望が掌を指さす如く分つて来るでしょう、人間にはその能力が生来備わっているのです。そして実行

する力を言靈学が教え導いて呉れることでしよう。

【収載】第四百号(平成九年二月)

●太安萬侶の墓再訪

先に古事記の編纂者太安萬侶の奈良市郊外にある墓を家内と共に訪れたのは平成六年二月二十三日の事であった。雪が降る非常に寒い日であったと記憶している。その日が丁度家内の誕生日に当たっていた所せ為もあつてか、家内はその時より安萬侶氏に大層近親感を覚え安萬侶氏の事を「伯父さん、伯父さん」と呼ぶようになった。千二百年以上前に生きた人をそう呼ぶ気持となった人間の感情とは誠に妙なものである、何かの因縁のためでもあらうか。

その時から三年の余が過ぎた。その間、私共の家庭には色々な事が起つた。私自身生れて初めての大病を患い、六ヶ月間の入院療養生生活を余儀なくされた。ただ一人で留守をする羽目はめになった家内は病院への面会、研究会報発行の打合せ、書籍の発送等忙しく、心身共に疲れ果てたようであった。けれど家内は言う。「毎日、毎日、やっと生きていた様ではあつたが、不思議と一人で家に居ても寂しくはなかつた。自分の右後ろ脇に安萬侶伯父さんが何時も居る

ような感じがしていたから。別に話かけたりするわけではないけれど。」

ベッドの上の半年間の生活で、雑事に追われる事なく充分な思索の時間を持てる境遇となり、その時までアイマイであった古事記言霊百神の中の禊祓の奥^{みよまがら}疎^{とろ}の神以下の神名の意味を明確に理解することが出来、古事記神話の言霊百神の詳解を「古事記と言霊」の書名で出版し、世に送ることが出来たのであった。千二百余年前、太安萬侶が「知らしてはならず、知らさいではならず……」と木本教お筆先にある如く、苦心して太古よりの日本伝統のアイウエオ五十音言霊布斗麻邇を謎々の神話の形式で編纂した労作の書（古事記上巻）の内容を略々百パーセント現代に生きる人間の心の構造とその機能として解明することに成功したのである。

そんな事があって今回安萬侶氏の墓を再び訪れ、古事記上巻の謎解きの完了の報告をしようと関西旅行を思い立ったのである。

旅行を思い立った目的はもう一つあった。今年に入り女優であり、また独り語りの公演をなさっておられる会員、いわかね栄氏より大本教聖師出口王仁三郎氏の孫出口和明

氏の書いた「大地の母」全十二巻の寄贈を受けた。大本教教祖、出口なお氏の誕生よりその死に到るまでの八十年余にわたる詳細な生活記録とも言える事実小説である。私も読み始めたら流麗な文章に惹き込まれ、十二巻を一気に読んだ。自分の名前も書く事の出来ない教祖の貧苦の中の燃えるが如き信仰と、その清らかな魂を通じての国祖国常立尊の神懸りの物語である。

その物語の中で「黒墨・金光先走り、終りに大本の国常立神が世に現われて世界の建替え、建直しをいたすぞよ」とのお筆先のままに、教祖なお氏と女婿出口王仁三郎氏が身を以て建替え、建直しの靈的な型を示した神開きの行事を興味深く読んだものであった。

何故なら、それらの行事が言霊の原理から見て、誠に理に適った言霊原理に基づく人類の第三文明時代を建設する事業の靈的な型見本を示すものであったことを明瞭に看取することが出来たからである。木本教の教祖と王仁三郎氏の行じた建替え、建直しの型について、その主なものを言霊学の立場から列記して見よう。（初期の皇道大本は人間個人の吉凶禍福については殆ど説いてはいない。専ら世の建替え、建直しについての国常立神の神示である）

明治二十五年出口なおに神懸かりの神示が下り始める。

明治三十三年七月竜宮開きの型が示された。若狭湾に浮ぶ冠島、杳島を開く。両島間の海を竜宮海と謂う。竜宮とは性の宮の意で、八つの言霊父韻とその働きによつて生れる三十二の現象子音を指示している。冠島とは雄(主体)の島の意で、アオウエイ五母音の事であり、杳島とは雌(客体)の島の意で、ワヲウエヰ五半母音を示している。(二見ヶ浦の夫婦岩と同義である)出口なお教祖に懸かった神霊の第一の世直しの型は、結局二千年前、崇神天皇によつて世の中から隠没させられたアオウエイ五十音布斗麻邇の原理の現世への復活を意味していた事である。この神示より現在まで約百年の歳月が流れたことになる。

明治三十三年十月、京都の鞍馬開きの行が行われた。その行は鞍馬の火祭で有名な由紀神社、鞍馬寺、不動堂、それに奥の院魔王殿に於て行われた事が小説に書かれている。その行事の霊的な意味が何であるか、社寺の名前を言霊を以て見ることで大よそ推定することが出来たが、実際の断定はその地にお詣りする時の感応に委せることにした。大本の型の行が実際の人類の歴史の上で如何なる意味をこめたものであったか、旅行前の興味は津々たるものが

あった

更に大本の型示しの行は大正五年六月より三回わたり頼戸内海播磨灘沖の神島開きと続いている。仏説の弥勒菩薩の成仏、神道で謂うみろく神の出現へ道を開く神開きの行である。弥勒菩薩の成仏とは如何なるものか、これも大きな関心が持たれた。

小説「大地の母」に書かれた大本教祖出口なお女史が八十年の生涯に身を以て行じた世の建替え・建直しの霊的な型の行事が、言霊学の見地から極めて合理的であることを知り、この度の関西旅行のスケジュールの中に右の大本教の行事の跡を辿る為の鞍馬詣りを入れることにしたのだった。因みに出口なお女史は神島開きの行事の翌々年、大正七年十一月に八十年の貧苦と信仰とお筆先の生涯を閉じている。

大本教祖の型示しの跡を辿る事、安萬侶氏の墓詣りの家内と私の旅は十月二十一日(火)朝、七時五十六分東京発の「のぞみ号」に乗ることで始つた。京都で山陰線の特急に乗り換えて一時間余。十一時三十三分綾部駅に着いた。駅前よりタクシーで五分、大本本部に着く。先ず事務所で当会発行の書籍「コトタマの話」「言霊」「古事記と言霊」を各一冊

宛、並びに玉串料を奉納して後、御神殿の長生殿にお詣りした。家内と共にご神前近くに進み、「高天原成弥栄」を三唱した。広い御神前には私達の他誰もいない。広々としてまた清々としている。今世紀(二十世紀)最大の木造建築との事。総松造りで清楚壮大である。続いて歴代教祖をお祀りしてある老松殿に詣った。教祖出口なお女史の霊に「誠に世の建替え・建直しの御神業の型示し、御苦勞様で御座いました」と言葉で告げた。今から百年前の靈的型示し(神開き)が現代の實際の世界文明の大転換の時、所謂「九分九厘の一厘の仕組」のその一厘の仕組がアオウエイ五十音言靈布斗麻邇の原理の復活となって実現されたのである。文字通り御苦勞様であつたわけである。因に大本教祖は初代なお、二代すみ、三代直日、現在聖子の諸女史と続いている由。代々女性の教主である。

帰途境内入口にある松香殿なる信者用の施設に立ち寄つた。丁度お昼刻である。一人三百五十円也の昼食を御馳走になつた。小鱈の南蛮漬、茸と野菜のいためもの、それにお新香と御飯は食べ放題、質素の中に温かみがある御馳走であり、御給仕の御婦人達も礼儀正しく親切であり、「おなおさん」の精神が現代まで残っている事に感心したので

つた。

帰りは駅までの道を歩いた。大本通りと名付けられた商店街は秋の日差の下で如何にも鄙びて和やかな町並であつた。大本開教当時、教祖の神示を慕つて全国より集つて来た信者の人々の子孫の家も多いのではなからうかと思つた。

その夜は明日のスケジュールの都合上、京都に近い亀岡に宿をとつた。

翌早朝に宿を出て京都に向つた。通勤の人々の雑踏を縫うようにして京都駅前よりバスで出町柳へ。そこで叡山電鉄鞍馬線に乗り換えて終点鞍馬駅で下車。駅前から鞍馬寺の門前町の家並が続いている。徒歩少々。登りにかゝる所に山門がある。まだ朝のうちなのに町が何となくあわたたしい様子。山門脇の雍州路なる店で雲珠そばという名物を朝飯に食べようと店内に入ったところ「今日は鞍馬の火祭の日で、店はお休み」と告げられた。年に一度の火祭の日に来合わせたのだつた。

鞍馬寺への道は山門を少し入った所から二手に分れる。右はケーブルカーの道でお寺の下へ。左はつづら折の坂道で途中に鞍馬の総氏神、由岐神社があるという。その道を

登った。神社社前には火祭りの日とて羽織袴の町の顔役衆が多勢集つていた。立札に御祭神は大己貴命と少彦名命とあり、平安時代に王城鎮護のための創建とある。いよいよこれより大本の鞍馬開きの言霊学による謎解き（審神）が始まることとなる。

大己貴命とは如何なる神であるか。古事記に「大國主神。またの名は大穴牟遲の神といひ、またの名は葦原色許男の神といひ、またの名は八千矛の神といひ、またの名は宇都志國玉の神といひ、併せて五つの名あり」と書かれている須佐男命直系の神であり、現在島根県の出雲大社に祭られる神である。須佐男命がここ三千年の物質科学文明創造の根本理念の神であるのに対し、この神は大國主命または宇都志（現）國玉（國魂）の神といわれる如く、この理念の現実の実行を担当する原動力の神であり、八千矛の神と呼ばれる如く八千即ち八道で、八拳の劍（矛）による物質科学原理解明の神でもある。

毎年十月を神無月と呼び、出雲国だけが神有月と呼ぶ如く、全国の神々がこの神の下に集つてくる総師の神、物質科学文明時代を主宰する大元締の神である。ユダヤ教ではこの神のことを須佐男命と一体のものとしてエホバと呼

ぶ。ここ由紀神社がこの神を祭神として平安の王城鎮護のために創建されたのも当然のことである。平安時代を含め神武天皇より昭和天皇までの神倭皇朝の主眼の一つが物質文明創造にあつたからである。

では由紀神社のもう一方の祭神、少彦名命とは如何なる神なのであろうか。その神名を言霊学によつて解いてみると、少（すくな）彦名（日子・言霊）とは発音上最も単純な言霊、即ちアオウエイの五母音という事になる。これは人間としての主体自覚の確立した姿を表わしている。ところが古事記の「少名毘古那の神」の章を見ると、次の様に書かれている。少々長くなるが引用しよう、

かれ大國主の神、出雲の御大の御前にいます時に、波の穂より、天の羅摩の輪乗りて、鶴の皮を内刺ぎに剥ぎて衣服にして、帰り来る神あり。……ここに多通具久白して言さく、「こは久延毘古ぞかならず知りたらむ」と白ししかば、すなはら久延毘古を召して問ひたまふ時に答えて白さく、「こは神産栗日御祖の命に白し上げしかば、こは實に我が子なり。子の中に、我が手俣より漏きし子な

り。かれ汝葦原色許男の命と兄弟となりて、その国作り堅めよ」とのりたまひき。かれそれより、大穴牟遲と少名毘古那と二柱の神相並びて、この国作り堅めたまひき。然ありて後には、その少名毘古那の神は、常世の国に渡りましき。

少彦名の命という神名だけで見れば、人間の心の主体、アオウエイ五母音の自覚の姿を表わしているが、右の古事記の文章は明らかに「こは神産巢日の神の御子少名毘古那の神なり」と、客体神産巢日の神(言霊ワ)の御子として客体側の神であることを示している。これは如何なる意味なのであろうか。この疑問を解くために古事記の右の文章の内容に立入って調べて見なければならぬ。この審神の中から日本と世界に関する重要な出来事が一つ一つ浮び上つて来る事となる。

(次号に続く)

【収載】第百十四号(平成九年十二月)

●太安萬侶の墓再訪(言霊学随想その二)

少彦名命がその名前だけの言霊学的解釈は明らかに主体である五母音の自覚の姿である。ところがその神が神産巢

日の神の子と古事記が謂い、客体の側の神と殊更に指摘している。この意味は何なのか。これを解くためには、少彦名命に関する前号の文章全体を調べなければならない。随想の中であるから難しい理論説明は後日に譲り、結論を急ぐ事にしよう。(読者御自身興味がおありなら、少彦名命の古事記の文章の謎解きをなさって頂き度い。言霊学の良し勉強となること受け合ひである。)

「主体的法則の自覚体でありながら、客体世界の側に属するもの」と言えば、「主体的に精神の法則として捉えたものを、翻って客体的な肉体・物質の研究に活用・応用したものと見るより他にない。そんなものがあるであらうか。確かにある。例えば漢法医学である。漢法で五臓六腑という如く、五母音の自覚を肉体の診断に使っている。「神代の昔、日本に少彦名命の医術があった」とは現在の漢法医学の伝説となつている。その医術が日本で断絶し、その一端が中国に伝わつて発展したものが今日の漢法医学である。「大穴牟遲と少名毘古那と二柱の神相並びて、この国作り堅めたまひき。然ありて後には、その少名毘古那の神は、常世の国(外国)に渡りましき」と古事記は指摘している。

医学だけではない。紀元前五百年程以前のギリシヤの人

ピタゴラスにその名を冠した幾何学の定理「直角三角形の直角を挟む両辺の二乗の和は斜辺の二乗に等しい」がある。読者の多くは多分奇異に思われるであろうが、この定理が言霊学に於ける所謂東洋精神(数霊八)と西洋精神(数霊六)を統合調和させる唯一の道、日本の言霊学(数霊十)の關係(8+6=10)の幾何学への適用から生れたのである事を知る人は極めて少ない。かくて少彦名命とは、五母音の法則を活用して客体的、物質的生活を研究する基礎法則に名付けた神名である事が了解される。

その他、五母音の自覚の応用は中国・印度の哲学五行・五大の原理など幾多の結果を生むのである。以上の事から須佐男命・大国主命の主宰する物質文明の時代にあつては、金力・権力に拠る政治大国主命(大穴牟遲命)と少彦名命との協力は文明創造の不可欠の要件であつた事が理解されると同時に、その二柱の神を祭る由岐神社が平安朝王城の鎮護のために創建された理由も当然の事と頷けるのである。少彦名命は物質文明創造の初期に於て、物質科学の基礎を築く働きの神ということが出来る。

由岐神社の参拝を終え、先程登つて来た道を引返した。

山門脇より鞍馬寺下まで登るケーブルカーに乗るためである。このケーブルは乗車賃を取らない。代りに一人百円の愛山料を徴収する。ケーブルカーの施設は信者さんが寺に寄贈して、今は寺の所有であるが、寺が交通事業を行うわけには行かない。そこで乗車の人から鞍馬寺山内の整備に協力して貰う愛山料との由、聞いて納得がいった。ケーブルの終点より寺までは参道と石段続きで登るのに骨が折れる。参道の清掃は行届いていた。愛山料のお蔭であろうか。参道を掃除している男の人に「今日は火祭りの日だそうです」と話しかけた所、「火祭りと当山とは関係ありません」という素気ない言葉が返つて来た。咄嗟のことで哑然とした。登りつめた本堂(本殿という)は銅板葺きで、鄙びた造りであった。境内から京都市街を見渡すことが出来る。家内と共に合掌し、「高天原成弥栄」を口の中で称えた。

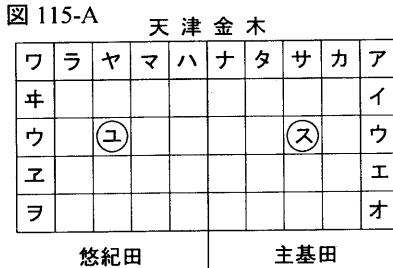
鞍馬寺案内によれば、本殿金堂は鞍馬山の中心道場であり、堂内には千手観世音菩薩、毘沙門天王、護法魔王尊を安置。この三尊は三身一体として尊天と呼び、地球と太陽、月輪の精霊、すなわち宇宙生命を表しているという。

金堂前で「高天原成弥栄」を称え乍ら、鞍馬寺のこの三身一体の道理の意義が直ぐに分つて来た。これは言霊原理隱

没後の三貴子(みはしらのうづみこ)の姿を表徴している事に。鞍馬寺案内によれば、「六百五十年前の太古から、鞍馬山には金星より地球の靈王として遣わされた靈神サナート・クマラが示現されており、常に神の靈波をだしている」と記されている。五行の木火土金水の金は言靈ウであり、魔王とは須佐男命の表徴なのだ。三尊のうち、千手觀世音菩薩は言靈エ、護法神毘舍門天は言靈オ、魔王尊は言靈ウに当り、三身ウオエが一体となった理想の精神状況を表わしている。言靈原理が隠されて物質文明創造の世となった最中に、太古の三貴子の並立する高天原の姿を志向した仏寺としては誠に珍しい形式の寺なのである。

同時に、先に参拝を済ませた由岐神社との

関係が、まるで一つの絵にまとまるが如くに意識されて来たのであった。元々由岐神社なる社名が気になって来たが、今ここで明らかに天皇即位の儀式である大嘗祭に於ける悠紀殿に当り、鞍馬寺金堂が主基殿を成している事に気付いたのだった(図115-A参照)。



言靈原理隱没後の生存競争の世界の精神構造は天津金木で示される。音図を左右に縦に二分すると、向って右の上段はアカサタナとなる。「明かき悟りの田を成せ」と読め、宗教心の要諦である。図右半分の中心に言靈スが入る。大嘗祭に於ける主基殿の名はこれに由来する。

音図の上段はハマヤラワとなる。「端をまとめて八つの列に和せ」と読める。これは物質科学の手法である。音図左半分の中心に言靈ユが入る。大嘗祭に於ける悠紀殿の名の由来である。

言靈原理隱没後の世界は、悠紀殿に表徴される物質文明と、その社会に於ける精神荒廃の慰めとなる主基殿の宗教活動とが双方譲らぬ精神抗争を繰返して来た。即位する天皇の役割は本来天皇が自覚すべき言靈原理を表徴

する稻(言靈イの音)を以て物質と精神の両文明の調和の責任の型を示す。これが大嘗祭の意義である。そして今、大嘗祭に於ける主基殿を鞍馬寺が、悠紀殿を由岐神社が靈的な型を代表することが明らかとなった。(後で聞いた話であるが、由岐神社が鞍馬寺の山内にあるに拘らず、両者は

昔から仲が悪いのだそうだ。ある年両者の仲違いで由岐神社の火祭が中止された事があったとか。(鞍馬寺の掃除をしていた人の火祭に対する素気ない態度も宜なるかな、と思つた。

大本教の出口なお女史と王仁三郎氏が、冠島と杳島開きによつて言霊開眼の型を示した後、この鞍馬寺と由岐神社に参詣し、自らを言霊原理自覚の霊的責任者となつて鞍馬寺と由岐神社が代表する精神文明と物質文明との調和世界実現の型を実行したのである。出口なお女史に懸かつた国常立命の人類文明創造の計画の型が実に正確であつた事に頭が下がる思いがしたのだつた。

本堂に向つて左へ上る階段を登つて行くと霊宝殿に着く。そこで数々の国宝・重文の寺宝を拝観し、更に登ると次第に深山幽谷に入つた感じである。登り切つた所に源義経が籠つたという義経堂がある。そこから下り坂となり、不動堂を経て奥の院魔王殿に着く。老杉に囲まれた小さなお堂で、六五〇万年前に金星から天降つたといわれる魔王尊が祭られている。お堂右手の湧き水で手を洗い、参拝した。そそり立つ大木に囲まれ、薄暗い森の中の質素なお堂

なのだが、そこから受ける雰囲気が何かに似ている。「おやつ」と思つた。そして瞬間的に思い出した。東京の広尾にあるユダヤ教の教会のことを。

もう二十数年前のこと。言霊学の師、小笠原考次氏著「古事記解義言霊百神」の英訳の仕事を終え、その校正をたまたま師の家を訪れていたユダヤ教のラビ・トケーヤー氏に依頼し、氏は快く引き受けてくれた。二ヶ月程の後にラビから「校正が終つたから来てほしい」の電話があり、私は生れて初めてユダヤ教の教会を訪ねたのだつた。木とガラスで造られた質素な教会の空間に足を踏み入れた瞬間、思はず受けたその雰囲気というか、その感じと今、目の前に見る魔王殿がピッタリなのである。形容が難しい。質素で清楚で、都会的でなくむしろ鄙びた感じの中に、否、その奥に何か人間臭い黒いものがある。「これは正しく《魔王》殿なのだ」と気付いたのだつた。

鞍馬寺の三身一体である千手観音と毘舍文天と魔王尊の中の、魔王尊だけが奥の院に祭られているのは何故なのであろうか。種々の理由が語られて来た事であらう。けれどその真実の筋道が解明される時、皇祖皇宗の世界歴史の経綸、大本教の神開きの意味、更に神開きを越えた歴史的任

務の内容が明らかとなつて来たのだつた。

魔王殿の魔王尊は、三貴子の天照大神の岩戸隠れ、言霊原理隠没後の須佐男命(言霊ウ)の《独走》の姿である。歴史の事実から言えば、物質科学文明創造の時代のユダヤの神、エホバの独裁の姿を映している。出口なお、王仁三郎両氏と大本教信徒の一行は、蕙しづなを持って行つて魔王殿の裏で一夜を明かしたという。何故か。魔王と共に一夜を過ごすことによつて、大本は須佐男命の物質科学時代創造のための《独走》を追認する神事を行つたと同時に、大本自体が魔王となつて、「世の建替え、建直し」の中の、建替え、言換えれば、旧来の皇室の終焉、日本国家の覆滅のための社会の裏の旗頭の任に就く霊的行事をも行つた事が理解されて来る。

由岐神社と鞍馬寺にまつわる《大嘗祭》の神事は出口なお女史の担当であり、魔王殿に於ける魔王と一体化の神示は王仁三郎氏が主体となつた事が推察される。その立場から大本教のその後を見る時、王仁三郎氏の行動の真の意図が明らかに看取されるであろう。王仁三郎氏は白馬に跨つて都大路を闊歩した。陸海軍のエリート将校を集めて世界の建替え・建直しの思想を吹込み、終に日本を米英を敵に廻

す大戦争に追いやり、旧日本の滅亡を招来させ、結果として百二十四代続いた日本の神倭皇朝の皇室を昭和天皇を最後に終焉させたのである。《建替え》は見事に成功したのでつた。建替え即ち破壊の意味を知つて破壊する、それこそ魔王であり、王仁三郎氏の面目躍如たるものがある、と言えようか。

この事を仏説で説明しよう。魔王殿裏に夜を過した行事により出口王仁三郎氏は仏説の所謂提婆達多たいはだたになつた。出口なお女史の泰ずる国粹の神靈国常立命に対抗する別行動の旗頭となり、日本の建直しの為の建替え(旧日本の破壊)を意図する魔王となつた(この大本教内の霊的抗争は「大地の母」に詳しく述べられている)。鞍馬開きの神事より十数年が経つた大正五年、王仁三郎氏は瀬戸内海の神島開きを行つてゐる。提婆達多が成仏して弥勒みろくとなる神事である。魔王であり、提婆達多となつた王仁三郎氏が、その《破壊》の意義達成の功績の故に、弥勒仏と成仏することとなる。但し、この王仁三郎氏の霊が弥勒となつて成仏するのは、大本教の、または仏教や神道のその後の宗教活動によつてではない。王仁三郎氏の成道、更にはなお女史の予言の成就是一にかかつて言霊布斗麻邇の今後の活用如何にかか

ているのである。

大本教の鞍馬開きの神事の跡を辿る旅は終わった。魔王殿より一気に坂道を貴船に下った。明日は旅の主目的の太安萬侶の墓詣りである。乗物を乗り継ぎ奈良に向った。その日京の街は《時代祭り》の行列で賑っていた。

十月二十三日朝七時四十分近鉄奈良駅発北野行ききのバスで出発、安萬侶氏の墓詣りは九時少し前であった。最初に来た時と違い県指定の史跡太安萬侶氏の墓は草に蔽われ荒れていた。路傍の野菊の花を一本手折り、墓前に供え、家内と共に「高天原成弥栄」を称え、古事記言霊百神の開眼の現状を報告した。墓詣りを終え、家内に「何か感じたか」と問うた。「叔父さん、全く知らん顔よ」と家内の答え、感応のないのは御経論扶翼の活動が順調な証拠というものであらう。そう言えば、この墓詣りという主目的があったからこそ、鞍馬詣りも出来たのである。これも安萬侶叔父さんのお導きと言えようか。

旅行の主目的の墓参が午前中に終り、午後は三十年ぶりに法隆寺へ行く事にした。幸いにその日は夢殿の救世観音ぐせくわんおんの秋の御開帳であった。聖徳太子と等身大に造られた救世観音の像のお顔に晴れの出番を迎える救世観音の眼差しを

見たような思いがしたのである。斑鳩ひまろがの里に秋の陽がさわやかであった。

【収載】第百十五号(平成十年一月)

(終り)

平成十年

● 言葉と世界歴史 その五

邇邇芸の命靈知り集団がこの日本の国土に初めてその足跡を印した所は何処であつたのでしょうか。その詳細は今後の研究に俟たねばなりません。靈知りの携えて来た統治の方法・手段を「高千穂の奇振嶽」と謂い、また古事記に「笠紗の御前に来ま通りて」とありますから、多分九州の南部地方ではなかつたかと推察されます。

この日本の国土に下つて来た靈知りの集団が先ず最初に行つた事は何であつたのでしょうか。それは先にお話ししました如く、邇邇芸の命という名前が教えてくれます。邇邇芸とは「第二次的な、またその二次的な」の意です。第一次的なものは生命即言葉である言靈です。哲学ではロゴスと呼び「神の言葉」とも訳されます。その第二次的なものとは言靈により、その法則に従つて造られた言葉という事が出来ず。更にその二次的なもの、初めから言えば第三次的な芸術とは造られた言葉がそのまま通用して矛盾の起らない人間社会という事です。この様な社会を創ることを今の言葉で政治と言いましよう。

邇邇芸の命集団が最初に着手した仕事はその日本の風土

・気候等環境の実相に見合つた言葉を言靈の原理に基づいて造つて行く事であり、またその言葉が示す内容通りの社会制度を整えて行く事でありました。それは正しく人類の文明の始まりと言う事が出来ましょう。そしてこの生命の真理に基づく言葉と社会制度の創立の事実は徐々に世界の各地に伝わつて行きました。

古事記の邇邇芸の命による人類文明創造の始まりの事実を古事記以外の書である民間の稗史、竹内古文獻ではどう書いてあるのか、に触れて置く事にしましょう。この文明の始まりを竹内古文獻では皇統第一代天日本葦牙氣皇主天皇（あめのひのもとあしかびきみぬしスメラミコト）の治績として述べられています。天皇はヒヒイロカネの玉を持って天界より日本に降臨したとあります。ヒヒイロカネとは靈代神音（神代文字）の事であり、玉とは言葉の玉の意で、言靈の事を示します。天皇は言靈原理を持つて降臨したという事ですから、古事記の邇邇芸の命の天孫降臨と全く同じ内容であることがお分かり頂けることと思います。この人類文明創造の第一歩が踏み出されたのは八千年程前のことあります。言靈原理に則り、言葉が創られまし

た。古代大和言葉の創造です。同時にその言葉に見合う社会制度が完備され、その成果が時と共に広く世界へ伝播されました。日本は文字通り言霊原理による人類精神文明創造の世界の中心の国《霊の本》となりました。

言霊原理による物事の名前を付ける役の名を古事記は宇都志日金折の命と謂い、竹内古文獻は萬言文造主の命と呼んでいます。新しい文明の発展とは、その創造物に付けられる名前の発展であるという事が出来ます。新しい真理の言葉が次々に世界に広められました。その伝播の速度は現在から見れば余程遅いものであつたでしょう。しかし年月をかけて着実に世界各地に伝えられ、その地域々々の実情と時代の変化に適合した文化が作られ、定着して行きました。

世界が一つの政治の舞台としてまとまつて来ました。現在の世界の各民族の神話が物語るように、世界が神の国と謂われる平和で豊かな世の中が続くようになります。旧約聖書に示されますように「はじめ世界は一つの言葉であつた」のです。世界は真理即言葉、生命即言葉である言葉の政治によつて治められていました。この政治を「まつりごと」と謂います。真釣りごと、の意です。三種の神器の剣

の章でお話しましたように（「コトタマの話」三種の神器参照）世界の各民族の性質、氣候、風土等を詳細に分析してその真実の相を觀取し（太刀）、そこで得られた真実（ま）がすべて生かされるように全体がまとめられる（真釣り）政治のことであります。言霊原理の自覚によつてのみ初めて実行が可能となる政治です。

政治という言葉を目にしますと現代人は直ちに今の社会に見る如き権力・金力による少より多が、弱より強が支配する政治を思い浮かべることでしよう。けれど布斗麻邇の原理による太古の政治はそれとは全く趣を異にしたものであります。政（まつりごと）を司る心の根底は愛であり慈悲であります。大御心と呼びます。国民は大御宝（おおみたから）です。政治の手法は高千穂の奇振嶽で述べました如く、父韻の並びがタカカマハラナヤサとなる萬人がその所を得しめられる（仏教で撰取不捨と謂う）調和と平和の政治であります。事が起ろうとする前に、その兆しを見て時と処の変化に素早く対応して誤ることのない政治、誇張して謂えば何事も大事が起ることのない社会をモットーとする政治、言霊原理による合理性と宗教的愛に基づく道徳の政治です。

以上のような政治による平和で心豊かな時代が日本と世界を舞台に約五千年近い間続きました。竹内文献によれば、この間日本の皇朝は邇邇芸皇朝、彦穗穗出見皇朝、鵜草葺不合皇朝と続く三代の皇朝があつた事が記されています。それぞれの皇朝は天皇（スメラミコト）が十数代或は数十代即位したとあります。邇邇芸という皇朝の名は已にお話しました。言霊原理によつて政治という芸術を始めた皇朝の意であります。彦穗穗出見という名は言霊原理（彦・靈子）による政治の実りが穂に穂が咲いて現われ出た（出見）時代の皇朝という意味であり、この時代に日本及び世界の精神文明は最盛期を迎えた事が窺えます。

右の神代と謂われる古代の精神文明の時代が如何なる状況であつたか、についてお話ししてみましょう。その精神文明の時代の日本の統治の責任者を天津日嗣天皇（あまつひつぎスメラミコト）と言います。天津日嗣とは人間が天との性能、人間を人間たらしめている心の先天と後天の全性能の自覚を受け継いでいる、の意であります。天皇（スメラミコト）とは、その自覚された人間の全性能を理想的に活用することによつて世界の人々の心を統一する人の意です。ここ二千年余の神倭皇朝の天皇の如く国民信仰の対象

であつたり、現代天皇の如く国民統合の象徴と言つたアイマイなものではなく、天皇自身が身につけた愛と英智の徳によつて全世界の人々の状況を把握し、これ等に各々処を得しめて足らぬ事のない政治の責任者であつたのです。

天皇が最高の統治の責任者である政庁の事を百敷の大宮と呼びました。その政庁がどんな組織を持っていたか、は大祓祝詞に詳しく述べられておりますが、その詳細は他の機会に譲ることに致します。その政庁は単に政治を行うだけでなく、言霊原理の活用によつて精神文化（言語・文字・産業）を次々に生み出し、世界の各民族の実情に適合するよう教え伝える教育の庁でもありました。竹内文献によれば天皇は即位し、都を定めるに際し、常に新しい地方を選び、創造された文化を地方に伝える便宜を計つたと伝えられています。また各代の天皇は即位後、数年乃至十数年をかけて世界各地を巡回し、行く先々にて言語・文字・生活の手法等を伝え、徳化・教化をするを常としたことも示されています。最近日本や世界の各地に日本古代の神代文字が発見され、解読されつつあるという報道が伝えられますが、その事の真实性を裏付けるものとして右の史実を挙げる事が出来ましょう。

古文献によれば、現在の中国をエダナクニ、ヨーロッパをヨモツクニ、南北アメリカをそれぞれヒナタエビロス・ヒウケエビロスと呼びました。

また代々の天皇の即位式に当っては、世界中の各国の王達が儀式に参列した事が伝えられています。

日本の歴代の天皇の御霊を祭った廟を皇祖皇太神宮（すめおやすめらおほたましいたまや）といいました。外国の王達が死ぬと、その遺骸は日本に運ばれ葬られました。別祖大神宮と呼ばれます。この両神宮の關係は現在の伊勢神宮の内宮・外宮の關係を思わせるものがあります。

最後に竹内文献にある皇統第二十二代天疎日向津比売天（あまかるとむかひめ）津日嗣天皇の遷宮の状況を記すことにしましょう。

天皇は英智・靈力に恵まれた美しい神巫（靈能者）でありました。その皇居は天越根中国（越中）にあり、本殿六百六十一尺、前殿千二百六十一尺、奥行千二十一尺、桧白木造りの壮大な宮でありました。その遷宮祭に当り、天皇は羽衣、冠を着用され、皇族並びに百官、それに外国の王達を従えて日球国（飛驒）から神通川を下られました。その当時の神通川は現在の信濃川のような大河で、飛驒に通じていたのですが、日本海の陥没地震のために今日のような急流

になったと記されています。天皇はその宮殿で天津日嗣の宣言をされ、世界の王達から宣誓と祝賀を受けられたのでした。

以上神代と謂われる古代の日本と世界の状況を簡単に述べて来ました。それは天孫降臨の八千年前より数千年間の出来事であります。この時代の状況を更に詳しくお知りになり度い方は次に挙げる書物を参照して下さい。先ずは茨城県磯原の竹内家に伝わる竹内古文献であります。この文献には山根キク氏著「世界の正史」（昭和三十九年刊）、その他最近発刊の種類の抄訳があります。また矢野祐太郎氏と小笠原孝次氏の共編の「神靈密書」（昭和六年作成、昭和三十九年再刊）にも収められております。その他先の大戦以前に酒井将軍氏等による著書が出版されたと聞いております。竹内文献以外には秋田県横手唐松神社に伝わる物部文献（未発表）、秦の徐福が撰つたと伝えられる富士宮下古文書、また源頼朝の子大友能直が編纂した大友の上記（うえつふみ）、安部古文獻等々が知られています。

（次号に続く）

●言霊と世界歴史 その六

【収載】第百十五号（平成十年一月）

アイウエオ五十音言靈布斗麻邇の原理に基づく人類文明創造の時代は八千年前より約五千年の間続きます。この五千年の間に日本に於ては邇々芸皇朝、彦穂々出見皇朝、鵜草葺不合皇朝と三つの皇朝が続きました。いづれも十数代または数十代の天皇（スメラミコト）が即位した皇朝（*Onasay*）でありました。この五千年間を人類の精神文明時代と呼んでいます。人類の歴史を主体である精神の原理を基礎にして追求・建設した時代という意味であります。

三つの皇朝の中で、最初の邇々芸皇朝は精神文明創造初期の皇朝であり、次の彦穂々出見皇朝は人類の精神文明が完成され、最盛期を迎えた時代であったと言う事が出来ましよう。前にも申しましたが、彦穂々出見皇朝とは言靈原理による文明社会（日子）の成果が穂に穂が咲く如く（穂々）実現した（出見）皇朝の意を示しています。精神文明の成熟の時代であります。この時代に於て人類の精神文明は霊の本日本の国を中心として世界が「一の言であった」と表現される完成・成熟の時代を迎えた事になります。

第三番目の鵜草葺不合皇朝も引続き精神文明の時代でありました。精神文明の爛熟の時代と言う事が出来るのであります。けれどこの皇朝時代は前の二つの皇朝の時と少

々趣を異にしていました。精神文明の華が悉く咲き誇っていたと同時に、その中で精神文明とは正反対の文明である物質科学文明の芽が萌え出て来た時代でもありました。鵜草葺不合という皇朝の名前がその事をよく物語っています。鵜草とはウの神の屋の意です。人間の五官感覚に基づく認識作用は言靈ウに属します。その宇宙性能の中に作り出される神の家屋と言えば正に物質科学を意味します。葺不合でありますから、その神の家屋である物質科学の研究がまだ完成されていない、という事を示しています。鵜草葺不合皇朝の時代とは、人間の主体的な心の原理に基づく精神文明の成熟した社会相の中に、人間の客観的な物質界観察の自然科学の芽が微かに萌え始めた時代でありました。

以上の鵜草葺不合朝に於ける時代相の変化を古事記の文章で見ることによしましよう。邇々芸・彦穂々出見皇朝の精神文明生長の時代は古事記の所謂天照大神・月読命・須佐男命の三貴子（みはしらのうずみこ）の三権並立の時代と言う事が出来ます。天照大神の言靈原理の幸倍う高天原日本に於て、月読命の芸術並びに精神学問の分野と須佐男命の産業経済の分野が三位一体となって世界の精神文明創造の

ために協力して経営の任に當つていた時代でありました。

それが鵜草葺不合朝の中葉になつて、人類世界の精神文明爛熟の時を迎え、三貴子の三権分立の協力体制に変化が現われて来ました。人間の五官感覚に基づく認識の分野を担当する須佐男命が三権協同の枠を離れて自己独立の自己主張を始めたのでした。

精神文明の創造時代にあつては、社会の政治・学問・教育・産業・経済等すべての分野が唯一の精神原理である布斗麻邇の指導の下に行われていました。ところが鵜草葺不合朝の中期になつて、産業経済を司つていた須佐男命と呼ばれる物質研究担当の集団の中からその時までにはなかつた新しい主張が言い始められて来ました。「歴代の天皇(スメラミコト)の統率する日本の百敷の大宮の世界統治の布斗麻邇の原理は全く非のうち所のない立派な法則である。

この法則を適用して我々は物質の生産・分配の任に當つて来た。精神原理を物質の世界に適用する方法とは別に、物質現象の一つ一つを観察して物質特有の法則を研究するという未開発の道がある様に思われて仕方がない。我々は今からは高天原の精神原理からは離れて、物質独自の客観法則を研究して行き度いと思ふ」と志したのでした。須佐男

命物質科学研究集団の誕生です。

世界統治の頂点に立つ天皇はじめ靈知りの集団も高天原の主体的精神原理とは反対方向にある客観的物質法則の研究態度が存在することを常々予感していたところでありましたから、須佐男命物質科学研究集団の意図を了としたのでした。けれど客観的な物質現象の研究は物事を細断・分析し、その内容構造を調べる事から始まります。謂わば《破壊》を基調とする作業です。それは万物の調和・協調を基本とする靈の本・高天原日本に於てその研究を推進するのは適當ではありません。そこで須佐男命の高天原から黄泉国(外国)への《神逐(かんやち)ひ》という形で、須佐男命科学研究集団は外国へ出発して行きました。今より約五千年前の事と推定されます。以上は古事記の文章を参考とした物質科学文明発祥の消息であります。

日本を出発した須佐男命科学研究集団は先ず隣国朝鮮に渡り、新しい国家を創立しました。檀君国といひます。次いで中国の東北部に進み、更に印度にまで達しました。中国東北部に伝わる古文書「契丹古伝」は須佐男命集団が建設した古代国家は夏(か)・殷(ひん)までであり、その後立つた国家、周(しゅう)は西域から中国に侵入して来た異民族が殷の国を滅ぼ

して建国した国家であると伝えていきます。

須佐男命集団の科学研究の初期に於ては、現代の科学研究に見られる如き一定の研究方法が確立されていませんでしたから、専ら高天原に於ける精神の原理、布斗麻邇を客観的物質研究に適用・応用する方法が用いられたようであります。その成果として挙げられるものに東洋の古代の科学と謂われる鍊丹還金術や本草学または漢方医学等があります。時代が下り殷・周の後に興った秦の始皇帝が特に鍊丹還金術の研究を奨励した事は有名であります。その研究者を方士と呼びましたが、その一人徐福なる人に命じて黄海の東の国日本に派遣して「不老長寿の薬」をもとめさせた話が伝えられています。その薬とは実際には古代科学の根拠となった日本のアイウエオ五十音言霊布斗麻邇の学問であった事は言うまでもありません。因にこの徐福の故事は日本のおとぎ話の一つ「浦島太郎」として語り継がれました。万葉集にも「浦島の子」として詠まれています。徐福の墓は和歌山県熊野市にあります。

天照大神と須佐男命と共に三貴子の一人である月読命の仕事は古代歴史上で辿ることにしましょう。須佐男命物質研究集団が日本から外国へ出発して行った後、月読命の精

神領域である古代の哲学・宗教の分野の活動はどうであったのでしょうか。現代に於ては物質科学(須佐男命)と宗教・芸術の分野(月読命)ははっきり区別されています。けれど科学研究の初期に於ては両者は判然とした区別はまだ示されませんでした。共に天照大神の精神原理の応用であったからであります。月読命とは太陽に譬えられる天照大神に附(屬)して、太陽に対する月の如く薄ぼんやりと言霊の真理を他の概念や表徴を以て説明するのが仕事です。その仕事を外国の文化創造に適用して世界の文化を興す一役を担いました。その成果は古代中国に於て易経の基本原理となる河図・洛書を伝え、印度の古代哲学ヴェダやマヌの法典の根本原理となった事などが挙げられます。また仏教以前のインドの宗教バラモン(波羅門)の哲理の基礎を作り、更に東洋ばかりでなく、西方のベルシャ・エジプト・ギリシャ・北欧の民族の神話をも編む基本原理となったのです。それ等の月読命の功績について旧約聖書には「ヤコブが神の人と相撲をとった」事、また「神の人々がイスラエルの娘達を娶った」などと記されています。その神の人とは外国に渡って活躍した月読命を任務とする日本の人々の事であります。

以上のように葺不合朝の時代、日本より外国に向つて進発して行きました月読命学派・須佐男命学派と謂われる人々は、精神の法則である布斗麻邇の原理を物質現象の、または精神を客観の対象とする研究に適用することによつて物質並びに精神科学の研究を推進して行つたのでした。そして月読命学派は近代の哲学・宗教学の基礎を作り、須佐男命学派は近代物質科学への道を開拓して行つたのです。

布斗麻邇の精神原理を精神や物質の客観的研究に適用する作業が漸くにして成果を挙げて来た葺不合朝の後半には、その時までとは逆に諸外国から高天原日本に向つて、物心研究の基本となる真理を求めて来朝する諸民族の賢人、学者、技術者の数が増して来ました。竹内文献によれば中国より伏羲、神農、老子、孔子等、イスラエルよりモーゼ、後にイエス・キリスト、インドより釈迦、アラブよりマホメット等の来朝が伝えられています。歴代の日本の天皇はこれ等の来朝者を留学生として受入れ、そのそれぞれに布斗麻邇の学問をそれ等民族の内情に応じた形で教育・伝授し、帰国後その人達の活動が皇祖皇宗の人類文明創造の経緯に役立つよう指導したのでした。

この葺不合朝後葉に於ける諸外国の王侯、賢者、学者等

の教育とその将来への活動の布石によつて、葺不合朝末葉より現代に到る約三千年余の長い、複雑な歴史の底流を形成する崇高にして高遠な文明創造の筋道が確定して行くのであります。

邇邇芸、彦穂穂出見、鵜草葺不合と続く布斗麻邇の原理に基づく日本と世界の文明創造の時代は八千年前より約三千年前までの五千年間でその繁栄の頂点に達しました。この時代を人類の精神文明の時代、またその後に出現する人類の物質文明時代と比べて人類の第一精神文明時代と呼んでいます。そして第一精神文明の末葉より勃興して今迄の三千年間で今日見るが如き隆盛を極めている物質文明の時代を人類の第二物質文明時代と呼ぶ事になります。

鵜草葺不合皇朝の末葉に到つて、人類の精神文明は爛熟期に入りました。布斗麻邇の原理の下に世界は王道楽土の盛況を極めました。と同時にその布斗麻邇の原理を客観世界の現象研究に適用する月読命、須佐男命の努力も徐々に成果を挙げ、その研究方法が次第に布斗麻邇の適用という範囲を越えて、その独自の研究方法の確立に向う気運が高まって来ました。

この人類文明創造の歴史の大きな移り変わりの気運・状況を見て、高天原日本の朝廷は文明社会経営の方針を百八度転換し、人類の文明の更なる飛躍のために一代決断の時となったと判断したのです。人類の第一精神文明は完成した。世界は唯一つの言葉の下に平和の道を歩んでいる。その一方、漸く成果を挙げて来た物質研究の道はまだその緒に着いたばかりである。その物質現象研究が独自の道を開拓した暁には、その研究の手法の基礎は言霊ウ・オの領域に於て物質の分析・破壊を事とするのであり、その研究を促進するには、社会が平等・平和・協調をモットーとするのではなく、競争原理に基づく状況に置かれなければならぬであろう。従来の精神文明の世界の言霊イ・エの法則に基づく平和・公平の社会が存続すれば、物質科学文明の興隆はどれ程の長期の年月を要することになるか計り知れない。世界人類の第二の文明となる物質科学文明を、精神の第一文明と比肩する事が出来るようその進歩を促進するためには、此処に人類の文明経営の方針を一変する必要がある、という結論に達したのでした。物質科学文明興隆促進のために方便として人類社会を平和・協調の社会から生存競争の大きいもの、強いもの、速いもの勝ちの社会に

変換させることであります。

高天原日本の朝廷に於てこの世界歴史の経営の方針の大変革の決定が行われることとなりました。今より約三千五百年以前のことであります。

この大方針の決定によって、どんな政治的変革が行われたのでありましようか。それは五十音言霊布斗麻邇の原理に基づく大転換、大変革でありました。その内容を次に列記し、次にその一つ一つについて説明して行く事にしまし
よう。

一、過去五千年間続いて来た人類の第一精神文明の中核であったアイエオウ五十音言霊布斗麻邇の原理を、これより発達が予定されている物質科学文明の一応の完成を見る時まで高天原日本から隠没させ、世界人類社会の人々の表面意識から忘却させること。この事によって人類社会に弱肉強食の生存競争の時代が現出する事になるであろう。

二、その結果、世界の人々は協調の心を失い、早い者勝ちの競争社会が出現し、人々の生活に種々の苦悩が

現われて来るであろう。それを緩和するために世界各地に言霊原理に則り、言霊原理とは全く違ふ表徴・比喩・物語等の形式で各種の宗教を樹立し、人々の心の慰めとする。またそれによる心の修養は、やがて将来物質科学が完成に近づいた暁、隠没している精神原理が人々の心の底から顕在意識化する時にも役に立つ事となるであろう。

三、早い者勝ち、強いもの勝ちの生存競争を培養土として興隆する物質科学の研究によって人間生活にとつて便利なものが大量に作られる時代が到来する。その生産によって齎もたらされる金力と武力によって獲得される強大な権力が生じて来る。その権力の下に世界人類は再び統一されて来るであろう。この一貫した歴史の責任を担う者が決定されなければならぬ。

日本の朝廷に於て世界の経綸上の以上の三大方針が決定され、葺不合朝の後葉から次に興る神倭朝の初期にかけて、それら大方針を現実に行うための施策が次々に講ぜら

れたのでした。その施策について次にお話をしましょう。

言霊原理の隠没

鵜草葺不合皇朝の末期に到り、その時まで各皇朝の天皇が即位の後、恒例としていた世界各地を広く巡幸し、行く先々で精神原理に基づく新しい文化、文字、生活方法等を教伝する習わしを廃止した事があります。その事によって精神文明の成果を各民族に輸出することがなくなり、時代の推移と共に霊の本日本の道德的權威の存在が次第に各民族の意識から消えて行く事となりました。「初め世界は一つの言葉であった」の時代は所謂神代として文字通り《伝説》となつて行きました。地球上から次第に過去五千年間続いて来た人類の第一精神文明の存在は人々の記憶から薄れ、次に続く人類の第二の物質科学一辺倒の文明時代に突入して行つたのです。

精神文明の世界の中心地であつた霊の本日本に於ても、この大方針に従つて、それまで国の政治の根本原理であつた言霊原理を離れ、民衆の意志を汲み取る事によつて政治の方向を決定する所謂民主主義的政治に移行する決定がなされました。神倭朝第一代神倭伊波礼毘古天皇(神武天

皇)の時であります(日本書紀、神武天皇の章参照)。その約六百年後、第十代崇神天皇の御代、この方針は三種の神器の「同床共殿」制度の廃止という形で実行に移されました。剣・璽・鏡の三種の神器はアイウエオ五十音言霊原理の器物的表徴物であります。天孫降臨の時の天照大神の邇邇芸命に授けた神勅の下に、天皇と三種の神器は常に同じ場所に置かれるというその時までの掟を廃止して、神器を神として伊勢神宮に祭ってしまふ事となりました。「形而上を道といい、形而下を器という」とあります。器である三種の神器を天皇の座右から離し、国民信仰の対象である神として祭ったという事は、その器の形而上の道である言霊布斗麻邇の原理を天皇自身の自覚から遠ざけ、忘却させた事であります。天皇が政治の全責任者たるための必須の精神原理が天の岩戸の中に隠れた事となりました。日本に於ける精神文明の終り、物質科学文明時代の始まりであります。

ここで現代行われている歴史学の一説についてのお話を挿入させて頂きます。日本書紀に神倭朝一代神武天皇を始馭天下之天皇(はつくにしらすスメラミコト)と呼び、十代崇神天皇を御肇国天皇(はつくにしらすスメラミコト)と同

様の名で呼んでいます。この事から歴史学者の中から「神倭朝第一代は実は崇神天皇であり、この天皇の時に日本は始めて中央集権国家として誕生したのであって、この天皇以前の九代の天皇は歴史の体裁上作られた架空のものである」の説を立てる人があります。けれど今迄お話しして来ました歴史の筋道を御理解下さるならば、その内容については異なる事ではあっても《中央集権》という問題は日本国に於ては神倭朝肇国より数千年以前に遡る事なのであって今更問題にならない事がお分り頂けることと思えます。「はつくにしらす」と同じ名で呼ばれますのは、その時までの精神文明立国から物質科学文明立国へと変革する上で、神武天皇はその大方針の決定者であり、崇神天皇はその方針に則った現実の政治上の実行者であつた事に拠ります。過去長く続いた精神文明から一転して物質文明時代の国家を肇める上で両天皇は全く同じ目的意図を推進した天皇であつたわけです。以上一言現代歴史学の一学説の誤りについて指摘した次第です。

かくて日本は高天原霊の本の国として言霊原理に基づく種々の精神文化を世界に教伝・輸出していた立場を捨て、この時より外国に於て発展して来る物質文明の成果を逆に

輸入し、その輸入された主義・学問・産業等によつて国家を經營して行く事を国是とする国に交つたのであります。「はつくにしらす」とは以上の意味で用いられたものであります。

各世界宗教の樹立

鵜草葺不合皇朝の後半以降世界各地より靈の本日本に向つて賢者・学者の来朝が盛んになりました。皆、精神文明の原器である言靈布斗麻邇の学問を求めての事でありました。各代の天皇はそれら外国人を留学生として受け入れ、精神原理をそれぞれの民族の実状に適合するよう脚色して教え、また帰国後は世界文明創造のための役割を定め、その任務を命令したのでした。竹内文献によれば、それら留学生は次の様に記されています。

葺不合朝五十八代、御中主幸玉天皇の御代、支那伏羲氏、神農氏来り、……天津金木を授ける。

葺不合朝六十九代、神足利豐鋤天皇の御代、ヨモツ国よりモ一ゼ・ロミナス来り、十二年間日本に住む……。

葺不合朝七十代、神心伝物部建天皇の御代、迦毘羅国王、釈迦来る……。

葺不合朝七十三代（神倭朝一代）、挾野天皇（神武天皇）の御代、老子来る。二年二ヶ月日本に住む……。

神倭朝三代、安寧天皇の御代、孔子来る……。

神倭朝十一代、垂仁天皇の御代、イエス・キリスト来る。

以上来朝の世界の賢者を年代順に竹内文献により抜書きしました。天皇は来朝の留学生にその民族に適うよう言靈原理を脚色して教え、帰国後はそれぞれ来るべき生存競争時代の民衆の心の支柱となる宗教として広めるよう任務を与えました。伏羲氏は易経、モーゼにはヘブライ教、釈迦には仏教、老子には道教、孔子には儒教、イエス・キリストにはキリスト教を故国の民衆に教伝し、ここ二千年の物質文明の下、人々の精神の苦悩からの脱却のための修行法を説く宗教を興したのでした。またそれぞれの宗教の經典は精神原理である言靈原理を比喩・表徴の形で説くものであり、世界歴史の将来、物質科学文明が完成の暁、言靈原

理がそれ等經典を手掛りとして再び人々の顕在意識の上に蘇るよう記されてあります。

竹内文献によつて挙げました世界の六人の賢者に対して日本朝廷がとつた教育の内容と帰国後のそれぞれの任務の内容をお話しましたが、それら六人の中で唯一人モーゼに對しては、他の五人とは異つたものがありました。伏羲、釈迦、老子、孔子、イエスに授けた教育は高天原に於ける月読命の精神領域に属す言靈原理の比喻・表徴によつて説明される宗教原理であり、それらが帰国後の使命が宗教の宣布と民衆の精神救済でありましたが、モーゼに對しては月読命の領域の他に須佐男命の領域(言靈ウ)の支配・經營の責任をも負わせたのであります。

モーゼに對し神足別豐鋤天皇は懇切に言靈原理の中の言靈ウを中心とする精神構造を表わす天津金木音図の法則をモーゼの民族が理解し易いよう伝授しました。その原理・法則をユダヤ民族は今にカバラと呼ぶそうであります。この原理はモーゼとその後継者にその民族を永く統率し、更にその民族に敵對する者に対しては常に勝利を収める必勝の秘訣となる法則であります。モーゼの「十誠」は有名でありますが、竹内文献にはモーゼには表十誠と裏十誠が授け

られたと記されています。表十誠は旧約聖書にある「殺すなかれ……姦淫するなかれ」等の十箇条の道德律でありますが、裏十誠とは言靈布斗麻邇の原理の中の天津金木(人間の五官感覺による宇宙万有の認識とその統轄法音図の横の十音アカサタナハマヤラワの父韻法則のことです)です。

モーゼの帰国に際して、天皇はモーゼに靈の本の三種の神器(劍・璽・鏡)と同様の意義・内容を持つ三種の神宝(アロンの杖・黄金のmana壺・十誠石)を授け、勅語を賜りました。竹内文献はその勅語を「汝モーゼ、汝一人より他に神なしと知れ」と伝えてあります。そして帰国後の使命を次の様に授けたのでした。「汝と汝の子孫は天津金木の神法を以て、来るべき三千年余の弱肉強食の生存競争世界の中心にあつてその中核となり、生存競争を助長し、その競争社会を利用して物質科学研究を促進・完成させ、科学の成果より獲得する物力・金力・武力による権力を掌握し、その権力によつて全世界の民族・國家を統一せよ。」この命令を授けた天皇の名は神足別(神のトロー)を授けた(豐鋤(よすき)十四(よ)の言靈原理により世界文化を耕し、創造した)天皇であり、その命令によりモーゼとその子孫の民族は神選民族

と呼ばれるようになります。

この神足別豊鋤天皇のモーゼに対する歴史創造の委託の命令を端緒として、人類文明の歴史の様相は大きく変化することとなります。その時までの人類の第一精神文明時代は高天原日本を中心とし言霊布斗麻邇の原理に則る愛と道徳と平和と協調の時代でありました。この後に展開される人類の第二物質文明時代は、世界人類の背後にあつて「戦いの神、妬みの神、仇を報ずる神」(旧約聖書)エホバを崇めるユダヤ民族が歴史の推進者となる生存競争の時代であります。その暗闘と苦悩の三千年の時代を生きながら、人類は物質科学文明を創造して行く事になります。

英語のサイエンスを科学という日本語をつけたものは時代が下った明治時代と聞いていますが、科は「とが」即ち罪に通じます。誠に適切な命名をしたものと驚かされます。

(次号に続く)

【収載】第百十六号(平成十年二月)

●言霊と世界歴史 その七

鵜草葺不合皇朝の末期に到り、世界人類の歴史は第一の人間生命の主体側の法則である言霊布斗麻邇の原理に基づ

く精神文明の時代から、物事を外に、客観的に研究する物質科学文明の時代へ大きく転換しました。

この時代の転換の内容を古事記並びに大祓祝詞の神話は天照大神の岩戸隠れ、須佐男命の高天原での「畔放ち、溝埋め、瀬播き、串刺し」等の天津罪を犯した叛乱、それに続く母神のいます黄泉国(外国)への須佐男命の神逐ひ(追放)等の物語として表現しています。

そして右の神話が物語る神の世界の変様が現実世界の政治に如何に現われて来たか、という政治の変革について古事記、日本書紀は次の様に伝えていきます。先ず言霊原理の形而下の表徴物である剣・壘・鏡の三種の神器と天皇との同床共殿の制度の廃止、原理の政治への適用の停止、伊勢神宮の創祀、日本の文化を外国文化の輸入によって賄う方針の決定等であります。

また外国の神話、宗教書の中にもこの世の中の大きな変革についての表現は数限りなく見出すことが出来ます。その幾つかを拾って見ますと次の様になります。ギリシヤ神話に於ける平和の神タイタン巨神の隠滅、旧約聖書の神エホバの「戦いの神、妬みの神、仇を報ずる神」の宣言、また同神の「バベルの混乱」の生起、キリスト教の原罪、更

に仏教經典に於て「仏陀入涅槃」、「白法隱滅」、「正像末の經説」等がありますし、儒教に於て「結繩の政の廃止」等によつて人類の精神文明より物質文明への轉換の内容が述べられています。

世界に於ては今から三千年前、日本に於ては二千年前より以上のような内容によつて精神文明より物質文明への時代の轉換が行われたのでありますが、その人類の文明の内容の轉換については、神話や世界の宗教書が断片的に伝えるのみで、一般社会で読まれる通常の歴史書には何一つ述べられてはいません。そうでありますから現代人のほとんどは過去に自分達の祖先が壯麗で合理的な精神文明時代を築き上げていた事も、その精神文明創造の基礎となつた人間精神の究極の原理——「人間とは何ぞや」の問題を余すことなく百パーセント解明した精神の学問が存在した事も知つてはいません。

過去に厳然として存在していたものが何故かくも完全に人類の意識から忘れ去られてしまったのでしょうか。その理由は今お話が進行中のこの歴史の全編を通じて理解納得することが出来る事ではありますが、今ここではその答えを簡単にお話申上げることによしまししょう。その答えは、精神

文明より物質文明への轉換が単なる成り行き上から、または偶然から起り、また行われたものではなく、人類文明創造上の方便として、政策として、全くある理由から故意に、文明創造の轉換の時に以前の精神文明時代の存在を社会の表面から完全に隠没させたからなのであります。そうするより他の方法があらゆる点から考慮してなかつたからであります。ここに述べられつつある歴史の全部を御覧になり、その顛末を讀者御自身の心に照らし合わせて御理解頂くならば、必ず納得されることでありましよう。

以上、第一文明より第二文明への人類歴史の轉換を古事記・日本書紀、その他外国の神話や宗教書に於て見て来たのですが、その轉換内容の記述は比喻表徴的で現代の人間の意識には今一つピンと来ないのでは、と感じられる方もいらつしやる事でありましよう。そこでこの三千年前の変革によつて世の中の人々の心の持ち方がどの様に変つたのか、変らざるを得なくなつたのか、を一つの例を引いて説明して見ることにしまししょう。

その格好の例として伊勢神宮本殿の床の真下に祀られている心柱、一名忌柱または御量柱を取り上げて見ます。これについては以前より何回かお話をして来た事でありま

が、三千年以前より現代までの人々の心を説明するよい例でありますので、更めて検討することにします(「コトタマの話」一五五頁「心の御柱」参照)。心柱は長さ五尺(時代により変遷がありました)、内宮・外宮の本殿中央の床下に立てられている白木の四角の柱です。伊勢神宮の祭祀の中で最も尊いものとして忌柱いみばしらの別名があります。そして奇異に感じられることには、五尺の柱の中で下二尺が地中に埋められていることです。神道ではこの心柱について「一心の霊台、諸神交通の本基」と説明されています。この柱は一体何を示しているのでしょうか、

言霊学に接している方にとって、心柱の長さ五尺の五の数字が表徴しているものが何であるか、直ぐに気付く事があります。それは古事記で天之御柱と呼ばれるアオウエイ五母音の重畳のことです。言霊母音は人間の心の現象の全てがそこから生れて来る心の家のことです。(五重構造が家の語源です)五母音の上下に並ぶ順序は五通りあります。アオウエイと並ぶ五十音図は天津菅麻すがせ(音図)と言います。言霊の神、創造主神である伊耶那岐神の音図です。伊勢神宮は神倭朝十代崇神天皇の時、宮中の三種の神器を遷して五十鈴の宮として祭りました宮であります。言霊学

による天皇(スメラミコト)の歴史経綸の立場から見らば、本来天皇が政治を行うための必須の自覚内容であるべき言霊原理を、天皇の自覚から切り離し、国民信仰の対象の《神》として祭った事であります。即ち言霊原理の社会からの隠没であります。その歴史的意義は、神宮創祀以後の世界の人々の心がどの様な構造内容になるか、を言霊を以つてはつきりと示した表徴物なのであります。

言霊母音は人が生れた時からの天与の根本性能を表わします。言霊ウは五官感覚意識に基づく欲望性能、オはウの感覚経験同士の相互関係を調べる経験知、アは感情性能、エは行動にさいしてウオアの性能をコントロールする実践選択の英智、そして言霊イは言霊ウオアエの四性能を生む原動力となる創造意志であり、創造生命の要素五十音言霊の存在する次元であります。

五母音の示す心の内容を右のように確認した上で、神宮の心柱の長さ五尺の中の下二尺が地中に埋められているという事の意味を検討しましょう。心柱の長さ五尺の中の下二尺といえは天津菅麻音図の母音アオウエイのエイに相当します。エとイの言霊が地面の下に埋められたという事は、精神文明時代に人間の自覚の下にあった天与の五性能

の中の言靈イ（創造意志・布斗麻邇）と、その言靈原理に照合して物事を処理する実践選択智の能力である言靈エが人々の自覚・意識から離れ、忘却されるという事を意味します。現実には英智とその精神の構造原理が神として伊勢神宮の奥深く信仰の対象に祭り込まれてしまつて以来、日本の天皇も、そして国民も、また世界全体が、人間の英智と呼ばれる実践智と心の構造原理との存在を次第に忘れて行きました。併せて人間が持つている天与の選択智に厳然とした法則があることをも忘却してしまつたのです。

二千年前から現代に到るまで、人類全体はその自らの行動を律するのに、後に残された三つの性能、言靈ウ（欲望）、オ（経験知識）、ア（感情）によって決するしか方法がなくなりました。この三つの性能の中で、言靈アの感情によって物事を処理することは余りにも奔放に過ぎて危険であることに人は直に気付きます。とすれば行動の指針は言靈ウとオ、五官感覚による欲望追求と、それより得る経験智に頼るしかありません。その結果として言靈原理とそれによる英智とを神として伊勢神宮に祀つた後の日本と世界の人々の心はどうなつて行つたでありましょうか。

基本的な五性能の中の言靈イとエの自覚を失つた人々

は、残りの三性能の中の言靈ウの五官感覚による欲望が生活推進の指導力を握ることとなります。その主な原動力に、如何にすればその欲望を大きく早く達成出来るかの経験智（言靈オ）が補佐役として加わります。言い換えると、生活を推進する好奇心と功名心に加えて、それを実現する為の知識の豊富な人がもてはやされる世となつて行きます。それはまさしく生存競争の世の中です。そして生存競争が余りに激しくなりますと、三性能の中の残された一つ、言靈アの感情性能が昇華した宗教的・哲学的な愛・慈悲に基づくヒューマエズムが歯止めとなつて行く社会です。果てしない欲望と宗教的な歯止めとの間の調整は為政者や人間各自の恣意的な経験と良心に委ねられました。言靈ウオアの三性能をコントロールする言靈エの英智とその根本原理法則である言靈イの自覚を失つた人類が辿る当然の姿でありましょう。

かくて人類は、外国に於て三千年間、日本では二千年の間、人間性能の中の欲望とその抑制の機能の葛藤の中の苦悩の歴史が繰り返され、繰り返り広げられて行く事となります。人々は戦争と苦悩の中の僅かな隙間で平和と平安を喜ぶ仏教の所謂八苦の娑婆の中に身を置かなければならなくなり

ます。その葛藤の唯中から、その苦惱社会の眞の目的である第二物質科学文明時代の研究の花が咲き、実を結んで行く事となるのです。

初め、人類の精神文明時代に於て天照大神、月読命と共に三貴子として高天原日本の言靈布斗麻邇の原理に基づく言靈ウの分野の物質生産・分配の役目を担当していた須佐男命が、鵜草葺不合皇朝中期以降、高天原より離脱し、一人この世の魔神となつて世の中の言葉を乱し（聖書の謂うバベル）、生存競争を助長し、その競争に打ち勝つための最高の手段となる物質科学とその成果である富と権力の獲得に人々を駆り立て、煽動するようになるのも、すべては言靈布斗麻邇の原理に基づく日本の大先祖、皇祖皇宗の深謀遠慮の歴史創造の経緯による所なのです。

人類はその歴史の初めから現在私達が見るような弱肉強食の生存競争の社会に住んでいたわけではありません。この様な権力の下での苦悩の時代は、たかだかここ三千年間の方便上の産物なのです。方便の目的である物質科学が一応の完成を見た時には、人類は再び精神時代のアイエオウ五次元協調の自覚を取戻し、須佐男命は高天原の三貴子の一員に復帰し、物心両真理の協力による第三文明時代

の建設が皇祖皇宗の《予定調和》の筋書きなのだと言えるであります。

人類の精神文明の時代から物質科学の時代への転換の意義について長々と説明を試みました。本講が歴史の話である筈なのに、哲学や心理学の如き話が多すぎるとお叱りを受けるかも知れません。それを承知した上で時代の転換についての説明を挿入いたしました。駄弁を弄しますが、長編の小説にはそんな例が時々見られます。フランスの有名な小説「あゝ、無情」にはその中に長々と数頁にわたりフランス革命の意義についての説明が折り込まれます。我国の最大の小説、中里介山著「大菩薩峠」には全く難解な仏教典法華経の説明があります。実は小説の中の宗教や政治についての長い説明が、長編である小説の筋を追い続けて行くのに重要な意図・眼目を明らかにしたい著者の期待があるからであります。本講に於て第一文明より第二文明への転換の意義をお話申し上げましたのも、その後の物質科学時代と呼ばれる三千年の複雑極まる、ややもするとその歴史の筋道が捉え処がなくなる様に思える時となつても、初めの転換の真意義の出発点となつた観点に帰るならば、その

三千年の歴史の帰着点が明瞭に把握出来ることになるからであります。事実、物質文明のその後の三千年の歴史は正しくその転換に見られる内容通りに進行することとなります。

さて人類の第二物質文明の創造を先ず外国の歴史から見て行くことにしましょう。精神文明時代より物質文明時代へ入り、歴史創造の主役が言霊布斗麻邇の原理に基づく高天原日本の天皇による政治から一転して須佐男命・大国主命・エホバと呼ばれる精神理念の下、カバラの法則を奉ずるユダヤ民族による陰の策謀へと代ります。時代相は精神文明時代の平和と協調から物質文明時代の弱肉強食・権力万能の社会相へ移ります。人々は果てしない戦乱・貧困・闘争の渦の中に巻き込まれて行き、次第にその昔、争いのない平和な時代が長く続いていた事を夢の如く何時の間にか忘れ去って行きます。過去の精神時代の記録は地球上から抹殺されました。人々はこの生存競争の社会は劫初よりずっと続いているが如く思い込んでしまいました。中国の秦王朝第一代の始皇帝はその時まで存在した過去の記録書を全て焼き捨てたと歴史書に載っています。所謂「焚書」です。けれど始皇帝によってだけでなく、《焚書》は世界中で

行われた様であり、その事件は時代が下って西暦六〇〇年頃のマホメットの時まで続きました。イスラム教典コーランの一節に「我は歴史の最後の封印者なり」というマホメットの宣言を見ることが出来ます。物質科学文明の完成を見るまでは、その文明成長の基盤となる生存競争社会は方便としてどうしても必要であったのです。

物質文明時代に入ってから生存競争社会に於ける国家間、民族間の闘争の記録は現代の歴史書に詳しく載っています。その為この歴史のお話では、物質文明時代の陰と陽両面の主役であるユダヤ民族の動きを中心に検討して行く事にします。葺不合朝の神足別豊鋤天皇より爾後三千年にわたる物質文明創造の責任を委託され、三種の神宝を授与されたモーゼは、故国に帰り、先ず民族をエジプトの桎梏から解放して乳と蜂蜜の流れる地にイスラエルの国家を建国します。その国家は次第に繁栄し強大となり、ダビデ、ソロモン王の時繁栄の頂点に達します。ダビデ王の時、民族の宝である三種の神宝(アロンの杖、黄金のmana壺、十誠石)は民族の魂(使命)の祖国日本に返還され、イスラエルの国家から姿を消します(旧約聖書参照)。この民族の神宝の喪失と日本への返還という事実が、その後の民族の動

向と深い関わりを持つ事となります。

その後、イスラエルの国家はイスラエルとユダヤの両国に分裂し、やがて遂に両国は滅亡してしまいます。普通国家の滅亡はその民族の衰微を意味しますが、ユダヤ民族に關してはそうではありませんでした。国家滅亡後、ユダヤ民族は全世界に逸散することになりますが、ユダヤ教の信仰と教育によってその民族の純粋性を保持し、その民族の予言者、大ラビの統率の下に民族の使命の遂行のために世界各地を廻る放浪の長い旅に出ることになります。民族を統率する予言者の神示の神靈エホバの意図は何なのでしようか。先にエホバは世界の言葉を乱し、人々の言葉を互に通じ合わなくすることによって世界の精神文明時代を閉塞させました。そして今、自らの民族であるユダヤの国家を滅亡させ、民を全世界に逸散させ、放浪の旅に出したのは何故なのでしょう。その目的は唯一つ、放浪の旅先の各国家、各民族の中にユダヤ民族をやらせ、政治・経済社会の裏側にあつて生存競争を助長し、それを生育土壤として物質科学を興隆させるためであります。「目には目を、齒には齒を」の旧約聖書の言葉は生存競争を助長する最適の心構えを表わしています。

ユダヤ民族は祖国を失つて後、彼等の指導者である予言者の神示・預言に従つて東と西に民族移動を開始します。

旧約の聖書を見ますと、民族を導く予言者の黙示（リベレ—ション）で満ちています。その黙示では神エホバを崇め、民族の行動を指し示し、勇気を鼓舞し、彼等の究極の使命達成に向わせます。黙示の一つ、二つを例に引きましよう。

「汝ら東にてエホバを崇め、海の島々にてイスラエルの神エホバの名と崇むべし。我等地の極より歌と聞けり。いわく栄光は正しきものに帰すと。」（イザヤ書二十四章）

「彼は海の間において美しき聖山に天幕の宮殿としつらわん……その時、汝の民の人々のために立つところの大いなる君ミカエル起らあがらん……」（ダニエル書十一章）

旧約聖書に見られる予言者の黙示に従つてユダヤ民族は二手に別れ、民族移動を開始します。彼等十二部族の中の宗教祭祀を司るレビ族の一派は東に向い、現在のシルクロードを通つて極東に姿を表わし、中国に入り、殷より後に興つた周・秦・漢等の国家樹立の中核を担い、遂に海を渡つて民族移動の最後の目的地日本に来て、次第に日本の社会と同化、帰化して行きます。その時期は葺不合皇朝の末

期から神倭皇朝の初期の頃と推定されます。今迄の日本の歴史書では神倭朝初期より応神天皇頃までの日本への渡来人を朝鮮人または中国人と伝えていますが、実は西方より渡つて来た異民族系、特にユダヤ民族系の人々であったのです。

ユダヤ・イスラエル両国家の滅亡と日本の神倭朝の建国がほぼ同時期であった事は単なる偶然ではなく、そこに大きな因果関係があったものと思われまます。ともあれ東洋の西の果てから東の極日本まで、長い旅路を経てユダヤのレビの一族が旅の目的地としてやつて来た目的は果して何であったのか。この時期、日本民族が遭遇する歴史の新しい展開によって民族の体質に関する大問題が起ることとなります。この事は後程お話することとなります。

神倭朝の初期前後に日本に渡来、帰化した西からの外国人は、その経済的・工芸的才能によって日本国の社会に次第にその地歩を固め、有名人となり、朝廷の役職の地位にも登るようになり、日本皇室とも血縁関係を結ぶ様になります。そしてやがて日本人と全く同化して渡来ユダヤ人としての外観が全く失われて行き、僅かに呉・秦等の名前にその名残を留めるだけとなります。

レビ族以外のユダヤの部族はレビ族とは反対の方向、西に向つて民族移動を開始します。国土を失つた彼等は西に西へと進み、ヨーロッパの各地の民衆の中に入り、それぞれに経済的地位を確立して行きます。これらのユダヤの部族は東進したレビ族とは反対に、その民族としての純潔性と団結を失うことなく、その上で各国の政治の裏面で社会の生存競争を助長し、指導して行きました。ユダヤ教の教えの下に、百年・千年という長い時間と、地球を一周するような遠い道をあせらず、弛まず西進を続けます。レビ族の東進と同様、この西進するユダヤ部族の目的とは何なのでありましようか。

祖国を失つて後、東進して東洋を横断して日本に渡来し、やがて日本人に帰化して、ユダヤ民族の血統としての外観を失いながらも、靈統として彼等の使命に生き、日本の経済を支えて行くレビの一族、一方西進したレビ以外の部族はユダヤ教の下に民族の純粋性を保ち、団結して西進途上の国々の経済力を起し、それを掌握し、生存競争社会を基盤として物質科学技術を振興し、そこより獲得する富により裏面より権力を操作して、その究極に於て世界の再統一の完成という目標を持って更に西漸する。この東進と西漸

の両部族がやがて地球を一周して東洋の東の国、日本に於て再会を果す事、それは彼等の祖先であるモーゼが、日本の神足別豊鋤天皇より授かった民族の使命「人類の第二の物質文明創造を指導し、それより得る富と権力を以て世界を統一せよ」を完遂し、成就させることであり、その使命成就の成果を携えて、モーゼの魂の故郷である高天原日本へ報告に来る事であります。東進・西進のユダヤの部族は地球を両方向から一周し、その旅の行く先々で生存競争を煽り、その社会を闘争と苦悩の泥沼と変えさせながら、彼等の目的地日本で部族の再会を目指します。そしてその泥沼の中から美しい物質科学文明という花が咲き出る事となります。

以上のユダヤ民族の活動とその完了を予言する日本の神話を左に挙げましょう。

ユダヤ神選民族の世界統一事業を予言する神話は出雲風土記にあります。原文は少々長いですので簡単に抜き書きすると次の様になります。

意字と号づくる所以は、国引ませる八束水臣津野命詔り

たまはく……三自之綱打掛けて……国々来々と引來縫えら
国は……持引く綱は夜見鳥是なり。……今は国引き訖へぬ
と詔りたまひて、意字の杜に御杖術立て意恵と詔りたまひ
き。故に意字といふ。」

八束水臣津野命は出雲系統の神です(古事記参照)。三自之綱とは言霊学で神産巢日と呼ぶ考え方で、△▽を以て図示され、哲学では正反合の弁証法思考のこと。西洋的物の考え方であり、☆はその典型で箆目と呼ばれます。ユダヤ・イスラエルの国旗に使われます。国引きとは、世界の国々を財力・権力を手段として統一すること。夜見の鳥とは日本以外の国のことを呪示します。「意字の杜に御杖術立て意恵と詔りたまひき」の意字はユダヤ民族・須佐男命の自覚領域である言霊オとウ(学問と欲望)を指します。経験知と欲望によって世界の統一を完了し、彼等の魂の故郷高天原日本にその成果を報告し、その後の世界は学問(オ)と実践英智(エ)によって経営・運営されるという予告であります。「意恵」とは「終った」と「言霊オとエ」を掛けた言葉であります。第一文明、第二文明を経て、第三の人類の栄

光の文明時代の到来を予言しています。

次に天照大神と須佐男命の再会を予言する伝説は毎年七月七日に行われる七夕たんぱはたの祝いであり、陰暦の七月七日の夜に、天の川の東西にある牽牛けんぎゆうと織女おひくじよの二つの星の年に一度の逢瀬を祝うお祭りであります。牽牛とは言霊ことだまが静まっている欲望の所産である物質文明を推進させる須佐男命であり、織女とは空間を表わす五つの母音と時間を規定する人間の根本知性八父韻を経緯たんととに人類の歴史の布を織って行く創造者である天照大神を表わします。

須佐男命が精神文明の中核である高天原から神かみ逐ひひによって外国へ出奔し、三千年にわたり神エホバとユダヤ民族として世界を放浪した後、その労苦の所産である物質科学文明という輝かしい成果をお土産として、再び姉神天照大神の待つ高天原に舞い上り、三千年の経過を報告し、その後相携えて心物両文明を統合した第三文明時代を創造して行くという壮大な神定のドラマを予言しています。

七夕の日である七月七日は、七七四十九で、易経に「大衍たいえんの数五十、その用四十九」と示されている根本の原理アイウエオ五十音布斗麻邇の法則に基づいて見れば、人類の歴史はかくなるという謎で示した聖ひとしちである皇祖皇宗の経緯

を表わしています。

(次号に続く)

【収載】第百十七号(平成十年三月)

●言霊と世界歴史 その八

人類の第一精神文明時代より第二の物質文明時代への変化の様相をわが国日本について見ることにしましょう。その時代の移行は外国に於ては約三千年前、そして我が国に於ては二千年前であり、その年数に約千年のズレがありますのは、第一精神文明創造と第二物質文明創造のそれぞれの責任者、主役が交替する準備期間という事が出来ましよう。

鵜草葺不合皇朝の末期には精神文明創造の責任者であり、布斗麻邇の原理の体得者である日本の天皇(スメラミコト)の世界各国への巡幸による精神文化の各民族への教伝の制度が打切られました。その後は道を求める人々は日本へ来朝、留学生として言霊原理を教わる事となります。モーゼ、老子、孔子、釈迦、イエス等皆その留学生の人々でありました。それ等の人々に日本の朝廷は言霊布斗麻邇の原理をそれぞれの民族に適合するよう教導し、来るべき物質文明時代の精神荒廃に対処する宗教を樹立させまし

た。それらの準備の後に、いよいよ精神文明の中核となる言霊原理を外国は勿論、日本社会からも隠没させることとなりませう。

言霊原理を隠し、日本国家を物質文明主導の国家として経営する方針を決定したのは神倭皇朝初代神武天皇でありました。神倭皇朝はその目的のために樹立されました。神武天皇の神倭朝樹立の第一声（日本書紀・神武天皇章）にその意向をよく汲み取ることが出来ます。紀元前約六百年の事でありませう。その方針を政治の上で実行に移したのは神倭朝十代崇神天皇であります。天皇は言霊の原理の形而下の表徴物である三種の神器を天皇の座右から伊勢神宮の御神体として社殿の奥深く移してしまいました。言い換えると言霊の原理が政治の責任者の天皇の自覚から離れて、神という信仰の対象として人間の意識と認識の外の物として祭られてしまったのです。こうして人類の第一精神文明の基本であった言霊布斗麻邇の原理は日本と世界の人々の意識から隠没して行ったのです。今から二千年前のことでもあります。

右のような第二物質文明時代の始まりに際して、日本に於てどのような施策が講ぜられたのか、を個条書きにして見

ましよう。それは第一精神文明時代の存在を、方便として人々の意識から遠ざけること、それによって次に来る二千年間の物質文明時代の社会に当然起るであろう人心の荒廃・社会不安に対処する施策、また物質文明の中核となる物質科学文明が一応の完成を見る時、人類社会に元の精神文明の原器であった言霊の原理が復活するための準備の準備をすること、等々でありませう。

一、三種の神器を天皇の座右から離し、豊鋤入姫命に託けて倭の笠縫邑かさぬいに祭りました。宮中に於ける同床共殿制度の廃止であります。これによって言霊原理の政治への適用が完全に停止されることになりました。

二、言霊原理の隠没によって生ずる物質文明創造下の社会不安・人心の動揺を出来るだけ少なくするための方法として、外国の仏・儒・耶等の個人救済の宗教の輸入とその奨励、またその輸入宗教の手法を真似た日本の神社神道を創設して、個人の精神救済に当らせました。この精神救済の方法は今日も同様に続いております。

三、日本国内の文明創造の方針は専ら外国文化の輸入に基

盤が移されました。日本より千年近く早期に始められた外国の物質科学研究の成果を輸入することによって国内の物質生産・工芸・学問の需要に当てられることとなりました。日本固有の神代文字は社会より隠没され、輸入の漢字がその後の需要を満たしました。立国の基本方針も従来の古神道(言霊学)より仏教儒教精神に置かれるようになり、時代が下りますと、近代に於ては西歐文明一辺倒となります。

四、右の社会文化創造が外国文化一辺倒となるのと同時に、第二物質科学文明の完成時に於ける第一の精神文明の再生・復活の準備のための施策も極めて計画的に推進されました。その施策を左に連記しましょう。

イ、言霊原理を信仰の対象の神として祭った神社を伊勢神宮といます。古名は折釧五十鈴宮です。明らかに五十音言霊を祭った宮であることが分ります。その神社の本殿の構造を唯一神明造と呼びます。伊勢・熱田の両神宮に見られる社殿構造です。「神とは何か、の内容が明らかを示される唯一の造り方」の意であります。その名の如く、後世この唯一神明造の神社構造が

言霊原理と密接な関係がある事に気付きますと、その本殿の構造が言霊原理の重要な法則を一つ一つ象徴によって教示している事が分つて来て、言霊学の理解に大きな示唆を与える事となります。その例は「折釧五十鈴宮」という古名の他に、本殿中央の真下に祀られている心柱、御神体、本殿の床板、木階、千木、榎木等々に顕著に見られます。詳しくは「コトタマの話」の伊勢神宮の章を御覧下さい。

ロ、宮中で行われる重要な儀式、例えば天皇即位の際の大嘗祭、立太子式の壺切りの儀等は言霊原理に照合して初めてその天皇(スメラミコト)の責務の内容が明らかとなるよう、表徴的な意味によって構成されております。儀式の言霊学的意味を知るならば、人類史に関する重要な示唆を与えていることに驚くのであります。それを知らずして行う事は後世言霊原理復活のための形式の伝承の意味を持つ事となります。謂ば宮中に於ける芝居による伝承の意味を持っています。

ハ、奈良朝前後に至り、大祓祝詞、古事記、日本書紀の最終的編纂が行われました。これ等の編纂はすべて

後世の言霊学復活に便宜を遺すための施策であります。特に太安萬侶による古事記の上つ巻は神話の形式を以てするアイウエオ五十音言霊学の教科書として編纂されたものであり、日本民族伝統の言霊学はこの古事記の神話の解明によってのみ復活することが出来るよう微に入り細に涉つた言霊学の解説書となるものであります。(「古事記と言霊」参照)

人類の第二物質科学文明時代に対処する目的をもって日本に於て先に鵜草葺不合皇朝に代り神倭皇朝が樹立されたのですが、初代神武天皇は神倭皇朝二千年余を一貫する政治の目的・大綱を定め、第十代崇神天皇に到つて前皇朝までの政治の原器であつた言霊布斗麻邇の政治への適用を停止することとなりました。同床共殿制度の廃止がそれであります。更に時代が下り、第十五代応神天皇の時となり、それより後の日本の文明創造の基本を専ら外国の文化の輸入に頼る方策が顕著に打出されたのでした。この時代以来、外国より怒涛の如く外国文化がわが国に入って来ました。すぐれた学者の来朝、種々の工芸・産業・経済人の流入が盛んとなります。

所謂縄文時代の終りから弥生時代の始まりにかけて、日本国家の歴史の流れに異質の文化が流入し、民族の体質がガラリと變つて行きます。この点を理解するために二つの歴史的事実を取上げて見ることにしましょう。

初代神武天皇が神倭皇朝樹立の目的の大綱を定め、十代崇神天皇が前皇朝までの精神伝統の布斗麻邇の学問を伊勢神宮に信仰の対象の神と祭ることによって原理の隠没を實行し、第十五代応神天皇の時に到つて日本民族の文化需要を外国よりの輸入文化によって賄う道を開きました。お氣付きの事と思いますが、上述の三天皇の諡名に「神」の字が使われていることとあります。そして神武天皇より百二十四代昭和天皇に到る百二十四人の天皇の諡名の中で、神の字が入る天皇は上記の三天皇以外にはないという事であります。上古の天皇の諡名は奈良時代末期の学者淡海三船あうみのみかねの作という事です。淡海三船が何の意図で上記三天皇に神の字の入る諡名を付けたのか、は記録にありません。けれどこの学者が古事記・日本書紀が編纂された奈良時代の人であることに思いを致す時、またこれ等三天皇以外に神の字の入る諡名が全くないという事実を考える時、神武・崇神・応神の三つの諡名の中の神の字の意味する処が浮彫りに

なつて来ることになりましょう。

結論から申し上げることにしましょう。上記三天皇の謚名の中の神とは「皇祖皇宗の人類文明創造の経綸」上この三千年の間、方便として歴史創造の最高理念となつた神、須佐男命・エホバ・大国主命の事」なのであります。人類の歴史が第一精神文明時代から第二の物質科学文明時代に移行したという事は、人類全体が、また人類を構成する個々の人々の生活を創造して行く心の最高理念が變つたことに他なりません。古事記の神名を用いるならば、歴史創造の責任者としての神が天照大神から須佐男命(エホバ・大国主命)に交替した事でありませぬ。神武・崇神・応神の名前にある神とは、正しくこの人類文明創造の過程に於ける方便として創造の責任を委託された須佐男命(エホバ・大国主命)に他ならないのであります。神倭皇朝百二十四代、約二千七百年間の日本の歴史は上記三天皇によつて敷かれた道であつた、という事が出来ます。人類の第二物質科学文明時代は須佐男命・大国主命の時代であつたのです。この事を表現する下世話な言葉があります。旧暦で十月、結びの月のことを神無月かみなしつきといひます。そして出雲の国(島根県)だけは神有月かみありつきと呼びます。結びの月十月に全国の神

々は大国主命の鎮座する出雲大社の国、出雲に全貢が集り、他の国に神々が不在となる事を言い表わした呼び名であります。崇神天皇による神器の同床共殿制度の廃止以来、日本の神々の世界に大變動が起つた事を知るよすがともなりましょう。

以上の時代の変遷を引き起した神様の交替劇を指摘する後世の出来事を一つ紹介しておきましょう。時代は下り、現在の物質科学文明完成を間近にした明治時代前後、来るべき人類の第三文明時代を予言する目的を持って出現した黒住・金光・天理・御嶽・大本等の宗教の一つ、天理教々祖中山みき女史の神懸りの神言に「高山の眞の柱は唐人や。これがそもそも神の立腹」があります。神武・崇神・応神の三天皇によつて軌道を敷かれた歴史の推進者である神倭皇朝の眞の柱(天皇)の魂は皆唐人(外国人)なのだ。この事が古来の日本の神々の腹立ちとなる、という意味であります。

右に挙げました如く人類の第二物質文明時代が、実は第一の精神文明と同じく古来よりの高天原の皇祖皇宗の意図による経綸の下にあるという事を示すもう一つの例をお伝えすることにしましょう。それは古事記仲哀天皇の章「神

功皇后」の項に見られます。所謂神懸りが出て来る物語りでありますので、御注目願います。

第十四代仲哀天皇は当時、筑紫の詞志比の宮にいて熊曾の国を討伐しようとしていました。ある日、天皇は御琴を控き、大臣建内の宿禰は沙庭に居て、神の命が下りますようお願いしました。神功皇后は巫女さんであったからです。

神のお告げが下りました。「西の方に国あり。金銀をはじめ、日輝く種種の珍宝その国に多なるを、吾今その国を帰せたまはむ」と申されました。それを聞かれた天皇は答えて申しました。「高き地に登りて西の方を見れば、国は見えず、ただ大海のみあり」と言つて、詐りを言う神だと思つて、御琴を押し退けて、控くことを止めてしまいました。すると神は大層お怒りになり、「およそこの天の下は、汝の治める国ではない。汝は思うままに熊曾征伐に行くがよい」と申しました。これを聞いた建内宿禰の大臣は天皇に申しました。「畏れ多い事です、天皇様。思い直されてその御琴をお控きなされませ。」天皇は少し思い直され、御琴を取り寄せて、おぎなりに控き始めました。それ程時が経たない内に御琴の音が聞えなくなりました。そこで灯をつけて見ますと、天皇は已におかくれになつていま

した。

そこで宮中の者は皆驚き懼み、天皇の仮葬を営み、国の大祓いをした後、建内宿禰は沙庭に居て、再び神のお告げをお願いしました。すると神のお告げが下りました。「およそこの国は、汝命(神功皇后)の御腹にます御子の知らさむ国なり」と。

建内の宿禰が申しました「恐し、我大神、その神の御腹にます御子は、何の御子ぞも」と。神は答えました。「男子なり。」宿禰は申します。「今かく言教へたまふ大神は、その御名を知らまくほし。」神は答えます。「こは天照らす大神の御心なり。また底筒の男、中筒の男、上筒の男三柱の大神なり。今まことにその国を求めんと思ほさは、天つ神地つ神、また山の神海河の神たちまでに悉に幣帛奉り、我御魂を御船の上に乗せて、真木の灰を瓠に納れ、また箸と葉盤とを多に作りて、皆皆大海に散らし、浮けて、度りますべし」といいました。

神功皇后と建内宿禰はすべて神のお告げ通りに軍船を整へ、朝鮮にわたり、大勝利を博し、九州の博多に凱旋し、皇后は男子を出産しました。母親の御腹の中に於て皇位を継承されたと伝えられる第十五代応神天皇であります。こ

の朝鮮征伐を契機に我国への大陸からの産業・文化の輸入が盛んになって行きます。

仲哀天皇、神功皇后、応神天皇、建内宿禰等と天照大神の神示とにまつわる古事記の文章を抜き書きいたしました。

言霊エに則る人類文明創造の神である天照大神が神示によって朝鮮(三韓)征伐を天皇に命じられ、天皇が命令を承知しなかった時、直ちにその命を召されたという恐ろしい話であります。第一文明から第二の物質文明への移行に当り、戦争という方便上の手段をとつても、この神倭皇朝の時代は日本が先進国である外国から物質文化を輸入するという国是に従わざるを得ないよう神の指導があつたという人類文明創造の経緯の厳正・悠大な様相を知るよい例でありますので、引用させて頂きました。この神懸りの古事記の物語の詳細は当会々報八十一号「底・中・上筒の男」三命について」を御覧下さい。因みに底筒男、中筒男、上筒男の三命とは、古事記の禊祓(人類文明創造)に於ける総結論であり、言霊エの創造英智の全内容を示す神名であります。言い換えますと、現在の一切の状況を踏まえながら、それ等に関しての全てを生かし、所を得しめる創造の至上命令の言葉の内容のことです。(「古事記と言霊」禊祓の

章参照)

母親神功皇后の御腹の中で皇位を継承し、外国(朝鮮)に渡り、母親と共に凱旋して、その地(九州)にて産声(うぶこゑ)をあげた応神天皇は年令長ずるに及んで積極的に外国との交流を盛んにし、この御代より外国の人々と文化が堰(せき)を切つた様に我国に入つて来ることとなります。人類の第二物質科学文明時代に於ける日本は外国の文化の輸入とその摂取によって国家の発展を計るといふ国是の実行であり、この国是の実行は千六百年後の現代まで続きます。

外国の文化の輸入による立国の国是の実行に最初の道を拓いた応神天皇の名の中にある「神」とは如何なる神であるのか、を私達に明確に示して呉れる神社があります。日本全国に最も多く祭られている神社、八幡様です。少し大きな八幡神社なら見ることが出来る神社の「由緒」を御覧になつて下さい。御祭神の筆頭が八幡大神とあり、次に応神天皇、神功皇后、……と続いています。八幡神社の中には八幡大神の名はなく、第一番目に応神天皇の名が見える事もあります。実のところ、現在八幡大神という神は如何なる神か、誰にも分つてはいません。

そこで本稿でお話しております言霊学に基づく人類文明

創造の歴史の筋道から見た八幡様の戸籍を紹介しましょう。(詳しくは会報「神様の戸籍」の八幡神社の項をお読み下さい)先ず八幡神社なる神社は応神天皇以前には存在しませんでした。この事を頭に留めておいて、八幡の字を見ましよう。「はちまん」と読みますが、その他に「ヤーは」とも読めるであります。ユダヤの神、旧約聖書にあるエホバはまた「ヤーへ」と呼ばれます。日本に最も多く祭られている八幡様は実はユダヤのエホバ神の応作なのです。奇異に思う方もいらつしやるでしょうが、間違いありません。祭祀に担ぐ御輿は八幡様が初めですが、この輿の発端はユダヤ民族が奉ずる三種の神宝を入れた箱を棒をつけて担ぐ習慣から来ています。旧約の聖書には詳しく載っています。御輿上の八幡様は荒神です。これも旧約聖書のエホバは「戦いの神、ねたみの神、仇を報ずる神」とある事と一脉通じます。応神天皇は母親の胎内にあって西方朝鮮に渡り、外国の文物の流入に道を拓くと同時に、遙か西方よりのエホバの神霊をも我国に招じ入れた事となります。

以上、約二千七百年前より現代に至る神倭皇朝の日本歴史の骨格となる根本方針を決定づけた神武・崇神・応神の

三天皇の治績についてお話をして来ました。事実、神倭皇朝を中心に日本の二千七百年の歴史は、この三天皇によって敷かれた物質文明の軌道を忠実に、まっしぐらに突き進む事となります。即ち日本民族本来の面目である言霊布斗麻邇の忘却、天皇を中心とする国民信仰の下に、外国文化の輸入による国民文化の形成という道を歩むこととなります。

人類の第二物質科学文明時代に於ける日本の歴史は右に記した筋道によってほぼ規定することが出来ますが、真の民族の精神支柱を失った日本国内では、ほぼ絶え間のない政争、戦乱が起りました。この間の歴史が戦乱の相続の時代と言っても過言ではない程であります。二千年余にわたる国を挙げての戦争・騒乱の原因となる民族の因縁、カルマについてお話をしておく事にしましょう。

第一精神文明時代の末より西方よりのユダヤ系外国人の日本への流入があり、それに合わせたように神倭朝初代神武天皇による神倭朝樹立の宏謨が決定され、十代崇神天皇による精神原理である布斗麻邇の隠没によって日本国民の心から民族の精神的支柱となる言霊原理の理念が忘却・喪失されて行きました。いとも厳密で荘厳な精神の原理を忘

却した後に、国民の中には日本民族の優秀性という自負心のみが残され、受け継がれることとなりました。更に十五代応神天皇の時から従来に増して外国からの人や物やすぐれた文化の流入が盛んになって来て、優れた外国の文化を崇拜する人々、また外国よりの帰化人が数を増すことによつて、従来この国に住み、国粹的な心を持つ人々の勢力を凌駕する程となつて来ました。その双方の衝突が国政を左右する勢力争いに発展して行き、その後千数百年にわたり陰に陽に日本の歴史のカルマ(因果)を形成して行く事となります。所謂国粹派と外来派の確執です。両勢力とも皇祖玄宗の深遠なる人類歴史創造の経緯の内容の理解を欠き、それぞれの心中に宿る強因縁に奔弄される傀儡(操り人形)の役を務め、このカルマはその後の日本の歴史現象を演出する最大の原因となつて行きました。

そのカルマによる抗争の事件を歴史の順を追つて列挙して見ましよう。蘇我馬子(外来派)と物部守屋(国粹派)との戦争(五八七年)、蘇我氏が皇太子中大兄皇子と中臣鎌足に滅ぼされる(六四五)、壬申の乱(六七二)、道鏡と和氣清麻呂の戦(七七二)、その後藤原氏と菅原道真の確執(九〇一)あり、源平の戦、建武の中興(一一三三、四)、北朝と南朝の

抗争(一二三三、八)、戦国時代(一四九二)、徳川幕府と朝廷の確執(一六〇三)、明治維新(一八六七)、昭和天皇の人間天皇宣言……。

右に挙げました種々の紛争は、現在の歴史学では単なる政争や怨念によつて起つたものと記されています。出来事を表面から見れば確かにそうであるに違いがありませんが、それぞれの時代の底を流れる民族の二大體質、言い換えますと、日本民族の眞の使命であり日本語の本質である原理を忘却・喪失した為に発生した国粹派と外来派との対立抗争のカルマから見ると、「人間とは何か」の見識を失つた為に自らの心のカルマに奔弄される因縁の傀儡となつた悲惨なドラマなのであります。この悲しいドラマは、将来日本の人々が自らの民族の伝統である言霊布斗麻邇の原理を知り、その原理に基づく皇祖玄宗の人類文明創造という歴史の経緯を理解する事が出来る日が来るまで、果てしない抗争の連続として記録されて行く事でありましよう。

右に述べました千五百年乃至二千年にわたる日本国内の政争・抗争の歴史の原因について付言しておきましょう。国粹派と外来派の対立を、上古における戸籍上の神別と蕃別の制度上の対立と呼ぶ事も出来ます。時代が下ると南朝

と北朝の戦いのカルマと言う事も出来ず。このカルマは代々の皇室の内側にも入り、先に挙げました壬申の乱や道鏡事件を起し、北朝と南朝の血で血を洗う抗争の時代を現出し、そして明治より昭和にかけても種々の歴史的内紛の原因ともなりました。すべては日本国内に於ける人類の第二物質文明時代に方便上当然現出して来る民族の二大物質のカルマのなす業であります。

近代の政治的大変革であった明治維新が何故日本本来の理想の民族体制を築く事が出来なかつたのか。この理由も上述の民族の二大物質の意義に気付かなかつたからであり、また明治維新が物質文明時代の移行を決定した神倭皇朝の初めに帰ることを目標に置き、更にその昔にあつた日本の神代と謂われる言霊の原理の幸倍さいばいう精神文明の時代への回帰にまで気付く事が出来なかつたからだ、という事が出来ず。

人類の第一精神文明時代より第二物質科学文明時代への移行という大経綸によつて醸成された方便のカルマに奔弄される日本の神倭皇朝の歴史であるのです。(次号に続く)

●神様の戸籍(予告)

以前会報で「神様の戸籍」の題の連載をした事がありました。誰でも知っている神社の御祭神がどんな神様なのか、言霊学の立場から説明したものです。

最近会員のI氏より長野県安曇野の穂高神社の御祭神について、この神様が神代から名のある神と伝えられるが、その正体がいまだに神道界ではつきり分つていない、という事が伝えられました。興味深い事なので言い伝えられた伝説から、また言霊学上から種々調べて見ました。すると誠にユニークな、人類歴史上有意義な事が判つて来ました。近い内に会報にてお伝えする予定です。御期待下さい。

【収載】第百十八号(平成十年四月)

●言霊と世界歴史 その九

二千年前、崇神天皇による言霊布斗麻邇の原理の政治への適用の廃止を最後に、日本並びに全世界は人類の第二物質文明の時代に入りました。それは人間に与えられた五つの性能の中の、最も基本的ではあるがまた最も原始的な言霊ウの五官感覚を基礎とした欲望性能が他の性能との協調を離れ、独走を始めた時代でありました。弱肉強食の生存競争の社会が現出し、世の中は全て「強いもの勝」一色の時

代相となりました。戦乱が相次いで起り、人々は戦いと戦いの間の僅かな平和の時に憩いを得るだけの悲惨な時代です。国家・民族間の戦争、個人・社会の間の反目の世の中では、人々は宗教に心の慰安を求めるのが精一杯となります。かくして世界の人々はその昔、自らの先祖の人々が、厳正な人間の人間たるべき真理の法則と慈悲と愛の世界に何一つ不自由なく暮らす事が出来た時代があった事をすっかり忘れ去ってしまいました。僅かに世界各民族の神話として、ユートピア的時代を憧憬するオトギ話の中に慰めと希望を託す事となったのです。この様な時代が私達の住む現代まで、外国に於ては三千年、日本では二千年の長い間続くこととなります。

以上の三千年、二千年間の世界と日本の国家社会の変遷については現在の歴史書に詳しく載っています。更めて本講にて述べる必要はない事であります。ただその人間の欲望性能の独走の担い手であるユダヤ民族の動向だけに注目すれば足ります。ユダヤ十二部族の中のレビ族は早くより東進し、漸次日本に来て、政治・産業・経済等各方面に入り込み、民族同化を行って行きました。一方、レビ以外の部族は反対に西進を開始し、ヨーロッパ民族の中に入り込

み、生存競争を煽り、産業経済界で頭角を現わし、裏面で政治の実権を掌握して行きました。イタリヤ、オランダ、ベルギー、フランス、イギリス等順々に本拠を移しながら物質的繁栄に貢献し、徐々に、着実に物質科学研究の促進を計って行きました。特に十四世紀より十六世紀にかけて興ったルネサンス運動以後は科学研究の進歩は目覚ましいものがあり、各種の発明・発見、それによる産業革命となり、機械文明は急速に発展して行く事になります。

その様な科学研究の成果による社会の変貌の裏にあつて、ユダヤ民族は民族の結束を失わず、産業・経済・金融・交通・学術その他各種文化の中核を担い、政治社会の実権を掌握して行きます。

一方、日本の歴史はどうであつたでしょうか。二千年前の崇神天皇による同床共殿制の廃止、紀元三百年頃の応神天皇による外国の文物の輸入による日本文化の発展の方針決定以来、日本も外国同様物質文明時代に入りました。産業経済だけでなく、宗教・芸術の分野までほとんど外国文化の輸入によつて賄われることとなります。と同時に生存競争の社会が現出し、上は朝廷内より下は都から地方にわたる戦乱の世が続き、カルマはカルマを呼んで複雑な人と

人との確執の歴史が繰り広げられて行きました。

言霊布斗麻邇の原理の隠没と同時に古代よりの神代神名文字の使用が停止され、十一代垂仁天皇の時中国より漢字が輸入され、次第に漢文が公用語文章に採用されるようになります。多遅摩毛理によって中国より齎された、「常世の国の時じくの香の木の実」とはみかんの木の事ではなく、漢の国の文字であるという説があります。言霊原理の隠没に代って外国の宗教が輸入され、紀元四百年頃には儒教・易・曆・医・天文・養蚕・機織・裁縫などの学問・宗教・技術が大量に輸入されるようになったと記録されています。五五二年欽明天皇の時仏教が伝えられ、古来よりの神道勢力を次第に駆逐する勢いとなって行きました。輸入文化による国家経営の方針は変ることなく二千年後の今日まで続いております。

かくて崇神朝における天皇と三種の神器との同床共殿制度の廃止以来、日本国民の意識から徐々に日本伝統の言霊布斗麻邇の原理は忘れ去られて行きました。その状況は今に遺された諸種の和歌集の内容の変遷によって窺うことが出来ます。万葉集より古今和歌集(九〇五選上)までの歌集には、随所に言霊原理を詠み込んだ歌が見られます。けれ

ど新古今和歌集(一二〇五選上)には見ることが出来ません。その頃の公卿や一般の人々の意識からは已に布斗麻邇の原理は埋没してしまつた事が分ります。

布斗麻邇(太占)と言えば、直ちに亀の甲羅や鹿の肩骨を焼いて、そこに出る紋様によって吉凶禍福を占う占術の事だと思われるようになりました。二千年前迄日本人の祖先が保持した人間精神の究極の構造原理であり、この原理を政治全般に適用して平和で心豊かな人類の精神文明の時代が数千年にわたって続いていた事など全くの夢物語としか思わなくなつたのです。

しかしこの二千年の間には、言霊布斗麻邇の存在に気づき、その自覚に基づいて活動し、また後世に伝えようと努力した人も少なくありませんでした。けれどこの二千年は方便として原理の隠没が国の方針で定まっていた時代でありましたから、明治時代の大本教々祖のお筆先に「知らしめはならず、知らさいではならず、神はつらいぞよ」とあるように、原理の存在に気付いた人々も原理そのものを説く事は出来ず、種々の表徴、謎々、呪文、または信仰・芸術の形で発表したのでした。そのいくつかについて次に述べることにしましょう。

伊勢神宮本殿の唯一神明造りの構造の事、また宮中に於ける重要な儀式の様式等については先に詳しくお話しました。また太安萬侶による古事記、舎人親皇らによる日本書紀が言霊学の神話形式の教科書であることも度々お話しした所です。

歴史経綸の意義や言霊原理を後世に伝えようと尽力した人々の名を挙げますと次の様になります。聖徳太子、柿本人麻呂、役小角、空海、菅原道真、日蓮等はその行動・著述によって明らかに証明されます。

聖徳太子は神・儒・仏の三教の奥義を極め、皇祖皇宗の文明創造の経綸を熟知した上で、殊更に仏教立国の方針を促進させました。またユダヤ系帰化人を保護優遇しました。全国寺院名鑑の京都広隆寺の項に次の様に記されています。「京都市右京区太秦蜂岡町在。本尊は聖徳太子像。蜂岡山と号し、聖徳太子御願七ヶ寺の一。山城第一の古刹。本派の別格本山で、太秦寺ともいう。推古天皇の十一年、聖徳太子が弥勒菩薩半跏像を秦の河勝に下賜、河勝がこれを奉じて当寺を創建、同三十年、新羅・任那の二国より贈られた仏像を当寺に安置したことは日本書紀に記されている。秦氏は帰化人のうちで最も繁栄した氏族で、六世紀に

は已にこの地に約七千戸の人々が住んでいたという。十月十二日の夜に行われる牛祭は境内にある大酒神社の祭り、天下の奇祭として有名。……」太秦は漢音でダージーと読み、東ローマ帝国のことであり、大酒は大睥の転訛で、それはダビデの漢音名であります。また寺内に十二の井戸があったと伝えられ、その井戸の石に伊俊井の文字があり、イスラエルの十二部族を表わしたという。現存は三つであります。

柿本人麻呂は古代より伝わる大祓祝詞を現代ある如き美辞麗句に修飾し、言霊学復活の暁には、それが全文皇祖皇宗の人類歴史経綸の大綱であることが分るよう文章を整えました。

役小角は諸国を行脚し、言霊五十音の一つ一つを各地に神として祭り、神社を創祀しました。空海は中国より真言宗を伝えると同時に、嵯峨天皇より古神道の手解きを受け、日本独特の真言宗を創始しました。その著「十住心論」「般若心経秘鍵」等に言霊原理に関しての文章を見ることが出来ます。菅原道真は死後天神様と祭られ、単なる学者ではなく、「天」である言霊原理に通じていた人であることが窺えます。「桃太郎」「舌切雀」……等のおとぎ話は道真の作

という言い伝えがあり、言霊原理を内蔵した予言書であることが解明されています。日蓮は法華経・維摩経・華嚴教を修証後、伊勢神宮に参籠し、言霊布斗麻邇の手解きを授かり、日本独特の日蓮宗を開きました。その遺文(三沢抄)には仏法の正法・像法も及ぶことのない大法が存在することを切々と訴えています。

(次号に続く)

【収載】第百十九号(平成十年五月)

●神様の戸籍 その十三

穂高神社

穂高神社は日本北アルプスの登山基地の一つ、長野県穂高町にある神社である。御祭神は穂高見神。最近この御祭神についていろいろな事が分つて来た。人類の文明創造の歴史上興味深い事なのでお伝えすることにしよう。

先ず「神社名鑑」に従つてこの神社の内容を調べると次の様である。

「穂高神社本宮 Ⅱ 長野県南安曇郡穂高町穂高六〇七九。奥宮 Ⅱ 南安曇郡上高地字明神。御祭神は穂高見神・綿津見神・瓊々杵命。例祭は本宮が九月二十六日、奥宮は十月八日。

例祭日には本宮では五艘の船形の山車に安曇比羅夫命の形を飾り、境内を練る勇壮な祭典がある。奥宮では明神池に龍頭鷲首の御船を浮べて平安朝の昔を偲ばせる。

神社の由緒は次の通りである。主祭神穂高見命は社伝によると、神代の昔、人跡未踏の穂高岳に御降臨になり、重畳たる中部山岳を開発されると共に、梓川の流域安曇・筑摩の地を沃野となし、神胤をこの地に蕃息せられた。古くより天下の名社として皇室の崇敬極めて篤く、平安朝の時すでに祈念の国幣に預り、また累次の神階昇叙があった。延喜の制には式部名神大社を以て遇せられた。しかし武家時代に及び漸次社運は衰微し、わずかに地方の藩侯崇事の有様となったが、さすがに氏人たる郷士人の信仰は衰えず二十年毎の御造替、七年毎の御修営……等の古儀は少しも懈怠なく伝承され、今日に至っている。……」

以上の「神社名鑑」を読んだだけでは、この神社が日本中部山岳並びに安曇平野等の守護神という事以外特別の意義を看取することは出来ないが、古事記神代巻と言霊学の見地に立つて見るならば、日本並びに世界の文明の歴史上重要な意味を持つ神社であることが分つて来る。

神名の方が初耳の方のために、私事を交えてこの神社の所在を明らかにしよう。穂高神社本宮は信州の松本市より大町市を経て新潟県糸魚川市に通じるJR大糸線の穂高駅より三百米の所にある。筆者三十年余前、安曇野に三年程滞在した事があった。その時、車の運転免許証取得のため穂高町の自動車教習所に通った。穂高神社はその教習所の隣にあった。質素な造りであったが、郷社としては大きく威厳ある社であったと記憶している。その奥社は同じ郡内にあるとは言え、随分と離れている。中部山岳の雄、穂高岳の南麓、上高地を流れる梓川の西岸にある小さい明神池畔に佇んでいる小祠である。観光地で名高い上高地のバスターミナルから有名な河童橋を渡り、梓川の右岸を上流に向ってさわやかな森の中の道を進むこと三軒、暫くして左側は明神池がある。木立に遮られて池の畔の奥社ははつきりとは見えない。中へ入るには拝殿料が要る。本宮と奥社との間は車で二・三時間はかゝるであろう。松本駅より四十八軒と「名鑑」に見られる。

さて、本題に入ろう。主祭神の穂高見神とは如何なる神であろうか。古事記・日本書紀にその名の記載はない。そこで神名の示す内容を言霊学によって解く事にする。穂高

見神とは勿論大和神代文字に漢字を当てた名前である。平仮名で示すと「ほたかみの神」である。「ほ」は言霊の意。「た」は田で、五十音言霊図である。「かみ」は神であり、また明らかにか現われる(見)の意でもある。神名全体では「言霊五十音図の原理が明らかに現われ示される神」という事になる。言霊原理が現われ示される神と言えば、何時、何処で示されるのが問題となるであろう。その答えは主祭神穂高見神に続く脇祭神、綿津見神・瓊々杵命の神名が教えて呉れる。

瓊々杵命と言えば天孫降臨の神であり、古代日本の初代の天皇(スメラミコト)の事である。瓊々杵は邇々芸とも書く。二の二の芸うゑの意である。二次的のまた二次的、即ち第三次的な芸術ということであろう。それは何か。第一次的真理は心の究極の要素である言霊である。二次的なものとは、言霊原理に基づく言葉、即ち大和言葉の事であり、そのまた第二次的なものとは、大和言葉の示す内容その通りに実現・運営されて行く社会を創造する芸術、即ち政治の事を示している。瓊々杵命とは、古代言霊原理に基づき理想の楽土をこの地球上に建設しようと高天原地方よりこの日本へ下って来た靈知りの集団の長(スメラミコト)

に付けられた名前である。それはこの地球上に理想の人類文明を創造し、運営するため第一歩を踏み出した初代の経綸者という事が出来る。穂高神社の脇祭神として瓊々杵命が祭られているという事は、主祭神である穂高見神が人類文明創造のための歴史的経綸に関係した神である事を物語って呉れる。

瓊々杵命に二人の皇后がいた。姉の石長比売と妹の木花佐久夜比売である。石長とは五十葉長の意であり、人類精神の永劫の原理五十音言霊を中核とした精神文明を表徴し、木花佐久夜とは梅や桜の花が咲く如き華麗な人類の物質科学文明を表徴している。瓊々杵命以来の日本の天皇スメラミコトの人類文明創造の経綸の八千年間の歴史はただこの二つの文明、精神文明と物質文明の時代を造り出して今日に至った。そして穂高神社の主祭神穂高見神とは、五十音言霊図の神であるから、その働きは瓊々杵命の経綸の中の石長比売の精神文明の側に立っていることが了解されるであらう。

それなら穂高見神の働きが人類文明の歴史の今日的意義は如何なるものなのだろうか。その答えはもう一つの脇祭神、綿津見神の神名が明らかに示してくれている。その解

答は二十世紀末の私達人類に大きな福音を齎すこととなるであらう。

綿津見神は古事記「禊祓」に出て来る神名である。実際には底津綿津見神・中津綿津見神・上津綿津見神の三神であり、総称して綿津見神である。綿津見の綿は海または渡すの意。津は港、見は現われるの意である。綿津見の全体で、ある処より或る処まで渡すことが出来る力の神という事になる。詳しくは「古事記と言霊」の「身禊」の章を御参照の事。禊祓とは、現代の神社神道で謂う所の罪穢を払拭する行法の事ではない。政治的創造行為のことである。理想の政治的創造とは、現時点に於ける一切の物事の真相をよく見極め、そのそれぞれを生かす事が出来る新しい状態を創造して行く事である。仏教で撰取不捨と謂う。今あるものに、新しい生命を与えること、此岸より彼岸に渡す言葉の原理、それが綿津見神の内容である。穂高神社の本宮と奥社双方共「船」の行事があるのは、この「渡す」事を表徴したものである。

以上挙げた二神、人類の精神と物質の二大文明の交錯する歴史創造の経綸者である瓊々杵命と、時代創造の力の神である綿津見神を脇社に持つ事を考えるならば穂高神社の

主祭神、穂高見神とは、天皇(スメラミコト)の歴史の経緯上、ある時を期して言霊の威力を発揮する事となる神である事が了解される。それならこの神が穂高の地に祭られた理由は何か。

信州、長野県にある神社といえは忘れてはならないのが諏訪神社である。諏訪湖畔にある大社であり、祭神は建御名方神とその妻神八坂刀売神。更に事代主神を配祀する。この神についての記述は古事記にただ一個所あるだけで、日本書紀にはその記載がない。そのため古事記の訳注に「長野県諏訪郡諏訪神社上社の祭神。この神に関するとは日本書紀に無い。挿入説話である」と記されている。古事記の編者、太安万呂が編纂の主目的である天皇(スメラミコト)の主宰する人類文明史上の重要意義を訴えるために、ことさらに挿入したものに違いない。諏訪湖と穂高神社のある安曇平野とは塩尻峠を境に南北に位置している。謂は峠を中にした隣同士なのである。ただ隣というだけではない。時が来たならば、この二神社の神は人類歴史上切っても切れぬ間柄となつて活躍することとなる。

建御名方神の詳細は会報三十七号「神様の戸籍」その十一でお話した。簡単に繰返すと次の様になる。建御名方神の

建は田気で五十音言霊図を構成する言霊(気)のことである。その御名であるから言霊真名(英語で manna)である。それでは言霊五十音そのものを表わす神であるか、というところではない。最後に「方」の字が付く。方は片である。

言霊が主体的精神要素であるなら、建御名方の方はその反対の片方の意味となり、客体である物質の要素を示している。それは丁度、古事記「身禊」の章の終りで、須佐男命が「僕は此の国根の堅洲国に罷らんとおもふがからに哭」と言った「堅」と同様である、根の堅洲国とは音の片方の洲の国の意で、客観世界のことである。建御名方神の内容は更に妻神の名八坂刀売神の名が説明して呉れる。八坂とは五十音図の主体・客体である母音・半母音を除いた中の横の八音、即ち現象音のみを探究(刀売は求めるの意)する道であり、一般に科学の手法を現わしている。建御名方神とは物質科学探究を表わす神名であることが分る。

事が多岐に涉り分り難くなつて恐縮であるが、この建御名方神についての古事記の記事を話さなければならぬ。天孫降臨に当り、天照大神は、その時まで日本の統治者であつた大国主命の所に、建御雷の神に天の鳥船を副へて「国を天孫瓊々杵命に譲るよう」言向けやはし(説得)するため

に派遣した。大國主命とその子八重事代主命は直ちに國讓りを承諾した。けれどもう一人の子である建御名方神は承知しなかった。建御雷神という精神主体の言靈原理に対し、建御名方神という客體世界の物質科学原理が挑戦したのである。建御雷神と建御名方神は力競べをし、建御名方神の惨敗に終わった。世の中を統治することが出来るのは主体である精神原理によるのであり、客觀世界の物質科学原理はこれに預ることが出来ない。建御名方神は逃げに逃げて、終に科野の国洲羽(諏訪)の海で建御雷神に追いつかれた。建御名方神は懇願した。「恐し、我をな殺したまひそ。この地を除きては、他し処に行かじ。……」と。かくて國讓りの説得は終了し、天孫降臨となったのである。

右の古事記の挿入神話は言靈学の解説がないと何の事だか現実の意味は分つて来ない。物質科学原理というものは言靈ウとオの次元から発現する。それが人の心の他の次元を抑えて独走した結果が輝かしい科学原理の発見と同時に世界精神の地獄的危機をも生み出した。科学原理は精神の主体的原理である五十音言靈原理と協調・並立することによってのみ人類の福祉に貢献することが出来る。この事を心に留めて先の古事記の建御名方神の話を見ると意味の理

解が容易となる。建御雷神の五十音精神原理と建御名方神の物質科学原理が人類社会統治の点で論争をし、建御名方神は諏訪湖まで逃げて行き、「この諏訪の地以外には決して行きませんから殺さないで下さい」と懇願し、許された。諏訪は主和に通じる。人間精神の最高の規範である五十音言靈の鏡を天照大神といい、人類文明の最高神であり主である。この神と協調することを主和(主と和する)と呼ぶ。物質科学探究の神である建御名方神は「諏訪の地以外には行かない」言い換えると「私が物質の真理を求めて努力するのも、その究極に於て、その解明される原理でもって天照大神即ち天孫瓊々杵命と協調する目的を忘れることなく、他の事は考えません」と言った事となる。天孫降臨以後の代々の天皇(スメラミコト)の経緯にとつて建御名方神の宣言は望ましい事であり、それ故に許される事となったのである。

その時、同時に諏訪湖の北、塩尻峠を越えた安曇平野に建御名方神が誓いを破り、程度以上の暴走をしないよう見守るために、また御名方神の志す物質科学原理が一応の完成を見た暁には、直ちに五十音言靈の原理という身を現わして御名方神の「主和」の目的を達成させ、主と客の真理協

調を成し遂げる事を表徴し、予言するために祭られたのが穂高見神の穂高神社であつたのである。両神社の創祀が同時代であつた事が想像される。主体と客体の完成された両真理の協調体制を造り上げるのは飽くまで主体側であつて、客体自体からはその発想は起らないからである。人類社会に物質科学原理の完成を見た時、二千年間眠つていた精神の原理言霊布斗麻邇が目をさまし、完成された科学原理の進むべき道を示し、精神と物質両面の真理協調の人類の第三文明時代の幕明けの役を演ずる表徴として穂高神社は創設されたのである。

三千年にわたる人類の物質文明の時代相を反映して諏訪の神社は木の花佐久夜比売の如く繁栄し、穂高神社は石長比売の如く地味な社運を見せている。けれどこの両社が古事記が示す如く、現実の歴史の舞台にその真実の姿を現わし、私達人類の二十一世紀へ向う転換点を明らかに示して呉れる日が極めて近いことを教えているのである。

以上、穂高神社祭神の戸籍調べを終えることとするが、最後に塩尻峠について一言しよう。

穂高神社のある安曇野と諏訪神社のある諏訪盆地との間に険しい塩尻峠がある。この峠に塩尻の名が付いたのが何

時であつたか、筆者は知らない。今回の穂高神社の戸籍調べの上で言霊学的にも興味ある名前なので、紹介することとする。

塩尻は「四穂知り」に通じる。言霊母音に働きかけて現象子音を生む契機となる八つの父韻は、元は二つづつ陰陽に組み合わさる四律である。チキシヒの四音が陽(主体性)であり、イミリニの四音が陰(客体性)である。塩尻峠に登れば、北に主体側の穂高地方と、南に客体側の諏訪地方の両方を望むことが出来る。四組の創造父韻を知る事が出来、正しく「四穂知り」である。峠の語源は「手向け」だと言う。

「ここよりは主体的世界高天原、ここより外は客体世界四方津国」と主客両世界の境界となる古事記神話の所謂「千引の石」に当るといふ事が出来る。出雲の国に於ける建御名方神と建御雷神との出会いを古事記は次の様に記している。「建御名方の神、千引の石を手末にささげて来て、『誰そ我国に来て、忍び忍び物言う。然らば力競べせむ』」

(終り)

【収載】第百十九号(平成十年五月)

●言霊と世界歴史 その十

人類の歴史上、第二の物質科学文明時代は、外国に於ては神足別豊鋤天皇がイスラエルの王モーゼに神選民族の長としての使命を授けてより三千年余、日本に於ては神倭ヤマト朝十代崇神天皇が言靈布斗麻邇の原理を伊勢神宮の奥深く神として隠してしまつてから二千年余続く事となります。

この間、人間の全人格を構成する五大性能、言靈ウの五官感覚による欲望性能、言靈オの経験知性能、言靈アの感情性能、言靈エの実践智性能、言靈イの生命意志性能の中の言靈ウの欲望性能だけが他の性能との協調の枠を離脱して独走を始めました。人類社会が弱肉強食・生存競争の時代相を現出したのです。人と人が、民族と民族が、国と国が互いにせめぎ合う血みどろの戦いの時代が、カルマがカルマを呼んで果てしない苦しみにのたうつ地獄の時代が続きます。そしてその苦悩の泥沼の中から第二文明時代の主目的である妖艶な物質科学研究という花が咲き出し、終には人類の精神秘宝である布斗麻邇の原理と肩を並べる人類の第二物質文明の宝である物質科学原理という巨大な実を結ぶこととなります。

人類の第二物質文明時代の終結点である現代とは、第二物質文明時代の主目的であり、その成果である物質科学原

理が各分野に於て一応の結論に達し、地球上に巨大な科学機械文明社会を作り上げたと同時に、その文明時代の社会基盤であつた生存競争の社会相が内蔵して来た言靈ウの独走の矛盾が終に人類全体の生命の破綻を余儀なくさせる地獄のドン詰りの様相を現出させる事となります。

地球上の人間が好むと好まざるとに関わらず、三千年乃至二千年間続いて来た人類の第二物質科学文明の時代は終りに近づいて来ました。人類が此処まで歩いて来た道を、外国と日本国内の両方から簡単に振り返つて見ることにしましょう。

人にはそれぞれ歴史があります。その日一日の歴史、一ヶ月の歴史、十年、そして一生の歴史があります。家族、地域社会、国家、民族等も同様です。その他産業・経済の歴史、学問、芸術、宗教、道徳等の歴史もあります。皆それぞれが人類全体の歴史と関わりを持ち、その一つ一つが文明史上興味ある事を提供して呉れます。そしてそれ等の歴史については現代の歴史書が事細かく私達に伝えてくれております。今更特にそれに付加えることは必要ない事でしょう。そこで、ここでお話しする歴史ではそれ等個々の歴史の奥底にあつて、それ等の歴史の進行の原動力となる、

今まで人々の意識と関心の外にあった歴史の流れについてお話して行く事にしましょう。

イスラエル民族の国家が、滅亡した後、その民族の十二部族の一つ、レビの一族は東進し、今日の所謂シルクロードを通じて中国・朝鮮に進み、西暦前六百年頃には日本に到達し、次第に勢力を増し、日本民族と同化して行きました。この部族の靈統者は現在に到るまで日本の産業・経済の中核となつて活動することとなります。

レビ以外のイスラエルの十一部族はレビ族とは反対に西に向つて民族移動を開始しました。民族を率いる預言者の言葉に従い、ヨーロッパの各地に入り、その土地の人々の中にあつて産業を興し、商業の分野に力を貯えて行きました。またその優秀な生産技術を活用して、地域々々の有力者となり、一方盛んに競争社会の氣運を作つて行きました。その豊かな富によつて社会の裏側でその地域・国家の政治の実権を掌握して行きました。

東進したレビ族が東洋乃至日本の民族と同化したのとは逆に、西進の各部族は大率その民族の純粋性を保ち、独特な教育の仕方で民族の知的水準を向上させ、社会の各分野で指導的地位を占めて行きました。ユダヤ人の家族はその

土地々々で永住権を得、進取的でありながら性急ではなく、預言者ラビの指導の下に各民族の中で隠然たる勢力を築き上げて行きました。

西進を開始して二千年余、ユダヤ民族の本拠地は全ヨーロッパの各地に移り変わりました。イタリア、スペイン、フランス、ドイツ、イギリス、そしてアメリカと変ります。その間、特に十四世紀末より十六世紀にかけてヨーロッパを中心に興つたルネッサンス(文芸復興)の運動以後、産業革命の中核となり、近代機械産業を興し、工業製品の大量供給に成功することによって巨大な富を手中に収めて行つたのでした。

更に産業経済の競争場裡に近代科学を興し、ヨーロッパを近代科学の中心地に作り上げ、その技術より得る富と優秀な交通手段によつて全世界に勢力を広げて行きました。ユダヤ民族が本拠を置く国は、あたかもその国が世界の中心であるかの如き活況を呈することはここ数百年の歴史がよく物語つている事であります。第二次世界大戦前までユダヤ民族がその本拠地を置いたイギリスは「我が国の領土には太陽の没することなし」と謳歌した繁栄がその事をよく証明しております。事実、イギリスは世界の五大大陸す

べてに領土を持つつ大国となりました。

二十世紀に入り、第一次、第二次世界大戦を契機としてユダヤの本拠はイギリスよりアメリカ合衆国へ移りました。二十世紀が終ろうとしている現在、アメリカは世界の経済・金融の中心地となっています。世界中の国々が経済不況に喘いでいる中であつて、アメリカだけが天井知らずの好景気に躍っている現状がそれをよく物語っていると、う事が出来ましよう。

かくて人類の第二物質文明の三千年間の時代は、キリスト紀元二十世紀末にて終りを迎えようとしています。

三千五百年前、日本の鵜草葺不合朝六十九代神足別豊鋤天皇がイスラエルの王、モーゼに委嘱した人類の第二物質文明建設の大業をユダヤ民族はほぼ完遂した様に見受けられます。ユダヤ民族に課せられた仕事に二つの事がありました。一つは人類の第二物質文明の中心原理となる「物とは何ぞや」を解明する物質科学の完成であります。二つにはその科学研究の成果である科学技術による産業・経済の富によって得られる金力・権力を以て世界全体を再統一する事(国引き)であります。この二つの事業が、二十世紀の末である現在、どの様になつていのかを検討して見る事に

しましう。

先ず第一の物質科学研究は何処まで進んで来たのでしうか。その進歩の足跡を辿ることにしましう。最初の物質科学研究集団とも言える須佐男命のグループが、その時までにはなかつた独自の物質研究の方法を求めて高天原日本を外国に向つて出発して暫くの間は、精神の法則である言霊原理を物質の現象に当てはめることによつての探究が行われました。東洋医学・本草学・煉丹還金術等がそれであります。その研究方法は次第に西方に延び、シルクロードを通つてアラビヤ人社会に伝わつて行き、そこでアルケミーと呼ばれるその時までとは異質の研究方法が開発されて行きました。近代科学の始まりといふことが出来ます。

中世より近世にかけて、特にルネサンス以降物理学・化学・天文学・植物学・医学等や諸種の人文科学が急速に発展して行きました。各社会間、民族間、国家間の生存競争に打勝つためには、その財力の豊富なこと、武器の優秀なことが必須の条件となるからであります。科学研究は中世の宗教的ドグマの束縛から離れ、完全に自由な独自の研究方法を確立して行き、近代科学技術の進歩が促進され、機械力による品物の大量生産の時代に突入して行きます。同

時に戦いの武器も剣より弓矢へ、鉄砲より大砲へ、また木船より鋼鉄船へ、更に航空機へ、終には原子爆弾、大型ロケット、各種化学兵器等大量殺戮兵器の出現へと進んで行きました。

十九世紀の終り以降、物質科学研究の歴史で特筆すべきことは、研究のメスが物質を構成する先天の原子構造並びに分子構造の中に入った事であります。科学の最終目標である「物とは何ぞや」の解明の時代が来た事を示します。また科学のメスが、生物の生命の要素である遺伝子構造の中にも入って行った事があります。物質科学研究の旅がその最終目的地に今一步の所まで来たという事が出来ましよう。

ユダヤ民族のもう一つの仕事、金力・武力に基づく権力によって世界を統一する所謂国引きの使命は現在までどんな経過を辿って来たのでしょうか。先に東進したレビ族以外は亡国のイスラエルの地を離れ、西進を開始し、長い長い旅の末にヨーロッパ、イギリスを経て、第二次世界大戦前後にはその本拠地がアメリカ合衆国に移って来た事は先にお話しました。ユダヤの遠大な世界統一の計画の必要からアメリカは今までに例を見ない繁栄に湧き返っています。

す。そしてアメリカ合衆国は現在世界で唯一の超大国に伸し上りました。しかしユダヤ民族の長い旅路がそこアメリカで終点であるわけではありません。彼等が西へ西へと民族移動するのは何の目的があるのでしょうか。

二千数百年の間、急がず撓まず民族移動を続けるユダヤ民族の目的は何か。それは一にかかつて地球上を西に向い、最終目的地日本に於て、先に東進して日本に上陸し、日本に帰化・同化した彼等のレビの一族に再会し、その東進と西進の部族が地球を東西に一周する旅路に於て彼等の優秀な頭脳と技術によって各地に繁栄をもたらし、生存競争を助長し、物質科学文明を興し、その成果を掲げて、彼等の祖であるモーゼが三千年の使命を授けられた魂の故郷である高天原日本に錦を飾ることであります。旧約聖書に次の如くあります。「これらのもの声をあげて呼ばはん。エホバの稜威みいつの故をもて海より歓び呼ばはん。この故になんぢら東にてエホバを崇め、海のしまじまにてイスラエルの神エホバの名なを崇むべし。われら地の極はたより歌を聞けり。いはく栄光は正しきものに帰すと。」預言者イザヤが神エホバの靈言として民族の先頭に立つて述べる「東の国」「海のしまじま」とは、東海の靈知りの国、「高砂の尉じやうと姥うば」のい

ます国、人類文明創造の経綸者のいます国、この日本のこととあります。

こんな事を申し上げますと、読者の中には「そんな途方もない事など有り得るであろうか」と疑問を持たれる方もいらっしゃるでありません。「一つの民族とは言え、二千年余の間、世は変り人も変ります。その長い年月の間、変ることなく民族が一つの目的のために命をかけて進んで行く事など考えられないことだ」と。ちょっと考えただけでは、そんな事は有り得ないと思うのが当然です。けれど人が人間意識の奥底にある生命そのものである原理、言霊布斗麻邇を理解し、自覚した観点に立つて、三千年余の昔、鵜草葺不合朝六十九代神足別豊鋤天皇がモーゼに授けた勅語「汝モーゼ、汝一人より他に神なしと知れ」の大宣言と、モーゼに命令し、委嘱した人類の第二物質科学文明の創造とその成果による人類の再統一の使命の意義を知るならば、「その有り得ない」と思われることが、疑うことのないもつともな事なのだと思得がいく事でありましょう。人類が人類たるべき永遠の真理の名に於て授けられた使命は、その遂行の後に、その使命授与の経綸の原理が存在する場所即ち高天原日本に来て、使命完了の報告をすることによ

つてのみ使命の終了が確認されるのであります。始祖モーゼとその後継者である代々のユダヤの預言者の指図によってユダヤ民族は生きて来たのであります。それは丁度、私達日本民族が天孫民族としての伝統である大和言葉、即ち日本語を受け継ぐ事によって、その民族の使命の遂行が可能となつてゐる事と同様の理由によります。

かくてユダヤ民族の本拠は現在アメリカに在り、各国権力の裏側より隠然たる影響力を行使し、各種の巨大国際企業・マスコミ・金融機関・政治法曹界・学術団体等を掌握して生存競争場裡に科学を振興させ、同時に世界統一の計画を着実に推進しています。そして物質科学の完成と世界統一事業が一応のメドがついた暁には、一挙に太平洋を渡り、古き仲間であるレビの後裔の待つ日本に本拠を移そうと時機を窺つてゐるのです。

ここで挿話を一、二付け加えることにしましょう。その一つは「たしかに昔からユダヤのシオニズム運動と謂われ、この歴史の話でもユダヤの世界統一の仕組が説かれてゐる。最近起つた東欧共産主義国家の崩壊、ソビエト・ロシアの瓦解等によつて世界各国は一つの体制へ編成されて行く傾向にあります。けれど東欧諸国はやはり各国独立の形

態を保ち、ロシアも大国として独立している。その他中南米諸国、アフリカ諸国等、国家の数はむしろ第二大戦以前より増える傾向にあります。単純に考えるとユダヤの世界統一、ユダヤ権力の下の世界という事にはなっていないように見られますが、何が統一なのでしょうか」という事についてです。

それについて一言お話しすることにしましょう。ユダヤの世界統一などと言いますと、読者の中には紀元前四世紀のアレキサンダー大王の征服、十三世紀の蒙古大帝国の樹立、また近くでは前世紀の欧州諸国の領土拡張政策による未開弱小国の占領・植民地化の如く武力による植民地化、属国化の事を思い浮べる方が多い事でしょう。けれど二十世紀の末を迎えた現在では、その様な征服による統一は勞多くして益少ないものとなりました。交通機関の進歩は世界を全く狭いものにしてしまいました。更に情報技術の発達によって地球上の一箇所にいて、瞬時の内に世界中に起る出来事を知ることが出来るようになりました。金融・通貨制度が世界的に確立した事によって所謂わが国の昔の鎖国政策のような孤立経済の中に閉じこもって一国の経済を運営することが不可能になって来ました。地球上の各国家は否

でも応でも世界の中での国家として、世界の動向というバズに乗り遅れないよう務めなければ国家の成立が危うくなる状況になりました。

このような世界の現状の中で、昔のような武力一辺倒の世界統一など愚の骨頂と言うべきでしょう。時にはアメリカとその同盟国を動かして武力に訴えることはあっても、それは秩序を乱す者に対する懲らしめの意味以外のものではありません。世界統一は優秀な情報技術を駆使し、政治の裏舞台で世界政治を動かし、金融通貨制度を巧みに利用して単一通貨と同様の状態に世界を導き、マスコミを操縦して全世界の人々を今までのナショナルリズムからインタナショナル或はコスモポリタンの方向に導いて行く事は比較的容易な事でありませぬ。

今お話し申し上げている観点に立つて世界の政治・経済・金融等の状況を詳細に点検なさって見て下さい。一国の政治や経済がその一国という枠を越えて、次第にオープンになって行き、その結果として金力・武力・情報等の中心が自然と世界の中の一点（アメリカ）に集中して行く動向を見極めることが出来るでしょう。その流れの底に確固として、一貫して変らぬ計画と策略の存在を感知することは左

程難しい事ではありません。その計画遂行のために世界戦略として標榜^{ひょうぼう}される言葉は「オープンな経済」と「民主主義」であります。ユダヤによる世界統一の事業の推進にはこの二つの言葉の宣伝だけで事足りるからです。何故ならば、オープンな経済社会に於ては、彼等は絶対不敗の戦術と方策を持つているからであり、また民主主義社会が他のすべての制度に増してマスコミを手段とする社会人心の操縦を容易にするからであります。(民主主義より専制主義の方がよい、と言っているわけではありません。専制主義・君主主義も民主主義も共に政治形態としては不完全なものです。念の為)

もう一つ話を付け加えましょう。昔から、特に最近よく聞く事ですが、「ユダヤが日本に大挙して来たら、日本国民には皆番号制が敷かれ、生活全般にわたって管理され、奴隷の如く扱われる。背けば食糧も規制され、ひどい事になる」等言われます。何だか恐ろしい話ですが、そんな事にはならないでしょう。過去数百年の歴史を見ましても、また現在彼等の本拠地があるアメリカ合衆国を見ても、そんな奴隷的社会を見ることは出来ません。そんな強制的な事を手段としたのでは数千年にわたる計画が継続される筈

もない事です。人々はユダヤ人と言うと、直ちにシエイクスピアの「ベニスの商人」のシャロツクを思い出すかも知れません。けれど実際のユダヤ人の一人々々はそれ程冷酷ではありません。むしろ人なつこく、考えが合理的で、極めて進取的です。

彼等が人々から不気味に思われる事があるのは、一つに彼等民族の眞の指導者ユダヤの本拠、キング・オブ・キングズと呼ばれる者が有史以来今日に到るまで社会の表面に出て来た事がない為であります。個人として、また集団として社会に姿を現わした運動であるなら、数千年もの間、人類文明創造の中核となる事など不可能であるからです。彼等の指導者は社会の裏に立ち、世界中の各枢要の機関に人材を送り、政治・経済の権力を操縦することによって物質科学文明の創造と世界統一の計画を推進しているのです。

ユダヤ人ひとり一人は頭がよく、優秀な知識人が多いように思われます。けれどそのユダヤ民族を指導し、民族の使命を遂行するモーゼの後裔の指導者、預言者のグループは、極めて使命に対して忠実・冷静な戦略家であり、使命のためには他の民族ばかりでなく、自らの民族の人々をも

手段・犠牲にして悔いることのない所謂冷酷さも身につけているようです。そして彼等は極めて自らの行いに戒律的です。

以上、ユダヤ民族のことに関し、その活動の内容を一二お話し申し上げました。御参考になれば幸いです。彼等は自らの民族の幸福のためと共に、モーゼ以来の神選民族としての三千年の使命のために、孜々營々として涙ぐましいまでの努力をして来ています。そしてその使命の成就のための今一步の段階に於て最後の詰めの上げに取り掛っているのです。二十世紀は全く彼等の世紀と言う事が出来るでありましょう。

今の二十世紀は須佐男命（エホバ）、大國主命が主宰し、神選ユダヤ民族の指導する人類の第二物質文明の完成の時であります。「物質とは何か」の解答を科学が明確に出す時となりました。また「生命とは何か」の肉体的解明に一步近づく事ともなりました。物質科学は飛躍的に進歩しましたが、その科学技術の進歩が、同時に人類と他の生物を取り巻く地球環境に危機的な汚染をももたらしてしまいました。このままで行けば、地球上の生物の生存がここ百年の

内に破滅的状况になるであろう事が予測されています。また第二物質科学文明創造のため方便として作り出された人間の天与の五次元性能の中のウ言靈性能の独走する生存競争の社会状況が、この二十世紀後半を迎えて人類の精神内容にも地獄の様相を醸成しました。言葉の混乱、教育の頹廢、麻薬禍の蔓延、青少年犯罪の増加等どれをとって見ても効果的な対策が立たないものばかりと言った状態です。

有史以来人類が迎えた最悪の状況が現出してしまいました。そしてもつと憂慮すべきは、各国の為政者や国民がこの地球人類の危機的状况を魂の底から認識し、自覚していいない事でありましょう。地球環境の問題となると、すべての会議が総論賛成、各論反対で常に少々の対策でお茶を濁すこととなります。また各国の精神の頹廢には対策お手上げと言う有様なのです。物質科学はこれ等の危機の対策に答える何らの力も持ってはいません。物質科学文明の完成という素晴らしい成果を挙げた我等の二十世紀は、同時に我等人類全体に生命の終末を予告する警鐘の鳴る世紀ともなってしまったのです。

天孫民族としての日本の二十世紀にはどんな事が起つて来たのでしょうか。物質文明の中核となる科学の研究が「物

とは何か」の中心課題となる物質の先験構造である原子核内にその研究のメスを入れ始めた二十世紀に入る直前、教派神道と呼ばれる黒住・金光・天理・御嶽・大本等の宗教が民間から興りました。それ等の宗教は表現は違いますが、すべて二千年にわたる獣のような人間の生存競争の時代が終り、昔のような平和な心豊かな神の国の到来を予言する宗教でありました。それを最もよく表わしたのが大本教々祖出口直女史のお筆先——

大千世界 一度に開く梅の花

梅で開いて松でおさめる神国の世が来るぞ

皇位、金光先走り 終りに大本が現われて

世の建替、建直しとするぞ

であります。そのお筆先の全編は日本国を作られた太古の神(国常立命、言霊工)がこの世に現われて、穢れた世の中を整理して、人ではなく神が治める世界を作るぞ、という予言でありました。

そして大本の予言そのままに、神である言ことばの原理、人ではない神による政治の原理、即ち言霊布斗麻邇の原理が

二千年の忘却の暗黒の中から不死鳥の如く復活して来たのもその頃の事でありました。その人類の精神秘法である言霊原理の存在に初めて気付かれたのは明治天皇であります。天皇は皇后と共に、皇后が一条家よりお嫁入りした時、実家より持参した日本本来の和歌の道(これを言の葉の誠の道と言います)を書いた本を頼りにアイウエオ五十音言霊の原理即ち布斗麻邇の勉強を始められたと聞いております。この事はお二人の作られた和歌によって窺うことが出来ます。

明治天皇の御歌

聞き知るは 一つの世ならむ 教鳥の

大和言葉の 高き調べと

天地と 動かすばかり 言の葉の

誠の道と きはめてしかな

皇后の御歌

教鳥の 大和言葉と たて貫きに

織る 倭文しずはな機の 音のさやけさ

敷島は大和にかかる枕言葉であります。敷島は昔磯城島と書き、磯は五十を意味し、敷島全体で五十音言霊の意となり。また敷島とは奈良県磯城郡、ここに欽明天皇(二十九代)の皇居があつた事から「しき島の大和」と言うようになったとも伝えられています。「たて貫き」とは縦横の意。倭文とは上代の織物の一種で、穀(かじ)・麻(あし)を織り出したもの、あやぬの、しずおり、あらたえとも言います。

明治天皇と皇后の言霊学研究のお相手を勤めたのが、皇后の書道指南であつた山腰弘道氏でありました。氏は尾張藩出身の学者で、書道の大家であつたと聞いております。弘道氏は、不肖私の言霊学の師、小笠原孝次氏の師であつた山腰明将氏の父君であります。敷島の道、言霊学の復活・研究は明治天皇以後は民間に伝わり、幾多諸先輩の労作を経て、当言霊の会に到っております。(次号に続く)

【収載】第二百十号(平成十年六月)

●言霊と世界歴史 その十一

「言霊と世界歴史」というテーマで続けて来ました人類の歴史

の話も今回にて十一回となりました。天孫降臨と名付けられた神話が示す人類文明の発祥の時から、前号までのお話によって漸く現代という時点にたどり着きました。その間、少なくとも八千年という歳月が経過した事になります。

この八千年の間に人類は如何なる事をして、如何なる文明を創造して来たのでしょうか。人類がその間に成し遂げた仕事は二つ、たった二つの事ということが出来ます。その第一は人類の精神文明であります。その中核となる指導原理はアイウエオ五十音言霊布斗麻邇の原理でありました。その原理を主体的に自覚し、保持・継承して人類の精神文明社会の建設・創造の頂点に立った人は、天孫民族の霊知りの天皇(スメラミコト)でありました。そしてその第一の精神文明の時代は八千年前より約三千年前までの五千年間と推定されます。

人類の第二の仕事は物質科学文明社会の建設であります。その創造の原動力となる精神は、物事を客観的に観察し、現象間の因果関係を追求し、その究極に於て「物質とは何か」の完全な解答を得んとする科学精神であります。

その時代創造の中核となり、推進者としての役割を担ったのは神選民族と呼ばれるユダヤ民族の中心グループ、キン

グ・オブ・キングズと謂われる予言者集団であります。この物質文明原理の発見とそれに基づく社会の建設に要した期間は、(先の精神文明時代の後期とダブる事を考えますと)約五千年前より今日までの五千年間と推定されます。

以上の如く人類は八千年の間に第一精神文明と第二物質科学文明とを完成させ、人間の心とは何かの精神原理布斗麻邇と、物とは何ぞやの物質科学原理を発見して今日に到ったのであります。こう言いますと歴史上の現代とは誠に結構づくめの様に思われますが、実情はそうも言っていないられない大変な問題が持ち上っている事は現代人がよく知っている所であります。

人類の第一文明より第二の物質文明へ転換する際に、物質科学文明の創造を促進する方便として第一精神文明の指導原理であつた言霊布斗麻邇を世の人の表面意識より隠してしまい、物質科学研究の發育土壤である生存競争社会を現出させました。大きいもの、強いもの、速いもの、便利なもの勝ち残って行く弱肉強食の世の中の出現です。その結果これ以上自由気俣な科学技術による生存競争を続けるならば、大量殺戮兵器の開発、地球環境の破壊、人心の荒廃等によって人類全体の生存が不可能となる事態に迫い

込まれてしまつたのです。

しかも最も憂慮しなければならない事は、人類全体が直面している重大な危機に対して、第二物質文明の中心となる物質科学自体からは人類のすべてが納得するような危機回避の方法を提供することが出来ないという事であります。科学は今のままの情勢が続けば、地球上の人類は重大な局面を迎えることになるという予告をすることは出来ても、「では人類はどうすればその事態を回避して、公平で豊かな平和世界を実現出来るか」の方策に関しては全くの無力であるということです。

「人間の表面意識が乱れ、錯乱状態がひどくなればなる程、人間の深層意識の中では意識の統一力は強く大きくなって行くものであり、その統一しようとする心の内容を早く把握・理解することが深層心理治療の課題である」とは心理学の法則なのだそうです。その法則の示す如く、幸いにも人間の、そして人類の心の全てを解明し、人類の第一精神文明時代を創造した根本法則である言霊布斗麻邇の原理は、今より百年程前より明治天皇や諸先輩の努力・研鑽の末に、三千年前にあつたと同様の姿で今・此処に復活・復元されています。復元された言霊学の真理が日本の、そし

て世界全体の承認を得るためには一段の努力を必要としますが、地球人類の現在の危機を転換し、恒久平和の新世界を創造する現実的方策を提供する準備は完璧に近く整っています。大本教祖のお筆先「九分九厘の一厘の仕組」の実行の理論的準備は已に整っています。

以上が、今回で十一回を迎える言霊講習会でお話申上げて来た「言霊と世界歴史」に於ける現在、人類が自らの歴史を創造して来た歴史的な現在の実相であります。言い換えますと、この講座でお話して来ましたこの現在という時点で立って、私達はこれからの世界をどの様に創造して行ったらよいか、が問われているという事が出来ましょう。

この「歴史」の第一回の講座の初めにお話した事ですが、これから世界を舞台に始まるであろう歴史転換に関する数々の行事はすべて「古事記と言霊」の後編の歴史編にて残すことなく取り上げて説明されております。言霊学の立場から更めて細部を検討して見ましてもそれ以上に付け加える事はないように思われます。にも拘わらず「歴史」のお話を重ねて申上げますのは（これも第一回でお話した事でありますが）、その歴史の中には「歴史を進行させるために、誰

が、何時、何処で、どの様な方法で、どんな事をするか」が書かれていない事のためなのであります。

幾度となく申し上げている事なのですが、人間の歴史というものは自然現象ではありません。人為現象です。「今後の社会はこうなりますよ」と言いましても、放っておいてそうなるものではありません。そうなるように人の自覚と行動があつて初めてそうなつて行くものです。そうなるよう意志し、行動する人が必要です。

更にこの歴史のお話の冒頭、八千年にわたる人類の歴史が日本民族の祖先の、皇祖皇宗と呼ばれる霊知りの天皇（スメラミコト）の経綸による極めて計画的な創造なのだ、という事をお話しました。第一の精神文明は天孫民族が中核となり、言霊布斗麻邇の原理に則つて建設されました。第二の物質科学文明を創造する方便として、競争社会を現出するために布斗麻邇の原理は社会の表面から隠没され、霊知りの天皇とその民族は歴史創造の主役の立場を下り、物質科学文明創造の主役は神選民族であるユダヤ民族に委託されたのです。それより三千年、人類の第二物質科学文明の完成はもう眼前に迫っています。そしてこの物質科学文明の完成に呼応するように、第一精神文明の指導原理で

あつた言靈布斗麻邇は人々の頭在意識の上に復元・復活して来たのです。

この現代の根本となる状況を直視する事が出来るならば、第二物質科学文明創造の社会基盤である生存競争が醸成した人類の生存の危機を転換して、第一の精神原理である言靈布斗麻邇と第二の物質原理である科学法則とを車の両輪とする人類の第三生命文明時代の創造を可能にする唯一の道は、矢張り靈知りの皇祖皇宗の経綸の原理である言靈布斗麻邇のイニシヤチブによるより他には有り得ない事でありませぬ。

そこで次の様に言う事が出来ます。二十一世紀に始まる人類の第三文明時代への奇跡のドラマの幕を開ける人は誰か。それは人類の第二の物質科学文明時代の幕開けに当り、モーゼとその子孫に神選民族という名を授け、以後三千年余の物質文明時代の創造の任務を命令した鞆草葺不合皇朝六十九代神足別豊鋤天皇と同様に、皇祖皇宗の御経綸の原器である言靈布斗麻邇の原理法則を自覚し、体得し、その原理の活用が可能な人、であります。

仏教の經典に「弥勒下生」と言い、キリスト教で「救世主降臨」などと告げられておりますから、人類歴史のどん詰

まりの時に当り、偉大な神人や仏陀が突然この世に姿を現わして、所謂超人的な力を發揮して世界の悪を追放し、幸福な社会をもたらすであろうと人々は心の底でかすかな願望を持っているかも知れません。今の世の中の物質的な豊かさの裏にひそむ言い知れぬ絶望的な精神の暗黒や、核兵器の拡散や人心の荒廃等を心配する人の心情からは、夢のような想像も無理からぬものがあります。けれどそんな非合理的な、神話の比喩の話がそのままの形でこの世に現われることは決してありません。人間精神の究極の真理・原理である言靈布斗麻邇の学問から見ると、奇跡というものはあり得ません。それは信仰という言靈アの次元に於て述べられたものであつて、宗教書に予言されている神人、仏陀、救世主の出現とは、実際にはそんな途方もない奇跡によつて現われるのではなくて、いとも合理的な勉強学問の習得によつて生れて来るものであります。その手引きとなり、教科書となるものは現在、言靈の学として已に完璧な姿でこの世に整えられ、就学の希望者が一人でも多くと募集が行われているのです。この講習会開催もそのためであります。

では言靈布斗麻邇の学問を勉強し、習得し、それを活用

して人類の新しい世紀を切り拓く事が出来る人となるにはどんな方法と手順に拠つたらよいのでしょうか。則る教科書である言霊の原理については今までの講習会で毎回、縷々お話しして来た事ではありますが、その教科書に従つて言霊原理を自らの心の内に確認し、自証して行く勉強の過程については、人それぞれの性向・経歴によって多少の違いがありますので、一般論としての方法・手順については詳しくはお話ししなかつた嫌いがあります。それは主に一対一の対話を手段としてお伝えして来ました。けれど「時」は間近かになった今日、言霊学の書を読み、その内容を記憶し、意味を理解するだけでなく、その原理・法則を活用して第三文明時代の扉を開く実行力を発揮する人が出なければなりません。それ故、言霊学の習得と活用を可能にする方法・手順について出来るだけ平易にお伝えする時が来たように思われます。この講座の後の方でお話申上げることといたします。

ここで余談ではありますが、一言申上げておき度い事があります。講習会の席上または個人的対談の時、よく耳にする質問があります。「私のような何の特技もない平凡な人間が、霊知りの学、スメラミコトの学といわれる言霊学

を習得出来るのでしょうか」または「私のような欲望の強い煩惱多い者が言霊の学問をする資格などあるのでしょうか」であります。

答えは次の様なものであります。言霊の原理とは、平々凡々な人間の心の構造とその動きについての学問です。ですからその人の心に、また心の奥の方にも「自分はかどの人間だ」という自負を持つ方は言霊学は一生理解することは出来ないでしょう。「幸福なるかな、心の貧しき者。天国はその人のものなり」と聖書にあるではありませんか。……また煩惱の多い人、その人こそ言霊の学問に最も近い人であります。煩惱を心の中に反省して行く手順の中に言霊の原理・法則が心に焼き付く如く自覚されて行くものだからです。仏説維摩経にいみじくもその事を指摘した文句があります。「煩惱の大海に入るに非ざれば、一切智(言霊)の宝を得ることなし」と。言霊学を学ぶには、資格も何もあるわけがありません。必要なのは、人であること、それに日本語で日常会話が出来ること、それに言霊学を勉強しようという意志、この地球上を人間と万物が住みよい世界とし、それをいとしい子孫に遺そうという思いだけなのです。歎異抄の第一条に「弥陀の本願には老少善悪の人をえ

らばれず。ただ信心を要とすと知るべし」との親鸞の文章が載っています。言霊学を学ぶには一切の条件は不要です。唯勉強の意志だけが必要です。親鸞の謂う「弥陀の本願」とは実は言霊原理そのものことであり、言霊原理とは人間の心を意志の次元で捉えた原理・法則のことなのですから。

以上が人類の第二物質科学文明時代から第三の文明時代に転換する鍵を握る人物は如何なる人か、の答えであります。こうお話しますと、「なんだ……。歴史の新しい創造者は何の何兵衛だ、とはつきり言うのではないのか」とがっかりする人がいらつしやるかも知れません。けれど、ここで申上げる歴史とは(何度となくお話して来た事ですが)これからの歴史をどの様に創造するか、の歴史であって、今後はどうなっていくのかな、の歴史ではない事です。歴史の創造に責任を持たない人は、人類の歴史が轟々と音を立てて転換を起す時になっても、「春眠暁を覚えず」の如く何も気付くことなく過ごしてしまふ事でしょう。「常に目を覚ましておれ」とはイエス・キリストの聖言です。

ここで日本の天皇の問題に触れておく事にしましょう。「モーゼの子孫が民族の使命の成就を報告する相手は、使

命を授けたのが三千五百年前の神足別豊鋤天皇であるから、常識的に言えば日本の現在の天皇ではないか」とお思いになる方が多い事と察せられます。一応もつともな言い分であります。けれど問題があります。現在の平成の天皇は神足別豊鋤天皇とは違い、霊知りである天津日嗣天皇(あまつひつぎスメラミコト)ではありません。古代に於ける天皇たるの自覚原理である言霊布斗麻邇も知らず、またその原理に基づく人類の文明創造の経綸も御存知ありません。その上、神倭皇朝第一代神武天皇より前の昭和天皇までの、言霊原理を信仰の対象となる神として祭った伊勢神宮の大神主としての役目も、昭和天皇の「古事記・日本書紀の神話と皇室とは無関係である……」という昭和二十一年の宣言によって消滅してしまっています。現在の天皇は「日本国民統合の象徴」という国家の一機関の資格を持ち、天皇家の戸主として戸籍に名を連ねる一個人に過ぎません。古代に於ける霊知りのスメラミコトの自覚も神倭朝に於ける国民信仰上の伊勢の大神主としての資格をも持たぬ日本民族の一員でしかありません。真の意味において今の日本は天皇位不在の時代と言うことが出来ましょう。ですから使命成就の報告のために舞上って来るユダヤの王を

迎え、民族の三千年の勞を犒^{かむ}い、その仕事を承認する資格を現天皇は持ち合わせていません。

歴史的に異論がないではありませんが、常識としては数千年の血統を受継いでいらつしやる現天皇であり、また二千年のブランクの中から靈知りの学である言靈原理の復活を計られた初めての方が現天皇の曾祖父の明治天皇であった事を考えれば、現天皇またはその御家族、あるいは親族の中から新しいスメラミコトの自覚を得る人の出現を希望するのが日本人としての国民感情でありましょう。けれど現在のところ皇室とその周辺にそういう兆候を見ることは出来ないのが実状です。若しそれに適^{あた}わしい人が現われたとしても、その方は地位・役職等一切の肩書を外した全くの平凡な一個人として、前にお話しました如く言靈学の勉強をして頂かなくてはなりません。

「何を途方もない夢のような事を……」と思われる方も多いことでしょう。けれど現在の人類全体が直面する事態を真正面から直視して、その気の遠くなるような生存の危機と、已に社会に向つて発表されている言靈布斗麻邇の学の比類なき精密さに心をいたすならば、充分な御理解が頂けるものと思ひます。

次の問題に移りましょう。第二より第三文明への転換、大本教の所謂九分九厘の一厘の仕組の起る時は何時か。この答えは略、具体的にお話出来ることです。左に列記する事項について注意深く観察して行くならば、自ずからその答えを知ることが出来ましょう。

先ず第一に科学研究の分野に注目することです。

「物とは何か」の基礎研究である原子物理学に於て、物質を構成している究極の要素の発見が最近急速に進んでいきます。つい先頃、日本とアメリカに於て、物質構成要素コークの中でその存在の確認が出来なかつた唯一つのコークが実験によつて確認される現象が発見された、という発表がありました。物質構成要素(十二個だそうです)の発見・確認が成功すれば、それらの構成要素同士の関係・組合わせの研究である所謂「場の論理」の完成に向つて突き進むことになりましょう。その作業の成功に漕ぎつけることが出来るならば、その時こそ人類の第二物質科学文明の目的の一つである「物質とは何か」の完全なる解答の実現であります。人類の第二文明の完成の第一の条件が叶えられる事となります。

第二に世界の經濟に注目して下さい。

日本の経済界には長い不況の波がおしよせています。同時に金融・保険・証券界には国際化・自由化の嵐が吹き荒れています。所謂日本版ビッグ・バンの始まりです。真逆と思われた銀行・証券・保険の会社の倒産・廃業が起りました。この種の変動は今後とも起る可能性が大きいでしょう。当事者にとっては大変御苦勞な事ではありますが、世界の歴史の流れから見るならば、それ等のことは起つて当然の事と言うべきであります。それは何故か。

先にお話した事ですが、西進したユダヤは現在アメリカに本拠を置き、彼等の民族の使命である物質科学の完成と世界統一の事業に一応のメドがついた時、本拠を彼等のレビ族の仲間が待つ始祖モーゼの魂の故郷日本に移そうと虎視眈々と時機を窺っているところです。今やその二つの仕事とともに完成間近となりました。そこで彼等が本拠を移す次の目的地である日本が、彼等の仕事の本拠を置くにふさわしい自由と国際的平等の社会でなければなりません。また本拠を移すための作業に有利な条件が整うことが必要です。彼等は今、その条件が整うよう総力を挙げて国際間の状況の変動を起させているようでありませう。

日米間の為替相場や株式の状況をよく観察して見るなら

ば、右の条件が次第に完璧に整い出している事に気付かれる事と思います。外国、特にアメリカの企業が日本の金融・証券・保険その他一般の企業との買収、合併、提携、協力等が今ほど有利な時は過去にはなかったのではないでしょう。更に今の日本には昔にはなかった企業の保有する技術の優秀性と、豊穡が約束される広大な市場が存在しているのです。それだけではありません。日本の企業とのあらゆる意味での「提携」はアジア全体の市場の独占の道をも開くことが出来ます。

以上お話をいたしました状況を冷静に観察するならば、ユダヤが使命を達成し、最終目的地日本に本拠を移して来る時期がもうそう遠い話ではないという結論に疑いを差し挟む余地はないのではないのでしょうか。彼等の世界を一周する勝ち誇った三千年の足音がもうそこまで聞えて来ています。

人類の第二物質科学文明時代から新しい第三の文明時代への転換に当り、その転換点に於ける大本教々祖の所謂九分九厘の一厘の仕組が如何なる人物によって、何時行われるかについてお話しして来ました。次に《何処》で行われるか

に移りましょう。

誰が、何時、何処で……それは日本であることに間違いありません。日本の何処か。十中八九まで首都東京でしょう。東京の中の何処か。また明らかではありません。……場所のことは今の所、この位にさせて頂きます。そして次に続く問題、「どの様な事が起るのか」の話に移ることにいたします。

第二から第三の文明時代への転機となる事件として、どんな事がこの世界に起ることになるのでしょうか。その話に入る前に昔、第一文明時代から第二物質文明時代に転換するに当り、どんな事が行なわれたかを確認しておきます。それは三つの方策に於て実行されました。第一に三千年程前、その時まで長年の慣習となっていた日本の天津日嗣天皇の即位後の世界各地巡幸の制度が廃止された事です。この事によつて霊の本日本より外国への精神文明の伝播の道が閉ざされました。第二に二千年前、崇神天皇による言靈布斗麻邇の原理の政治への適用が停止された事です。これによつて世界は文字通り精神的支柱を失い、弱肉強食の生存競争の社会が現出したのでした。第三にこの生存競争の社会を基盤として第二物質科学文明を創造する責任者とし

てユダヤ民族のモーゼとその子孫が選ばれました。

右の事を踏まえるならば、第二物質文明時代が醸成した人類生命の危機を回避して、第一の精神文明の原理布斗麻邇と、第二物質文明の科学原理とを二本柱とする第三文明の時代を切拓く鍵は、第一の精神原理を如何にしてこの世の政治・経済の上に復活・活用出来るようにするか、そしてその事を第二の文明の責任者であるユダヤの預言者のグループに如何にして納得させるか、に懸かっているという事が出来た。その事をどう実現するか、が今後どんな事が起るか、という話になります。

三千年間のブランクの後に、ユダヤが支配する精神的暗黒の世の中に、精神の原理布斗麻邇がどの様にして世界政治の舞台に登場して来るか、の実際の経緯をお話することとなります。その事をいみじくも予言した旧約聖書、ダニエル書（十一―十二章）の言葉を書き記すことにしましょう。「彼は海の間において美しき聖山に天幕の宮殿をしつらはん。然れど彼はつひに終りにいたらん。之を助ける者なかるべし。その時汝の民の人々のために立つところの大いなる君ミカエル起ちあがらん。是艱難の時なり。国ありてより以来このかたその時にいたるまでかた斯る艱難ありし事なかるべ

し。その時汝の民は救われん。即ち書にしるされたる者は
みな救われん。」
(次号に続く)

●読者の皆様へ

研究会報「言霊研究」が今月号より発刊十一年目に入る事
となりました。発刊以来十年間、一度の休刊もなく続けて
来られたのも、ひとえに読者の皆様の御声援・御協力の賜
と深く感謝申上げている処であります。厚く御礼申上げま
す。

会報発刊当時、日本は空前の好景気に湧いておりました。
その夢も束の間、バブルがはじけ、今は日本全体が不況と
日本版ビッグ・バンに揺れ、東南アジアを始め世界全体が
旧体制よりの脱皮を迫られています。経済ばかりでなく世
界は最近のインド・パキスタンの原爆実験のショックにお
のきましました。好むと好まざるとに関わらず、世界は地球
上の唯一つの社会であり、埒外はあり得ない事を知らされ
ています。この一つの社会となるべき世界は何を基準にし
て生き、新しい世紀を築いて行けばよいのか。この小会報
は静かに、そして確信を以て世の中に訴え続けて行きたい
と思っております。今後の御声援を切にお願い申上げる次

第であります。

【収載】第百二十一号(平成十年七月)

●言霊と世界歴史 その十二

霊知りの皇祖皇宗の人類文明創造の歴史の経緯における
第二物質科学文明の終りを第三の文明時代に転換させる契
機となる、大本教々祖の所謂「九分九厘の一厘の仕組」が、
どんな人によって、何時、何処で、どんな事によって、如
何なる方法で行われるか、のお話が、「どんな事によって」
の所まで進んで来ましたが、そしてその事件を瞬味な表現で
はありますが、いみじくも予言した聖書ダニエル書の終り
の文章を前月号に引用いたしました、
話を進める便宜上、ダニエル書の右の文章を再び書き記
すことにしましょう。

彼は海の間において美しき聖山に天幕の宮殿としつらは
ん。然れど彼はついに終りにいたらん之と助ける者なかる
べし。その時汝の民の人々のために立つところの大いなる君
ミカエル起らあがらん。是艱難の時なり困ありてより以来
その時にいたるまで斯る艱難ありし事なかるべし。その時

汝の民は救われん。即ち書にしるされたる者はみな救われん……。

前月号に引用した文章は右の様でありますが、ダニエル書には更に次の如き予言が付加されています。「ダニエルよ終末の時まで此言を秘し此書を封じおけ。衆多の者跋涉らん。而して知識増すべしと」

これから起ろうとする現実の歴史の事件のことをお話するに当って、昔のユダヤの預言者のダニエルの言葉を引用しますと、多くの人々は「その様な運命論が現実適用されて良いのだろうか」と疑問を持たれるであります。勿論お話をしている私として、「ダニエルがそう言ったから、歴史がこうなるのだ」と主張するわけではありません。日本の、そして世界の歴史を創造するのは、歴史創造の主体である人間の心です。その人間の心の究極の原理であるアイウエオ五十音言霊布斗麻邇によって日本と世界の歴史を見、その上で歴史の将来を展望する時、人間が生きて行く世界の歴史はかくなつて行く、そうなるより他の道はないと見定めた時、ダニエル書の予言が極めて曖昧ではありませんが、しかししみじくも同じ内容であることを発見し、将

来の歴史の展開の道筋を説明するのに適當だと思つて取り上げています。その点御理解を頂き度いと思ひます。

モーゼとその霊統を引くユダヤの指導者（預言者）が自らの神選民族を活動の手足として、生存競争社会の中核となり、三千年余の長い年月をかけた努力の結果、人類の第二物質科学文明は現在見るが如き繁栄の時を迎えました。その時代の二つの主要な目的、物質科学原理の確立と、その成果によつてもたらされる物質的な富を手段とする世界の再統一の事業は完遂間近となつて来ました。

その活動の三千年余、彼等預言者達は世の表面に立つことなく、また他よりの援助・助言を受けることなく、彼等自身の堅持する所謂「カバラの原理」を拠り所として、自らの使命を遂行して来ました。カバラの原理とは、言霊布斗麻邇の原理の中の、言霊ウの欲望を中心に据えた天津金木音図をユダヤ民族の言語であるヘブライ語と或る数理とを結合した法則に脚色したものだと言えられています。それは天津金木音図で示された精神構造から推察して、生存競争社会中であつて無敵である事を可能にする心構えであり、戦略であると言ふことが出来ましょう。旧約聖書のエ

ホバの言葉「我は戦いの神、妬みの神、仇を報ずる神……」の宣言がよくその事を表明しています。彼等ユダヤの預言者達は三千年を通じて人類歴史創造の責任を担って来た孤高の戦士であり勇士達なのです。

さて彼等預言者集団は、物質科学原理の解明と世界統一の事業の完遂にめどがついた時、彼等の本拠を日本に移して来ます。自ら負うて来た民族の使命の成就という輝かしい成果を携えて、彼等の始祖モーゼの魂の故郷日本に舞上って来ます。勿論彼等の使命遂行のための民族の指令塔も移って来るでしょう。

預言者ダニエルの言葉「彼は海の間において美しき聖山に天幕の宮殿をしつらはん」とはこの事を指した予書です。島国日本、美しき富士山の眺められるこの日本にユダヤの本拠が打樹てられることであります。そして彼ユダヤの王の王と目される預言者は、三千年余前、彼等の祖モーゼが神足別豊鋤天皇に会ったと同様に、言霊布斗麻邇の原理を奉持する皇祖皇宗の経綸の自覚者と対面することとなります。預言者からは三千年の苦闘を乗り越えて今辿りついた使命完遂の成果についての勝ち誇った歓喜の言葉が口を吐いて語られることでしょう。ハレルヤの歌が聞えて来るよ

うです。

それに対し布斗麻邇の自覚者から彼等ユダヤ民族の長い年月の努力とその成果(第二物質科学文明の完成)に対する賞讃と犒らひの言葉をもって迎えられる事でしょう。三千年の歳月を隔てた同じ魂と魂の再会の時です。預言者の心の昂揚は絶頂に達します。

その時、布斗麻邇の自覚者が何気ないように発せられる一言、その一言が第二物質科学文明の終りと第三文明創造の開始を告げる決定的な宣言となつて響く事となります。大本教祖の所謂「九分九厘の一厘の仕組」はその一言によつて開始されます。

布斗麻邇の自覚者は一言、何げない口調で預言者に問いかけます。「さて、貴方はこれからどうなさいますか……」この言葉が預言者の胸に千鈞の重りとなつて突きささります。この瞬間、人類の第二物質文明時代の終焉となります。こんな事をお話しますと、多くの方々は世間知らずの著者が絵空事の空想小説のような事を言うとお笑いになるかも知れません。けれど、そうならざるを得ない理由があつて申し上げているのです。それを更に突っ込んで申し上げますと、布斗麻邇の側からのこの一言によつて始まる人間の心

の中の葛藤の事件を、昔から各宗教が言葉こそ違へ異口音に予言して来た「最後の審判」というものなのです。これから少々の頁を割いて説明をすることにしましょう。

人の欲望には種々あります。生れたばかりの赤ちゃんがお乳を吸う事から、美しい着物が着たい、よい成績をとりたい、お金持になりたい等々果てしがありません。その欲望の中で「世界を自分のものになりたい。世界を自分の思うように動かし度い」という欲望が最も大きなもの、と言ってよいのではないでしょうか。約二千二百年の昔、中国を統一して一大帝国を樹立した秦の始皇帝は、秦の王朝を一世より二世、三世と続け、果ては万世に伝えようと考え、腹心の徐福に命じて東海の君主国日本が保持していると伝えられる不老不死の妙薬を求めさせたという物語は余りにも有名です。その事に因んだ歌が万葉集に載せられてもいます。始皇帝の望んだ不老不死の薬とは始皇帝の肉体を不老不死にする薬の事ではありません。始皇帝の世が始まる数百年前まで世界の豊かな精神文明の世の中の継続を可能にした日本のスメラミコトの布斗麻邇の原理の事であります。徐福がその精神原理の入手が出来ないまま秦朝は滅んでしまいました。浦島太郎のおとぎ話はそれを伝えたもの

であります。

中国を武力統一したのですから秦の国家は武力・金力では他国よりすぐれていたに違いありません。にも拘らずその王朝を長く維持して行く方策は他(日本)に求めねばなりませんでした。敵を倒す術と無敵となった時を続けることは全く別の事なのです。多くの国を武力によって統一し、統一後もその強大な武力を保持すれば統一国家体制を長く維持出来ると思う事は幻想に過ぎません。秦を始めローマ、蒙古、ペルシャ……等々強大を誇った国家も、その繁栄が夢の如くに滅んで行きました。三千年余の長い歳月をかけ、生存競争の社会にその金力と武力を利用して世界統一を成就させたユダヤのキング・オブ・キングズの把持するカバラの原理も一切の生存競争場裡を勝ち抜く言霊ウとオにのみ準拠した戦いの原理でしかあり得ないのです。

人は、その人が如何に強い人間であっても、長い間念願とした目的を達成し、勝利の祝盃を挙げた瞬間に「ふっ」と感じる胸中をよぎる隙間風の経験を持たぬものは居ません。特にその人が思慮深く、奢り高ぶっていないなら尚更のことです。敵を滅ぼし世界に覇を称える事と、その後の世界を平和に維持することとの異質感を感じない人はいま

せん。

そのキング・オブ・キングズの胸内の隙間風の中をつんざく様に、布斗麻邇の自覚者、八千年にわたる人類歴史の経綸者の何気ない「さて今後どうなさるおつもりですか」の言葉が鳴り響くこととなります……。

その何気なく、和やかに発せられる言葉は、それが如何に優しく投げかけられた言葉であつても、言霊布斗麻邇の原理の言霊イとエに則つた人間の全性能を熟知した權威の言葉です。キング・オブ・キングズが決して持ち合わせていない事を承知した、強権に依ることなく、平和な社会をもたらず事の出来る真理の言葉です。キング・オブ・キングズの魂の真中が音を立て、崩壊し始めます。三千年間の信念が崩れ去って行きます。三千年の聖なる覇者の終りの時が来たのです。次に始まらなければならない新しい人類の世紀を建設する心とその原理を彼は持っているのですから。

旧約聖書ダニエル書の予言「彼は海の間において美しき聖人に天幕の宮殿をしつらはん。然ど彼つひに終りにいたらん」とは右の事を指した言葉です。予言は更に次に続きます。「之を助くる者なかるべし」ユダヤの預言者達は三千年

年間、モーゼの遺した使命とカバラの原理に則って生きて来ました。使命は達成しました。同時にカバラの原理がその後には通用しない事を知らされます。使命とその生きる方策の二つを同時に失つた彼は遂に終りを迎えることとなります。長い間独立強歩で生きて来た彼には、終りの時にも之を助ける者がいる筈はありません。

この時、布斗麻邇の自覚者から声がかかります。「貴方は今後全世界の政治に関わって行くおつもりですか。若し貴方がお望みなら、今後の世界の恒久平和の方策をお教えしましょうか」

この言葉が発せられる時が、過去二千年の暗黒の中から不死鳥の如く蘇つた世界歴史経綸の原理が再び世界政治の舞台に現身の姿を現わす第一歩の時であります。ダニエルの予言は「その時、汝の民の人々のために立つところの大いなる君ミカエル起ちあがらん」と告げています。聖書に謂う大天使ミカエルとは言霊エの神、大本教の所謂「黒住、金光先走り、終りに良の金神が現われて世の建替え、建直しをするぞ」と言つた国常立命のことです。世界歴史の眞の経綸の御霊が世に現われた事です。ダニエルの予言は次の様に続きます。「是艱難の時なり国ありてより

以来その時にいたるまで斯る艱難ありしことなかるべし」と。

この声を聞いた時からユダヤのキング・オブ・キングズの苦悩が始まります。ダビデ、ソロモン王の後、ユダヤ国家滅亡の時にも預言者の心は彼等民族の使命と、その方策として奉持したカバラの原理へ的確信によって揺らぐことはありませんでした。けれどその確信した二つのものが薄れてしまった今、王の王と呼ばれる自分を小僧つ子扱いする言葉を聞く破目になったのです。「国ありてより以来……」の艱難に、心は千々に乱れることでしょう。恥辱と憤怒に頭は割れんばかりとなりましょう。これより起る預言者の心の中の苦悩を宗教書は「最後の審判」と呼びます。ユダヤの預言者達の三千年間にわたる世界政策の功罪の一切が、事もあるうに、その預言者自身が自らの心の中に明らかに想起し、しかも自ら判定し、自認しなければならなくなるとは……。口惜しさに歯ぎしりすることでしょう。けれど、預言者の前に坐っている布斗麻邇の自覚者は如何にも平凡で、優しい態度で、預言者に慈しみの眼を向けているだけなのです。ドン底に落ちて悩み、憤り、嘆いているのは原因も結果も預言者の心だけなのです。預言者の持つ

カバラの原理とは敵に打勝つ原理です。けれど眼前に坐る布斗麻邇の自覚者は敵ではありません。敵であるどころか、むしろ礼讃者であり、同情者であり、進んでアドバイザーたらんと言葉をかけてくれる人でさえあるのです。

昔から伝えられる宗教の所謂「最後の審判」とは、ある時突然救世主がこの地上に現われ、地球上の人間一人一人の行状を神の目で審判し、魂清き者は天国に導かれ、汚れたる魂の者は地獄の火の中に投げ込められると語られて来ました。けれどそれは今・此処で話されている第二文明より第三文明への転換・移行の契機の瞬間の事件を勧善懲悪の信仰上の話に脚色したものに他なりません。現代の人類危機の責任を地球上の全部の人々の一人一人に問うのは見当違いです。その人達は何も知りはしません。責任を追求さるべき者は、この三千年の物質科学文明の推進者、ユダヤの預言者であります。しかもそれら預言者の始祖モーゼにその使命を賦与したのは布斗麻邇の自覚者、人類歴史の経綸者であった神足別豊鋤天皇でありましたから、その天皇の霊統を引く現代の布斗麻邇の自覚者として、預言者の功罪を審判する事は出来ません。自らもその責任を負わねばならぬ立場にあるからです。それ故にこそ、キング・オブ・

キングズは布斗麻邇の自覚者が奉持するアイウエオ五十音言霊の原理の鏡の前に立って、自らが自らの三千年にわたる使命の遂行上の功と罪の自己審判をする事となるのです。これが今後起るであろう「最後の審判」の真相であります。

以上、人類の第二物質科学文明より第三文明への移行の契機となる布斗麻邇の自覚者とユダヤの預言者との出会いのドラマの様相とその雰囲気をお伝えしました。更にこの出会いを可能にするために、三千年前に日本に上陸して来たユダヤのレビ族の霊統を引く日本の財界人の仲介があるであろう事を付加えお伝えいたしましょう。

実を言つて、お伝えしましたフトマニとカバラの両自覚者の出会いの様相は、その筋道と雰囲気をお伝えしたのであって、実際はそれ程簡単なものでは済まない事でしょう。両者の対面は一・二回ではなく、少なくとも数回乃至十数回続けられると言う方が正確でしょう、ユダヤの預言者の側から言えば、三千年余の労苦とそれによつて挙げることの出来た成果の偉大さを思えば、自らの信奉し、実践して来たカバラの原理をそう簡単に放棄することは出来ないで

しょう。それは誇り高き彼等のプライドが承知しない筈です。旧約聖書にある「項強き者」の最たる人々が彼等預言者なのですから。

この両者の魂と魂との交渉、心と心との葛藤については、古事記上つ巻の神話「海幸と山幸」に詳しく解説が載っています。古事記の神話の文章でありますから、勿論それは言霊学による解釈によらなければ現実の問題とはなり得ません。そしてひと度言霊原理による謎解きをして見ますと、日本の原理とユダヤの原理との出会いの様相が手に把つて見るように鮮やかに写し出されて来ます。「海幸と山幸」の神話の顛末はテーマを変えて詳しくお話するつもりであります。ここでは両者の出会いに関する要点のみを記すことといたします。(お手許の古事記上つ巻、「海幸と山幸」を御参照下さい)

「海幸と山幸」の神話では海幸はユダヤのキング・オブ・キングズ、山幸は布斗麻邇の自覚の歴史の経綸者を表わします。両者が出会った時、山幸が「この鉤は、游煩鉤、須須鉤、貧鉤、宇流鉤といひて、後手に賜へ」と海幸に言え、とあります。詳しい解説は号を更めていたす事にしますが、その要点は次の様になります。鉤とは葉の理で、海幸の用

いる言葉の原理、即ちユダヤのカバラの原理の事です。山幸即ち布斗麻邇の自覚者はユダヤの預言者に「あなたの奉持するカバラの原理は、游煩鉤（ぼんやり鉤）、須須鉤（すさみ鉤）、貧鉤（貧乏鉤）、宇流鉤（愁い鉤）だ、言い換える」と、あなたの原理はあなたに敵対する者のある時、その敵に勝つには役に立つが、世界再統一が完成した現在ではもう何の役にも立たない。若しこれ以上その原理に頼るなら、世界をドン底に陥し入れる貧乏原理に過ぎないのだと言え」という事になります。

更はその言葉を「後手に賜へ」と示されています。古事記神話の「黄泉國」の章にもありました事です。後手に賜へ」とは如何なる意味なのでしょう。後手」の逆は前手です。前手に物言うとは「私自身の考え方から見れば、こういう事になる筈だ」という言い方です。とするなら後手に言うとは、自分の考えは伏せておいて、相手の立場に立ち、「あなたが今まで歴史を創造して来た方法で今後共その方法を変えることなしに対処して行くなら、かくかくの如く世界は誠に困難な状況に追い込まれてしまうのではないでしょうか」と告げるやり方を言います。これは相手はその成り行きを全面的に肯定せざるを得ない説き方と言え

ましよう。

また古事記「海幸と山幸」の物語には「塩盈つ珠と塩乾る珠」の方策が述べられています。文章の一端を記しましう。

綿津見の大神誨へて曰さく、「……その兄高田と作らば、汝が命は下田と當りたまへ。その兄下田と作らば、汝が命は高田と當りたまへ。然したまはば、吾水を掌れば、三年の向にかからずその兄貧しくなりなむ。もし然したまふ事を恨みて攻め、戦はば、塩盈つ珠を出して溺らし、もしそれ愁へまどさば、塩乾る珠を出して活し、かく惚苦めたまへ……」

右の神話の文章を言霊の見地から現実的に見ると次の様になります。塩盈つ珠とは人間の意志の言律である八つの父韻チイキシシリヒニの中の陽性・主体音チキシヒの四音、塩乾る珠とはイミリニの陰性・客体音に当ります。チキシヒの四音は主体側より客体側に問い掛ける音であり、イミリニの四音は主体の問い掛けに対して客体側が応答する音です。言い換えますと、塩盈つ珠とは主体側が事態の進展を意図して、客体側の行動を促す言葉であり、塩乾る

珠とは、主体側の事態の進展の意志に対し、客体側が不本意の意志を表した時、主体側はそれに逆らう事なく、客体側の意志に委す言葉といふ事が出来ます。では実際にはどんな言葉なのでしょう。一例を申上げることになりました。

ユダヤの預言者が自らの使命を果たし、日本に舞上がって来ます。それを布斗麻邇の自覚者が迎えます。預言者の事業成就の報告を受けた経綸者は、次に預言者に「あなたの仕事は見事に終った。今後の世界の政治には新しい方策で臨まなければならない」という事を成る可く早く知って貰いたいわけです。そこで経綸者は「あなたは今後どうなさるおつもりですか」と問い掛けます。今後の処置について預言者が全く無知であること、然も知らないにも拘らず、知らないのと表白することは三千年間の王者のプライドがそれを容易には出来ない事を知つての上の事です。案の定、預言者の心中に動揺が起りました。そこで経綸者はもう一押しします。「御希望なら御伝授しましょうか。」この二言が塩盈つ珠であります。静かな海面に上潮の波を起したのです。

預言者は、これも経綸者が予期した如く、憤怒と拒否の

態度を示しました。「三千年の戦法があれば何とかやっで行ける筈だ」という事です。すると経綸者は全く逆らう事なく、むしろ好意と同情の心で「そう、あなたは有能な方です。あなたのやり方でうまく事態を切り拓くことが出来るなら、新しい時代の建設が出来るなら、これに越した事はないでしょう。頑張つておやり下さい。そして若し方がうまく行かない事があると思われたら、その時はおいで下さい。歓迎しますよ」と告げます。この対応を塩乾る珠といえます。上潮による気持の高振りも、間髪を入れずに引潮の如く静かに和めてしまふ事です。

人類歴史の現代の時代相をしつかりと把握した立場に立ち、しかも私心を交えることなく、相手の立場に同情を持ちながら行う塩盈つ珠・塩乾る珠の操作が続けられることによつて頂強きユダヤの預言者が心の底から自らの従来の方策では立ち行かない事を素直に認めざるを得ない事となります。それはユダヤの王が自分自身で審判を自分に下した事になります。「海幸と山幸」の文章は次の様に記されています。「攻めむとする時は、塩盈つ珠を出して溺らし、それ愁へまをせば、塩乾る珠を出して救い、かく慙苦めたまひし時に、稽首日さく、『僕は今より後、汝が命の書夜

の守護人となりて仕へまつらむ』とまをしき。」かくてユダヤの預言者の言霊天津金木より脚色したカバラの原理による第二物質科学文明の時代は完全に終了し、預言者は第三文明時代創造の新しい使命とそれを可能にする新しい原理を授けられます。人類の第一精神文明の原器布斗麻邇と、第二物質文明の物質科学原理とが車の両輪となつて新世紀を創造して行く人類の第三文明の幕が切つて落されることとなります。

以上、人類の第二物質科学文明社会が醸成した人類全体の生存の危機を回避して、恒久平和・繁栄の第三文明時代への移行の契機となる事件、天孫民族の責任者が神選民族の王を言向け合わす所謂大本教の「九分九厘の一厘の仕組」が誰によつて、何時、何処で、どの様な事が起り、どの様な方法で行われるか、を成る可く詳しくお話由上げて来ました。御理解頂けたてでありませうか。一見途方もない夢のような話に聞えるかも知れませんが、人間という生物の心の中を隅から隅まで洗い尽くした精神原理から見た真実であることをお心に留めて頂き度いと思ふ次第であります。

十二回にわたつた歴史のお話を終るにあたり、一つの事

を付け加え度いと思ひます。それは右に述べた人類歴史創造の仕組を確実に実行し得る人となるためには、言霊布斗麻邇の勉強と共に、その人の心の内にどの様な心の体験を経ることが必要か、の問題であります。その問題が解明されなければ、人類全体の生命の危機が叫ばれる今、私自身は何を為すべきか、何をする事が出来るか、の行動の歴史とはなりません。要は自分の心の中に人類の現在の歴史を捉えることが差し迫つた問題です。この問題と「海幸と山幸」の神話の詳しい言霊学上の解説は、会報の号を更めてお話し上げる予定であります。御静聴有難う御座いました。

「末の世の麻の乱れは草薙の太刀よりほかに積くものぞなき」(古歌) (終り)

【収載】第百二十二号(平成十年八月)

●私と世界歴史

平成九年八月より今年七月まで十二回にわたり、「言霊と世界歴史」のテーマで言霊学より見ました世界人類の文明創造の歴史をお話して参りました。続きまして今月八月の講習会のテーマを「私と世界歴史」といたしましたのは

理由があります。先ずその事からお話を始めることにしましょう。

「対岸の火災」という言葉があります。「川向いの火事。自分には関係なく苦痛を感じない物事」と辞書にあります。川を隔てた向こう岸で起った火事は、その家の人は気の毒だとは思っても結局は自分に関係のない事、他人事だと片付けてしまいます。それが人情というものなのでしょう。それとは趣が違って自分にとって決して関係がないとは言えない物事であっても、それが余りにも大きな問題であった、自分一人の考えや工夫・努力では如何とも為し難い事だと思つて考えることを諦めてしまう物事があります。

国際間の核兵器製造競争の問題、排気ガスによる地球温暖化の問題、大気圏のオゾン層破壊の危機、青少年教育の頹廢や麻薬禍の問題等々、どれをとつて見ましても地球上に住む人々に関係のない筈はない問題なのですが、物事が余りに大きすぎて人間一人一人の考えや努力では力に余る事のように思えて唯々手を束つかねて見ているばかり、と言つた有様です。

右に挙げましたように、自分に直接に関係しない出来事ではないが、問題が大きすぎてその事を自分の外に、客観

的にしか考えられず、自分の生命に関係する問題、自分がどうにかしなければならぬ問題とは考えられない重大な問題が山積して来た事、それが今私達が生きている現代以前には見られぬ時代の実相だ、と言う事が出来ましょう。しかも列挙しました問題よりも更に憂慮すべき事は、地球上の国々の政治・経済・学術・報道・教育・宗教等の分野の誰一人としてこれ等の問題の根本的解決策を提案する人がいないという事であります。これも問題が余りにも大きすぎて、物事を一つの観点から体系的にまとめる事が出来ず、若し思いつきの提案をしても世界の人々のコンセンサスを得る事は到底出来ないと諦めてしまうからに違いありません。

それだけではありません。この一年間、十二回にわたる「言霊と世界歴史」の話をお聞き下さり、または十二号にわたるそのテーマの会報をお読み下さった読者の方々の中にも、お話の内容とは裏腹に世界の歴史創造の責任を自分自身が担う事に戸惑いを持ちたり、または「あゝ、そんな事なのか」と頷きながら、その話の対象が自分御自身になされてきているのだ、という事を全然気付かずいらつしやる方もあることと推察されます。

実は私が十二回の「言霊と世界歴史」の次に「私と世界歴史」というテーマの話を重ねて申し上げる主な理由がそこにあります。その理由を簡単に列記しながら、「私と世界歴史」の、もつと適切に言えば「私の世界歴史」の話を進めて行く事といたします。

第一に、現在の地球上の人類が直面している文字通り地球規模の種々の生存の危機を回避するための根本方策、言い換えますと、「言霊と世界歴史」の中でお話しいたしました人類の第二物質科学文明時代から第三文明時代に転換させる根本原理なるものを、現在の世界の各分野の優秀な人々をいくら集め、その知識の有りつたけを尽しましても、提供することは不可能なのだ、と言う事であります。何故なら、現代人が最も頼りとし、そこに生き甲斐を感じているその客観的合理的精神とその論法そのものが現在の危機を作り上げたのであって、その事実が気付かぬ限り、その精神からは自ら作り上げた危機を回避する道を見出すことは全く不可能なのだ、という事であります。

第二に、それでは人類の前途は全く絶望的なのか、というところではありません。第二物質科学文明が醸成した地球規模の危機を回避して、輝かしい第三文明時代の創造を

可能にする方法がたった一つだけあります。それが言霊布斗麻邇の道です。これ以外の方法はありませぬ。昔から各宗教で待望されている救世主の超霊力も、また信仰による愛や慈悲の祈りの力も、現在の人類の危機に対しては何の役にも立ちませぬ。蠅螂の斧に過ぎませぬ。理由は簡単です。現在の危機をもたらしした原因が一にかかって、人類の第一精神文明の指導原理であった言霊布斗麻邇の原理を、第二物質科学文明創造促進のための方便として、この世の表面から隠没させてしまったためだからであります。

道に迷って先に行く事が出来なかつたら、躊躇なく出発点にまで、少なくともここまででは正しい道と確認される地点まで引返すことです。人類の歴史創造の道に迷ったら、大昔の聖の文明創造の原器言霊布斗麻邇の原理に戻って見れば必ず道は拓けます。道はそれより他にはありません。

第三に、この原点の原理に戻るために何の設備も何程の費用も必要ではない事です。人はただその人の居る処で静かに、古事記・日本書紀を手引きとして解明された言霊の学問に則って自分の心を見つめて行けば事足ります。言霊の学問を理解しようとして他の現代の学問を参考とするの

でなく、言霊の学問を参考として自分自身の心を見て行けば自ずから道は開けます。言霊の学問は二千余年前、日本に於て活用されていた頃と同様の姿で現代に復活されています。現代の日本語で解説され、全貌の把握・理解・活用が可能となっています。

以上挙げました三つの理由から、「言霊と世界歴史」の話の総結論として「私と世界歴史」の話を進めて行く事としましょう。

蟹は甲羅に似せて穴を掘る、といえます。人間はその天与の精神性能に見合うような歴史を創造して行きます。この世紀末の重大な時に、どうしたら平安で安全で豊かな文明時代に転換出来るのか、の方策が見つからなかったら、言い換えれば、行くべき道に迷ったら、出発点に戻ればいいのです。人間が天与の性能とは何かの原点に戻って考えればよい事です。そこで人間精神の究極の学問である言霊学による心の構造を簡単に取り上げてみましょう。

人間の心は言霊母音ウオアエイの五層の宇宙を家(五重)としています。ウ(欲望)、オ(経験知)、ア(感情)、エ(実践智)、イ(意志)の五段階宇宙です。この五つの母音宇宙は古事記の神話が「独り神と成りまして、身を隠したまひき」

と述べているように先天的実在であつて現象として姿を現わす事はありません。これらの宇宙からそれぞれ欲望・経験知・感情・実践智という心の現象が現われ出るために、言霊イ(意志)の実際の働きの力動である八つの父韻が他の四つの母音の実在に働きかける事が必要です。母音は大自然の

実在ですが、それに働きかけて、現象を生む、八つの父韻は人間の根本智性の働きであり、この父韻と母音の結合によつて三十二の現象子音が生れ出て来ます。この三十二の子音があらゆる心の現象を構成する最小要素であります。

言霊学によつて人の心の構造をまとめて見ますと、図123-Aで示しますように、五つの母音、五つの半母音、八つの父韻、三十二の子音合計五十個の言霊によつて人の心は構成されていると言う事が出来ます。古事記の神話を教科書とする言霊学は、更にこの五十個の言霊を検討・操作して、人間が人類社会を理想の文明社会に創造して行く典型的方法を発見しています。言霊ウオエの三権分立・協調(三貴

図 123-A

キ	ニ	ヒ	リ	シ	ミ	キ	イ	チ	イ
エ									エ
ワ									ア
ヲ									オ
ウ									ウ

子)の原理です。天照大神は高天原を、月読命は夜の食國を、須佐男命は海原を統治して、その統治の領域は区別されながら、三者は共に協調して行く体制であります。その操作する心の次元はそれぞれ天照大神は言靈イとエ、月読命は言靈アとオ、須佐男命は言靈ウとオとなります。これを実際の社会相で区別しますと、天照大神は言靈原理による世界統治、月読命は宗教・芸術・哲学の分野、須佐男命は物質科学・産業・経済の分野の文明創造を分担する制度という事が出来ます。

以上が日本人の祖先によって発見・自覚された精神の究極の構造原理と、その原理に基づく理想社会を建設・保持して行く政治体制の概要であります。この原理と政治の体制によって人類の文明創造の仕事が始まりました。今より約八千年前と推定されます。その時より五千年間、人類の精神の豊穰な平和の時代がこの日本を中心として栄え続けました。この時代を人類の第一精神文明時代と呼びます、その世界政治の中心はこの日本であり、政治の根本の原理である言靈(靈)の原理を保持・継承する国の意味で靈の本と呼ばれました。

人類の第一の文明である精神文明が最高調に達した今よ

り四・五千年前、日本の三権分立の政治体制の中の産業・経済を分担する人々(須佐男命)の中に今迄にない考え方を持つ者が現われて来ました。「現在までの世界の政治の根本原理であつた言靈布斗麻邇は非の打ち所のない立派なものである。これは人間の心を内に省みる事によって得られた精神の真理である。しかし私には物事を客観的に見て、物とは何かを研究する仕事が残されているように思われる。心の原理に対する物質の原理・真理が別にあるに違いない。」この主張が次第に大きくなり、その探究を志す須佐男物質研究集団とも呼べる人々が高天原日本より外国に向って出発して行きました。物質科学研究の始まりです。時が経ち、外国に於ける物質探究の動きが次第に高まり、その成果も徐々に挙がつて来ました。この時の世界の精神文明の爛熟の様相と、新たに興つて来た物質探究の勢いを察知した歴史経綸の政庁である日本の朝廷は、新しい文明の時代に入る気運に対処するために、当時日本に來朝・留学していたユダヤの王モーゼに、やがて興つて来る人類の第二の物質科学文明創造の責任を委託し、使命を授与したのでした。今より三千年余前のことであります。この時より世界は第二の物質科学文明時代に入ります。

物質探究の成果は神倭朝第一代神武天皇の時前後よりモ
ーゼの末のユダヤのレビ族の渡来・帰化人によって日本に
入って来ました。そして世界の精神文明の中心政庁として
の日本朝廷の仕事が廃止され、第十代崇神天皇の時、精神
文明の基本原理であった言霊布斗麻邇も社会の表面より隠
没することとなりました。五千年間続いた世界の第一精神
文明時代の終焉であります。

爾来、外国に於ては三千年間、日本では二千年間、物質
科学研究促進のための方便として推進された弱肉強食の生
存競争の世が続きます。三貴子による三権分立の高天原の
政治体制を離れた言霊ウ(欲望)と言霊オ(経験知)だけを事
とする須佐男命の独走の暗黒の時代が現出しました。そし
てこの強い者勝ちの暗黒の世の中から第二文明時代の目的
である物質科学の輝かしい成果である「物とは何か」の根本
法則と、世の中の生活を便利そのものに交統させる科学技
術が今日見るが如く発達して来ました。確かに人類の第二
文明の目的は達成されました。と同時に、この目的達成の
ための方便であった生存競争の様相もその極に達し、常識
を以てしては如何ともなし得ない人類生命の危機の時代を
も現出させてしまいました。

過去八千年余の努力によって人類は第一精神文明の原理
言霊布斗麻邇と第二物質科学文明の原器である物質科学の
真理を二つながら手にし、この両真理を活用して人類が今
まで経験した事のない第三の生命文明時代を建設する事が
出来るか、それとも方便として醸成した生存競争社会の残
渣の泥の中に人類全体が沈んでしまいか、の絶体絶命の岐
路に立たされていると言う事が出来ませぬ。これを各宗教が
予言する「最後の審判」「世の終り」という事なのでありま
しう。

そして今三千年間、皇祖皇宗の附託に応え、物質科学の
完成と世界再統一の事業を完遂したユダヤの予言者と、二
千年前世の中から隠没し、不死鳥の如く現在甦って来た言
霊布斗麻邇の自覚者とが、三千年余前、神足別豊鋤天皇と
モーゼが会ったと同様に一堂に会する日が近づいていま
す。大本教祖の所謂「九分九厘の一厘の仕組」の始まる時も
目睫に迫っています。近い将来、この両者が一堂に相会す
る時に起るであろう両者の心中のドラマ、これが真の意味
に於ける「最後の審判」です。

以上前号まで十二回にわたった「言霊と世界歴史」を簡単
に復習して参りました。約四・五千年にわたる人類第二の

物質科学文明の時代はもう直ぐ終焉を迎えようとしています。残すのは唯一つ「九分九厘の一厘の仕組」即ち「最後の審判」だけとなりました。その「最後の審判」の人類八千年の歴史を背負って現代に生きる人間の再生のドラマを述べることによって、人類の客観的な歴史としての「言霊と世界歴史」を人間個人の主体的な歴史である「私と世界歴史」として総結論に導いて行く事にいたしましょう。文字と絵に書き出した餅である世界歴史を、それを自ら料理して自ら食べる生きた歴史としてまとめて行く事にしましょう。

人類の第二物質文明時代の終りに醸成された絶望に近い危機を回避・転換して第三の生命の文明とも呼ぶべき時代の創造を可能にする唯一つの方法として、言霊布斗麻邇の自覚者によるユダヤの王の王への「言向け」(ことむけ)が行われるとお話しました。「言向け」とは精神的な権威による説得の行為です。日本の言霊布斗麻邇の自覚者はイエアオウ五次元の人間性能を全て熟知し、その五性能を活用する根本智性である八父韻に精通した人であります。一方のユダヤの予言者は五性能の中の言霊ウ(欲望)と言霊オ(経験知)の二つの性能に明らかであり、その性能を社会に活用

する方法であるカバラの原理(布斗麻邇の中の言霊ウ段の金木音図と言霊オの赤珠音図をユダヤの言語と数理の法則に転化・脚色したもの)に習熟した人であります。

右の両者の出会いである一厘の仕組とは、布斗麻邇の自覚者の保持する五十音言霊の心の鏡の前に立ったユダヤの王が、自らの保持する言霊ウ・オのカバラの原理に基づいて建設して来た第二物質科学文明時代の三千年間の功と罪を徹底的に自己審判するドラマなのです。そのドラマは心のベールをお互いに取り外した魂と魂の触れ合う言葉のやりとりによって行われます。

この時、布斗麻邇の自覚者がユダヤの王にその自己審判の心を起させ、しかもその罪を責めるのではなく、愛と慈悲の眼で見守りながら新しい事態に対処する事が出来る心構えに変貌させる権威は何によるものなのでしょうか——この言葉の権威を昔の言葉で御稜威(みいづ)と言います。言霊イである言霊原理に則った言霊エの実践智の力であり、哲学でこれを至上命令と呼びます。この至上命令が布斗麻邇の自覚者の精神の何処から発せられるのでしょうか。この点を明らかにする事が「言霊と世界歴史」の話、「私と世界歴史」に変換させることとなります。対岸の火災視

ではない歴史をお話申上げる事となります。

ではどうしたら「言向け」を成功させる御稜威を發揮することが出来るのでしょうか。結論を簡潔に申上げることになります。

一、先ず言霊の学問を身につけることであります。それによって自らの心が言霊ウオアエイ五層の宇宙に住んでいる事を自らの心の内に確認することです。

二、同時に、自らの心の内を反省して、この世に生れて来てよりこの方、身につけて来た経験的知識が真に自分を、身内を、そして親族や他人、ひいては社会・人類を幸福に導くのに何程の効用があったか、その効用は完璧であったか、を謙虚に考えて見ることです。

問題は以上の僅かな二点にかかっています。以下それを説明しましょう。言霊学を学ぶことによって、私達は人間の心が五官感覚に基づく欲望性能(言霊ウ)、人生の種々の経験をその因果関係を探ることによって知識にまとめて行

く経験的知識(言霊オ)、感情性能(言霊ア)、上述の三つの性能を物事に対処して行動するのに如何なる配分でまとめればよいか、の実践智性能(言霊エ)、更に上述の四性能を縁の下の力持ちの如く心の底から下支えして発動させる根源力となる創造意志性能(言霊イ)、以上五つの性能を心の内に確認する事が出来ます。人間の心の活動はこれ等五段階の性能によって行われ、それ以外のものは存在しない事を知ります。

これら五性能の中の欲望、経験知、感情、実践智という四つの性能が自我として心に現われて来ますが、そのどれもが自我のコントロールの下に置いておく事が如何に難しか、そしてそれ等をコントロールするものは一般的に現代では経験的知識即ち学問だと思われています。現代人は学識万能の信仰を持っています。

人間社会や個人の生活上のコントロールに知識が必要である事は論ずるまでもありません。けれどその知識によるコントロールが決して万能・万全ではあり得ない事を知ることの方がもっと遥かに必要である事を知らなければなりません。その頼っている知識が純粹な学問上の知識であっても、または単なる個人の生活経験から来る知識であって

も、それに百パーセントの信頼を置いて突き進み、反省することがないならば、危機は必ずやって来ます。一身上の破綻、家庭の破壊、そして現代見る如き地球全体の全滅の危機も原因はここにありません。古事記の神話が呪示し、言霊学が明示する所謂須佐男命の独走、言霊ウとオの二性能を重視し、そのみに目を向けた文明の末路がそこに見られます。

言霊学によって自らの心が言霊ウオアエイの五界層の構造を成している事に気付かれた人は、更に進んで自分自身が生れてから今まで真実だと確信して身につけて来た経験知識・信条・主義の主張に従って自らの欲望達成のために勇猛邁進して来た過去と現在を静かにたゆまず反省してみて下さい。自らの信頼した知識・主張が自分を、また他の人を十分に充実させ、健康で幸福にしたか、その主義・主張は完璧で一切の状態に対処し得るものであるのか。

この様な反省の末に、自らの主義・主張の行き着く先に自らの生命の死と、自らの精神の錯乱が待っている事に気付く人は幸いであります。生れてこの方、自らの人格の全てをかけて追い求めて来た人生の勝利の代りに死と錯乱が待っている事に気付き、絶望のドン底に落ちることの出来

る人は幸いです。何故ならその人は新しい生命を与えられるからです。自分の人格の崩壊、絶望は余りにも悲しい事です。果然自失、生きる気力もなくなる事でしよう。けれどもその人はしばしの時間の後に、主義・主張に破れ、希望も気力も失ってしまった自分が尚「生きている」事に更めて気付きます。努力と気力によって希望を追求して来た事で生きていたのではなくて、自我よりもっと大きな、計り知れない大きな力に包まれ、育まれて生かされて来た事に気付きます。人は勝手に生きているのではなく、愛と光によって生かされているのだ、と気付きます。

従来 of 宗教で謂うならば、これは立派に「再生・復活」であり、「空の悟り」であり、「救われ」の境地です。そして生かして下さっている方は神や仏と呼んでふさわしいものでしょう。一般に信仰上の悟りとはこの様なものであります。しかし言霊学によって自らの心が言霊ウオアエイ五界層の構造を成している事を承知している人にとっては信仰の悟り以上の意味を持つ事になります。自らの今までの言霊ウの欲望と言霊オの経験知だけに身を委ねた人生の破滅から自らを救ってくれたものは、神や仏ではなくて、当然死と錯乱に落ちる自分を温かく懐に抱いて呉ていたものは言霊

アの純粹感情の宇宙であり、自らの小賢しい經驗知を振りかざして天下をわがもの如く思っていた自分を人知れず大過なきよう人生の案内役を務めて呉ていたのは言靈エの宇宙より発現して来る実践智であつた事、更にこの小さな自分をこの世に生み育て、社会の一員として生きる事を許して呉た言靈イの生命の創造意志の力であつた事を知ります。

しかも信仰に於ける神仏が小さい自分の外に在つて自分を見守つて呉るといふ觀念から一転して、自分に新しい生命を与え、その息吹の中に生かしてくれた言靈アエイの宇宙生命の性能が、実は自分が今まで生きて来た生命の本来の姿、本来の自分であつた事に更めて気付きます。自分とはこの身体に限定された生命ではなく、広大な宇宙そのものが自分の本来の実態であることを知ります。

更に視点を新たに与えられた言靈アエイの宇宙の立場に移して見るならば、それまで矛盾と葛藤が渦巻き、煩惱に苦しめられて来た自らの言靈ウとオの次元の生活が、実は言靈ウ・オの生活の姿そのままに生命の五界層ウオアエイの調和・協調の中に摂取されて、円満な、極めて合理的な生活であつた事に気付きます。言靈ウとオだけを見た時の

矛盾が、五界層全体から見ると実は全生命の非の打ち所のない調和・合理の世界であることが分かります。

それと同時に、その時まで自らの外にあつた世界は自らの住家であり、世界人類とは我そのものであり、世界の歴史とは即ちわが歴史に他ならない事を知ります。

眼前に在るユダヤの王の王を「言向け」する御稜威みいづの原動力となるものは、上述の言靈布斗麻邇の勉学者が体験する個人的な死より新しき生への生まれ変りのドラマそのものなのであります。言向け合す側は新生した言靈五界層協調の本来の人間精神の自覚者であり、人類歴史の経綸者です。言向け合わされる側は言靈ウとオ独走の矛盾と苦惱に満ちた復活以前の自らの姿そのものなのです。ですから、死に瀕した第二物質科学文明の責任者を、言靈アの慈愛で包み、言靈エの英智によって指導し、言靈イの皇祖皇宗の世界人類・文明創造の経綸の仕組の中に摂取することが可能となります。

第二文明より第三文明への転換は、人間の外に向つての努力では歯が立ちません。それは第二文明時代の手法です。人間の心の内に向つて掘り下げて行き、奥の奥の、そこで

個人の生命と人類全体の生命が合致する一点に達する処に九分九厘の一厘の仕組が発見され、その御稜威を発揮することが可能となります。……そこで「私と世界歴史」のテーマが完成します。

(終り)

【収載】第二百二十三号(平成十年九月)

●言霊父韻について その一

父韻についてお話をします。母音につきましては事あるごとに説明をして来ましたが、この父韻につきましては話が複雑なるのを防ぐために今迄少々省略して来た嫌いがありました。そこで今回言霊父韻について詳しく解説をする事といたします。

人の心は五十個の言霊によって構成されています。ピツタリ五十個であって、それ以上でもそれ以下でも有り得ません。この五十個の言霊をその内容によって区別しますと母音・半母音・父韻・子音となります。母音はウオアエイの五個、半母音はウヲワエキの五個、父韻はチイキシリヒニの八個、子音は三十二個であります。これら五十音言霊によって人間の精神を説明するよう配列しますと、図124-Aのようになります。

図に従って更に詳しく区分けしますと、母音ウの内容性質上、母音ウと半母音ウは同一のものでありますので、これを一音に勘定いたします。そして全部で四十九音の言霊を神代文字で現わしたものを、これを言霊シとして四十九言霊に加ええます。

以上のように五十音を区分けしましたが、そのそれぞれの内容を簡単に説明しましょう。言霊母音は人間の心の住家である心の宇宙のことです。この心の宇宙は五つの次元界層のたなわりになっていて、その一つ一つに五つの母音を当てました。ウオアエイの五界層の宇宙実在です。この五段階の

図 124-A



宇宙に關しては、外国に於ても種々取り上げられて來ました。中國に於て木火土金水の五行、印度に於ては地水風火空の五大という概念で説明されています。仏教の五重の塔もその象徴であり、またキリスト教では五大天使として表現されています。

母音は宇宙實在であり、古事記に「独神(ひとりのみ)に成りまして、身(み)を隠したまひき」とありますように、心の先天的實在であつて、意識では捉へることの出来ない、現象としては姿を現わすことのないものであります。その母音實在から五つの次元として現象がどうして現われるのか、が問題となりますが、その働きの原動力となるのが矢張り先天構造の要素である八つの父韻です。アオウエイ五母音の中の言靈イは、母音實在であると同時に、また人間の根本智性としてチイキシリヒニの八つの父韻の働きとなつて展開し、言靈イ以外のウオアエの四母音に働きかけて三十二の言靈子音の現象を生み出します。言靈イはこの様に大自然宇宙實在であると同時に人間の根本智性でもある事により、一切の現象の創造主であり、言靈イ・音を特に親音と呼びます。そして生み出された三十二の子音はそれぞれ一切の現象の最小の要素となりますのであります。ま

たお話が飛びましたが、ワヲウエヰの五半母音はアオウエイの五母音が主体側である私自身であるのに対し、その主体と相對している客体側のあなたの事を表わす言靈であります。

以上、言靈母音・半母音・父韻・親音、子音について簡単な説明を致しました。さてこれより本題である父韻の詳しいお話に入ることとしましょう。言靈母音(半母音)については前にお話ししました様に昔より各宗教・哲学によつてその実体がおぼろげながらにでも分るよう説明されています。けれど言靈父韻については僅かに易经に八卦として、また仏教で八正道として、ドイツ古代哲学で「Feuer(火花)」という言葉で取り上げていますが、その概念的な言葉からは父韻実体を窺う事は殆ど出来ないと言つても過言ではありません。言靈父韻はここ二乃至三千年間の思想界の秘密に属す言葉となつていたものであります。

この言靈父韻に関する消息を明らかにする上で私が言靈学を勉強して來た中の一つの体験をお伝えすることにしましょう(公報二十九号、神様の戸籍、戸隠神社参照)。古事記の神話にはそれ程関心のない方でも、次の神話だけは幼い時から耳にしている方は多いのではないのでしょうか。

高天原の天照大神の田んぼや服屋はたやに弟神の須佐男命が乱暴を働いた。天照大神は天の岩戸の奥に隠れてしまった。高天原は真っ暗になり、日本の国に色々な禍い事が起るようになった。困り果てた高天原の神々は天の安河原（やすかわら）に集つて相談し、その結果、高御産巢日の神の子、思おもひ金の神かねに考えさせて天の岩戸の前に種々の準備を整え、天の宇受売うぢめの命が神懸りして岩戸の前で裸踊りをした。その様子が可笑しいと神々が皆笑い出しました。

岩戸の中の天照大神は、岩戸の外は真黒で人々は悲しんでいる筈なのに陽気に笑うとは何故なのか、と不審に思い、岩戸を少し開け、身を外に乗り出して見た時に、岩戸の脇に隠れていた手力男命たぢからなが、大神の手を取つて引き出したてまつた。天照大神の出現で高天原は明るくなり、元の平和な姿に戻りました。

以上が古事記の「天の岩戸」の章のあらましであります。古事記の神話が言霊の学問の教科書であるならば、天の岩戸の文章の中の、手力男命が天照大神の手を取つて岩戸から引き出したという事が言霊学の上でどんな意味となるのか、がその当時の私の疑問でありました。その疑問が昭和六十一年夏の長野県北部の戸隠神社の参拝によって図らずも解消したのでした。

戸隠神社奥社の主祭神は手力男命であります。この奥社の「戸隠」の社名と祭神名「手力男命」だけでは私の疑問を解く事は出来ません。奥社から徒歩二十分程の処にある中社の由緒書きの高札の中に中社祭神の神名を見るに及んで、疑問は氷解したのでした。中社神名を天八意思金命あめやごころおもひかねのみこととあります。八心と書かず八意とあるのは、正しく人間の創造意志（言霊イ）の働きである八つの父韻を指します。思金（おもひかね）とは「思い神音（かね）」の意です。神音とは言霊三十二子音の事を謂います。すると八意思金命の全部では「八つの父韻の自覚（かね）」により三十二の子音の実相を見ること（かね）となります。天の岩戸に隠れていた天照大神を岩戸の外に引き出したてまつた手力男命と古事記の神話が示すその働きとは、現在の言霊学を学ぶ人間が「言霊の八つの父韻を自覚し、その自覚を基礎として三十二子音を見ること、言い換えると、八父韻と三十二子音の自覚を完成させて、言霊五十音の全構造である天照大神の八咫鏡を完成させること」と言う事が出来ましよう。

以上、古事記神話の天の岩戸の章の手力男命の謎解きによって、今回の本題である言霊父韻というものが、過去二

千年間の人類の秘事であり、父韻を明らかにすることが「人間の心とは」を全面的に解明する鍵となる、という消息をご理解頂けたのではないか、と思います。このように、八つの父韻は少なくとも過去二千年の間、その実態が日本のみならず、全世界の人々の意識から隠されていたものであり、今それを明らかにすることが出来るという事が、人類の文明史上その重要性は計り知ることが出来ない程のものであります。

少々前置きが長くなりましたが、本題の父韻の話に入り

ましよう。前置きが長かったり、父韻が天照大神という名で示される八咫の鏡の構造を解明する鍵なのだ、などと言いますと、父韻の何たるかを把握することは至難の業のように思われ勝ちであります。また精神的な真理というものは修煉の積み重ねの結果会得するもののように思われ勝ちです。けれど言霊の学問は奥へ入れば入る程、それは聞き知ってしま

えば「なあ〜んだ」という程平凡で簡単なものであります。人の心の言霊五十音の構造と言いますのは、全く平々

図 124-B

ニ	ヒ	リ	シ	ミ	キ	イ	チ	小笠原氏
成	開	滲	調	整	収	繁	創	山腰氏
熟	顯	透	和	理	納	榮	造	陽出力
								飛至力
								陰搔力
								旋回力
								透刺力
								螺旋力
								開発力
								吸引力

凡々たる人間の心の構造なのであり、特別な威厳や靈力を持った人の学問ではないという事です。ですから特別の修行で得られるものではなく、平凡な人間の心で知ることが出来るものなのだという事を御心に留めてお聞き下さい。とは言いましても父韻は母音と同様心の先天構造内のものであり、五官感覚で捉える事が出来ません。その五官で捉えることの出来ないものをどうしたら知る事が出来るのか。今回は難しい理論よりもこれからお話する日常茶飯の出来事の中から父韻の内容を汲み取って頂き度いと思ひます。

最初に私の言霊学の先師小笠原孝次氏、またその師山腰明将氏、両氏の父韻の説明を掲げることにします(図124B参照)。父韻は人間の創造意志の働きであり、この意志が人間の他の四つの宇宙性能(欲望ウ・経験知オヲ・感情アワ・

実践智エエ)に働きかけて主体と客体とを結び原動力となるもので、心の奥でパチッと光る知性の火花の如きもので

す。その火花の如き瞬間の働きを解説せよと言いましても仲々困難な事です。しかし困難とばかりも言つてはいられませんが、お聞きになられた方は図に掲げた先輩両氏の表現を参考になり、またこれからお話する私の表現を基として、自ら心の中に、それこそ日常茶飯の如く働いているその意志の火花の実態を把んで頂き度いと思ひます。

言霊父韻は八つあります。それも厳密には、陰陽、正反、作用反作用の關係にある二つ一組である四組の働きに過ぎません。それ等一組ごとに並べますとチイ・キミ・シリ・ヒニの四組となります。その組毎に順々に説明して行きましょう。但し今回のお話では各父韻を示す古事記の神話の神名の解説は省く事としました。父韻とそれを示す古事記の神名との關係は書籍「言霊」または「古事記と言霊」の父韻の章を御覽下さい。

言霊父韻チ・イ（古事記神名字比地邇・須比智邇）

九州薩摩に伝わる劍術の流派に示現流があります。その劍の構え方は有名で、八双の構えと謂い、劍を右脇に垂直に立てて構え、敵に対して真直に突進して、そのまま劍を振り下す劍法で、その際の掛声が「チェストー」と言ひます。

掛声の主たる言葉がタツツテトの夕行で出来上つてゐることに御注目下さい。示現流は試合に当り小賢しい駆引などを用いず、身体全部を相手にぶつけるつもりで突進し、劍を大上段から真直に敵に振り下ろし、その一撃が失敗すれば死ぬ覚悟で、初めの攻撃に一身を賭ける劍法です。その時の気合いが父韻チに始まる「チェストー」です。「振り下ろす劍の下は地獄なり。身を捨ててこそ浮ぶ瀬もあれ」と歌に詠まれてゐます。これに見られるように一瞬の動作の中に自らの生命、または人格の全体を以て形に表わす意志の力動、これが父韻チであります。書籍「言霊」の中の父韻の項に、父韻チは「精神宇宙がそのまま現象となつて姿を現わす力動韻」と説明しますのも以上の事と同様の事であります。

劍術のような剣呑な事でなく、日常ま起る事柄の中にも父韻チの消息を窺うことが出来ます。日頃付合つてゐる友達とちよつとした事で言い争ひ、相手を傷つけてしまつたとします。翌日になつて「悪い事をしてしまったな」と氣付き、謝りに行かなければ、と思ひます。けれど言い争ひの場面が思い出され、「あいつがあんな事を言わなかつたら、自分も決定的に彼を傷つけるような言葉は口に出さず

に済んだ筈だ」と言い訳がましい言葉が頭に浮び、仲々素直に謝る気持ちになれないで、ぐずぐずしてしまいます。色々考えあぐみ、悩んだ末にふっと気が付きました。「考えて見たって仕方がない。彼の心を傷つけたのは私なんだから、あれこれの経緯はどうであれ、彼の処へ行つて素直に謝ろう」と決心がつかしました。もうこうなれば仲直りは間違いない事でしょう。

あゝだ、こうだ、と言いつつて自分を弁護することでは事態を解決出来ないと知つて、相手がどんなに非難しようとして、素直に百パーセント自分の非を認め謝ろうとする心、その心が起る瞬間の意志の力動が父韻子であります。自らの精神宇宙、全人格を一つの行為として表現しようとする動作の内にその力動を窺い知ることが出来ます。以上のような状況は煩惱多い私などには日常茶飯に起る事です。些細な自己弁護や他人をぐずぐず非難することから開放されて、何時も素直に生活を楽しんでいられたらどんなに気持ちよいか、と思われます。そのことを修行によつて解決した人の一人に空也上人がいました。空也念仏を称え、念仏踊りを踊つて、生きることの樂しみを謳歌したと言われています。空也の一挙手一投足が宇宙の一挙

手一投足であつたのであります。禪で謂う一期一会の言葉もこの父韻子の力動の自覚から生れたものであります。

話が何となく難しくなつてしまいました。というのも父韻子の説明が他の父韻の組合せより説明しにくい為、という事が出来るかも知れません。御理解頂けたではありませんか。次に父韻子と作用・反作用の関係にある父韻子の解説に入りにしましょう。

父韻子は父韻子と作用・反作用の関係にあります。御承知の事でありましょうが、父韻イと言います時は、母音のイではなく、ヤイユエヨの行の中のイの事であります。父韻子が「心の宇宙全体がそのまま現象となつて現われ出る意志の力動韻」という事でありましたから、それと反作用をなす父韻イとは「心の全体が現象となつて現われ出て、その現象の形がそのまま持続する力動」と説明することが出来ます。こう説明しましても仲々御理解し難いと思われますので、更に解説を続けます。

先の例にありましたように、「兎角の言い訳は抜きにしても、百パーセント自分が悪かつたと詫びよう」と決心しました。この瞬間の決意の心の力動が父韻子でありました。

その心が決まりますと、その決心は変る事なく、その心の状態は持続します。自分の非を認め、率直に相手に謝るという心は変る事なく続きます。それはあたかも今決意したのと同じ気持です。パツと現われたものがそのまま現われたものの如く持続する動きの韻、これが父韻イというわけであります。

それは次の様にも言う事が出来ます。山の峠への道を喘ぎ喘ぎ登って行き頂上に辿り着きました。着いた瞬間、ハツと息を吞みました。眼を向けた正面に何とも美しい富士山の秀麗な姿が見えるではありませんか。その美しさ、その壮快さ、我を忘れて見とれて暫し呆然たる気持となります。こんな状況はどなたも経験がお有りでしょう。この時、突然眼中に飛びこんで来た美しい山の姿に我を忘れた瞬間が父韻チであります。そしてその我を忘れた感動は暫くの間持続します。この持続の韻が父韻イであります。

父韻キ・ミ (角杙・活杙)

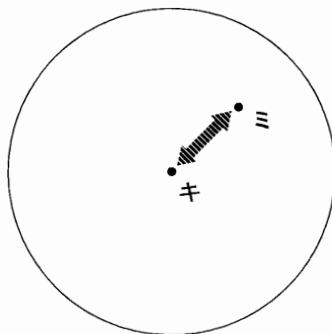
陰陽一組とする四組の父韻の中で、父韻キ・ミの一組は比較的容易に理解し得るもののように思われます。何か起った瞬間に自分の精神宇宙の一部に位置している体験的知

識、信念、希望等々を自らの意識に掻き寄せよう(父韻キ) または反対にそれ等のものに結び付こう(父韻ミ) とする意志の力動韻だと言うことが出来ます。

一般的には右の如く言う事が出来ますが、もっと具体的な説明に入ります。人がある時、何かの出来事に出会うとします。それが何であるか、またはどんな内容を持つのか、戸迷います。

その瞬間、その人は自分が過去に経験した事がある似通った物事を思い起こし、それを掻き寄せて、眼前のものと比較して何であるか、どんな内容かを明らかに

図 124-C



知ろうとします。この記憶の中から現時点に思い付いたものを引張り出して来ようとする動きの原動力となる意志の韻が父韻キであります。この父韻が理解されますと、言霊父韻というものが私達人間の日常生活の中で休む事なく活

動している心の根本要素である事がお分かり頂けるのではないのでしょうか。

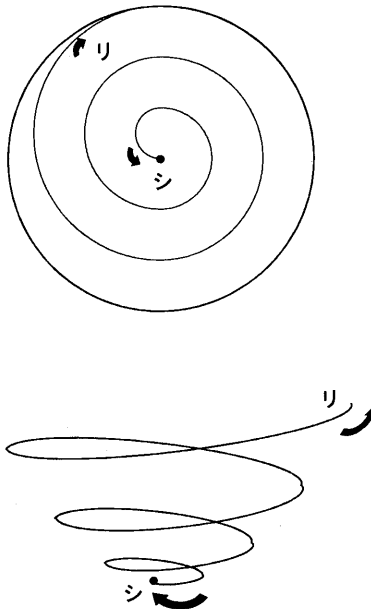
或る記憶を精神界の一点から意識の中心地点に引張って来る動きの韻が父韻キであるならば、立場をその引張られる記憶の方に移して見るとしたら、逆に意識がその記憶に結び付こうとする動きとなる、という事が出来ます。これが父韻ミの働きです。正に父韻キと父韻ミとは作用・反作用の関係にあり、一つの動作の主体と客体の両立場から見ただものであることが明らかであります。(図124C参照)

この父韻キ・ミを示す古事記神話の神名は角杵・活杵です。それは丁度蝸牛かたつむりや蝶の触角の働きに似ているという事が出来ましょう。この触角の対象となる事柄を沢山持っている人程人生の色彩は大きく、多様となりましょう。どの国の国会議員さん達もこの触角を盛んに動かし、地盤・看板・靴を大きく広くすることにひたすら励んでいらつしやるようであります。

父韻シ・リ (意富斗能地・妹大斗乃弁)

この陰陽を成している父韻の内容を古事記の神名から探ることは大層むずかしくなりますので、父韻へ直接アタツ

図 124-D



クすることといたします。図124Dを御覧下さい。平面的に見れば渦巻状に、立体的に言えば螺旋線形に何処までも発展、伸展して行く状態を示しています。人が何か一つの事を考え始めますと、その思いが知らず知らずの内にどんどんと広がって行き、心の中に今迄体験した事、印象を持ったもの等に結び付きながら発展して行く事の経験を誰でも持っていることと思います。この心の中の動きは図の如き渦巻状または螺旋線形によく似ています。この心の中の意識

の動きの原動力を父韻リと言います。

俳聖芭蕉の辞世の句に「旅に病んで 夢は枯野を 駆け

めぐる」があります。真実を求めて芭蕉は旅の一生を過ごしました。そして生が終らんとする時に詠んだのがこの句だと謂われます。死が眼前に迫った時、芭蕉の脳裏に過ぎし日の色々な出来事が駆け巡った事でしょう。そして芭蕉の心の中を駆け巡った体験の記憶はただ何の繋りもなく思い出されたものではありません。その夫々は死の迫る芭蕉にとって一生をかけて追いついた俳句の心と言うテーマに貫かれたものであったに違いありません。俳句本来の心の真実を心の糸車(螺線)として、一生の思い出が心を駆け巡ったに違いありません。この螺線状の現象の発展の原動力が父韻りであります。

意識が心の空間を限りなく発展して行つて、何時の間にか霞の如く忘却の彼方に消えてしまう事がしばしばです。けれど時にはその螺線形の発展の中で、ふとその思いの発展の主要テーマの内容が何であったのか、に気付く事もあります。すると「あゝ、そうなのだ」と連想の輪が瞬時に消えて、心の中心にその連想の主要テーマがしっかりと収まって、心は静かに治まります。この動きは心の螺線状・渦巻状の動きとは作用・反作用の関係になる事は御理解頂けると思えます。この動きの原動力を父韻シと呼びます。文

字通り心がしずまる韻です。

静まり澄んだ心の真実を「悟り」といいます。芭蕉は俳句を通して真実の悟りを追及し、「光」を時には垣間見た事でしょう。「古池や……」の句や、「あらとおと 青葉若葉の

日の光」静かさや 岩にしみいる 蝉の声」の句に証明されます。けれど仏教で寂光または無礙光と謂われる静かな光の中の境地に安住することは出来なかつたのでしよう。辞世の句「夢は枯野を かけめぐる」がそれを表しています。ドイツの詩聖と呼ばれるゲーテが死に臨んで「Mein Licht(もっと光を)」と言ったのと同様ではないでしょうか。連想・想像の繋りとなる螺線状のテーマ、父韻りの動き、これを学問上「理」と言います。御存知でありましょうか。

父韻七・二(於母陀琉・妹阿夜詞志古泥)

第四番目の組である父韻七・二の解説に入ります。

この父韻の理解は比較的容易であります。以前確かに会った事のある人と久し振りに出合いました。「やあ、暫で御座います。」と挨拶をして別れたのですが、何処で会った人なのか、何という名前の人なのか、がどうしても思

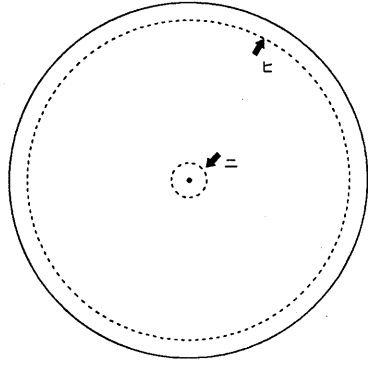
い出せません。思い出そうとすればする程、心の奥に沈んで行く何か大切な宝物のような、または思い出せないと気になって仕方がないような感じで、胸内にもやもやくすぶり

続けます。その何ともどかしい気持が、思いがけない時に一瞬に晴れて、「あゝ、そうだ。三年程前の誰さんの結婚披露宴で偶々お隣の席に坐った花嫁の大学の先生だと自己紹介してくれたA氏だ」と記憶が蘇えます。以上のように記憶が心の表面にパツと鮮やかに浮び上って来る心の動きの原動力が父韻とであります。神名於母陀琉(面足)はその事を指し示す、誠によき「指

月の指」と申せましょう。その面足とは反対に、心の奥に燦るようにもやもやとわたかま蠕くって行く動きの原動力を父韻二といえます。心の内にぶすぶすと燦り続けるのは、実は一つの思いが真実に向って煮につめられている事なのです。十分に煮詰め尽され

たとき、その真実が言葉となって心の表面に浮び上って来ます。神名阿夜詞志古泥あやまことしこぬいとは「あやに賢かどい音ね」を意味し、

図 124-E



父韻二のよき指月の指であり、また父韻ヒとニがはっきりと作用・反作用の関係にあることが理解出来ましょう。

もう二十年も前の事、私は今お話しした言霊父韻の事に専心思いを致しておりました。またその頃、私は月に一度のある研究会に出席していました。出席者が互いに意見を述べ合う会でしたが、その中で一人の人が妙に私の発言に絡んで来るのです。一回だけでなく、次の月もまたその次の月もです。鈍感な私も「これは何だ」と不審に思い、考え出したのですが理由が仲々掴めません。更に二

ヶ月程経ったその会の帰り途で、彼が絡んで来る理由が「彼と私との見方の次元の相違」の為と分りました。その後は何事もなく過ぎたのですが、私にとって有難かった事は、それに気付いた時に、それとは関係がない言霊父韻ヒ・ニの問題が心中に焼き付くように自覚された事です。「何故か」と考えていた数ヶ月、その間に問題は心中で煮につめられていたので

す。煮つまった瞬間に「次元の相違だ」と言葉で理解されました。煮つめられる過程では心にもやもや燦ります。煮つ

まった瞬間心の表面に言葉として完成します。父韻ヒ・ニを知る切掛きしかけを与えて呉た彼に感謝の念を送ったのでした。

(次号に続く)

【収載】第二百二十四号(平成十年十月)

●言霊父韻について その二

前号会報で言霊父韻の内容の解明の意義と八つの父韻それぞれについて詳しくお話ししました。御理解を頂けた事と思えます。八つの父韻の一つ一つの御理解を基礎として、父韻についての次のお話に入ることといたします。前号に掲げました母音・半母音・父韻・親音・子音を区分けしました五十音図を思い出して下さい。五十音図の向って右側に五母音が縦に並びます。向って左側は五半母音です。その双方を取り持つように八つの父韻が横に並びます。この構造はどんな事を表現しているのでしょうか。

音図に向って一番右側の母音は主体を意味します。それに対し左側の半母音は客体です。母音は私であり、半母音はそれに対する貴方であり、その貴方は一人の人間であっても、また社会でもあり得ますし、生きた人間ではなく、物であっても差し支えありません。そしてその主体と客体

を結びつけて現象を生んで行く切掛きしかけとなるのが母音・半母音の間に横に並ぶ八つの父韻という事になります。

そういたしますと、八つの父韻がそれぞれ母音ウオアエの四音に働きかけて生まれて来るウオアエの四段それぞれ横に並ぶ八つの子音の列は、ウ(欲望)、オ(経験知)、ア(感情)、エ(実践智)より現われて来る実際の現象の始めから終りまでの一連の経過を表わしている事と理解することが出来ます。例を引いて説明しますと、言霊ウ段の典型的な現象である商業活動に於て、売手と買手との間の商売交渉の成り行きを示しますし、言霊オ段の学問研究に於て、学者がある研究課題に向い合つてから一つの結論に行き着くまでの研究の全過程を示すこととなります。更に言霊ア段に於ては、芸術家が一つの作品の製作を志してから人々の鑑賞に供するまでの過程でもあり、言霊エ段に於て、人がある事件に対処して、関係する全ての人々が納得する事が出来る処置法を考え出す様相をも示しています。

以上のように言霊イの実際の働きである八つの父韻が母音・ウオアエの四段に働きかけて四つの人間界層の社会現象を生んで行く事となりますが、そこに現われるウオアエの四性能の現象が各自独特の法則を持っている事に気付き

ます。たとえば商売(ウ)の手法と芸術作品の製作(ア)とは同一の論理で語ることは出来ませんし、学者(オ)は必ずしも紛争のよい調停者(エ)とはなり得ません。このように人間性能の次元的な相違は何処から来るのか、と申しますと生命意志の働きである八つの父韻の並びの順序の違いからなのであります。八父韻の並びの順序の違いが人間の四性能現象の次元の相違に表われます。

そこで人間のウオアエの四つの次元より現われるそれぞれの活動の法則の特色をもたらず八つの父韻の並び方の相違についての説明に入ることとなりますが、その前に母音イと八つの父韻について人間の心の構造上重要である二点の事柄についてお話しして置き度いと思えます。

その一つは、母音イの実際の働きである八つの父韻がイ以外のウオアエの四つの母音に働きかけて後天である三十二の子音を生みます。ウオアエの四つの次元宇宙からは後天である現象子音が生れますが、言霊イの創造意志の次元は母音イも八つの父韻も先天構造内の言霊であって、現象としては決して姿を現わす事はありません。この事から次の様に言う事が出来るであります。「心の現象の全て、たとえば言霊ウに属している人間の欲望活動も、言霊オの

学問探究の心も、言霊アの泣き笑いの感情も、また言霊エの道徳心も全ては言霊イの生命創造意志の働きが縁の下の力持ちとして作用することによって可能なのだ、という事であります。創造意志言霊イは万物を生み出す根源的存在だと言うことです。

その二は、宇宙実在である母音イはまた人間の根本智性である八父韻に展開して後天現象の子音を生む原動力となります。宇宙大自然であると同時に人間の根本智性でもあるもの、これが人間という生物の根本内容であります。人間とは母なる宇宙を本質とし、しかも創造の原動力である父なる智性を保持しているもの、神であり人である人、万物の霊長であります。敷衍して言うならば、人間が万物の霊長である根本原理を発見した人々を祖先に持ち、その原理そのものを言語化した日本語を使う日本民族は、万物の霊長たるべき原理を自覚し、その原理を継承・保持して、原理の指示する恒久平和・全民族平等の理想世界を建設する使命に生きる責任を持って、という事であります。

さて本題の八父韻の並び方の説明に入ることになりました。父韻の一つ一つが現象の要素である一つ一つの子音を生む原動力として、心の奥底でパチッと光るとも言うべき

意志の火花であります。その火花が八つ集り、心の底で光ることによって人間の社会的行動をその初めから終了まで削り出して行くのですから、一つの父韻の火花を見極めるより難しいかも知れません。けれど意識のフオーカスを心の底の一点に集めて注意しますと、自ら確認・自知することが出来ます。そのおつもりでお聞き下さい。

人間の心の現象は人間の五つの性能の中の四つの性能の活動として発現します。母音ウ(欲望Ⅱ産業・経済)、オ(経験知Ⅱ学問・科学)、ア(感情Ⅱ芸術・宗教)、エ(実践智Ⅱ道徳・政治)の四次元の行為です。これ等次元の異なる行為は、それぞれ特異な様相で現われ、次元が違えば全くの様相は違って来ます。その各次元の特異性は何に起因するかと言うと、次元それぞれの現象を惹き起す原動力である八つの父韻の配列の違いにあります。そこでウオアエの四つの次元の現象を生むそれぞれの父韻の配列を左に掲げることしましょう。

言靈ウ キシチニヒミイリ(カサタナハマヤラ)

言靈オ キチミヒシニイリ(カタマハサナヤラ)

言靈ア チキリヒシニイミ(タカラハサナヤマ)

言靈エ チキミヒリニイシ(タカマハラナヤサ)

物事の姿は母音アの立場に立って見る時、その姿の実相が最もよく見ることが出来ます。言靈アの立場、禅ではこれを諸法空相と呼び、その立場に立って見る実相の明らかなることを「花は紅、柳は緑」と言って表現しています。それ故、右に示しました父韻の配列の下にその配列から生れるア段の子音の配列を参考のために記しました。八つの父韻の配列の説明には、その配列によって生れて来るア段の現象子音の配列を見ると、一層理解し易いためであります。

最初に言靈ウ段のキシチニヒミイリ(カサタナハマヤラ)の説明から始めることにします。言靈ウの次元宇宙より起る現象は五官感覚に基づく欲望現象であり、それが発展して生れる社会的現象は産業・経済であります。その活動を生じる原動力である八つの父韻の配列を説明することになります。読者御自身がたとえば一商人になり、お客と相対している姿を想像し、そこに動く御自身の心理を観察するおつもりでお聞き下さい。

魚屋さんの店先に客が一人入って来ました。「いらっしやい」と魚屋さんが挨拶の言葉を言います。この店主の「い

らつしやい」の言葉の奥に、一体どんな心が浮かび上つて来るでしょうか。いろいろな事が考えられましょう。けれど最も明らかなものは「この客に沢山の魚を買つて貰おう」の心です。店主自身の心の中から「売ろう」の心が意識にまで「掻き繰る」ように呼び出されます。この心を意識にまで掻き繰つて来る意志の原動力が父韻キであります。次にこの呼び出された「売る」の気持が心の中心にしっかりと根を下したように静まります。「売ろう」・「買つて頂こう」の決意が心の底にしっかりと根を下すこと、これが商売が成功するか、否か、の先ず第一の岐路となりましょう。この決意の静まる原動力が父韻シであります。商売はただ「買つて下さい」の言葉の繰り返しだけではうまく行くものではありません。「売るぞ」という気持が浮付いていては熟練した商売人とは言えません。心の底にしっかりと商売する心が根付いた時、客はその心に惹きつけられます。

「何差し上げましょう」、店主のお客に掛ける次の言葉はこれです。この言葉によつて店主は魚屋としてお客に正面から向き合うこととなります。この言葉の裏で店主の心の中心にどんな事が起つていようか。店主の心はこの時フル回転し、自分のその時までの人生の全経緯を総動員して、

お客の人柄・好み・懐具合等を推測するでしょう。この心の原動力が父韻キであります。そしてこのお客には「こういう心構えで行けばいい」という心積りが心中に出来上ります。これが父韻ニです。

心中に出来上つたお客への心積りの結果(父韻ニ)を踏まえて、「奥さん、今日の鰯がは脂が乗つていて旨いよ」という言葉となります。この原動力が、父韻ヒです。この言葉はお客の心に訴え、結び付きます。父韻ミです。そしてお客の心に訴え、結び付いた言葉の影響力が店主とお客との間の商談の結果へ導く事となります。この原動力が持続韻、父韻イであります。お客が魚を買うか、買わずに帰つてしまふか、どちらになろうとも、魚屋の店主の心は次に来るお客への商売の事に移り、展開して止むことがありません。この原動力が父韻リであります。商売の心構えは以上のように一つ商談が終つたらそれが一先ず完結というのではありません。生々流転して止む事がありません。この事が言盡ウの次元の諸活動の特徴という事が出来ます。

以上、母音ウの次元宇宙に働きかけて現象を生んで行く八つの父韻の配列キシチニヒミイリについて、魚屋の店主とお客の心的交渉を例に引いて説明を致しました。お分り

願いましたでしょうか。魚屋とお客との場合だけでなく、個人と集団との交渉、会社と会社との間、国家間交渉に於きましても、ウ次元の活動である限り、キシチニヒミイリの父韻配列には変りがありません。交渉の人間の心の動きの原動力となる八つの父韻の配列を観察するならば、すべて同一の原理が働いていることがお分りになると思います。またその原動力となる八つの父韻の一つ一つから発せられる精神の力、所謂霊力と呼ばれるべき力と雰囲気を、その人なりの修練によって会得した程度によって（勿論その人は言霊原理を知らなくても）交渉の成否が定まって来ることになりましょう。

このキシチニヒミイリの八つの父韻が母音ウの宇宙に働きかけて、社会の産業・経済の現象を生んで行く状況は、映画のフィルムと映写されるドラマとの関係に似ています。先の魚屋さんとお客との交渉を例にとつて、八父韻配列を説明しました時は、配列の順序と一音一音の父韻の内容を明らかにする為に、店主とお客との間に起る現象の方からその原動力としての父韻を説明することとなりました。それで間違ひはないのですが、一つ言い残した事があります。店主が「いらつしゃい」と言った瞬間から、店主の

心の中に「キシチニヒミイリ」の父韻の配列が商売の心構えとして出来ている、という事です。その場合、店主の心の八つの父韻の心構えは、映画に於ける映写機に納められたフィルムに当ります。そしてその心構えの働きによって店主とお客との間の交渉という映画のドラマが繰り広げられるという事になります。

この様に心の中に一瞬に構成された八つの父韻の配列、それが当事者の行動の心構えであります。その心構えが時の経過と共に現実の出来事（現象）を生んで行きます。言葉を変えて言いますと、八つの父韻が空間を次々に変化させて行きます。この事から「時間とは空間の変化であり、空間とは時間の内容である」という難しい哲学の命題が証明される、という事にもなります。また「いらつしゃい」と言った瞬間、店主の心中にパツと八つの父韻で構成される商売の心構えが浮び現われて来る原動力となる力動は父韻チであり、その心構えの持続によって現実の商売の現象が生み出される原動力が父韻イであるという事も出来ます。

以上で母音ウの次元の父韻の配列の説明を終え、次のオ次元に働きかける八父韻（キチミヒシニイリ・カタマハサナヤラ）の説明に移りましょう。言霊母音オから発現する

人間性能は経験知であり、この性能が社会的に発展した活動は一般に物質並びに精神科学であります。学問と言えば普通この事を指しましょう。ここでは一人の科学者の研究態度を例にとって、その研究の心組みを説明する事にします。

普通の場合、学問研究は一つの疑問から始まります。その時まで真実と一般に思われていた現象間の法則に当てはまらない一つの出来事を発見しました。「あれっ、これはどうしてだ」とその出来事を自分の意識の中心に掻き込んで来る事から始まります、この原動力は父韻キであります。その疑問はその時まで通用している科学の全分野の法則・原理の体系の上に検討されます。父韻チが登場します。そして以前の通説であった理論と、新しい疑問として浮び上って来た現象とを共に満足させることの可能な新しい理論の立場が発見され、それと結びつけられます。この動作が父韻ミを示します。新しい理論は新しい表現の言葉となつて発表され(父韻ヒ)、その理論が次に自覚され(父韻シ)、その理論が「真実」として認められ(父韻ニ)、その後の社会に定着します(父韻イ)。けれどやがてはその定着している理論に対する疑問が起り、八つの父韻の手順は繰返される

こととなります(父韻リ)。

母音オに作用する八父韻の配列キチミヒシニイリの内容は右の様であります、この配列キチミヒシと続く学問の心構え、心の持ち方を哲学で弁証法的思考(Dialectics)と言い、正反合の順の討論形式を基礎とする物の研究方法であります。

次は母音アに働きかける八父韻の配列です。チキリヒシニイミ(タカラハサナヤマ)と並びます。その働きによって起る現象は感情であり、その社会的活動は宗教・芸術となつて現われます。一人の芸術家を例にとってその父韻の配列を説明しましょう。

ア次元に作用する八父韻の働きは先ず父韻チで始まります。芸術家の心が美というものに対して純粹であればある程、その創作活動に自分自身のすべて、全人格を投入します。そうでなければよい芸術作品は生れないでしょう。その活動に全人格を投入する原動力は正しく父韻チであります。投入した全人格の中から自分はこの創作に於て自分の何を表現したいのか、が意識の中心に掻き繰られて(父韻キ)、その目的は如何なる表現方法があるか、が心の中を駆け巡つて検討されます。父韻リの働きます。そしてこの

方法(父韻ヒ)で行こうと決定され(父韻シ)、その方針が心の中に納得されます(父韻ニ)。心の中に表現しようとする目的と表現の方法が明らかに意識されれば、その気持は創作活動中ずくと持続し(父韻イ)、作品は形となって現われて行き、当初の創作の意図に近づき結び付いて行きます。そしてその完成された作品が創作者自身から離れ、独立した存在として鑑賞者の心に訴え結び付こうとする存在となります(父韻ミ)。

以上ア次元に働く八父韻の作用を芸術家の活動を例として説明しました。芸術活動を宗教活動に変えましても、起って来る現象は異なってもその活動の原動力となる八つの父韻の配列には変えることはありません。宗教家の活動を自らの心に想像しながら、読者御自身でその八つの父韻の配列に変更がない事をお試しになって見ては如何でありましょうか。

ここまでに母音ウオアの三つの次元宇宙に働く八父韻のそれぞれの配列について説明して来ました。これら三つの配列を見て気付く顕著な相違について少々お話を置いて置こうと思います。それは三つの配列のそれぞれの最初の父韻についてであります。ウとオの次元に於ては父韻キで始ま

りますが、アの次元ではチで始まることです。この相違は当事者の心構えの如何なる違いを示しているのでしょうか。

次元ウ・オの宇宙に働きかける父韻の初めはキであります。キは先に解説しましたように「精神宇宙(心全体)の中からある一つの記憶または経験を意識の中心に掻き繰って来る韻」であります。この事に示されますように、心の動きの初めから主体と客体が分れています。心の先天的構造の中に意識の萌芽とも謂える動きが起る事、古事記神話の冒頭の文章「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は天の御中主の神(言霊ウ)、……」と示されている人間生命の本体である「精神宇宙全体と、そこより発現して来る主体と客体がまだ分れていない意識の芽(言霊ウ)」の双方共、ウとオの次元の活動意識ではネグレクトされている、という事を示しています。平易に表現しますと、次元ウから起る産業・経済活動と次元オの学問の活動では、人間生命の全人格がそのまま活動の本体となって初動するという事はない、という事が分ります。次元ウの活動の初めの父韻キは「売ろう、儲けよう、……」の意識であり、次元オの学問に於ける父韻キは「従来の説に対する疑問」であります

す。

それに対して次元アの宗教・芸術活動の最初の父韻チは「精神宇宙がそのまま活動となって現れ出る韻」であり、その活動が人間人格全体の感動から始まることです。宗教活動では愛という感動です。愛という経験知識ではありません。芸術活動に於ては美的感動から始まるという事が出来ません。(愛からでない宗教活動、美の感動の感じられない芸術作品がないわけではありませんが。)

第四番目の母音エの宇宙に働く八父韻の説明に入ります。その八つの父韻の配列はチキミヒリニイシ(タカマハラナヤサ)です。この配列は人間の実践智と呼ばれる智性の原動力となる並び方です。実践智は人間社会を創造して行く力でありますが、その最も典型的なものが五十音言霊の法則に基づく古事記の所謂「禊祓」である人類文明創造の原理、八咫の鏡であります。五十音の言霊によって結界された清浄無垢な精神世界を古事記は高天原と呼びますが、その名称はこの実践智の父韻の配列タカマハラナヤサから来ているのであります。

エ次元の八父韻の配列は前のア次元の時と同様父韻チで始まります。アの次元の父韻に於ては、その行為の初めが

人間の全人格の感動である愛の心または美の感動から起ると説明しました。エ次元の行為の初め父韻チも全人格の発動である事に違いはありませんが、エ次元の行為の典型である禊祓で説明しますと、その全人格とは言霊の学問で教えられます人間の心の全景であるアイウエオ五十音言霊図の事となります。禊祓と謂われる人類文明創造の行為の初めは、人間精神の全構造である五十音言霊図が心の中に姿を現わす事から始まります。

次に続く父韻はキミです。キは掻き繰る韻、ミは外に結び付こうとする韻です。そこで父韻キは実践智にあつては眼前の状態を正確に把握することであり、父韻ミは現況を出発点として如何なる状態にまで変化させればよいか、の目標を設定することです。これを言霊学で説明しますと五十音言霊図を鏡として現状と目標との時処位が見定められる、という事です。世の中のどんな出来事にも時と場所と位(次元)が具わっています。この三つがないものは現実のものではなく空想の産物に過ぎません。その出来事は何時、如何なる環境に於て、五つの人間性能の中のどの次元で起っているか、が確かめられます。以上父韻チキミが確かめられますと、父韻キによる現況から父韻ミによる

目標に導く事が出来る言葉が定まります。これを可能にするのが父韻ヒです、

以前、「古事記「褌祓」の説明の時、アル中患者に対する医者態度を例に引いた事がありました。若い時の心の痛みを癒し切れないで、朝から晩まで酒を呑み、高血圧症状が続くアル中患者に対し医者は「酒を止めろ」の一边倒であります。これは実は治療をしないのと同じです。アル中の患者が少しでも酒量を少なくしようと決意するキツカケを与える言葉が医者に要求されているのです。実践智チキミヒの言葉とはそういう言葉を生む英智の事です。言霊図に照らして現況と目標との時処位が明らかにされれば、自らの言葉は生れて来ます。人にはその能力が生来具わっているのです。

その英智の言葉が生れ出て来れば(父韻ヒ)、その影響力は現況を大きく動かし(父韻リ)、行動の中心課題が定まり(父韻ニ)、活動が持続して目標に向って変化して行き(父韻イ)、遂に目標に到達し(父韻シ)満解決となります(父韻シ)。

次元エに働く父韻の配列の説明は以上の様であります。が、実はこの父韻のチキミヒリニイシの配列の心構えは現代人にとって最も体得の難しい事柄と言っても過言ではあ

りません。この次元に求められる言葉とは、単に「現状の説明」ではなく、また「目標への激励」でもありません。現状と目標の双方の時処位の内容をよく理解しながら、双方の説明ではない言葉、現状から目標に確実に到達させることが可能な権威ある言葉のことです。そして、その心構えを可能にすることが五十音言霊学の最終的な目的でもあります。

以上ウオアエの四つの次元から現象を起す原動力となるそれぞれの八つの父韻の配列について説明をしました。御理解頂けたでありましょうか。何分にも、父韻とは頭脳の先天構造内の言霊であり、意識で捉えることの出来ないものであります。でありますから、その内容についてどんなに解説を勞しましても所詮は禅でいう「指月の指」に過ぎません。「あれがお月様だよ」と指差すその指をいくら凝視しても、実際の月を捉えることは出来ません。同様に父韻に関する説明の理解だけでは父韻の把握は不可能です。説明を案内役として、読者が御自身の心の内に閃く創造意志の火花を捕捉し、内観して頂き度いと思えます。

最後にウオアエの四次元に働く八つの父韻のそれぞれの最後の父韻の相違についてお話しします。言霊ウとオの次元

の父韻の終りは父韻リです。父韻リは心の宇宙の中に螺旋状に発展する韻です。それ故父韻リで終る言靈ウ・オの活動は全て一つの行為の終りが次の動きの始めとなる限りない流転の相を表わします。商売の活動や学問研究の仕事の中にその消息を明らかに汲み取る事が出来ず。ア次元の父韻配列は父韻ミで終ります。父韻ミは対象に結び付こうとする韻です。ア段の行為の宗教・芸術の全身全霊の行為も、結局は客体に「訴える」だけで結果はその客体の受取り方如何にかかっています。エ段の実践英智の行為だけが父韻シで終り、一つの行為が主体的・客体的に円満に完遂され、大団円で終ることが出来る唯一の智性であり、哲学的に謂う至上命令の言葉、真実の「権威」(御稜威)の行為であります。

【収載】第二百二十五号(平成十年十一月)

●言靈学とは

今月号のテーマが「言靈学とは」だと聞くと、「今更何で……」と思われる方もいらつしやるかも知れません。言靈の会からは言靈の学問の本が三冊発行になっていますし、毎月発行の研究會報は今月で百二十六号を数えるのですか

ら、そう思われるのも無理ない事なのかも知れません。言靈学が人間の心と言葉に関する学でありますから、広い意味では人事百般人間の心の営みの全てに関係した学問だと言っても言い過ぎではありません。その為に言靈学を学ぶ人の中にはともすると「木を見て森を見ず」の勉強態度に陥る心配もある事となります。出来れば成る可くそうならぬ様に、筆者が普段ふと思つた事、成る程と感じた事などを思い付くままにお話して見ようと思います。

古い歌集である「万葉集」に「言靈の……」で始まる歌があるのを御存じでしょうか。それは万葉集二五〇六番です。

言靈の八十の術に夕占同占正に告る妹はあひ寄らむ

また日本の国のことを古くから「言靈の幸倍ふ国」と呼んでいる事などを考えますと、言靈という言葉、また言靈の学問(これを古くは布斗麻邇または太占と呼びました)が私達現代人の想像する以上に古い昔からあった事が理解出来ます。初めて聞かれる方には直ぐには信じ難いでしょうが、言靈の学問(布斗麻邇)は今より少なくとも八千年の昔、私達日本人の祖先達の弛まぬ長い長い研究の結果として発見・完成された人間の心と言葉に関する精密な学問であり、

私達が現在使用している日本語の語源となった学問なので
す。

その言霊やその学問である布斗麻邇(太占)を現代の国語
学はどの様に解釈しているのか、を因みに国語辞典で調べ
て見ました。すると「言霊」ことだま。言語に宿る神霊。
言語の靈妙な働き。わが上代人が言語を神聖化して呼んだ
称」とあり、また「太占」ふとまに。神代に行われた一種の
占法。鹿の肩骨を焼き、その裂けた文あやによって吉凶を占つ
たものという」と書いてあります。

右の現代国語学の言霊や布斗麻邇の解釈を受けて、多く
の知識人が言霊の意義についての私論を発表するようにな
りました。言霊論は現在静かなブームとなった感がありま
す。けれど当言霊の会が紹介申上げる言霊学をひとたびお
聞き下さった方々は、その言霊布斗麻邇が現代人の知識で
は到底想像もつかない精神的な広さと深さを持った人間の
心と言葉に関する究極の学問であることにお気付きになる
ことでしょう。その言霊学は人間の精神機能のすべてを解
明し尽した学問であり、その原理によって日本の大和言葉
が制定され、古代の日本を初めとして全世界の社会制度が
創造され、人類の輝かしい精神文明の五千年の長い間の平

和が保持され、今より約三千年以前、故あってその精神原
理は方便のために人類の顕在意識の表面から忘却・隠没さ
れ、今より百年以前、明治時代に人間の潜在意識の底から
再び蘇がえって来て、つい最近になって古代にあったと同
様の姿に復活・解明された学問であることを御理解頂ける
でありましょう。当会がお話する言霊学は現代人の私的解
釈を一切含みません。日本に昔からあった日本伝統の言霊
布斗麻邇をただ現代の日本語によってお話し申し上げてい
るものであります。

言霊布斗麻邇の原理によれば、人間の心を反省・内観し
てもうこれ以上分けることが出来ない所まで分析すれば、
そこに心の要素五十個を発見します。それ等五十個の要素
にアイウエオ五十音の清音を一つづつ結びつけ、それを
言霊ことたまと呼びます。言葉であると同時に心であり、言葉の最
小要素であると同時に心の最小要素でもあるもの、即ち言
霊です。ですから人間の心は五十個の言霊で構成されてい
るといふ事が出来ます。

次に言霊学は五十個の言霊をどのように操作・整理・活
用するかの方法を教えて呉ます。そしてその典型的な言霊
の操作・活用の仕方もう丁度五十あることが分ります。五十

個の言霊と五十の操作法合計百の原理、これが言霊の原理であり、五十音言霊布斗麻邇であります。百の原理の最終結論として人間の心の持ち方、理想の精神構造が発見されました。それが信仰の対象として天照大神といわれる神であり、象徴する器物としては八咫やたの鏡といわれ、人間精神構造で言えば天津太祝詞ふとりのり五十音図であります。

更に私達の祖先はこの原理・法則に則つて事物に名前をつけ、日本語の元である大和言葉を制定し、言葉の真理内容そのままに健康明快な社会を創造・建設して行き、数千年にわたる豊穡で平和な人類の精神時代を現出させました。またその精神原理により人類歴史の永遠の方針を決定し、その経緯は今日に到るまで人類の頼るべき唯一の歴史創造の鏡として人間の心の底に脈打っているのであります。

人は自分の心を他の人に伝える時に言葉を使います。それだけではありません。言葉を発する以前、行動を開始する以前にも言葉で考えます。頭の中を言葉が駆け巡っています。また言葉を言わず、手足を使って行動している時も、その行動は頭の中の言葉の命令に従っています。そのように、人は言葉によって生活し、生きているという事が出来

ます。言葉は生きています。生きた言葉を構成している「言葉の言葉」である言霊も常に生きていて、人間の生命の営みを支えています。としたら、その言霊ことたまは心の何処に宿り、何時働いているのでしょうか。今回は主としてその事についてお話することにしましょう。

言霊は人の心の何処に存在しているのでしょうか。広い視野で見ると、人間の身体は大きな宇宙の中に住んでいます。これは紛れもない事実です。とするなら、人間の心は精神宇宙の中に住んでいるという事が出来ます。精神宇宙とは人が心を内に省り見て内観した広い心の領域の事です。言霊学はこの心の宇宙が次元を異にする五つの宇宙から成立っていると指摘します。もう少し説明しますと、異なる五つの宇宙がただ並んで存在しているのではなく、一つの宇宙が終った所から、その宇宙を含んで次の宇宙が始まる次元界層を成した宇宙だという事です(図126・A参照)。言霊学はこの五つの宇宙に五十音図の五つの母音ウオアエイを当てて命名します。人の心が住むいえ宇宙が五重である事から住家の事を「いえ」と言います。家の語源です。こ

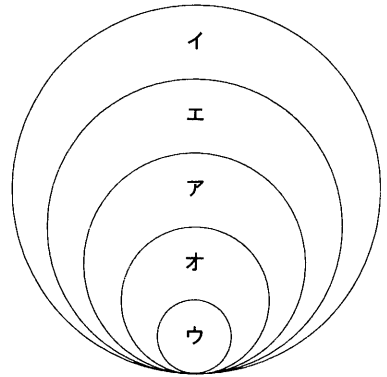
れら五つの母音宇宙から人間天与の五つの異なった性能が発現して来ます。

人間に付与された性能はこの五性能が全てであり、これ以外にはありません。

心の中の言霊の所在を明らかにするために、ウオアエイの順で重畳する五つの宇宙を順に説明しましょう。最初のウの宇宙（これを言霊ウといいます）

から発現する人間性能は五官感覚に基

図 126-A



づく欲望性能です。赤ちゃんは生れると先ず母乳を吸います。食欲という性能です。生長して行くにつれて色々な欲望が出て来て、遊びたい、美しい服が着たい、良い学校に

入りたい、金が欲しい、高い地位・名誉が欲しい……等々、欲望に限がありません。この性能から社会的に各種の産業

・経済活動が起つて来る事となります。この欲望性能だけで心の独立した領域（宇宙）を成立させている事を御理解頂けると思えます。言霊学教科書である古事記上つ巻はこの事を「独り神に成りまして……」と書き示しています。

次の次元宇宙は言霊オの宇宙です。ここから現出する人間性能は経験知であります。前の宇宙から現われて来る五

のが一般に学問と言います。人文科学や物質科学は全てこの分野のものです。

経験から得られる知識は人生の営みにとって重要なものである事に間違いはありません。けれど人間の知恵とはこの経験知だけだ、と断定しますと、そこに落とし穴が待ち構えている事になり兼ねません。経験知が成立つのは必ず一定の概念、謂ば観察の尺度に依っています。観察の基準となる尺度が違えば、経験の結果は全く別のものになること、ともすると世の中の矛盾・争いはこの懸命に集めた経験知の相違から生じて来ます。経験知とは聖書にいみじくも書かれて「禁断の木の実」でもあるのです。

官感覚に基づく欲望の行為の記憶を集め、二乃至多数の経験間の因果関係をその時々のある概念によってまとめて行く仕事です。あの時甲という事をしたら乙という結果が出た。同じ因果関係の事が何度も起る。その原因は何か、と考える仕事です。ここで得られる知識を経験知と呼びます。この人間性能から生れて来る

第三番目の言霊アの宇宙から発現する人間性能は感情であります。感情は第一の欲望性能とも第二の経験知性能とも相違した、それだけで独立した人間性能である事はお分り頂けると思います。この次元界層より現われて来る社会的活動は宗教・芸術活動と言えましょう。「ア」の感歎詞は崇高なもの、美しいものに感じた感情の発露のものであります。アの音は国際語であり、阿弥陀、アーメン、アラ、アノインテッド等がそれを表わします。また第一の欲望性能と第二の経験知性能が人間の意欲と作為によって促進され得るのに対し、この第三の感情性能以上の性能が人為の作為・意欲のままになり難い性能であることに御注目願ひ度いと思ひます。

第四番目の言霊エの界層宇宙より発現する人間の性能は実践智です。人間にこの性能がある事、またこの性能の内容をよく知っている現代人が誠に少ない事を知らなければなりません。実践智は第二の経験知と混同し勝ちでありませんが、全く違う性能です。実践智とは、人間が何事かに遭遇し、それに対処して行動を起そうとする時、第一の欲望第二の経験知、第三の感情の三つの性能をどの様に塩梅あしはらし一つの行為としてまとめて行くか、の選択をする知恵のこ

とであります。従来この知恵にたけた人を世馴れた者と呼びました。世の中の知識を沢山持っている人の意ではなく、世の中の出来事に対処するのに才能を発揮する人の意であります。この実践智に敵たる法則のある事を知る現代人は誠に少ない、と言えましょう。この性能が人間に付与されている事、またこの性能の内容を知る人が少ないとは言つても、現代人には他の性能と同様に生れながらにこの実践知性能は付与されており、無自覚のうちにその性能の恩恵の下に生活を営んでいる事に交りはありません。けれどもこの性能を付与されている事の自覚がない為、この性能の恩恵をよりよく、より大きく受ける為にはどうしたらよいか、の訓練、教育が学校でも社会に於ても何もなされていない事となります。若し第二の経験知の性能の存在の自覚がなく、その為のに学問の教育、訓練が学校や社会でなされていないとしたら、世の中はどうなるでしょうか。考えただけで空恐ろしい事でしょう。けれどその恐ろしい事がこの第四の実践知性能に關しては全く自覚されていないのです。世界的に、国家・社会的に、また各個人の家庭で、人々は繁栄の中の混乱・苦悩の中に生きなければならぬのも当然の事であります。

次に最後の次元、第五界層宇宙言霊イより発現する人間性能は意志、または創造意志であります。この意志という人間の性能は今迄お話して来ましたが第一より第四次元までの人間性能とは趣を異にしている事に御注目下さい。と言いますのは第一より第四までの人間性能の行為が現象として人間意識で捉える事が出来るのに対し、第五の意志という性能は、確かに機能として認めることは出来るものの、現象としては意識で捉えることの出来ないものです。現象として捉え得ないものなら無いに等しい、取るに足りないものか、という決してそうではありません。それどころか、この意志性能というのは縁の下の力持ちの如く、他の人間の四性能を下支えしてそれぞれの現象を現出させる根本性能であります。人間が欲望を起すのも、経験知として好奇心に駆られるのも、感情の波が起るのも、また迫って来る出来事に対して実践智を頼んでよい結果を得るよう努力するのも、一にかかってこの意志、生命意志有つてのことなのです。現象として行為の姿を現わす事はなくても、意志性能は万物を生み出す根本性能であります。

それならこの意志性能が心の中でどの様にして他の四性能を発現する原動力になるのか、そのメカニズムは意志性

能の実際の働きとなる八つの言霊父韻(チイキミシリヒニ)の話に移らねばなりません。今回は省略させて頂きます。ただ今お話ししました四次元より現出して来る現象(それが世の中の精神現象の全てなのですが)を生み出す根源となる第五界層宇宙(言霊イ)に五十音言霊は整然として存在しているのではありません。言霊イの宇宙に視点を置いて人間の全精神現象を見る時、その現象は五十個の言霊の素晴らしい合理的な活動として捉えることが出来ます。言霊の生命創造意志の宇宙領域にはこの五十個の言霊だけが存在し、それ以外のものは存在しません。言霊イの宇宙は五十音言霊が五十通りに動く百の原理・法則の支配する理路整然たる精神世界であります。理論的にこの世界を古神道言霊学は高天原と呼んでいます。またこの第五生命性能の五十音言霊の原理に基づいて第四の実践智を働かせて世界文明創造の経綸の仕事を推進する日本の政庁をも高天原と呼びます。

以上で今回のお話の主要テーマの一つである五十音言霊とその原理(布斗麻邇)は何処(空間として)に存在するか、の解答が出ました。次に五十音言霊は何時(時間として)働くか、というもう一つのテーマのお話に移ることに

しましう。

「老人は過去に生き、少年は未来に生きる」などと謂われま
す。一生の晩年になって老人は昔の元氣だった少年・青年
の頃を思い起し、追憶の日々を過ごします。反対に少年は
早く大人になり、思う存分自分の希望に向って突進して見
たいと夢見ます。けれど過去を懐かしがるのも、未来を夢
見るのも実は現在ただ今なのです、とするならば、言葉に
よって、言い換えると言霊五十音の活動に於て人間は生き
るので、五十音言霊は現在、ただ今の時に活動する
のだ、という解答が「言霊は心の中に於て何時働くのか」に
対して始めから出された事になります。

極めて常識的には問題の解答はそれで済んだ事になるか
も知れませんが、実は人間生命活動に於ける「時間」という
ものは、それ程簡単には済まないものがあります。もう少
し「今」というものの内容に立ち入って調べて見なければな
りません。

禅宗無門闕という書物の中に「過去心不可得、現在心不
可得、未来心不可得」という言葉があります。過去に起っ
た心はもう過ぎ去った心であるから「それはこれだよ」と示

すことは出来ない。現在思っている心、と言っても、その
現在は一瞬々々過ぎ去って行き、捉える事は不可能である。
また未来の心と言っても、未来は文字通りまだ来ていない
ものであるから、これも捉えて「これだ」と示すことが出来
ない、という意味であります。過去も現在も未来も捉える
ことが出来ないのだとしたら、五十音言霊が展開し、活動
する「今」とはどう考え、どう設定したら良いのでしょうか。

言霊学の唯一の教科書である古事記上つ巻(神代卷)の冒
頭の文章は「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名
は、……」と始まります。この「天地の初発の時」を現代国
語学の常識に従って「太陽や月や星また地球がこの宇宙に
出来上った時」という天文学や地球物理学の主張している
通りに受取ったなら、古事記上つ巻は単なる神様のおとぎ
話に終わってしまうでしょう。けれど古事記の撰者太安万侶
の書いた「天地の初発の時」とは、皆様が已に御承知の如く、
人間の心が何かを起そうとし、言葉を発しようとするその
瞬間の今、此処の事を言っているのです。その事に気付いた
時、初めて古事記の教える五十音言霊学が理路整然たる
学問体系として現われ出て、私達の理解を得ることとなり
ます。その人が何か発想が始まる瞬間、それが此処であり、

今であると言う事が出来ましょう。この今を無門関は更に「一念普ねく観ず無量劫、無量劫の事即ち今の如し」と言っています。西洋の哲学者スピノザは「永劫の相」と表現しました。それは言葉が始まろうとする瞬間です。古神道はこの今・此処を「中今」(統日本記)と呼びます。

現代人の常識では時は過去より現在へ、現在より未来へ流れて行くものと思われています。けれど生命活動の真実では、永遠の今以外には存在しないのです。ですから生命活動の担い手である五十音言霊は何時働くのか、それは正しく今・此処であります。五十音言霊はその中今に、一瞬の中今に展開していて、その活動によって全ての現象、所謂森羅万象を生み出します。

古事記神代巻の冒頭の文章をもう一度引用しましょう。「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天の御中主の神。次に高御産巢日の神。次に神産巢日の神。この三柱の神は、……。」かくて「天地の初発の時」と古事記が教える「中今」に次から次へと天の御中主の神(言霊ウ)より火の夜芸速男の神(言霊ン)まで五十柱の神々、言換えれば五十個の言霊が登場します。この五十個の言霊が今・此処である中今の内容であります。そしてこの五十個の言霊の

活動によって私達人間の意識で捉える出来事、一切の現象が生れ出て来ますが、その活動の典型的様式をも古事記の神話は事細かく教えて呉れます。五十音言霊と五十通りの言霊の動き、それが言霊百神の言霊原理であります。言霊五十音が存在する次元(言霊イ)が実際に働く処、それがイの間即ち今であります。

以上が言霊は何処に存在し、何時活動するか、の二点に対する解答です。御理解頂けたでありますようか。今回のテーマのお話の最後に「中今」の自覚についてももう少しお話ししましょう。

言霊は「天地の初発の時」即ち今・此処である「中今」に働くのだ、という話をお聞きになり、「成程」と御理解頂きましても、その理解は飽くまで知識としての理解であって、実際に御自分の心の中でその瞬間を「これだ」と確かめられたのではない事もお分かり下さる事でありましょう。事実この永遠にして一瞬の今を手取るように確実に捉える事は仲々難しく、幾百千の昔からの宗教書の目的の大半がこの「中今」の自覚のための修業法の解説にあつたと言つても過言ではありません。

天台宗比叡山の荒行「千日廻峰」を達成し大阿闍梨の僧位

を授かったお坊さんの事がテレビで有名になりました。人間の力の極限を超えるような荒行の末に何を会得するというのでしょうか。その目的は正しく今回のお話のテーマの一つである「今」の自覚なのであります。聞く所によると、千日廻峰の行とは、千日間一日幾十キロと比叡山の山道を駆けるが如く歩き、その満願の九日間は食はず、吞まず、眠らず、横にならず、お経を称え続けるのだそうです。社会人では想像の出来ない荒行は当然人間の持つ気力と体力の限界を覚らざるを得ない事となります。すると限界を己に越えながら更に生きてお経を称える事が出来るのは、自分(自我存在)を超えた大きな力が存在することを自ら知らされる事となります。それは常に怠け者で力弱く、無知で、また無知なる故に取るに足らない事を自慢して得々としてゐる小さな小さな自分を知ることであります。生かして下さる大きな宇宙、仏教の所謂大慈大悲の阿彌陀仏のお蔭によって生きる芥子粒の如く小さい存在の自分を知ります。すると自然に自我という視点が大きな宇宙という視点に移行します。無限に大きな視点から無限に小さい自分を見る時、自分の一挙手一投足が動こうとする一点、瞬間の一点をはっきり見、また聞く事が出来ます。人間の言葉が発せ

られようとする瞬間、行動が開始されようとする瞬間の一点を指で指し示す如くに明瞭に捉えることが出来ます。一瞬々々変つて行く現象の中に視点を置くのではなく、現象を生み出す元の宇宙の眼で見ることによって、今を捉えることが出来ます。これが「今」を見、聞くという事であります。人の力の限界に挑戦する宗教修行の目的が「今」の自覚であること、とは以上のようにあります。

右のように僧侶の荒行などを例にとつてお話ししますと、社会の中で普通の生活をしている私達には到底不可能な行であると思われ勝ちです。けれど千日廻峰などの荒行は、昔、仏教の末法時代を迎えようとする時、天台が、末法のさ中にも仏の慈悲の心を知るための究極の手段として工夫されたものです。末法から仏の所謂正法の実体である布斗麻邇の原理が復活して来た現在では、「今を知る」事は修業の目的地ではなく、真理へのワン・ステップに過ぎなくなりました。家庭に居て毎日、一日の中の僅か三十分か一時間、自分自身の姿を素直に、はっきりと見ようと努力によって「今」を自覚することが比較的容易になりました。「こういう人になろう」、または「こういう人になることが出来たらなあ」という目的の自分ではなく、現在生き

ている自分のそのままの姿を見ることによって、それは可能です。

えています。

【収載】第二百二十六号（平成十年十二月）

（終り）

自分の欲望性能（ウ）と一所懸命集めて来た経験知の努力では、一生かかっても自分自身を幸福にし、社会や世界の平和を築くことなど不可能であり、それは今の時代にあつては自分も世界も地獄に堕ちるより他ないのだ、と見極めるならば、その小さな小さな自分であるのに気付く事でしょう。その時、その小さい芥子粒の如く小さい自分が大きな宇宙（仏・神）の愛の中に抱かれており、自らの一挙手一投足の、瞬間が正しく言霊五十音が躍動すると説かれる「今・此処」であることを自覚し、その自らの行動がそのまま聖の皇祖皇宗の人類歴史創造の経綸の中にあることを心の底から知ることが出来るであります。

その一瞬々々の行動決定を司る五十音言霊（霊）の光（靈駆り）は小さい自分自身から発せられているのであり、その光によって人類の歴史が創造されており、人とは創造の主人公であり、創造の瞬間が実は宇宙の中心なのだ、と言う事を改めて自覚することになります。

天地の初発の時、高天原に成りませる神は「天の御中主の神、即ち宇宙の中心にいます主人公の神」と古事記は教

平成十一年

●伊耶那岐の大神

伊耶那岐の大神という神名は、古事記の神話がクライマックスに達する「身禊」の章の初めに「こを以ちて伊耶那岐の大神の詔りたまひしく、『吾はいな醜め醜めき穢き国に到りてありけり。かれ吾は御身の祓せん』とのりたまひて、……」と、現われ出て来る神名であります。「身禊」の章以前には、この神の名は伊耶那岐の神または伊耶那岐の命と出ており、「身禊」の章に入つて突然に伊耶那岐の大神と「大」の字が加わるのは何故か、が問題となります。

この問題については言霊の会の書籍「古事記と言霊」の中でその理論上の意義について詳しく説明をして来ましたが、今またそれに附け加える事はないのですが、その理論的な説明が人間の実際の活動の中に、どの様な形で現われて来るのかについて、今回のお話しを進めて見たいと思います。

身禊と古事記にあります事が「吾はいな醜め醜めき穢き国に到りてありけり。かれ吾は御身の禊せん」などと書かれておりますから、それを文字通りに受けて、自分の身体に溜まった罪穢を祓う事だと思つて、現在の神社神道に見られます様に水を浴びたり、滝に打たれたりする所謂

「修祓」の事と考えられ勝ちであります。

けれども五十音言霊布斗麻邇の原理によって精神文明を創造していた太古の世界にあつては、全くその内容を異にしていました。古事記の身禊とは、人間個人の罪穢の払拭のことではなく、個人的な精神的な罪を己に払つて清浄な心の聖霊知りりが、世界中に次々と起こつて来る黄泉国(よもつくに)即ち外国の出来事を自分自身の出来事として受けとめ、それらの出来事を五十音言霊の鏡に基づいて摂取消化することによって、世界の文明の歴史を創造して行く高度な政治の事なのであります。

この身禊(禊祓)の作業を遂行するに当って、言霊布斗麻邇の神である伊耶那岐の神は神格を伊耶那岐の大神と変化させることとなります。神格の変化などと言いますと、何だか人間社会とは直接には関係のない事のように思われる方もいらつしやるかも知れませんが、実際にはそうではありません。喩えて言えば、一国会議員が衆議院で指名されて総理大臣になるようなもので、人も名前も変わりませんが、総理大臣に指名されると同時に、毎日の仕事の内容、権限、責任、心構え等が一度に変わるのと同様であります。伊耶那岐の神は伊耶那岐の大神となる事によって、純主体である

自分が純客体である伊耶那美の神をも包含した一者として、言い換えますと、精神の全構造である岐の神が、客体である純物質構造をも合せた宇宙全体の総責任者として、歴史創造の任に当る地位に立つ事となります。この地位に立った歴史創造の仕事は古事記は身禊と呼ぶのであります。

以上、「古事記と言霊」の伊耶那岐の大神の身禊の内容について復習をいたしました。理論は矢張り概念的で、その作業の内容は今一つ掴み切れない所があります。そこでその活動が人間のする仕事として実際にどの様な形となって現われるのかを具体的に明らかにして行く事の話に入ることにしてしましよう。

伊耶那岐の大神という神名が示す人間精神の内容がどんなものであるか、を明らかにする為に、人間が自分自らに与えられている諸性能の中のどの段階までを自覚しているか、に依じて一つのものに対処する心構えがどの様に変って行くか、の比較を試みることにしようと思ひます。

昆虫の蝶の生命は三段の進化(メタモルフオーゼ)をします。幼虫から蛹、次に蝶となつて飛び立つ三段階の進化です。それに比べて人間の精神生命の自覚には五段階の進化

が考えられます。言霊母音で表現しますとウ↓オ↑ア↑エ↓イの五段階進化であります。ただ両者の進化には際立った違いがあります。蝶の進化は大自然の恵みによつて時間の経過と共に自然に幼虫↓蛹↓蝶と変様して行きますが、人間の自覚の進化は自らが進化しようと思ひ、努力しなければ進化が一生起らないという事であり、以下人間が「人間とは如何なるものか」の自覚の進化を順を追つて説明し、それぞれの進化段階に於て人間の物事に対処する心構えが如何に変化して行くかを調べる事にします。

人間精神の進化の初段階は言霊ウであります。五官感覚に基づく欲望の追求が人生唯一のものと考えられる段階です。そして一生をこの欲望追求だけが人間唯一の仕事として過す人が社会の中で大多数を占めると言う事が出来ましよう。これ等の人にとって他人とは、社会とは「自分の利益追求のためには、どう付合つて行つたら得策か、どう利用したらよいか」という事に限られます。つまり社会とは自分の利益を得るための競争場裡なのです。その人が商人だとしたら、親切も笑顔も結局は自分の利益のための手段という事となります。

この社会の人が若し何処かで欲得なしで人を助けたり、

手を貸したりする事があれば、それは「仏心が起った」と言われるでしょう。まして自分自身の心の領分を越えた世界、例えば「地球温暖化に如何に対処すべきか」とか「原水爆の脅威を無くすために人はどう考えねばならぬか」等の事柄に対しては、全く関心の外の問題であり、「俺とは関係ないよ、誰かお偉方がその内に何とかして呉れるだろう」で済ませてしまいます。全く眼前の事以外に関心を持つ事がないのです。

これと同じ事が永田町に集まる国会議員さんや、ニューヨークの世界各国の国連大使の方にも言えるのではないのでしょうか。彼等は国民の為とか、世界平和の為とか言いながら、腹の中はすべて自己または自国の権力の増大が主要目的なのです。自分の欲望の立場からの「国」であり、「世界」であり、それ以上の思考からは断絶させられている人達なのであります。言霊ウの立場から見た国や世界は結局自己欲望追求の道具に過ぎないのです。

人間の精神進化の第二段は言霊オの経験知であります。初段階の欲望追求によって生じる諸現象間の因果関係を研究する段階です。現象を観察するには「観点」が、即ち立場が必要です。見る立場が違えば出来事の受け取り方も違っ

て来ます。一つの花瓶を買うにも一人は「色がよい」と言い、また一人は「形が素晴らしい」と言い、次の一人は「値が高すぎる」と言います。時には論争になりかねません。

この段階の人が出来事に対処するとなると、先づ、状況・人物の観察から内容の分析にかかります。そして自分なりの結論を出し、その結論に沿って事態を収めようとします。出来事には相手がいます。相手が承服しないと、自説を押し付けるか、論争になるか、また時には手を引く事となりましょう。何か困った事が起って、兄弟や親戚に相談することがあります。その対応に三つの種類があります。「口は出すが、金は出さぬ人」、「口も出すが、金も出す人」、「金を出して、口は出さぬ人」の三種です。時とすると、「口も金も出さぬ人」もいます。逃げたのです。これ等の対応の仕方の中にはその人の心の進化過程がはっきり分って来るではありませんか。困って相談した本人にとっては、どれが最も有難い事になりましょうか。

読者はバグオツシュ会議というのを御存知であります。うか。敗戦から暫らく経った頃、世界の大国の間で原水爆製造競争が起り、それに対し原水爆禁止の反対運動も盛り上って来た時でした。世界中の知識人中の知識人と目され

るノーベル賞受賞者や宗教者等がカナダのバグオツシュという町に集り、世界の平和を考える会議を開いたのでした。確か日本から湯川秀樹博士が参加したと記憶します。会議の結果、「このまま原水爆製造と実験が推進されるならば、やがては人類全体の生存を脅かす重大な事態が来るであろう」というバグオツシュ宣言が全世界に発表になりました。まさに世界人類の生存に対する脅威となる事を指摘する原水爆製造・実験への正式な警告の第一声となりました。

第一回のバグオツシュ宣言は世界の種々の問題・状況の精密な分析に基づく正当な警告として世界の人々に受け取られました。けれどそれは警告にはなりませんが、原水爆を絶滅して全人類の生命を保証する世界政治を実現するための将来の詳しい計画と手段を提供することは出来ませんでした。残念ながらそれは已むを得ないものでありました。何故ならどんなに高名な知識人であっても、知識人が他人に、社会や世界の問題に対処する根拠は人間精神の進化の第二段階である経験知識なのです。経験知識は、それが如何に精密なものであっても、過去にあった現象と状況を捕捉することは出来るでしょうが、生きている人間社会の未来の計画と予測は能力外の事なのです。知識は将来を決定

する力は与えられてはいません。バグオツシュ宣言は真摯で勇氣ある警告ではありましたが、第一回宣言より現在までの数十年間、世界の事態はその宣言の希求する所とは正反対の最悪の経路を辿りつつあると言わざるを得ません。問題は人類精神の進化の第二段階での解決が不可能であることを示しています。

人間精神の進化の第三段階は言霊アの感情の世界であります。この世界は純粹感情として宗教や芸術の心が表出して来る根元の宇宙でもあります。芸術に於てこの宇宙を自覚すれば、美しいという事の根源を掴むこととなり、宗教に於ての自覚は「空」とか「救われ」と謂われる諸々の現象（欲望や経験知等の現象）が生れ出て来る元の宇宙を把握することとなります。諸現象が言霊子音の世界とするなら、それ等が発現して来る元の宇宙は言霊母音の宇宙であります。

精神の宇宙を心に自覚出来た人は、神とも仏とも呼ばれる宇宙全体の慈悲や愛に包まれ、育まれていた自分、また同様に他の人々をも神の子、仏の子と思ふ様になります。そして人には神の心、母の心で接しようと心掛けます。神には懺悔と感謝を捧げ、人には愛と慈悲の心で接します。

その人の行く所、人は喜びを感じ、その人と接する時、人は心を和ませます。そしてその人は個人を越えた世界の問題(世界平和、原水爆禁止、教育振興、地球温暖化防止、大量飢餓救済、麻薬撲滅等)に対しても「地球上の一人一人の人間が愛と慈悲の神仏の心を持つようになるならば、人類的な大問題も必ずや解決されるに違いない」と信じています。

果たしてそうでしょうか。釈迦生れてより二千七百年、イエス・キリスト生誕二千年、愛と慈悲の言葉は絶え間なく叫ばれて来ました。幾千万の宗教団体が個人救済に務め励んで来ました。二、三千年にわたる宗教的な愛と慈悲の運動の下に世界は現在、人類全体が生存の危機の崖淵に立たされてしまう最悪の事態に立ち到ったのです。宗教活動は個人の心の救済には役立つても、世界人類の危機には役に立たないのではないのでしょうか。人類愛といわれ、近代ヒューマニズムの根幹と目されている人間の愛と慈悲の心が世界の物質科学文明の独走する社会情勢の下に、その崇高さと能力に関して鼎の軽重を問われる世紀末の時代となりました。

個人を救済し、この地球上に神の国を建てようと献身す

る宗教が世界と人類全体の重大問題については何故これ程までに無力なのでしょうか。それは宗教が人間精神の第三段階の自覚(言霊ア)より現出した活動であるという基本構造によっているからだという事が出来ます。言霊アの広々とした宇宙の観点に立つと、人間や社会の実相が有りの俚によく見えるようになります。よく現在の状況が見えますから、それに対処して事態を好転させようと意志が動きませんが、さて何をしたらよいか、を考える段になると、その採用する手段は、自分自身が神の子と自覚する以前の、所謂自分自身の因縁である概念的経験知に頼らざるを得ません。そこに落とし穴があります。

人類の一人一人が皆神の子としての自覚に立ち、神の子として世界の平和活動を始めようとする時、その人は嫌でも自分がその時まで直視し、悔悟、懺悔して来た自らの罪であった概念的経験知識に頼らなければならぬのです。先に述べましたように、概念的知識は、その観点の基準とした概念の相違によって意見はマチマチになります。人皆神・仏の子という共通の自覚はあっても、実際の社会的・政治的活動に於て意見の統一が何時しか困難になります。現在までの歴史が示しますように、幾多の宗教観念を

基礎とした平和活動、政治活動が活動の失敗、団体の分裂をおこし、消えて行った事でしょうか。

結局は個人救済を事とする宗教には世界人類全体を救済する能力は与えられていないのだ、と結論付けることが出来るでしょう。

神の子の自覚に立ちながら、個人救済や全人類的な平和活動に当っては、自分がその時まで煩惱と呼び業と思つて反省して来た経験知識に頼る一辺倒のやり方に力不足と矛盾を感じざるを得ない人は、心を決して新しい境地を求めて出発します。その道が人間精神の第四の進化段階であり、言霊エ(実践智)の自覚です。自分自身は神の子の自覚を得て、広い広い宇宙の心を持つ事が出来て心安らかである。けれど世の中には、昔の自分がそうであつた如く煩惱と力ルマに苦しみ悩んでいる人が大勢いる。世界はまた煩惱の坩堝である。それに対し救済の慈悲と愛の手を差し延べようと思う自分の知識は如何にも貧弱であり、千差万別の人々の心を把握するには力不足である。それならどうしたらよいのか。そうだ、自分が救済のために手を差し延べようとする一人一人の人から、また社会から、むしろ自分自身が教えて貰う気持で新しい道を開拓して行こう、と気付き

ます。この様に決意し、実行を始める人を仏教では菩薩と呼び、キリスト教では使徒と呼んでいるようであります。

菩薩や使徒と呼ばれる新しい道を志した人が手を差し延べる人々や社会は、時と場所によりその状況は文字通り千差万別であります。それ等多数の事態から教えられ、如何なる場合にも救済の英智が働く事が出来るようになる修行は正に気の遠くなるような厳しい長い労苦の連続であります。困難の中にあつて、救済しようとする人と救われ度とする人とが心一つとなる救済成就の時の喜びが決意を新たにしてくれるでしょう。その決意の彼方に望むものは、如何なる人々の苦悩をも、また全人類の困難をも救済することの出来る崇高な境地、キリスト教で言えば「天にまします父なる神」の英智であり、仏教に於ては「仏所護念の一切智」でありましょう。それ等の人々のために仏教維摩經は「不可思議解脱の法門」を説き、法華經は化城喩品に於て「砂漠の中の長い旅」を励ましています。

この長い心の修行の旅を成し遂げて、一切の束縛から解放されて仏と成る道を、仏教は「弥勒菩薩の成仏・下生五十六億七千万年後」と説き、中国の高僧寒山の詩は次の如く嘆いています。

我聞く天台山

山中に琪樹有り

永言して之を攀ぢんと欲すれども

石橋の道と暁る英し

此に歸つて非歎と生じ

幸居して將に暮れんとす

今日鏡中と見れば

颯々として鬢髪垂れて素の如し

詩の中の琪樹とは宝の実る樹であり、仏教の宝とは仏の持つ摩尼宝珠即ち一切智の言霊のことでもあります。石橋とは此岸より仏の国に渡る橋のことです。素とは白い糸の意。高僧寒山は修行の末に摩尼を自覚出来ない悲哀を嘆きました。それはまた高僧寒山であったからこそ摩尼を掴み得ない事を嘆くことが出来たのだ、という事も出来ます。

以上のように神の子・仏の子の自覚に立って、更に世の中のあらゆる人の救済を目指し、また世界の平和を表現しようとする努力・修行をして完璧な真理に到らんとする人を仏教で因位の菩薩と言いますが、かくの如き修行に於てもその成就には気の遠くなる程の年月を要すと説かれていま

す。佛教やキリスト教の如き宗教修行によつては世界の恒久平和の実現は不可能だという事になります。

かくて話は人間精神進化の最終段階である第五の言霊イに進むこととなります。そしてこの段階に来て今回の話のテーマである伊耶那岐の大神の登場となります。古事記の「身禊」の章の伊耶那岐の大神とは、人間精神の如何なる状態の事を言っているのか、の現実の問題に入ることとなります。

再び古事記の復習をすることとしましょう。伊耶那岐の命は初めの天の御中主の神(言霊ウ)より火の夜芸速男の神(言霊ン)までで五十個の言霊を生みます。次に五十一番目の金山毘古の神より五十の言霊の整理・活用の仕事に入り、遂に主観的にはありますが人類文明創造上理想の精神構造を表す建御雷の男の神という五十音言霊図を確立します。言い換えますと、「人間の精神とは何か」という人生究極の問題を主観的にではありませんが解決した事になります。これを仏教的に謂えば、正に仏陀の誕生です。「ほとけ」の語源は「ほどける」であり、自分個人の苦しみからも、また他人救済の困難からも解放された境地の人の意であります。

この時期は実際の人類文明の歴史の中で何時に当るのでしょうか。それは「古事記と言霊」の歴史編で詳説しましたように、地球上の高天原と言われる地方で、日本人の遠い祖先が数百、数千年の年月の努力によつてアイウエオ五十音言霊の原理を発見・完成させた約八千年乃至二万年前と推定されます。この霊知りの集団がこの日本に天降つて来て、言霊の原理に則つた人類文明の創造が開始されて以来、人類の歴史が始まりました。この事を仏教典の法華経は如来寿命品に於て「我美に成仏してよりこのかた、無量無辺百千万億那由他劫なり」と説いています。仏であり、霊知りである日本の皇祖皇宗は、日本人の、そして世界の人々の心の中に生き通しに生きて、人類文明創造の経輪を行っています。仏教はこれを仏国土莊嚴と呼びます。

古事記に戻りましょう。主観的にはあるが完成した心の鏡を胸に秘めて、伊耶那岐の命は先に客観的学問の世界へ出て行った妻神伊耶那美の命を追いかけて黄泉国へ行きます。そこで種々の工夫された研究のアイデアが湧き出るように現われて自己主張をする統制のとれない外国の文化を経験し、恐れをなして高天原に逃げて帰って来ます。客観世界創造の主宰者伊耶那美の命は「吾に辱見せつ」と言っ

て追いかけて来ます。そして高天原と黄泉国との境にある千引石を間においてお互いに向き合い、伊耶那岐の命と伊耶那美の命は事戸を渡します。離婚です。(この岐美二神の離婚の重大な意義は見逃がされ勝ちである。人間生命の内なる原理・法則と外なる原理・法則は、双方の研究が究極の真理・法則に辿り着くまでは、途中での交流、比較が不可能であることを宣言した事である)伊耶那岐の命は高天原の精神原理とは全く異質の客観世界研究の文化の存在を認めたのであります。

古事記のこの出来事は実際の人類文明創造の歴史の何時に当るのでありますでしょうか。それは昔の五千年間にわたる精神文明時代の次に、それとは全く異質の物質科学文明の創造を始めた約三千乃至四千年前に相当すると言う事が出来ましょう。人類の第二の文明への探究でありました。物質科学文明の創造は人類が担つた崇高な仕事であります。その創造を促進するために現出させた弱肉強食の生存競争社会は古事記に「吾はいな醜め醜めき穢き国に到りてありけり」とありますように、病貧争が渦巻く地獄世界が現出して来たのでした。

そして高天原に逃げ帰つた伊耶那岐の命は、自らが主観

的に確立した文明創造の鏡である建御雷の男の神を、身祓実行のために衝立つ船戸の神と斎ぎ立てて、自身黄泉国で見聞して来た物質科学文明を摂取して、精神と物質両文明が調和発展する理想の社会を創造する仕事に立上ります。

その仕事を開始する神格が伊耶那岐の大神であります。

人は法華経寿量品に説かれる如く、生き通しに生きている神であり、仏である人です。高天原の精神文明も自らの所産であり、第二の物質科学文明創造も自分自らがそれを「善し」と見、「かくせよ」と命じたものであり、その創造のために方便として現出させた生存競争の修羅の様相も、当然「わが業であり、罪である」と明確にその責任を負うべき我が身なのだ、の自覚に立つ事、その「我が身」の自覚が古事記禊祓の「かれ吾は御身の禊せん」と伊耶那岐の大神が言った、その御身のことなのです。

仏教に因位の菩薩に対し果位の菩薩のことが説かれています。因位の菩薩とは先に述べましたように、人々を救済する行為の中に、一切の人間の英智を授かり、その徳によって仏となる事を志向する菩薩のことです。果位の菩薩とは、已に仏となった身が、人類救済のために再びこの地上に菩薩となって下生して来た仏であると同時に菩薩である

者のことです。それは正に「身禊」に於て、伊耶那岐の神が伊耶那岐の大神となって現われて来た神格変化の内容と全く同じ事であり、それはまた太古の人類の第一精神文明の時代を創造し、五千年にわたる豊穰で平和な時代を永續させた私達の靈知りの祖先、皇祖皇宗の天皇（スメラミコト）のこともあります。人間の精神進化の最終の第五段階の実現とは以上のようなであります。

今年、一九九九年からは、真正の天皇（スメラミコト）の出現が可能な時代となります。アイウエオ五十音言霊布斗麻邇が完全に復活したからであります。（終り）

◆お知らせ◆

日本の社会は不況という暗雲に閉ざされ、沈滞一色の感があります。けれど心を澄ませて日本人の心の底を覗くことが出来るならば、そこに新しい時代の栄光の胎動を知ることが出来ましょう。言霊の会はその新世紀への転換の魂の胎動について言霊原理に則り皆様にご知らせして参ります。二十一世紀は目前であります。御期待下さい。

なかきよのとおのねふりのみなわさわ

なみのりふねのおとのよきかな (古歌)

【収載】第百二十七号(平成十一年一月)

● 神人モーゼ・ロミナス魂塚

かくの如くエホバの僕モーゼはエホバの言の如くモアブの地に死しねり

エホバ、ベテベオルに對するモアブの地の谷にこれと葬り給へり

今日までその墓を知る人なし

モーゼはその死にたる時百二十歳なりしが

その目はかすまらずその氣力は衰へざりき……

ヌンの子ヨシエアは心に知恵の充る者なりモーゼその手

とこれが上に按おさたるによりて、然るなり

イスラエルの子孫は之に聴きこしたがひエホバのモーゼに命じたまひし如くおこなへり

イスラエルの中うちにはこの後モーゼの如き預言者おこらざりき

モーゼはエホバが面かほと對あはせて知りたまへる者なりき……」

(旧約聖書申命記第三十四章五〜一〇)

不合朝六十九代、神足別業鋤天皇の御代、即位二百年、イヤヨ月内六日、ヨモツ国より、モーゼ・ロミナス日本に來り、十二年間日本に位ゐむ。この間に、モーゼは万國五色人の守る十戒の法を作る……

モーゼは、天皇の内親王、大宝姫と結婚、七人の子と産むむ。

……モーゼ五百八十三歳にして神かむ幽り、能登宝達山、ネボ谷に葬り、後分塚して越中國、呉羽の安ネボ山に葬る。大宝姫(ローマ姫)は、四百六十一歳にて神幽り給ひ、能登宝達山に葬る。

(竹内文獻、世界の正史、不合六十九代の章)

今年四、五、六月号会報に於て世界人類の第二物質科学文明時代より第三の新文明時代に移る大転換を可能にする唯一の手段である言靈原理による「禊祓」についての詳細を明らかにすることが出来たので、その第二物質科学文明創造の責任を負つた神選ユダヤ民族の祖であるモーゼ・ロミナスの墓へ行って見ようという氣持が筆者に起つたのは五月中旬頃であつた。モーゼの墓が能登宝達山にあるという事は相当以前から知つていた。けれど殊更にその地に足

を運ぶという気は起らなかった。ところが今になってふとその気が動いたのは、ユダヤの預言者、またはそのお使姫である金毛九尾霊に対する日本と世界の歴史上必須の「襖被」実行の時間が近づいて来た為であろうか。

五月二十三日(日)朝七時四十五分羽田(東京)空港発で家内と共に小松に向った。その日は快晴で、機内よりアルプスや白山の山々が残雪を頂いている姿がよく見えた。JR小松駅より金沢駅經由能登半島の七尾駅まで快速列車が走っている。能登半島の根元近くにある宝達駅に着いたのは午前十一時近くであった。ただ一人いる駅員にモーゼの墓を尋ねたが「知らない」という。駅前のタクシー営業所へ行ったら、よく知っていた。「この頃は日本人だけでなく外国人も来るようになった」という。「他所からお客さんが尋ねて来るのに、土地っ子の私が知らないでは恥になるから、最近私もモーゼの事を勉強するようになりました」と言っていて『モーゼは日本で死んでいる』という新刊本を見せて呉れた。見ると「山根キク著」とある。三十年程前、筆者の言霊学の師、小笠原孝次氏の主宰する会で数回会った事がある山根キク氏の事を思い出した。

モーゼの墓のあるモーゼパーク入口までタクシーで五分

位であったろうか。入口は誠に立派に整備されている。道標もしっかりしている。東京を出発する前、会員のA氏より頂いた案内図によれば、入口から墓まで上り坂で十分か十五分の所とあった。道標に従って日差しの強い道を上って行ったが、困った事に道標は入口だけで、道の分岐はいくつかあるが、第二、第三の道標は見当らない。人通りのない山道で道に迷うのは心細いものである。あっちこっち行った末に幸い山菜採りに来たという土地の御夫婦に会って案内して貰うことが出来た。有難かった。

モーゼの墓は三つ並んだ直径十数メートルの小山の中の中央にあった。山頂の平坦な所の中央に墓標が建てられている。A氏の説明書には墓標に向って右隣の山がモーゼ夫人、大室姫(ローマ姫)の塚、向って左隣の山がモーゼ夫妻の孫の塚との由。モーゼの墓標を見た。正面に「☆神人モーゼ・ロミユラス魂塚」と記されている。側面を見ると「竹内義宮建立」とある。文通はあるが、ここ二十年程は会った事のない竹内氏の姿を思い出した。

筆者は家内と並んで墓標の前に立ち、「高天原成彌栄」を三唱し、八拍手をした。言霊字とそれに基づく日本とユダ

ヤと世界の歴史の内容が走馬燈の如く脳裡を横切って行つた……。

イスラエル王モーゼが三千年余以前、ここ宝達山麓に葬られたと言つたら、現代の歴史学者は口を揃え、腹を抱えて笑い出す事であろう。けれど、それは彼等の歴史を考える視野が余りにも狭く、自らの精神の底を見つめるのが余りにも浅いために他ならない。彼等が虚心坦懐、次の二つの点に注目し、彼等自身の心の中にその内容を自覚するまで反省して行く事が出来るならば、事は率直に承認せざるを得ない事となろう。

一、竹内古文獻に謂く「鵜草葺不合皇朝六十九代神足別豊鋤天皇来朝のイスラエル王モーゼに天津金木を教う。モーゼの歸るにのぞみ、天皇モーゼに勅みことよりして言わく「汝モーゼ、汝一人より他に神なしと知れ」と。」次に旧約聖書に謂う「モーゼ神にいひけるは我イスラエルの子孫うりぐすの所にゆきて汝等の先祖達の神我をなんぢらに遣はしたまふと言いははに彼等もし其名は何と我に言は何とかれらに言べきや

神モーゼにいひたまひけるは、我は有りて在る者なり(1 an that I am.)」(出エジプト記第三章十三、十四)

右に挙げた神足別豊鋤天皇のモーゼに与えた勅語「汝モ

ーゼ、汝一人より他に神なしと知れ」と、神がモーゼに答えた神の名「我は有りて在る者なり(1 an that I am.)」とを単なる理論でなく、自らの心でその意味・内容を証明する行の立場から見ると、その二つの言葉が全く同じ内容であり、しかもその証明は日本の伝統の学「アイウエオ五十音言靈布斗麻邇」の原理によってのみ証明され、自覚される事が理解される。これがモーゼの日本来朝が事実である事の第一の証拠である。「汝モーゼ、汝一人より他に神なしと知れ」は人の人たる内容を極めつくした大真理に立たぬ限り言う事が出来ない言葉なのである。

第二点として日本の大祓祝詞と旧約聖書の「出エジプト記」と「レビ記」の中の文章が全く同一と思える程符合している事である。もっと詳しく言うなら、大祓の中の意味の分らないところ(「国津罪とは」の文章)が旧約の出エジプト記・レビ記を読めば理解出来る様に符合しているのだ。余りによく符合することから、これは偶然ではない事が分る、読者が実際に両者を読み比べて見れば成程と頷く筈である。これがモーゼ来朝の第二の証拠である。……

「高天原成彌采」三唱の後、筆者はモーゼの墓標に静かに語りかけた。

「皇祖皇宗の言靈布斗麻邇の原理に基づく人類文明創造の御経綸により、貴方と貴方の子孫であるユダヤ民族に人類の第二物質科学文明の創造と、その成果による人類の再統一の業が委託されました。そしてあなた方の世界の人々の中核となつての長い弛まぬ努力によって物質科学文明は今目見る如く素晴らしい成果を挙げることが出来ました。人類再統一の業も完成間近であります。一方、貴方が物質文明創造促進のために採用したカバラの原理による弱肉強食の生存競争社会の現出は、地球環境破壊と人心荒廃という公害をも産み出す結果となりました。今こそあなた方に委託された事業は完成の時であります。この時代が今後更に

情性となつて続くならば、人類滅亡の危機を招来すること必然です。あなたとあなたの子孫の業が皇祖皇宗の御経綸の中にあることを改めて自覚され、その仕事に有終の美を飾られ、その完成を速やかに皇祖皇宗に報告され、人類の新しい第三文明時代への転換に向つて協力されますよう努力なさいませ。三千余年の長い間誠に御苦勞様でありました。」

墓詣りを終え、山を下つた。宝達駅への復路は田園の道を約三十分歩くことにした。久しぶりの家内と共に田舎道

の散策である。青空の下、遥かに能登最高峰という宝達山の山頂が見える。氣持よさに大きく息を吸い込んだ。その瞬間、長かつた人類の物質科学文明創造の三千年の探究と苦勞が今・此処に凝縮し、一転して新しい第三生命時代へ転換して行く世界のドラマを垣間見た様な氣持となつた。五月晴れの風が誠に氣持がよい。

その夜は羽咋市の千里浜国民休暇村に泊つた。夕食にカニ、エビ、イカの大盤振舞であつた。食事を終え、部屋に帰つて何気なくテレビのスイッチを入れた。何チャンネルだか知らない。数年前に亡くなつたノイマン氏指揮で、ドボルザーク作「新世界」交響樂が聞えて来た。素晴らしい演奏である。四樂章全章を聞いて心地よい眠りに入つたのだ。

(終り)

【収載】第百三十三号(平成十一年七月)

●動かざる者(経綸者)

宗教書には剣または杖という言葉がよく見られる。剣は物を斬るもの、杖は道を歩む助けとなるものであり、共に人が世を渡る上に心の頼りとなる人間天与の判断力を表徴している。アロンの杖(旧約聖書)、「両頭を截断すれば一

劍天に倚つて寒し(禪語)、不動明王の智劍等々が伝えられてゐる。「あゝしようか、こうしようか」の小賢しい知識の迷いを振り払うと、自ずと人間が本来授かつてゐる実践の智慧が心から湧き出し、物事を最も良い形で処理してくれる。これが宗教で謂う杖であり、劍である。これを依り代として得られる平静な心を不動心という。何事に会つても動揺せず、物事に対処する事が出来る。心のことである。

従来各宗教の一番の目的はこの不動心であり、安心であつた。しかし宗教で謂う不動心が人間の一切の物事に適切に対処して誤ることがないか、というと必ずしもそうではない。そこに自ずと限界がある。確かに不動心は人間個人の日常生活に関しては心の依り代であり得る。けれど事が一たび人類的・世界的な視野で考えねばならぬ問題、例えば原水爆禁止の問題、地球環境汚染・地球温暖化の危機、教育の頹廢等々の問題となると宗教的不動心は何も答えを出して呉れない。既存の宗教がこれ等の人類の危機を回避することが出来る抜本的提案を出した事を聞いた事がな

ら。人類が直面する地球の破局的状況に対して既存の宗教からの救済策が提案されないのならば、人類の将来は絶望な

のか。否、そうではない。世界全体の未曾有の危機を回避して、人類の新しい世紀を創造するに必要にして十分な方策を提示し得る立場が世界に唯一つ存在する。私達日本人が日常使用する日本語の中に秘められたアイウエオ五十音言霊の原理、布斗麻邇である。

布斗麻邇の原理による人類歴史の新しい創造の話の前提として、この原理より見た過去の人類歴史を見ることにしよう。

古事記は言霊百神の原理の神話の結論として三貴子(みはしらのうずみこ)、天照大神・月読の命・須佐男の命の誕生を述べている。そして親神である伊邪那岐の大神は三貴子のそれぞれが受け持つ歴史創造上の精神領域の分担を決定し、命令した。その分担は天照大神は高天原(言霊イ・エ)、月読の命は夜の食国(言霊ア・オ)、須佐男の命は海原(言霊ウ・オ)である。またそれぞれの分担する統治の社会は天照大神が言霊原理に基づく人類歴史創造、月読の命は宗教・哲学・芸術、須佐男の命が物質科学・産業・経済である。

人類が言霊原理による文明創造を始めてから約五千年の間、三貴子の分担・協力の統治は平和で心豊かな人類の第

図 137-A

三貴子分治・協力 五千年 第一精神文明	天照大神 (高天原…言霊原理とその活用) — 言霊イ・工 月読の命 (夜の食国…宗教・哲学・芸術) — 言霊ア・才 須佐男の命 (海原…科学・産業・経済) — 言霊ウ・才	二神相克 三千年 第二物質文明	現代
	社会的表面より隠没 物質科学の完成 人類生命の危機		復活
	X		?

一精神文明時代を築いたのである。精神文明が爛熟期を迎え、日本の皇祖皇宗の世界文明創造の方針が大きく変わり、人類の第二の文明となる物質科学の振興のための方便として、第一精神文明の鏡である言霊布斗麻邇を社会の表面から隠没させることとなった。言霊原理の世界政治への適用が停止され、世は弱肉強食の生存競争時代に突入することとなった。外国に於ては約三千年、日本に於ては二千年前の出来事である。

この時より今日までの二・三千年の間に生存競争社会を培養土として、物質科学の発展、文明の利器の発明に人々は鎬を削った。その結果、今日地球上に見る如き物質文明社会が絢爛として建設され、この上ない便利な社会とはなった。物質科学文明の一応の完成である。と同時に物質

科学研究のための方便として仕組まれた競争一点張りの精神傾向は世界の歴史上人類が経験した事のない生存の危機状況をこの地球上につくり出してしまった。地球を取り巻く諸種の環境の劣化をもたらしたのである。この人類の生存の危機に際して、人類が挙って謳歌する科学法則はこの危機回避の根本方策を何一つ示してはくれない。また須佐男の命と共にこの三千年の指導精神である月読の命の宗教・哲学・芸術もこの人類の危機には無能を露呈している。

過去八千年余の人類歴史を三貴子の分担統治の見地から見ると前記の図137-Aとして示すことが出来る。この表で見ると限りキリスト世紀二千年の物質科学の興隆と生存競争の行き着く果を総決算して、人類の新しい世紀を切り拓く

手段は唯一つ二千年の間暗黒の眠りにあり、世の中を潜在意識の奥からその経綸の推移を見守って来た言霊原理の自覚者である天津日嗣の復活・再現より他に有り得ない事と断言することが出来る。

さて天津日嗣の経綸の自覚・実行を行う事が出来る人とは如何なる心の持ち主であり、またその自覚に至る如何なる方法があるのであろうか。古事記や大祓祝詞はその要諦をいとも簡潔に教えている。その言葉とは――

「底つ石根に宮柱太知り、高天原に千木高知りて」である。この言葉は古事記に於て政(まつりごと)が新たに始まろうとする時に述べられている。この言葉の言霊的意味について説明しよう。

先ずは「底つ石根に宮柱太知り」であるが、石根は五十葉音で五十音言霊の黙示である。その五十音の言霊は言霊イの次元に展開している。「底つ石根」とあるから、五十音図で言霊イの母音が一番下の底にある音図となると、五つの母音が上からアオウエイ(これを宮柱という)と並ぶ伊耶那岐の神の天津菅麻の音図の事である。そこで「底つ石根に宮柱太知り」とは「天津菅麻の音図が示す五つの母音の配列に従って自らの心を反省し、言霊原理を身を以て自

覚して」という事となる。

天津菅麻の音図の縦の母音の並びであるアオウエイの中のアオウの三音に注目しよう。その一番上の言霊アは真言宗密教で謂う「阿字本不生」とあるように、人間の欲望(ウ)と経験知(オ)の次元の営みを包んでいる心の宇宙そのものである。その事から「アオウ」の三音の並びは従来の宗教信仰の修行である心の反省によって魂の自由を求める行為を示している事が分る。信仰の行はアである大自然・神・仏の存在を信じて、自らの心の欲望とその欲望の経験からまとめられる経験知が完全な自分を作り得るか、否かを反省することである。反省すればする程自らの欲望と経験知からする行為が利己的であり、自我中心であり、そこに愛や慈悲の思いが一欠片も無い、真実には遠い行為である事を知る。それよりももっと驚くのは、それらの偽瞞の自らの煩惱が否定しても否定しても際限なく心に湧いて出て来る事である。欲望と経験知の自分の生活が矛盾だらけであり、それを更に直視すれば気が狂うのではないかと思う程心が苛まれる。その果に人はもうこれ以上心の反省の手段と気力が続かなくなる。この先に待つものは心と身体の死があるだけとなる。行くも退くもならず、そこにあるのは我

利々々亡者が地獄の底をのたうつ姿である。「如何なる行も及び難き身なれば、地獄は一定住家ぞかし」地獄の底だけが自分の住家である。這い上ろうとする目安が心の何処にも起らなくなる。心の死を迎える。

この時、人は暗黒の地獄の中で大きな声なき声を聞く。

「分つたか」と。「汝は世界の事も、他人のことも、何一つ発言するに値しない我利々々亡者である事が分つたか」と。かくてこの我利々々が生れて今まで自分が生きたのではなく、大きな宇宙、神・仏の力によって生かされていたのだと知る。生れて以来、神や仏の愛と慈悲に包まれ、育まれていた事を知る。矛盾に満ちた地獄がそのまま愛と慈悲の光の中に生き返ることを悟る。

以上が「アオウ」の三言霊の配列が教える信仰心の成就の過程である。神の愛に包まれた不動心を知る事となる。しかし前述した如く信仰で得たこの不動心が個人的生活に限られ、地球的・世界的問題に対しては無力であった。行は更に飛躍を要求される。その魂の更なる飛躍の順路を菅麻音図の「アオウ」に続く下の二言霊「エイ」が教えてくれる。「アオウ」の宗教信仰の成就によって神・仏の愛に包まれた「オウ」の自己である事を知り、不動心を得た。しかしその

不動心の合間から今まで懸命に否定して来たと同様の煩惱が勃々^{はげ}と心に湧き上って来る。歎異抄第九条に「久遠劫よりいままで流転せる苦惱の旧里はすてがたく、いまだ生れざる安養浄土はこひしからずさふらふことよくよく煩惱の興盛にさふらうにこそ」と言っている。信心成就の後にも依然として湧き上る煩惱を「もう取るに足らぬもの」と軽視してはいけない。更に湧き上る煩惱を反省し、自らの思惟によって見極めた自分の罪深さの底に、意識を越えた罪深き業の存在を自覚して行く事である。「煩惱の大海に入るに非ざれば、一切智の宝を得る事なし」と維摩経は警めて^{いまし}いる。その更なる反省の中から「アオウ」の信仰心を支えている人間の心の根源の法則とその実際の姿が姿を現わして来るからである。

古神道では人間の罪を天津罪と国津罪の二つとして説いている。宗教信仰によって克服し得るのは人間個人の罪である国津罪であり、それより更なる反省によって人間が生れる以前から人類に負わせられた罪、キリスト教で謂う原罪、古神道で謂う天津罪、言霊原理を乱し、言葉を乱した罪を自覚する事が出来る。人間個人が原罪として負う罪、それは同時に人類が文明創造上の宿命として負うた宿業の

罪である。この宿業の末に人類は絶滅の危機を迎えており、個人はまた自らの身勝手な「オウ」の罪に苦しみ喘ぐ。

人は宗教信仰の奥の後方に、即ち信仰「アオウ」の奥に言霊「エイ」の真理が心中に躍動し、人間の生のすべてを統一して余す処がないのを知る事となる。「アオウ」の信仰の救いは言霊アである神仏であった。今、個人と同時に人類全体の救いとなるのは、神や仏という観念ではなく、生きた神・生きた仏である言霊イとエの自覚者でなければならず、それは太古に人類歴史の経綸者であり、三千年にわたる物質文明時代を通して、人類の潜在意識の底流で人類を見守り、経綸を推進させ、そして人類の危機の今日、生きた人間の自覚によってこの世に姿を現わさんとしている皇祖皇宗御自身である事を知る。生きた神であり仏である人間が法華経の「湧出の菩薩」の如くこの地球上に現われるのである。この人類の歴史の大転換の仕組が一人の人間の心中の信仰心を更に進めた言霊「エイ」の個人による自覚の一点によって完成・証明される。人類と人間個人の言霊ウとオの次元の矛盾が、矛盾そのままの姿で宮柱アオウエイの自覚の調和の中に吸収され、同時にそれが合理的な全人類の運命を転換させる九分九厘の一厘の仕組の成就の確証と

もなる。この場合の言霊イは言霊原理のことであり、言霊エは原理に則る天津日嗣の歴史創造の経綸者のことであり、単なる観念上の神・仏のことではない。

以上が「底つ石根に宮柱太知り」の説明である。次に「高天原に千木高知りて」に移ろう。「高天原に」とあるからこの文章が天津太祝詞の音図上で言挙げしている事が明瞭である。この音図の一番上の段がア・タカマハラナヤサ・ワと並ぶことからそれが理解出来る。「千木高知りて」の千木とは伊勢神宮内宮本殿の屋根の棟に横に並んでいる十本の千木の事である。音図で示せば右に挙げた横の父韻の並びを意味している。そこで「高天原に千木高知りて」とは「天津太祝詞の音図に示される如く、父韻タカマハラナヤサと並ぶ禊祓の手法を以て人類歴史を創造せよ」という事になる。右に述べた立場は天津日嗣の経綸者が人類の文明創造の歴史を推進する手法である禊祓の原理そのものである事を示している。主体である伊耶那岐の命と客体である伊耶那美の命が一つとなった伊耶那岐の大神の立場、言い換えると歴史創造の経綸者が世界人類をわが身(御身)と考える立場、「我とは人類であり、人類とは我である」との立場に立つて、世界の歴史を創造する作業である。この立場に立つ

時、歴史の経綸者は「今・此処」を一步も動く事なくして自己と世界の宿業を一手に掌握し、世界の状況を熟知し、そこから言霊原理に則り、万人歓呼の中に、いとも合理的に人類歴史を転輪させることが可能となる。この地球上の将来の創造者こそ「動かざる者」であり、真の天津日嗣の経綸者なのである。

以上動かざる者としての真の経綸者の立場を説明した。

ここでもう一つの「動かざる者」のある事に触れておこう。それは神倭朝以前、鵜草葺不合皇朝六十九代神足別豊鋤天皇の命令・委嘱によって、その後三千年間にわたる人類の第二の物質科学文明創造の責任者となったモーゼとその後裔のユダヤ神選民族の預言者の事である。彼等は長い努力の末に、その使命である物質科学文明社会を建設し、その成果である世界の財力と戦力と権力を掌握して今や世界の再統一の事業完成寸前である。人間に授かったウオアエイ五性能の中のウとオの次元の世界を神秘のカバラの原理によって自らの薬籠中のものとして、然も自らは世界歴史の裏に隠れて姿を現わさず、「動かざる者」として科学原理研究と世界統一を推進させて来た。

一方は日本にいて言霊アオウエイ五次元のすべてを自覚

する動かざる天津日嗣の経綸者、また一方は現在アメリカにいる言霊ウオ二次元の世界を統轄する動かざるユダヤの予言者、両者の歴史的な出会いは極めて近い。その出来事は人類にとって画期的行事となるであろう。その両者の中で「動く」者は誰か。後者である。何故なら、後者の使命が前者の歴史創造の経綸の中に包まれたものであるからである。

【収載】第三百三十七号(平成十一年十一月)

言霊学随想

●月と梅

俳句と和歌は日本の伝統文化の中でも特にユニークな芸術という事が出来る。俳句と和歌については今までに会報誌上二、三回取上げて、日本語の語源であるアイウエオ五十音言霊学に基づいて、人間の心の構造との関係を明らかにして来た。今回はその決定版の話。

昨年の秋のある日、以前誌上で紹介した事のある女優さんで、現在は日本の文芸作品の「語り」を熱心になさっているいわかね栄氏から言霊の学問についての質問の手紙が届いた。謂わく、「人間の心の構造の学問である言霊学の御講義から俳句は十七文字、和歌は三十一文字であり、またそうでなければならぬ理由は何と分らして頂きました。けれど更に考えて見ますと、それなら俳句十七文字が五七五、和歌三十一文字が五七五七七で構成されている理由は何でしょうか」とある。

そこで私は直に筆をとり、言霊学上から俳句五七五、和

歌五七五七七の構成理由を手紙に書いた。書き終って読み返して見ると、どうもしっくりしない。「これではこの文章を読んで下さるいわかさんも納得はしないであろう」の感じが残った。自分で満足しない文章が他人様が読んで内容の意味を全部理解して下さる筈がない。「どうしてこんな固い文章になったのか。そうだ、これは言霊学の理論として書いたのであって、自分自身の俳句や和歌の歌心を観察する事を土台としたものではない」と気付いた。そこで私は手紙の末尾に「この手紙に書いた文章は貴方様の御質問に充分に答えたものにはなっていません。この真実の解答は私自身の歌心を深めることによって可能となりましょう」の一言を書き加えて手紙を出したのであった。

歌心を深める、と言ってもそう簡単には行かない。五七五、五七五七七の事は何時も念頭にありながら何もするとなく日が過ぎて行つた。これには理由がある。私が言霊学の勉強の心の素地を掴もうとして言霊アの自覚を得る行をしていた十数年前のことである。言霊アとは御承知の如く人間の心の本体である心の宇宙の自覚の事であり、この次元宇宙から現出して来る天与の人間性能は宗教・芸術の心である。

春酣の頃、私は家内とJRのフルムーン切符で九州一周の旅に出た。大分の宇佐八幡、九重高原、阿蘇山麓、熊本、島原半島から太宰府、博多と廻り、最終日夕刻博多より東京行きの特快列車に乗った。私は寝台列車での寝付きは良い方である。眠りに入る僅か二十分間程、五日間の旅行で見て来た風景が次々と心に浮かんで来た。それ等の風景の一つ一つが次々と漢詩となってまとまって来た。自分で驚く程の速さで漢詩が出来上ったのだった。その数は十首を越えたと記憶する。寝台車の電灯の薄明りで手帳に書取り、家に帰ってから多少の推敲はしたが、漢詩としての体ていは成していた。素人の拙い詩であるが、恥を承知でその中の一つを御披露申上げることしよう。

島原の普賢岳に登った日は前日の雨もあがり、抜けるような晴天であった。頂上からの眺めは素晴らしかった。東の方、有明海の先、雲海の上に阿蘇の山が顔を出し、西方島原湾のあなたは天草の島々が寝そべる様に続いている。五月の風は爽やかで周りの山々は緑が輝いていた。

有明海東阿蘇浮び 島原湾西天草横とう

遠山風輝いて一鳥舞い 快なる哉脚下普賢岳

普賢岳が大噴火を起し、多くの犠牲者を出し、山容は見影もなく荒れたのはそれから数年後の事である。

言霊アの宇宙にかかる心の雲が一瞬でも晴れると、その宇宙から宗教・芸術の心がほとばしるように形となって現われて来る。私は日頃より漢詩は好きで時折読んでいたが、自分から進んで作詩しようと思った事は余りなかった。それが寝台車のベッドに寝そべり乍ら二十分で十首である。自分ながら呆れたが、同時に言霊アの宇宙が芸術心の根源である事を知ることが出来たのであった。

そんな事があってから暫くして、私の言霊学の勉強の心が言霊アからエに移った。言い換えると、言霊学の中に足を踏み入れるために、自己の経験知を否定して行く退歩の学から、言霊原理に基づいて現実の日本と世界の状況を如何に見、その将来を如何に見通すか、の問題に入ってしまった。その時を契機に私の俳句や和歌や漢詩を作ろうとする心がパタッと止んでしまったのである。たまに作詩心が湧く事があるが、自身「あそび」の心として打消して来たのであった。

自分自身の歌心という事が気になりながら当面の仕事に

追われて日が過ぎて行つた。確か十月七日水曜日の午後だつたと思う。家内が中央区の主催する宮沢賢治の小説の朗読の講習会(一時から四時)に出席するため午後区民センターへ出掛けて行つた。客の来ない午後は家内と東京都区内を散歩するのを常としている私は何となく無聊である。ふと前々より興味を引かれていた芭蕉記念館訪問を思い立つた。地図で場所を確認し、電話して休みの日を尋ねた。今日はやつている、と言う。わが家のある中央区勝ときからは都バス一本で行ける。早速手帳一つをポケットに入れて出掛けて行つた。

亀戸駅行きのバスは月島を過ぎ、長い相生橋を渡り、門前仲町・清澄公園前を過ぎると間もなく高橋(たかばし)に着く。記念館は高橋停留所より徒歩五分とある。停留所の先五米程を左折、真直に進み、深川神社(江戸情緒の深川の地名の由来が記されている)を右側に見て更に進むとやゝ広い道路の丁字路に突当る。その突当つた家の向つて右隣りが江東区立芭蕉記念館である。

三階建ての瀟洒な建物の左脇の道を入ると右側に玄関がある。入ると右側で入場券を売っている。百円である。その左のロビーで芭蕉の俳風を説明する映画が上映されている。

た。スクリーンの前に十数人分の長椅子が備えられている。暫く映画を見ることにした。

野ざらしと 心に風の しむ身哉

旅人と 我名よげれん 初しぐれ

旅に病んで 夢は枯野と かけ廻る

俳句の真実を求めて生涯を旅に過した芭蕉の一生が画面に写し出される。元禄七年(二六九四)十月十二日芭蕉は五十一才の生涯を大阪御堂前、花屋仁右衛門方にて畢している。遺言により遺体を大津の義仲寺に移し、十四日埋葬とあつた。

映画を見終えて早速二階の展示室に上つた。左程広くない約十五坪位の部屋に芭蕉の作品、年代記等々、所謂ザ・バシヨオが展示してある。余り明るくない照明で落着いた雰囲気の一部屋である。私は部屋を右廻りでザ・バシヨオを見て廻つた。展示の俳句はどれも今までに読んで知っているものが多い。だが入つて右側の展示品の一番奥、突当りの壁との角隅に進んで私の足がピタリと止つてしまつた。そこに見事な俳画があつた。

俳画であるから左程大きくない掛軸の向って右下から左上に向って梅の木の枝が鷹揚に延び、その背景に大きな月が画かれ、春の香を伝えている。それは私が以前京都の大徳寺の部屋で見た掛軸の偈「梅花雪を破つて香ばし」の季節から一ヶ月近くは経つたであろう春の気配の月である。左下部に芭蕉自讃の句が記されている。

はるもや、けしきと、のふ 月と梅

説明書を見ると元禄六年吟とある。とすれば芭蕉没年の前の年、芭蕉五十才の作であることが分る。絵の構図は何処からの借物の感がしないでもないが、それにしてもこの鷹揚さは素晴らしい。月に春の艶めかしさがある。梅の良さはこの処が頂点だと言えよう。説明書は更にこの俳画は複製で、実物は山寺芭蕉記念館蔵とあった。

足を止め、暫くこの俳画と芭蕉の自讃に見入っていた私の心にメラメラと野心と歌心が同時に湧いて来た事である。玄人中の玄人の芭蕉さんの向うを張って素人中の素人が一句物そうというのだ。江戸っ子はそそっかしく、おちよこちよいである。「銀座生れの江戸っ子が芭蕉なんかにシャッポを脱いでたまるけん」と言うわけである(私のお

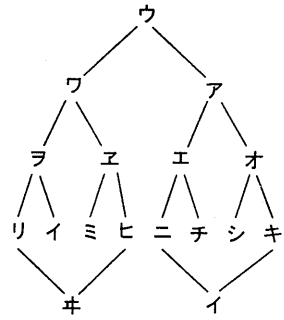
袋の家は十数代続いた浅草っ子である)。数秒の後、芭蕉の向うを張った句が飛び出して来た。芭蕉の句の整った上品さに比べれば、見る影もない下卑た句であるが、文章の成行き上御披露申上げる。

春はなお よそはい凝らす 月と梅

「どおでえ、見たことか」と言った気持である。たあいないう江戸っ子の一人ぜりふであり、幾日かすれば自身忘れてしまふ事であろうが、ただ私にとって有難い事には、ここ数年忘れていて、また忘れてしまおうとしていた歌心が湧いて来たという一事である。歌心が湧いた事、その自身の心の奥を省みる事で、日本人独特の俳句の心と言霊字との関係、俳句五七五の心の構造との切つても切れぬ関係を(その時は)ぼんやりではあるが掴む事が出来た事であった。芭蕉さんに啓発されたお蔭である。

自分自身の歌心が動いて俳句なり和歌なりが作り出されれば、それが作られる以前の心の動き(先天)と歌として表現された言葉との関係から、人間に与えられた天与の歌心の心の構造と俳句五七五、和歌五七五七七のリズムとの対

図 128-A



称が可能となり、それによって俳句と和歌のリズムと言霊字が明らかに結ばれる、とかねてより思っていたのだが、その予測は今、現実的に証明されたのである。

天空の雲と地上との双方の電気が感応すれば雷(かみなり)が発生する。太古の日本人の祖先は、人の言葉も雷(神鳴り)と表現した。人と人が、または人と物とが感応同交を起す時、言い換えると主体と客体とが感応した時、主体の側の人の頭脳内の先天構造(神)が動いて言葉が生れる。言葉は神鳴りという訳である。その神である人間精神の先天構造を図示すれば次の様になる(図 128・A)。この先天が主体と客体の感応同交により、即ち主体と客体との間が人間の根本智性である八つの父韻によって結ばれて三十二の現象子音を生む事を五十音言霊図によって示せば別の(図 128・B)が出来る。

太古の日本人が言った「神鳴り」とは、心の先天構造を示す図 128・A の先天十七言霊が活動を開始することであり、それを更に具体的に表わせば、図 128・B の如く天空である主体アオウエイと地上であるワヲウエキの間を、雷光であるタカラハサナヤマの八つの父韻が光で結んで、三十二の現象子音という雷鳴を轟かす事であると言えよう。

以上は日本人の祖先

先が神鳴りと表現した人間の生活の営みを担う言葉一般について言った事であるが、その人間の生の営みの一つである芸術活動の俳句と和歌が「神鳴り」とどう繋がっていると言えるのであるうか。それは今まで会報誌上で数

図 128-B

宝音図

ウ	ヲ	エ	ワ	イ	ニ	シ	ヒ	リ	キ	チ	イ
											エ
											ア
											オ
											ウ

三十二子音

回「俳句と和歌」の題で発表したように、俳句とは人間の芸術活動が現れ出る母音言霊アに、芸術を創造する先天的な

人間智性タカラハサナヤマの八父韻が刺激を与えることによつて作られるのであるが、その芸術活動の根本原則そのままが十七文字の俳句となるといふ、人間の言葉の原型即俳句という日本独特の芸術であり、和歌とは雷光が光つて、雷鳴が轟く後天現象の典型である三十二の子音原則そのまゝを写し出した、これもまた日本独特の芸術なのである。

ここまでの所は今までの会報誌上の俳句・和歌で明らかにして来た事であるが、今回のテーマは俳句十七文字・和歌三十一文字の内訳である五七五、五七五七七のリズムの問題である。この事に関しても問題を念頭に提起した上で、私の心の内に歌心が湧いた事であるから、意識に上る以前の心の中のその歌心の雰囲気を感じて、心より現れ出て来た俳句との比較を試みるならば、容易に俳句と和歌の言葉学上のリズムの構造は掴み得る筈である。そう楽観しながら、その後の日々を過したのであるが、芭蕉の俳画の前で閃めいた五七五のリズムの意味が、薄ぼんやりとしたものから次第に鮮明な形となつてまゝとまつて行つた。

そのイメージが一つの構図となつて出来上る出来事が十月三十一日の夜にあった。これもテーマの出題者であるいわかね氏絡みであった。かねていわかね氏より同氏の「語

りの会」の招待切符を頂いていた事とて、当日夕方から「語り」を聞きに出掛けて行つた。時は十月三十一日、午後六時三十分より九時まで。場所は東京世田谷の下北沢駅近くの、その名が「劇」といふ小劇場である。時間が時間とて、少々早目に出掛けて行き、近くの寿司屋で夕食を摂つて劇場に入った。私とその日まで見た事もない小さい劇場である。一階と二階に分れている様に見えるが、全部でも多分百人とは入れまい。何しろ狭いから前の客席との間に足を延ばせる余裕がない。勢い五六列しかない後方の座席が急角度に迫り上がっている。客席の前方、一番低い所に五センチ程の高さのさして広くない台(円形に見えた)が据えてある。演者の席であろう。窓は一つもない。劇場空間が一つの球形の様に見える。演題は明治時代の作家幸田露伴と巖谷小波のおとぎ話・童話である。うす暗い照明のせいか、劇場空間が一つの宇宙を形成する如くである。「語り」に合わせる伴奏は笛であつた。

客席は満席となつた。定刻、演者であるいわかね栄氏が正面舞台脇に姿を現わした。よくは分からぬが、緋模様かすりの昔よく見掛けたモンペ姿に見えた。演者の挨拶に続いて演題の解説があり、次に空間は暗転した。数秒の後、小さ

い舞台上にスポット・ライトが当り、そこにいわかね氏一人が座っている姿があった。「語り」が始まった。

「朗読」は小説の文章を読む。「語り」は小説の文章を読んで暗記し、実演では本を持つ事なく物語る。読むのと語るのとは究極では同じになるであろうが、実際は際立って違ってくる。本を記憶して暗誦することによって演者の言葉と思想が聴衆に伝わる度合が濃くなって来る。「語り」は小説の棒読みではなく、一人芝居に近い。それは一種の創作活動だと言えよう。言霊学による歌心のリズムに関心を持つ私にとって「語り」の演者の言葉とその気持がはつきり読みとれる点が大変参考となった。

「語り」が進むにつれ、いわかね氏の熱演によって劇場は全く一つの宇宙空間となった。芸術を生む言霊ア次元の宇宙がはつきり観取されるようになった。劇場「劇」が正に五音言霊図を形成した。先に揚げた図128・Bを再び御覧下さい。スポット・ライトの当る舞台上に唯一人座っている演者いわかね氏は音図に向かって右側のアオウエイ五母音である。「語り」に聞き入る聴衆はワヲウエエの五半母音である。

演者と聴衆との間を結んで一つの芸術的雰囲気を感じ上げるものは、演者が発する「語り」の言葉である。だからその

演者の「語り」は当然ア次元宇宙に働きかけて芸術作品(此処では「語り」を生む人間の根本智性のリズム八つの父韻に裏付けられている。その配列はタカラハサナヤマである。

「語り」が進行する劇場の雰囲気はこの様に感じ取ることが出来た時、芸術創造活動の主体(此処ではいわかね氏)の活動のリズム、一瞬一瞬の言葉を生み出して行く演者の心のリズムである八父韻の一つ一つが順を追ってはつきりと理解されて来たのであった。そのリズムを形成する八父韻はタカラハサナヤマである。そこでタカラヤマまでのリズムを「語り」の演者の心中を探ることによって説明して行く事にしよう。

・父韻タ(チ)

どんな名優も芝居初日明け前は体が震える程緊張するという。「語り」は数十分乃至数時間、本なしで語る。舞台上がる前に幾度か、否幾十度か台本を読み、暗記し、繰返し語りを練習するであろう。もう大丈夫だと思っても初日が近づけば緊張し、「舞台の途中で台詞を忘れたら…」の不安も付きまとうに違いない。出番が迫ってくる。さあ、出番という時、演者の心の中はすっかり白紙となる。「もう

成るように成れ」である。演者は勇んでスポット・ライトに照らし出される。演者は「ター」と舞台上の上って行く。父韻タ(チ)とは宇宙全体がそのまま姿を現わす韻と説明されている。劇場「劇」の宇宙に言霊アの主体宇宙が無我のいわかね栄氏となつて姿を現わした事である。主体宇宙が初めに吐出されるか、どうか「語り」の成功を占める第一の要諦である。

・父韻力(キ)

この父韻は心の宇宙の中から、一つの経験を中心を掻き繰る韻である。ここでは勿論今日の演題である幸田、巖谷の小説である。

・父韻ラ(リ)

これは心の動きが宇宙空間に螺旋状に発展・伸長して行く韻である。演者は初めにこの小説を読み、その節々の内容・状況・心理についての感想・解釈がどんどん脹らんで行くであろう。

・父韻ハ(ヒ)

その結果、「ここはこういう解釈の仕方で行こう。また

ここは……」と言葉ではつきり決定されて来る。父韻ハは心の球形の表面に言葉となつて完成する韻である。

・父韻サ(シ)

「よし、この解釈で間違いない筈だ。これで幸田・巖谷両先生の文章の意義を的確に語ることが出来る。」父韻サは心の中に意図が落ち着く韻である。

・父韻ナ(ニ)

「私は以上の準備によつて、聞きに来て呉れる方々にこういう事を主眼に訴えて行こう。そして〈語り〉というものの意義を理解して頂こう。」ここで役者魂が出来上る。父韻ナは行動の名目となるものが心の中心に煮詰まる韻である。

・父韻ヤ(イ)

この父韻は主体の心が(へいやか)に客体方向に力を増して迫って行く韻である。演者の「ナ」の意図・心意気が高揚して行くことである。

・父韻マ(ミ)

かくて演者の持つ全能力、全努力を賭けた演技が言霊ワ

の宇宙、半母音ワウエキである客席の聴衆の心に結び付き、演者の心全体が聴衆に訴えかける事となる。父韻または結び付く韻である。ここで演者と聴衆の心が一体となるならば、「語り」は成功というべきであろう。

心の究極の要素である言霊、その言霊の動きを数によって示したものを数霊カズタマという。「語り」に於て主体である演者アオウエイと客体である聴衆ワウエキを結び父韻タカラハサナヤマの全活動は数霊によって五八五と示される。けれど実際の父韻の数霊は七である。何故なら芸術の創作活動に於ては、父韻タは主体五母音宇宙がそのまま現象となつて現われ出る韻であるから、主体である五母音と父韻タは一体であり、実際の父韻総数の数霊は七となるからである。それ故に芸術創作活動を現出する心のリズム、即ち数霊は五七五だ、と言う事が出来る。

俳句十七文字の芸術に於てはどうであろうか。「語り」は主体である演者が客体である聴衆に語りかける。俳句の創作は俳諧師が自然に、または物に人の心に向き合う事から始まる。俳句の創作の経験のある方は是非その創造する自分の心の中を窺つて見て頂き度い。自我主体アオウエイに

対する客体となるものは種々に交つても、主体と客体とを結び主体の心の意志のリズム、タカラハサナヤマの父韻配列は、筆者が劇場「劇」でのいわかね栄氏の演技の中に観察した時のそれと少しの相違もない事を発見するであろう。

初めは何もなかった芸術の宇宙が、俳諧の創作活動が始まると同時にアオウエイの主体と、ワウエキの客体に分れ、それぞれが主体の創作意志のリズム、タカラハサナヤマに結ばれ、作り出された十七文字五七五のリズムによって作つた人の心と創作された俳句が一体となるならば、その俳句は名句と呼ぶに相応しいものと言える。

しかも、俳句は、永遠であり無限である宇宙の先天構造を構成する言霊数十七と同じ十七文字によって作られ、その十七文字によって表現される俳句の情景が同時に先天宇宙の無限・永遠と、その構造のリズム五七五を見事に写し出すという極めてユニークな日本語ならではの独特な芸術なのである。これも日本語の「言霊コトダマの幸倍ちかばいへ」と言うべきであろう。

貞享三年（一六八六）春、芭蕉は「古池や 蛙飛び込む水の音」の句を得て俳句の心を描んだと謂われている。情景だけを思い浮かべれば、何の変哲もない風景であるが、

それが五七五、十七文字に綴られる時、生命の幽玄さ、永遠と無限が、また同時に風景の実相がもの見事に写し出される。俳聖芭蕉の名と共に、この句も永遠の作品となった。この句を得た時の芭蕉の感動を描いた野上彌生子氏の小説を数十年前に読んだ事があった。俳聖が俳句の心を掴んだ瞬間の消息を見事に描写した筆力を今でもはつきりと記憶している。

「古池や 蛙飛び込む 水の音」いや、全く御見事、御見事。

最後に和歌の事に触れよう。和歌三十一文字は俳句の五七五の次に七七と七が二度続く。結局、主体と客体とを結ぶ父韻の懸橋が合計三回繰返される。それによって生れ出る後天現象子音の濃度が増し、先天の濃度が薄れて来る。俳句は十七文字の描写する情景の裏に十七言霊による宇宙実在が汲み取られ、和歌は三十一文字の描写する情景を克明にする後天現象要素の三十二の言霊子音によって裏付けられている。和歌三十一文字が現象子音の総数三十二に達しないその一数とは、和歌の作者その人の一なのである。これも三十二子音言霊原理の「幸倍へ」と呼ぶ事が出来る。和歌も日本語ならではの独特の芸術なのである。

話が理屈っぽくなった。美味しい話で文章を結ぶ事にし

よう。芭蕉記念館へ行く最寄のバス停の名、高橋は近くの小名木川に懸かる橋の名である。その橋の袂たもとに「伊せ喜」なる泥鰌屋がある。現今流行の減塩・減糖何処吹く風と昔ながらの江戸情緒たっぶりの柳川鍋を食わせて呉れる。日本酒と共に漬き頃のお新香に御飯、絶品である。芭蕉の「春もやゝ」の風趣を今度は舌で味わって見ては如何であろうか。

(終わり)

【収載】第百二十八号(平成十一年二月)

●人類歴史と言霊学

アイウエオ五十音言霊は常なる今・此処に存在し、活動して、人類文明を創造している。これをイの間(今)といい、いの道(生命)という。禅語で「一念普観無量劫、無最劫事即今如」といわれる。この今に存在する世界の出来事的一切を言霊原理の篩(ふるい)にかけ、天照大神(言霊エ)、月読命(オ)、須佐男命(ウ)の三つの道筋に色分けして、その彩を言霊才段の父韻(カタマハサナヤラ)の配列に沿って結んで行けば、人類の過去の因縁・来歴即ち歴史の実相が眼前にドラマを見る如く明かとなる。次に篩かけられたすべてを、言霊エ次元の父韻(タカマハラナヤサ)の配列に基づ

いて結んで行けば、人類歴史の将来とそれを実現するための方策（べし）が心中より湧き出て来る。この様な言霊原理の活用を言霊の幸倍はと呼ぶ。その予告は歴史上の事実となつて証明される。

【収載】第百三十五号（平成十一年九月）

●君が代

最近「君が代」の歌を国歌として法制化するに当り、その是非が国会やマスコミで議論された。その是非は脇に置いて、アイウエオ五十音言霊学の立場から「君が代」の問題を掘下げて見ることにしよう。

「君が代」の歌「君が代は千代に八千代にさざれ石のいわおとなりて苔のむすまで」の原典は、醍醐天皇の延喜五年、（九〇五年）紀貫之（きのつらゆき）等によつて選上された勅撰和歌集の初めである「古今和歌集」巻七の中の「賀の歌」の巻頭の歌（よみ人知らず）である。両者の違いは賀の歌が「わが君は……」と始まるのに対し、君が代は「君が代は……」と始まる事で、その他は相違がない。

先ずは言霊学に基づいて歌の意味を解説しよう。言霊の学（コトタマのmanaび）は今より二千年前、崇神天皇の時そ

の実体は封印され、社会の表面から隠没した。しかし政庁であつた宮中や公卿・役人の間では口伝えによつてであろうか、平安時代の初期頃までは言霊の学は全くは消えてなかつたようである。その証拠が「古今和歌集」である。この歌集の中には三十一文字の叙事・抒情の歌の中に言霊の原理が折り込まれているものが散見出来る事である。そして「新古今和歌集」（一二〇五年）となると、言霊の原理は全く姿を消している。この事から「君が代」の原歌が作られた頃には、言霊原理はまだ完全には姿を消してはいなかつた事が推察されるのである。

以上の事を頭に留めて君が代の言霊学的解釈に入ろう。

先ずは「君が代は」または「わが君は」の君とは何か。現代では君臣と言つて民に対する君、国民に対する天皇の意味と解するのが常識であろう。しかし布斗麻邇の原理が政治の鏡であつた日本の太古はそうではなかつた。隣の中国の昔の言葉に「君子は世に先んじて患い、世に後れて喜ぶ」とある。聖（霊知り）である王は世の中の政治がマンネリ化して世が乱れようとする前に、その兆候を察知して早々と対策を立てる。その功によつて世の乱れは未然に防ぐ事が出来た。この様な世に於ては民衆は政治を行つてゐる者が誰で

あるか知らずに済む。世は常に天下泰平なのである。この様な上の行いを無作の作という。民衆に王が何をしているか知らず事なく行う政治なのである。

では「君」とは何か。伊耶那岐・伊耶那美の岐美である。

古事記言霊百神の中の言霊イとキである。岐美二神は宗教で創造主神と呼ばれる人類文明創造の主神であり、言霊布斗麻邇の神である。人類を構成する全人間の頭脳の中核に位して人間の一切の機能を統轄し、人類全体の文明を創造する。その全能の原理を継承・自覚し、それを政治に活用する責任者が天津日嗣天皇(あまつひつぎスメラミコト)である。

「千代に八千代に」とは、数字にこだわれば千年も数千年も続く、の意となる。永遠にという事。言霊布斗麻邇に基づく人類文明創造の経綸の世は永遠に続くという事である。

「さざれ石のいわおとなりて苔のむすまで」は一般に「永遠に続く」事の修飾語と思われている。しかし同時に、古今集の時代まで存続していた歌による叙事の他に三十一文字の中に言霊原理を歌い込む事があるのに気付かなければならないであろう。それは何か。君が代の永遠であることと同時に、その永遠である理由として「君が代」の政治の内容

が秘められている。即ち「君が代」の政治とは如何なるものか、の内容の説明文でもあるのだ。その説明に入ろう。

「さざれ石」とは細かい石のこと。細かい石とは勿論譬え言葉であって、その指さすところは世界全国各地に於て言挙げ、即ち主張される意見・論点・アイディア・学問等のすべての事である。その主張は千差万別、種々様々であるが、それ等は皆人類全体の文明を創造して行く材料である。創造の生命(言霊イ)が静まっている(言霊シ)。それぞれは小さい主張(さざれ石)かも知れないが、その総量が人類文明創造という大目的の下に統一されるならば、すべての生命は生かされる事となる。天津日嗣天皇(スメラミコト)のスメラとは統べる、統一するの意であり、何を統一するかと言えば、全世界から主張される言葉、それには個々に生命が籠っている御言である。岐美の自覚者である天津日嗣天皇はそれらの御言をすべて取り入れて文明創造に操り入れて行く。この事を仏教では攝取不捨という。

「いわおとなりて」の「いわお」は「五十葉穂」で五十音言霊の意であり、「なりて」とは五十音言霊の原理即ち八咫の鏡に懸けられて文明創造上の時処位を得ることを指している。これを伊勢神宮の内宮・外宮に譬えて説明しよう。

伊勢神宮には内宮と外宮があり、両宮併せて伊勢神宮である。内宮には人類の文明創造上の最高規範である五十音言霊による人間精神の構造図、八咫の鏡が祭られている。

外宮は世界各地から産出する種々の主義・主張・学問・発明その他の文化(さざれ石)を内宮の五十音言霊の鏡に照らし合わせて、世界文明創造上の時処位を決定し、その処を得しめる場所である。「いわおとなりて」とは五十音言霊図上の処を得ることに他ならない。

「苔のむすまで」の苔は子氣(こけ)即ち子音である現象の氣、言い換えると「世界文明創造という現象が産出(むす)されて行く事となるまで」の意である。「さざれ石がいわおとなり、苔がむす」までの言霊操作を古神道で禊祓という。天津日嗣スメラミコトが言霊原理に基づく世界文明創造の行法のことである。

かくて「君が代は」または「わが君は」の歌の真意は次の如き意味となるであろう。「言霊イとキの世界文明創造原理の自覚者である天津日嗣スメラミコトの御代に於ては千代に八千代に次の如き政治が行われるであろう。即ち世界各地に於て言挙げされる種々の文化が言霊五十音の鏡に懸けられて、各々その処を得しめられ、それぞれに世界人類の

文明を創って行くための役目を与えられ、その時処位に応じた文化の花を咲かせて行く。天津日嗣の経綸とはかかるものなのである。」

以上、言霊布斗麻邇に則り「君が代」の歌の意味を説明して来たが、最後にその意味による「君が代」の現時点の存在意義について一言しよう。

アイウエオ五十音言霊の原理に基づく日本国肇国以来、邇々芸・彦火々出見・鶉草葦不合の三皇朝が続いた約五千年の時代は「君が代」の歌の意義が正確にその政治に適用されて人類の精神文明時代が創造されていた。仏教的に言え、ば、「君が代」の歌の真意義の正法時代という事が出来る。次に神武天皇頃より昭和天皇に至る神倭皇朝の二千七百年間は、言霊原理の政治への活用が停止され、原理は伊勢神宮の御神体という器物として祭られたから、正に像法時代という事となる。物質科学文明創造のための方便の時代であった。

昭和天皇の昭和二十一年一月の天皇の神聖放棄の宣言は、「君が代」の真意義である言霊原理も、またその象徴器物である三種の神器の神話をも否定してしまつたから、現在の天皇位は名実共に言霊原理とは無関係の地位となつ

た。仏教で謂う末法時代であり、「君が代」の真意義とも、天津日嗣スメラミコトの高御座たかみくらとも関係がなくなつた。今は正しく天皇空位時代である。

政府が「君が代」を国歌なりと法制化しても、またその「君が代」の君を如何に言葉尻を合わせようと苦心しても、喜ぶのは戦前の懐古主義者か右翼の一部の人以外にはないであろう。大部分の国民の心は「冷めていゝ」のである。何故なら、日本国民の心の奥底にある何か「君が代」の歌の真意義と現在の天皇位との間に矛盾と戸惑いを感じてゐるからである。

然しながら、「君が代」制定の意義が全くないわけではない。私達日本人が日常使つてゐる日本語の中に秘められた言霊の原理を謳歌する「君が代」の意義と現天皇位の内容との断層は近い将来、皇室と日本国民との間の認識の中核に地氾りの変動を惹き起す切っ掛をもたらず事になるかも知れない。その大揺れの彼方に日本天皇が新たに日本伝統の天津日嗣天皇（スメラミコト）として立ち上る日が来る事を期待する事が出来る。天津日嗣の世界文明創造の経緯とは、三千年以前よりこの事をも視野に入れた言霊原理に基づく遠大にして緻密な計画なのである。

【収載】第三百三十六号（平成十一年十月）

●ラビ・トケヤーの本を読んで

今年九月の或る日、会員K氏が一冊の本を持参された。『聖書に隠された日本・ユダヤ封印の古代史（失われた十部族の謎）』徳間書店刊、二九八頁）である。本の題名を見て「いよいよおいでなされたか」と思った。以前からこの題名のような趣旨の事が日本のマスコミに賑やかに登場する日が近い事を予想してゐたからである。更に著者名を見た。ラビ・マーブイン・トケヤーとある。二十数年前、ある事でその人と数回会つた事を懐かしく思い出した。早速目次を開いた。本の終りに近い処（二四〇頁）約一頁を費やして「言霊」という章があつた。参考のためにその抜粋を載せよう。

言霊

日本の古神道には、「言霊ことだま」への信仰がある。これは、言葉単なる言葉として見るのではない。言葉には不思議な霊力が宿つてゐるという考えである。私のもとにも、神道家から贈られた言霊に関する本がある。それを読むと、そ

の細かい内容はともかくとして、そこに展開された言霊学は全体的にユダヤ教のカバラ哲学に非常によく似ていると、感じさせられる。カバラは、ユダヤ教の神秘主義の一派で、やはり言霊を信じているのである。(傍線は私)

しかし、たとえ神秘主義まで行かなくても、聖書思想は確かに言霊を信じているものである。なぜなら創世記の冒頭に、神が「光あれ」と言われると光があった、と記されている。神の言葉は言霊である。それは単なる言葉ではない。霊力を宿した言葉である。人間においても、信仰を宿した言葉、心のこもった言葉には霊力がある。

ユダヤ教からカバラが生まれ、日本神道からは言霊学が生まれた。このことは両教、またユダヤ人と日本人に、根本的に似たメンタリテイがあることを示しているように思える。……

以上がラビ・トケヤーの本の「言霊」の章の抜粋であるが、この文章の始めにある神道家とは実は私の言霊学の師小笠原孝次氏と私である。言霊学の本がラビに渡った時の事を思い出すままに次に述べよう。

当時小笠原氏は東京都渋谷区幡ヶ谷に住まわっていた。

そしてその自宅には毎日のように若い欧米人が言霊の話を聞きに訪れていた。先生はそれ等の外人に達者な英語で言霊の話なをなさっていたのだった。またその時より二年程前、外人の訪問が多くなりそうな気配に備えて、言霊学講義の教科書となる先生の名書『古事記解義言霊百神』の書(昭和四十四年刊)の英語訳が計画され、私にその相談があった。私は早速心当たりの英語の教師をなさっている二、三の方々に『言霊百神』の英語への翻訳を依頼した。ところがお願いの時には快く承諾された方が二、三日経つと決まって断りの電話をかけて来る。理由を尋ねると異口同音に「翻訳するべきその日本語の文章が理解し難い」の答えが帰って来た。言霊学が体系的な学問の書として初めて世に出されてまだ数年しか経っていないのだから、それも当然かも知れなかった。

遂にその翻訳の役が私に廻って来る羽目となった。それから生業そっちのけ、辞書と首っ引きの私の翻訳作業が始まり、約一年半の作業の結果『言霊百神』の英訳が完成した。英語の題は「KOTOFAMA (THE WORD SOUL) THE PRINCIPLE OF ONE HUNDRED DEITIES OF THE KOIKI」である。英訳原稿をまとめ英文の校正をどうやる

か、先生宅へ向かった。翻訳の引受手がなかった以上、校正をやつて下さる方もいないに違いないからである。先生のお宅に着いたのは午後二時頃だったと記憶している。先生は体ががちりした鬚髭の外人と英語で談笑しておられた。その外人が東京の広尾にあるユダヤ教会のラビ・マーブイン・トケーヤー氏であった。

私は先生に言霊百神の英訳が出来た事、その校正をどうしたらよいか、を申し上げた。するとトケーヤー氏はその原稿を見たような様子でのぞき込んで来た。先生は早速英語でその英訳原稿の経緯をトケーヤー氏に告げた。すると彼はほとんど間髪を入れずに「私でよかつたらやつてあげましょう」と言ったのだった。先生も私も渡りに舟と彼に校正を依頼し、原稿を渡したのだった。

一ヶ月余経った頃、トケーヤー氏より校正が終わったから原稿を取りに来てくれとの電話があり、私は初めてユダヤ教の教会なるものを訪問した。三十分程会話をして彼がほとんど日本語を知らない事を知った。そして原稿を渡された。頁を繰って見ると僅かな訂正しか見られない。五頁に一字位、そのほとんどが前置詞を三〇に等の他は何も直していない。怪訝な顔の私にラビは次の様に話した。

「この原稿の文章は大層硬い文体で、アメリカでは数十年前まで使われた文体です。今の人はもっと易しい言葉を使います。けれど言霊学の内容を知りたいと思う人は、アメリカ人でも知識階級の人に違いありませんから、この文章のままでも結構理解出来ると思います。なまじっか直そうとすると反って分り難くなります。」

話の主意は了解出来た。同時に彼の話を聞いている内に翻訳原稿の校正を進んで申し出てくれた意図は主として日本の古神道言霊学とは如何なるものか、少しでも早く知ることが出来たからであることがよく分つたのであった。

その後ラビとは師のお宅で何回か会つた。彼とわが師との会話の大部分が日本の神道とユダヤ教との、儀式や服装等の類似点についてであつた事が思い出される。先のラビの新刊書の抜粋にある「私のもとにも、神道家から贈られた言霊に関する本がある」とのその本とは『言霊百神』の英訳が本となり、小笠原氏がその一冊をラビに贈つたものであると考えられる。その英訳本はまだ私の手元に数冊残っている。

それから数年後、ラビ・トケーヤーは日本滞在中の感想記を何冊か本に書き、出版してアメリカに帰つた。その中

の一冊の書籍名ははつきり覚えてゐる。『日本人は死んだ』である。

さて、ラビ・トケーヤーの新刊『日本・ユダヤ封印の古代史』が語る、イスラエル建国の事から見ることにしよう。

そもそもイスラエル人とは何なのか。紀元前一九〇〇年頃、イスラエル人の父祖で、ヤコブという人がいた。ヤコブは後に自分の名をイスラエルと改めた。彼の子孫がイスラエル民族と呼ばれる。彼に十二人の息子がいた。ルベン、シメオン、レビ、ヨセフ……等であつた。それら十二人の子孫が「イスラエルの十二部族」を形成した。十二部族の中のレビ族は祭司の部族で領地を持たなかつた。やがて紀元前一〇世紀になって、ソロモン王のもとに繁栄の絶頂を迎えた。当時イスラエル人の十二部族は、統一王国イスラエルを形成してゐた。

しかしソロモン王の死後、イスラエル統一王国は南北に分裂。王朝は二つに分かれ、「北王国イスラエル」と「南王国ユダ」とになった。北王国は「サマリヤ」とも呼ばれ、一方、南王国は「ユダヤ」とも呼ばれる。その後、十二部族のうち十部族が属する北王国は、紀元前八世紀に、東の強国アッシリヤ帝国の軍隊に征服され、アッシリヤ帝国はイ

スラエルの十部族を捕囚とし、アッシリヤへ強制移住させた。以来、北王国イスラエルの十部族は、歴史の公の舞台からは消え去つた。その彼等がいわゆる「イスラエルの失われた十部族」である。

この十部族がその後どうなつたのか、いろいろな説がある。その中で、ある学者は十部族はアッシリヤから他の国々へ移住して行き、今も世界の何処かで、無名の民として存在しているに違いないと主張する。そしてラビ・トケーヤーはこの書に於て、この移住説の意見が正しい事の主張を二百余頁にわたつて展開するのである。所謂ユダヤ民族の東進であり、現在に於ても彼等の足跡はシルクロードを中心にしてアフガエスタン、カシミール、インド、ミャンマー、中国、蒙古の各地に見られるという。

そして失われたユダヤ十部族の東進の最終目的地日本に於てはどうか。ラビ・トケーヤーは今に残る日本の風習、神道、葬式の風習、言語の類似性、伊勢神宮のカゴメ紋、から日本皇室の血統等についても詳細にユダヤと日本との類似性を説いている。その説明は日本文化の全般にわたり、これ程日本と外国との文化の比較を行った人は日本人にもいないであろうと思われる程である。そして最後には日本

の皇室にもユダヤ人の血が流れている可能性に言及している。

さて最後にラビ・トケーヤーの本の読後の感想に入ろう。ラビの論法は誠に巧妙である。それはユダヤの秘儀であるカバラの原理の一端を見る気がしないでもない。日本の文化、皇室の血統等に関しての主張はすべて今までの研究者三笠宮、小谷全一郎、川守英二、ヨセフ・アイデルバーグ、佐伯好郎(年代順不同)……等々の論説を多数引用し、決して自説を述べない。それでいて言外に「日本民族はユダヤ民族の後裔である」という印象を読者の心に強く焼きつけて来る。

将来、日本とユダヤとの関係について歴史の新しい研究の眼が注がれるならば、ラビのこの書の中の主張の大部分が真実であることが証明されるに違いない。しかしその真実性は紀元前約千年より以後についての真実である。けれども三千年より以前に地球上に起った人類歴史に於ける重大な断層にラビ・トケーヤーは勿論、大多数の歴史家も気が付いてはいないのである。それ故にラビは失われたユダヤ部族がどうしてかくも大挙して日本に来たか、の理由を明らかにしていない。分らないからだ。若しその時の人類の精

神史上に起った大転換に気付くならば、ラビの「祖はユダヤ、末裔が日本」の日ユ同祖論は逆転するであろう。それを必要にして十分に証明するのは言霊布斗麻邇以外にはない。

それ故、ラビは本の中の「逆日ユ同祖論」の章で三千年より以前の歴史を伝える日本の「竹内文献」をけんもほろろに「偽書」と一言で片付ける。ラビはその本の頁の九十九パーセントを自分以外の歴史研究者の説を引用し、自らはその裏に隠れて「日本のルーツはユダヤなり」の主張を日本人の頭脳に注入する。誠に巧妙である。けれど「舌が滑ると本音を言う」の諺に漏れず、残りの一パーセントの頁で自らも知らない「心の深淵」をチョロリと露呈してしまった。一つは「言霊」の章でユダヤ教の秘儀である「カバラ」の実在とその内容の「さわり」を漏らした事。もう一つは「竹内文献」の否定の露骨さで反って彼の論拠の薄弱さが浮き彫りになった。

そう断言出来る根拠は何か。言霊布斗麻邇の存在である。ユダヤの原理カバラは言霊ウオの次元に限定されたものであり、日本の歴史創造の布斗麻邇の原理はアオウエイ五次元、即ち人間性能の全体にわたる真理なのだからである。

日本・ユダヤ双方の原理の全貌の比較が行われる時、人類は初めて第三の文明時代に一步を踏み出す事となる。

(終わり)

【収載】第百三十八号(平成十一年十二月)

平成十二年

●人類開眼(伊勢・石上紀行)

平成十一年(一九九九)十月一日より十一月一日にかけての言霊学のまなびによって、日本神話の予言である天之岩戸開きと天照大神の御出現が現実のものとなった事が自覚・証明されたので、急に伊勢神宮と石上神宮の参拝を思い立ち、旅支度もそこそこに家内と共に東京を朝七時五十分発の「のぞみ号」で旅に出たのは十一月四日の事であった。列車が横浜を過ぎて間もなく青空の下、八合目程より上が白雪を頂いた富士山が見えて来て旅の平穩を約束して呉れている様であった。

東海道新幹線のぞみ号はひかり号より振動が少ない。座席をやや後方に倒し、くつろぎながら、心は何時しか過ぎし一ヶ月余の言霊学勉学の課程を思い起していた。

言霊学の先師、小笠原孝次氏の随想に次のような文章がある。――

我とは人類である。わが本具の性能は人類本具の性能であり、人類本具の性能は我が性能である。人類本具の性能を開頭する道は我が本具の性能をみずから開頭する以外にはない。

言霊布斗麻邇を学び、更に内省によって自らの本具の性能を知り、心中に天の御柱であるアオウエイ五母音の自覚の柱を打ち樹てたならば、古事記のいわゆる「底つ石根に宮柱太知り」が成就する。その自覚に基づいて大御心といわれる愛と慈悲(言霊ア)から全人類の行く末を思う時、「我とは人類であり、人類とは我である」との古事記の「御身」の境地が完成する。この境地はよく母親がその子に対する心に譬えられる。母は自らの身体よりも子の事を第一に思う。しかし御身とは人がその子を思う心ではなく、人が人類全体を即わが事と思う心のことである。

御身おほみの境地に於ては我と人類とは一体であり、人類を見ることは我を見ると同じであり、我を見ると人類をみると異なることがない。この時、人自らが言霊ウとオの次元の経験知を自我なりと思ひ込んで来た罪業と、人類全体の弱肉強食の生存競争社会の三千年の罪穢の二つが共に、生き通しの神であり人である自らが過去に播いた種によって生じた結果として運命共同体を形成している事、その運命の行き着く果が死をまぬがれ得ない事を知る。その自らと人類全体の死を明らかに見た時、言い換えると、今までの自

分の、そして人類の所有する経験知識では解決不可能な事態に立ち到つた事を知る時、自分も人類も今まで考えていた以上の大きな大きな力、皇祖皇宗の御経綸の中に生かされて来た事を悟る。そして一切の罪穢を抱擁し、撰取して、死を生に転換する事を可能にする光の言葉が人自らの中から**迸り出る事**を知ることとなる。それが言霊父韻タカマハラナヤサの**閃き**が生み出す人類歴史創造の至上命令である。この行法を古事記の禊祓といい、「高天原に千木高知りて」という。

「人類はこれで救われる。生き続けることが出来るのだ」という感動と歓喜が腹の底から胸から頭を突き上げるようにこみ上げて来たのだ。石上神宮の鎮魂歌

みたまあがり去にませし神は今ぞ来ませる。
魂箱もらて去りたるみたま、魂返へしなせそ

の成就の時が来た。

この鎮魂歌にある魂箱の神こそが、アイウエオ五十音言霊布斗麻邇に基づく人類歴史創造の神、天照大神である。

この神の言葉が生きた人間の魂の底から日常の会話の如く発せられる事、それは天の岩戸を開き、伊勢神宮正殿の扉

を開いて天照大神の生きた人間の魂の中への御出現である。三千年の暗闇を突き破って、言霊の光明が新しい時代を築く朝明けの時である。その時が今来たのだ。

こう思うと、感動の波が改めて胸中にこみ上げて来るのを感じる。新幹線の「ぞみ」の車内放送がもう直ぐ名古屋到着を告げていた。……東京より一時間四十分で名古屋である。早くなったものだ。

名古屋着九時三十二分、近鉄伊勢線賢島行き快特名古屋発九時五十分に乗換えて伊勢に向かう。伊勢市着十一時、直ちに外宮に向かい、外宮参拝は十一時三十分であった。駅前商店街の一膳飯屋で昼食後バスで内宮へ。内宮参拝は午後一時であった。外宮・内宮とも参拝の時「高天原成彌栄」を三唱し、八拍手の後御神霊に次のように申し上げた。

「皇祖皇宗の言霊布斗麻邇の原理に基づく人類文明創造の御経綸の下、第一精神文明に次ぐ第二の物質科学文明創造の時代が目度度く終了いたしました。次に来るべき第三の文明時代に転換するための言霊原理による禊祓の修法を今ここに自覚・確認する事が出来ました。これ即ち大神様の天の岩戸開きであり、伊勢神宮の奥深き処より生きた人間

の魂の中への御出現であり、現人神あらひとがみとして第三文明建設開始の時と拝察いたします。長い間神宮正殿という岩戸の中の裏のお働き、さぞ御窮屈であった事でしょう。いよいよお出ましの時、誠にお目出度う御座います。高天原成彌栄」

以上、内・外宮とも参拝は無事淡々と終わった。伊勢神宮の森は静かで、神域は清らかであり、五十鈴川の水は澄み、空は青く高かった。

伊勢神宮内・外宮の参拝を終え、バスで近鉄五十鈴川駅に出て、電車でその晩の宿泊予定地の鳥羽に向かった。鳥羽駅前の観光案内所で決めた鳥羽グランドホテルの部屋窓からは、夜空にまたたく星の数が三十個以上も数えることが出来た。私の住む東京都心では余程空気の澄んだ夜でも二、三個を数えれば良しとしている。素晴らしい。鳥羽湾の静かな海、点々と明滅する漁火、旅でしか味わい得ぬ美しい夜景である。「明日もよい天気だ。」

翌朝、六時前に目が覚めた。空の一面が白んで見えない。「ホテルの窓が東に向いている。日の出が見えるかも知れない。」家内に声をかけ、二人並んで暫し東を眺めていた。六時三十分、素晴らしい日の出であった。鳥羽湾の彼方、

小さな鳥影の向うから太陽が昇った。空、雲そして海が紫、青からピンク、燈、赤、金色……と輝いて、その中心からピカッと太陽が顔を出した。外気から部屋の中まで光が満ち躍っているようだった。瑞光とか、瑞兆とはこの事を言うのであろうか。

五日前九時十分鳥羽発の近鉄大坂行きで鳥羽を離れた。途中桜井駅でJR線に乗換え天理に向かい、石上神宮に参拝の予定である。前にも述べたが、伊勢の内宮は言霊五十音をもって人類文明創造のための理想の精神構造(天照大神)を表徴する器物である八咫の鏡をお祭りする宮であり、外宮は世界各国の精神的産物の一切を八咫の鏡に照らし合わせ、人類文明の内容として時処位を決定し、抱擁摂取して行く働き(豊受姫神)をお祭りする神宮である。そして今日お詣りする石上神宮は、伊勢内宮の五十音言霊を活用して人類文明を創造して行く、その活用法(布留ふりぞの御魂)をお祭りする神社である。この伊勢神宮の内・外宮と石上神宮は天照大神の岩戸開きの確認に最も関係深いお社という事が出来る。

電車は伊勢平野と奈良盆地の間の山稜地帯に入った。人里の少ない美しい山林の中を進んで行く。そのやや紅葉し

始めた林に眼をやりながら、私の心は昨日の伊勢内・外宮参拝のことを思い出していた。

昨日は家を出発してから一日中、交通の連絡はスムーズに行き快適であった。天気も上々、伊勢神宮の参拝も順調に済んだ。過ぐる一ヶ月余の期間、私の心に天照大神の禊祓の修法の自覚を確認し、大神の御出現を知った時は全身が震えるような感激と喜びがあった。二千年の間、大神が伊勢神宮の本殿に信仰の対象の神と祭られ、第二物質文明の時代を飽くまで影の経綸の立場で実行なさったのであり、いよいよ機熟し生きた人間の魂の中に目を覚まされ、現つ神と現われましたことを今、現実に確認出来た感激と喜びであった。だから私は取るものも取り敢えずこの参拝の旅に出て来たのだった。それなのに、昨日の伊勢参拝の余りにも淡々として感激も感応もなかったのは何故か。その時、何も起らず、何も感じなかったのは何故か??

今回私の心の中に確認された天照大神の岩戸開きの出来事と私という個人との関係についていろいろ思いを巡らした。岩戸開きの実現は人類全体にとって重大な出来事である。それが確認されたことも事実である。しかし理論的にも現実としても確実な重大事を私は平然と受け止めてい

る。参拝に当たっても何の感慨も湧かない。何故か。考えは堂々巡りで果しがない。電車は乗換ええ予定の桜井駅の手前の長谷寺駅を通過しようとしていた。何故? の考えから心がふとそれて、数年前、季節も今と同じ秋の頃、家内と二人で紅葉のさ中、長谷寺の長い階段の廊下を登った姿を思い出した。あの時の紅葉は美しかった。新築された朱色の五重塔の色も色褪せて見える程の美しさだった。見渡す限り真っ赤な大自然の中に私達二人の姿が溶け込んでしまいう程美しかった。

そう思った時、大自然の中の小さい、小さい自分に気が付いたのであった。「天照大神の御出現の事実が大事なのであって、私との関係が大事なのではない。大神は私だけに現われたのではない。このちっげな私だけに現われたって何になるものでもない。若しそうなら新興宗教と何ら異なることはない。大神は全人類のすべての人々の魂の中に天の岩戸というベールを脱がれ、現実の生きた姿を現わしたのである。人類を構成する一人一人の人間の思惟機能の中枢に蘇り、目を覚まされたのだ。だから言霊学を学び、聖書に謂うところの「目を覚ましてゐる者」ならば誰でもその事実を手にとる如くに自覚し、証明することが出来る時

節が到来したのである。」故に今よりは、世界の歴史はこの既成事実を歴史転換の基礎土台として渦を巻き始めることとなる。この既成事実が出发点となつて、言霊原理の光がこれから起るであろう一切の歴史的事件の上に光の網をかぶせることとなる。「人類は救われたのだ」。この大きな光の網を古事記は弥都波能売の神と呼んでいる。そしてその網をかぶせ覆うことを和久産巢日の神といい、その実際の働きを豊宇気比売の神と呼ぶ。伊勢外宮の祭神である。

桜井駅でJR線に乗換えて大神神社のある三輪を経て天理市に着いたのは十一時十分であつた。昼食後、駅前商店街を通り抜け、建ち並ぶ天理教関係の建物の前を過ぎて駅より徒歩約三十分で目指す石上神宮に着く。この社には今までに数回参詣しているが、何時も境内は静寂を保ち、社殿は豪華ではないが整然としている。創建は遠く、皇祖皇宗の御経綸に關係する種々の神宝が伝えられている事でも有名である。

私と家内は拝殿前に進み「高天原成彌栄」を三唱し、伊勢神宮の時と同じ報告の言葉述べた。心中の疑問が氷解した事もあつて、報告の言葉は淀みなくすらすらと述べるこゝとが出来た。続いて石上神宮に伝わる「布留の言本」ヒフミ

四十七文字「ヒフミヨイムナヤコトモチ、ロラネシキル、ユキツワヌ、ソヲタハクメ、カ、ウオエニサリヘテノマス、アセエホレケ」を唱え、最後に石上神宮の鎮魂歌「みたまあげり……」をゆつくりと唱えた。「魂箱もちて去りたる神」が今現実に帰つて来た。生きた人間の魂の目覚めとなつて活動を始めることとなつた。一度ここに帰つて活動を開始されたからには、もう二度と隠れることはない。その活動の行法を言霊で直接に表わしたのがヒフミ四十七文字であり、最も短縮すれば「高天原成彌栄」であり、詳述すれば古事記の「禊祓」ともなる。その行法が生きた人間によつて自覚・活用される時がいよいよ来たのである。

石上神宮の参拝は五日の午後一時二十分であつた。これで今回の旅行の目的の伊勢神宮・石上神宮の参拝は終わった。何となくホツとした気持で社殿の外にある四阿で一服し、家内持参の菓子と茶でくつろいだ。新しい歴史のドラマの幕開け前の穏やかさの感がした。傍らの池に大きな鯉が数匹悠々と泳いでいた。

今回やるべき仕事は終わった。「大和は国のまほろば」奈良の盆地を歩いてみよう。石上神宮を起点として南に延びる山の部の道の散策を始めた。なだらかな起伏の山の部の

道の始まりは柿の木林の中である。赤く熟れた柿の実がたわわの畑の間を家内と物も言わずにゆつくりと歩いた。魂の故郷に帰ったような心持である。高い澄んだ空、太陽の光を心ゆくまで吸いこんだ黒い土の道、赤い柿の実を眺めながら何の考えもなく、大きく息を吸い込んで歩いた。生き通しの神である人が生き通しの国のまほろばの大地を踏んで、生命を謳歌しながら永遠の年月を旅する感じであった。その夜は天理駅近くの天理観光ホテルに泊まった。宿の窓から仰ぐ星空が美しかった。

翌十一月六日(土)は九時十八分天理発で奈良に向かった。旅に出る当初は改築、新装成った三輪の大神神社おみかみへ詣るつもりであったが、昨日桜井線の車内で「正倉院御物展」の広告を目にし、家内がまだ一度も見た事がないというので、予定を変更して奈良国立博物館へ行くこととしたのである。十一時、博物館に入り、聖武天皇、光明皇后の御物を見て廻った。土曜日だというのに館内はそれ程の混雑もなく、「現代作」といわれても通用する斬新な形と模様調の度品の数々をじっくりと見る事が出来たのだった。

午後一時、近鉄特急で奈良発、一時三十分京都有着、駅近くにある東本願寺の本堂に座って一時間程時を過ごし、十

五時十分京都発新幹線「のぞみ」で帰路についた。列車が関ヶ原から夕陽豊かな尾張平野に入る頃、私は車窓に眼をやりながら、しっかりと心につぶやいた。「天照大神、言霊タカマハラナヤサは三千年の間を破って人類すべての人々の心の底に姿を現わした。人はここに太古にあった如き人らしい人となる事が出来る。また人類らしい人類社会を作れることも出来る。人類の開眼である。人類の歴史は当然の死を越えて、輝かしい新しい世紀を築いて行くことが可能となった。言霊学によってその消息を自らの心に自覚する人のある限り。」

(終わり)

【収載】第三百三十九号(平成十二年一月)

●言霊ことばの幸倍さちばいへ三題

言霊とは人の心の最小要素であると同時に言葉の最小単位でもあるものです。その最小要素であり単位であるという事から、一見まさかと思われることがいとも合理的に成立するという事実が確認されることがあります。これを「言霊の幸倍へ」と呼びます。既刊『古事記と言霊』では、後天現象子音三十二の誕生の説明の後でこれを取り上げましたが、紙数の関係で詳しい解説は省略しました。今ここでそ

の詳細をお話することといたします。

先ず第一は先に述べました子音創生に於ける「幸倍へ」です。先天十七言霊の活動によって三十二の子音が誕生します。その三十二の子音のどれをとっても、言霊コである子音として誕生するためには、先天活動から子音誕生まで三十二の子音の活動を経て生まれて来ます。三十二の子音の誕生が、それ等三十二の順を踏む子音全部の活動によって可能となる、という奇妙な事実が成立します。その子音誕生までの三十二音の子音の活動の順序は、タトヨツテヤユエケメ・クムスルソセホへ・フモハヌ・ラサロレノネカマナコであります。以上が第一の「幸倍へ」です。

第二の「幸倍へ」はいろは四十八文字(最後のン字を除く)「イロハニホヘトチリヌルヲワカヨタレソツネナラムウキノオクヤマケフコエテアサキユメシエヒモセス」についてであります。この歌は一般に弘法大師の作と伝えられています。が、実際は言霊原理が世の中に流布・使用されていた古代の作と考えられます。この歌は四節に区切ってみますと、現代人にも理解出来る文章となります。(その区切った文の下にそれぞれ漢文の詩を添えます。)

イロハニホヘトチリヌルヲ 諸行無常

ワカヨタレソツネナラム 是生滅法

ウキノオクヤマケフコエテ 生滅滅己

アサキユメシエヒモセス 寂滅為樂

人も花も色香はかぐわしいが、直ぐ褪せてしまう(諸行は無常である)、人の住む世の中で永久にあるものが有るか(是れが物事が生まれたり滅したりする法則なのだ)、憂いの奥山を今日越えてしまえば(生まれた滅びたと色香を追いかけることを止めてしまえば)、この世は浅い夢を見ているようなもので、物事におぼれることはなくなる(人は寂光の浄土に住んで心は常に樂である)といった意味であります。

浅き夢とは、五官感覚で捉える現象の世界の出来事は現れては消える出来事であつて、永遠に実在するものではないのだ、と知る事を言っています。その事を知る時、初めて「色即是空」と果てしなく広い宇宙がわが心の本体なりと知ります。即ち寂光浄土に住む事となります。そこから種々の現象が発生して来る久遠(くわん)来(らい)変わることをない宇宙を知ります。

いろは歌は人の心を構成する五十音言霊(イエンが除かれます)を重複することなく並べることによって現象世界からその現象が現出して来る元の空の宇宙に帰る手段・方法を明らかにする「言霊の幸倍へ」の業であります。言い換ええますと先天十七、後天三十二の言霊を使って、後天から先天に帰る方法を説いた歌なのであります。

いろは歌を次の様に並べて書きますと、二つの真実が現れて来ます。その事に触れておきましょう。

各節の上の一字を向かって右から左へ読みますと「イチヨラヤアエ」となります。これはヘブライ語で「ただ一つの神エホバ」という意味だそうです。「ヤアエ」は「ヤハ」で八幡に通じます。八幡神社

の神となります。八幡様はエホバの日本名です。

各節の最下段の一字を同様に連ねますと「トカナクテシス」となります。「トカ」を科(とが)と読めば、「科なくて全人類の罪を背負って死んだイエス・キリスト」を指します。また「トカ」を「説く」と取りますと、釈迦の言葉「我、八十

イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト
チ	リ	ヌ	ル	ヲ	ワ	カ
ヨ	タ	レ	ソ	ツ	ネ	ナ
ラ	ム	ウ	キ	ノ	オ	ク
ヤ	マ	ケ	フ	コ	エ	テ
ア	サ	キ	ユ	メ	ミ	シ
エ	ヒ	モ	セ	ス		

年一字をも説かず」が浮かび上がります。釈迦は在世中、二次・三次を説法して人生第一義の一切智そのものを説かなかつたの意であります。

「言霊の幸倍へ」の第三は「ヒフミ歌」であります。この歌はヒフミ四十七文字布留の言本ことばもとと呼ばれ、奈良県天理市布留の石いそのかみ上神宮に三千年間伝わるものです。ヒフミヨイムナ

ヤクトモチロラネシキルユキツワヌソヲタハクメカウオエニサリヘテノマスアセエホレケの四十七文字であります。この四十七文字は一字も重複することなく言霊五十音(イエンを除く)を並べて古神道の重要な事柄(禊祓)を述べた謎でありますが、ここ二千年間、幕末の国学者平田篤胤の神霊的解釈の他は一人の解釈をする人もなく過ぎて来た古神道の神秘の一つでありました。

わが先師、小笠原孝次氏により言霊学の概要が現代の言葉によって説明・復元されるに及び、このヒフミ歌も漸く言霊学の原理に基づいて百パーセント謎が解かれ、その大いなる意味がすべて明らかになったのでした。一九七〇年頃の事であります。言霊学が解明されない限り如何に頭を

振りしぼってもその謎は解き得なかつたでありましょう。その事はこれから解説が始まるヒフミの謎解きにて御納得される事でありましょう。

ヒフミ歌を数節に区切つて説明して行きます。

ヒフミヨイムナヤコトモチ

ヒからト、一から十を以て、の意であります。この十個を判断の基準とする方法を古神道は十拳剣とつかつるまと呼びます。

物事は五十音図の向かつて右の母音から現出し、八つの父韻が示す時の変化を経て、左の半母音に於いて終結します。この十の変化によつて物事の現象の発端から結末までの経過を知ることが出来ます。「この十の変遷の経過の法則を以て」の意であります。

ロラネシキル

ロラネとはロラの音ねの事。古事記「子生み(子音創生)」の項の子音が生まれて来る順序の箇所を見て頂きますと、津島と佐渡島の宇宙区分の子音の働きで先天活動のアイデアが一つのイメージにまとまり、言葉と結ばれ、発声されま

す。その発声された言葉は、大倭豊秋津島の区分の最初の方、フモハヌの子音の状態で空中を飛び、次にラ・サ・ロレと聞く人の耳孔の中に入り込んで行きます。ロラ音らとはこの入り込んで行く音ねの事であります。シキルとは仕切ることです。どう仕切るかといえますと、先に出ました十拳剣で仕切ります。耳に入つて来た言葉を発端(ア)から八つの父韻の変化で示される現象の変化を経て、最後に結末(ワ)で終わります。その十の段階の区別が明らかになるように仕切ることです。

ユキツワヌ

ユキとは結かう即ち結ぶことです。ツワヌが尋常な事では分かりません。子音創生の言霊の循環図を再び御覧下さい。先天の活動を受けて、子音がタトヨツ……と生まれて来ます。そのツがツワヌのツであります。即ち先天の活動が何を目指しているのか、子音が初めにタと出て先天がそのまま現象として現れ、それが音図の横の段と縦の連なりによつて篩ふるいかけられ、漸く一つのイメージ化に向かつて「ツ」と現れ出て来る姿のことです。そのおぼろげなイメージと、ツワのワである横の配列の最後の結末の状態とを結んで見よという事、それが「ユキツワヌ」です。ヌとは貫ぬで

横にという意味です。「この眼前の事態（または言葉）の始めに目指す意図から最終的にどうなればよいかの結果までの筋道を一貫して考えてみよう」という事でありませう。

ソヲタハクメ

耳に入つて来た声の意味する出来事が始まりから結末までどんな意図でどういう経路をたどり、どういう結果になることを望んでいるか、が分かつたならば、その事全体を「タハクメ」です。タハとは五十音図の言霊の事、物事全体をその物事がどの次元の物事か、ウオアのどの次元かを調べて、ウの次元なら金木音図で、オの次元なら赤玉音図で、アの次元なら宝音図で、その物事をそれぞれの音図の言霊の並びで組んで見よ、という事です。

カ

この一音「カ」が最も重要な事です。カとは心に焼き付く如くに浮かび上がつて来る言葉を表します。この一音を浮かび上がらせる事が出来る心の持ち方を天津太祝詞音図と呼びます。それは人生上、または世界人類の文明創造上の最高原理の事です。この心の持ち方を表す父韻の並びはタカマハラナヤサです。この精神は如何なる出来事も撰取し

て、それを人類の歴史に最大限役立つように取り入れ、採用して行く心構えです。ウオアどの次元の出来事かを判別して、それを言霊で並べたものを自覚した太祝詞の心構えで見ると、眼前の現象を仏教の「撰取不捨」の心で人類文明に取り入れて行く為の必要な言葉が「カ」と心中に印画される如く自覚されて来ますこの行為を古事記は禊祓と呼びます（『古事記と言霊』禊祓の章参照）。この「カ」と浮かび上がつて来る言葉は、眼前のウオアの出来事を、そのままで飛躍させて人類文明創造に取り入れる事が出来る創造の能力があります。この言葉を最高英智より出た至上命令（カント）と言います。

ウオエニサリヘテノマスアセエホレケ

ウオエニサリヘテとは、浮かび上がつて来た言葉（思い）を、相手の出来事の次元に適合するようにウオエの三次元に分けて、という事。ノマスとは宣べよ、の意。アセとはアオウエイの五母音の中のアの段のアカからワに渡す瀬。ここでは全世界の歴史の責任者の慈愛の大御心に立つて、の意。エは天津太祝詞の心構えから出た撰取不捨を可能にする結論の言葉。ホレケとは秀列気即ち秀れた順序正しい

(列)言葉(氣)の意。言葉の全部で「浮かび上がって来た言葉の内容を、相手の心の状態に応じてウオエの三次元に分け、慈愛の心から言葉の運びが相手によく理解出来るよう伝えよ」という事となります。

以上、ヒフミ四十七文字布留の言本を解説しました。ヒフミ歌は心を構成する言霊の全部を重複することなく並べて、人間精神の最高規範(八咫鏡)の構造を明らかにした「言霊の幸倍へ」であります。以上で「言霊の幸倍へ」三題を終わります。(以下次号)

【収載】第四百十三号(平成十二年五月)

言靈學隨想

●高天原成彌栄

「コトタマの最終的結論は何ですか」と尋ねられたら、私は即座に「高天原成彌栄」と答えるであろう。何故ならタカマハラナヤサの八言靈が示すものは、この人の世の中で最も気高く、善き、美しき、真なる、大いなるものであるからである。

私の言靈学の師、小笠原孝次氏の辞世の歌に――

身はたじえバベルの野辺に死するとも伝え置かなむ

たかまはらなやさ

がある。幕末の真学、吉田松陰の辞世の句をもじった歌であろうが「自分の身はこの荒れすさんだ世の中に死んでも、高天原成彌栄の真理だけは何時までもこの世に伝えておきたいものだ」の意であろう。一生を言靈原理の解明と復活に捧げられた師の心情が偲ばれる歌である。

私は昨年、感に触れて次の歌を詠んだ。

「人類の新しい代を言寿がむ永久の起手は高天原成彌栄」

(起手は掟の語源)

先師が世を去って早、十七年の歳月が流れた。時代は「高天原成彌栄」の理論的解明からその活用・実行の段階に進んできたのである。理論としての高天原成彌栄については既に『古事記と言靈』に詳しく説かれている。今回は活用・実行段階としての高天原成彌栄の意義と内容についてお話しすることにしよう。

古事記の上つ巻や大祓祝詞の中に「底つ石根に宮柱太知り、高天原に千木高知りて治め……」という文章がある。この意味を深く掘り下げる事によって「高天原成彌栄」の活用の解説を始めることにする。

伊勢神宮内宮の正殿の建築様式(唯一神明造り)を簡単に描くと図140-Aのようになる(詳しくは『コトタマの話』伊勢神宮の章参照)。神宮正殿床上の中央に御祭神天照大神を表徴する八咫鏡やたがみが船形の台の上に安置されている。天照大神とは五十音言靈の原理に基づいて人類文明を創造する神であり、その創造の規範となる五十音言靈の天津太祝詞音図の表徴器物が八咫鏡である。

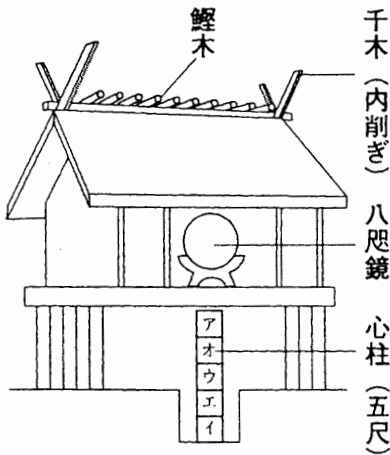
八咫鏡の真下の床下に伊勢神宮で最も神聖なものとされる心柱（御量柱または忌柱）が立っている。心柱は四角の檜の柱で長さ五尺、しかもその五尺の中の下二尺は地中に埋もれ、上三尺だけが地上に出ている。心柱は古事記に説かれるように伊耶那岐・美二神が一体となった伊耶那岐の大神を指している。心柱五尺は伊耶那岐の神の五十音図、天津菅麻の五母音アオウエイを黙示し、下二尺が地中に埋もれている事は、言霊エ（実践英智）と言霊イ（言霊原理・布斗麻邇）がここ二千年の間、人類社会の表面から隠没している事の黙示である。また床下の心柱の真上に八咫鏡が安置されているのは、それが伊耶那岐の大神の言霊原理に基づいて生まれた天照大神の人類文明創造の実践英智（言霊エ）である事を示すためである。

右に記したように古事記・大祓祝詞・伊勢神宮の唯一神明造りは、後世の言霊原理復活の時に備えて重要な黙示を伝えてくれている。言霊原理が太古にあったと同様の姿で現代に蘇った今、その黙示に対する私達人間の態度は如何に変わって行くべきであるかが問われる時となった。

先ずは伊勢神宮の心柱についてであるが、伊耶那岐の大神の菅麻音図の母音アオウエイを表徴し、しかもその下二

尺が地中に埋もれている事が母音配列の下の二段、言霊エの実践英智（天照大神）と言霊イの言霊原理がここ二千年間、人間の潜在意識の底に隠没していた事の印である事はお話した。その隠没した言霊原理が現代に蘇ってきたという事は母音配列の下二段である言霊エの実践英智と言霊イの言霊原理が地中から地上に現れ出て、心柱の五尺全

図 140-A



部が地上に、即ち現代人の自覚として姿を現した事であり、言い換えれば、アオウエイ五母音が人間の認識によって把握されるという事である。この事を古事記や大祓祝詞は「底つ石根に宮柱太知り」と表現している。「太知り」の太とは言霊布ふと麻邇まゐのことであり、文章全体で「底に位置する言霊イの上にアオウエイ五母音の自覚の柱を心の中に打ち立てる」の意となるであろう。

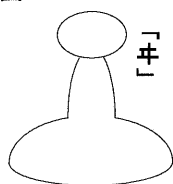
現代に生きる人が復活した言霊の学を学び、更にその人が生まれてから現在に到るまでの理論的、宗教的、科学的、神霊的な知識とその出所のすべてを心の中で否定し、生まれて間もない赤子、何の特技も先入観も持たない平々凡々たる一市井の人となつて、自分の心底が無一物であることを確かめるならば、その心の宇宙の中に壮厳にして麗美な心の柱がアオウエイの順でスックと

立っていることを知ることが出来る。

神道五部書はこの柱の事を「一心の霊台、諸神交通の本基」と説明している。

神といい、仏といい、学問や心霊や欲望経験もその柱から発現し、またそこへ帰って行く一切の根源である。

図 140-B



この二千年の黙示である伊勢神宮の心柱に対する人間意識内容の変化を下世話な表現で述べるならば、次のようになるであろうか。人間一人が伊勢神宮正殿の床下に入り込み、床下の真ん中に立っている五尺の心柱の角柱を「今までご苦労様、もういいよ」と言つて地上に抜き上げ、放り出し、その柱の立っていた場所に「ドッコイショ」と腰を下ろしあぐらをかく事である。「底つ石根に宮柱太知り」とは「アオウエイ五母音宇宙の重畳の自覚体がここに居る」という事と同意義である。太古の神代象形文字の「卍」即ち「居」は上の図140-Bの形で示されているのがその証である。この形は人が座っている形である。人一人が「ある」という事が、人事百般の一切であることを示した文字なのである。そこから森羅万象のすべてが発現し、終わればまたそこに帰って行く。

次に正殿床上中央の八咫鏡に話を移そう。伊勢内宮の御祭神天照大神を表徴する八咫鏡は人類文明創造実行のための理想の精神構造を表す天津太祝詞音図の父韻（ア段）の配列タカマハラナヤサに基づいて作つた立体構造の五十音図を型としたものである（図140-C参照）。その精神構造に照合して一切の歴史は創造される。その基本原理であるタカ

マハラナヤサの言霊の配列は、世界の各地から生産・提唱

八咫鏡（言霊図）

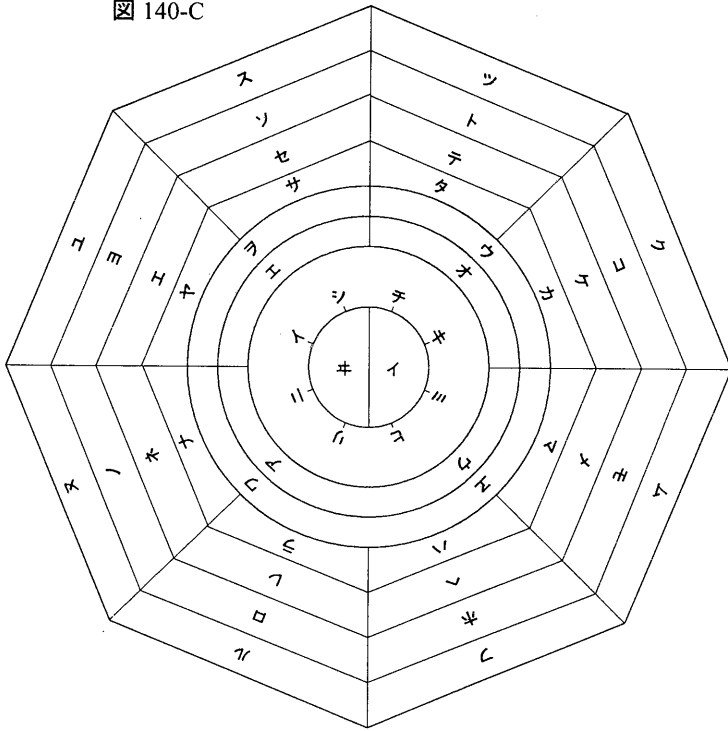


図 140-C

される種々の精神的産物（学説・主義・主張・信条・信仰

等）のすべてを人類文明創造のために如何に摂取し、その時地位を決定するかの方法の規範である。各主張すべての価値を最大限に生かしながら、世界文明の調和の中に摂取して行く理想の精神構造なのである。このタカマハラナヤサの方法を運用・活用して人類文明を創造することを「高天原に千木高知りて治め」という。「タカマハラナヤサ（高天原成彌栄）の法則に基づく演繹の法（内削ぎの千木）によって政治を行え」の意である。「底つ石根に宮柱太知り」は精神的土台であり、その土台に立って布斗麻邇を活用する事が「高天原に千木高知りて治め」である。それ故に伊勢神宮は床下の心柱の上の床上に八咫鏡を安置する。

神宮の心柱と同様、御祭神天照大神（八咫鏡）の精神内容とその言霊学的構造も百パーセント解明・復元された。今やその原理の活用実践の段階に入った。心柱と同様、八咫鏡に対する現代人の意識の変革は如何にあるべきか。八百年余以前、西行法師は「何事のおはしますかは知らねども、か

たじけなさに涙こぼるる」と伊勢神宮を詠んだ。「何事のおはしますか」が全部解明されてしまった現在「かたじけなさに涙こぼるる」では済まされぬ。もう「かたじけなさ」の信仰に安住する時代ではない。神宮の靈的な扉は既に開かれていますのである。伊勢神宮の御祭神天照大神は国民信仰の対象としての神宮正殿の座から世界人類の人々の魂の中にその活動の本拠を移されたのである(前号会報参照)。その現実の消息を言霊学を学ぶ事によって自覚され、その活動法則を理解し実践する霊知りが一人でも多く出現することが待望される時となった。

このところの事情をまた下世話に表現してみよう。先に心柱のところまで述べたように神宮正殿の心柱を引っこ抜いた場所にドッコイショとあぐらを組み、生まれたばかりの赤ん坊のような真更な心になり、暫くして座るのに飽きたら、発心して(法華経化城喻品)やおら立ち上がり、床下から這い出て、十段(外宮は十一段)の階段を駆け上がり、正殿の中に飛び込み、中央に安置されている御神体の八咫鏡を持ち上げ、「二千年間ご苦労様」と言つて部屋隅の隅に片付け、その跡にまたドッカとあぐらをかき、両手を合わせ、人類世界の現状をしつかり見据えながら「タカマハラナヤ

サ(高天原成彌栄)」と称えることである。終わつたら八拍手を打つ。それでいい。その時の心に焼き付く如く浮かび上がる心積もりそのままに世界文明の歴史は創造されて行く。この創造実現を約束された「心積もり」の言葉の発声を石上神宮の布留ふるの言本ことばもとは言霊を以て「アセエホレケ」と言う。

「タカマハラナヤサ(高天原成彌栄)」なる日本語の言葉は人事百般中の最も尊い言葉である。二千年前、崇神天皇の時、歴史経綸上、言霊の原理が社会の表面から隠没するに際し、原理の存在を後世に遺すために原理に基づいて創建されたのが伊勢神宮である。だから「何事のおわしますか」分からなくても「涙こぼれる」神聖さと美しさの雰囲気も備えている。ブルーノ・タウトが「世界で最も美しい建造物の一つ」と賞賛したのも当然である。けれど言霊学に於ける「タカマハラナヤサ」の内容の尊さ、神々しさ、美しさは神宮神域のそれの比ではない。その八つの言霊の配列は、必要ならば伊勢神宮の神々しさをこの世に幾十、幾百と建設することの出来る宇宙的創造力の神聖な言葉なのである。否、それどころではない。世界人類が住むこの地球上を人間の住むのに最も相応しい、伊勢神宮と同様の美しい所に改築

させ、永遠に持続させる能力を持つ人類の至宝たるべき言葉なのである。

言霊学上「高天原成彌栄」の持つ内容は「価値三千大千世界なり(その値打ちは宇宙に匹敵する)」と法華経に説かれる如く、この世の中で最も美しく(ア)、気高く(イ)、善き(エ)、奇しき真(オ)、大いなる(ウ)ものである。それは宇宙人類始まって以来、生き通しに生きている神であり人である人が持つ本性の言葉なのである。この消息を七百余年前に予言した日蓮の文章を引用しよう。

日蓮はその使にはあらねども……、存外に此の法門とさとりぬれば、聖人の出でさせ給ふまで、先づ序分にあらあら申すなり、而るに此の法門出現せば、正法像法に論師人師の申せし法門は、皆日出て後の光、巧匠の後の拙なきを知るなるべし。此時には正像の佛像僧寺の靈験は皆消え失せて、但此の大法のみ岡浮提(人間世界)に流布すべしと見えて候(三沢鈔)

その生き通しの神であり人である人の本性を自覚し、活用出来る人となる条件はただ、日本語で育ち、心に何らの所有も持たぬ平凡な市井人であり、布斗麻邇の求道者であ

る、という事である。近い将来、布斗麻邇の原理の自覚・運用者が地の底(社会の低層)から、法華経の予言する從地湧出の菩薩として出現することが期待される。それが古き宗教が予言する靈知りの天津日嗣の出現であり、弥勒菩薩の下生であり、救世主の降臨でもある。それは天から降りるのではない。現代の社会相の中の何一つ取り柄のない平凡な人の中からである。

「振り下ろす刃の下は地獄なり。身を捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」と謂われる。また「煩惱の大海に入るに非ざれば一切智(言霊の宝を得ることなし」と説かれている(維摩経)。現在、実際の「振り下ろす刃」とは、人類が直面する原水爆戦争の脅威、地球規模の大気汚染・温暖化の公害、教育・人心の荒廃等々の事である。「身を捨ててこそ」とは人類の現代の状況を常にわがものとして考え、その究極に於いて現在の人類の智慧では如何ともなし難い絶望以外にない地獄であることを心底から見極める事である。その絶体絶命の死の地獄へ差しのべられる弥陀の救いの御手、それが言霊布斗麻邇であり、皇祖皇宗の御経綸の自覚である。その救いの御手に気付くものは幸福である。世界はその人の音頭で救われるからである。

現代に生きる私、そして貴方が息づいている今・此処、そこが生きた伊勢の大神の居所である。

高天原成彌栄。高天原成彌栄。高天原成彌栄。八拍手。

(終わり)

【収載】第四百十号(平成十二年二月)

●白と鈴(言霊学語源随想)

『古事記』神話はアイウエオ五十音言霊布斗麻邇の原理を言霊百神の物語として説いている。百神誕生の初めは「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は天の御中主の神・言霊ウ」である。次いで先天言霊十六、アワオヲエエ、チイキミシリヒニ、イキが現れ、心の先天構造が定まる。次にこの先天の活動によって三十二の子音言霊、タトヨツテヤユエケメ・クムスルソセホへ・フモハヌ・ラサロレノネカマナコが誕生し、次に此等言霊を神代文字化する火の迦具土の神・言霊ンが生まれ、言霊総合計五十個が出揃う。次に言霊の神・伊耶那岐の神は五十個の言霊の運用・活用の方法を検討し、五十通りの手順を経て言霊字の総結論である三貴子(天照大神、月読の命、須佐男の命)を誕

生させる。言霊布斗麻邇の原理の完成であり、伊耶那岐の命の天地創生の事業は終了する。『日本書紀』に謂く「是の後に、伊弉諾尊、神功既に竟へたまひて、靈運当遷。是を以て幽宮を淡路の洲に構り、寂然長く隠れましき」と。

人が人の何たるべきかの原理・法則をすべて検討し尽くして黙居した姿を言霊スという。スメラミコトのスであり、住居・巢・洲のスである。創造主神伊耶那岐の命の仕事は言霊ウに始まり、言霊スに終わる仕事によって言霊百神という子、即ち言霊布斗麻邇の原理が完成する。

稲(いね)を碾いて粉(こ)を作る道具に臼(うす)と名付けた太古日本人の心は誠に素晴らしい。

伊耶那岐の命の言霊ウよりスに至る作業により言霊百神の原理、即ち人が人たるべき根本原理であるアオウエイ五十音言霊布斗麻邇の学が完成された。それは臼の原理とも言われる。『古事記』が教え示してくれる百神創生の順序はとりも直さず天津日嗣スメラミコトの世界人類の文明を創造する原理、即ち禊祓の法則でもある。それはすべてを自覚してスと修まったスメラミコトが、文明創造のために言霊スの立場より立ち上がり、臼の原理、五十音言霊の原理

を活用・運用して政事の処理に当たった。その活用・運用することを古代では「振る」と言った。その言葉は高千穂の奇振嶽や石上神宮の布留の言本等に遺されている。スメラミコトは人類文明創造の仕事、即ち襖祓に当たり、言靈スの座から立ち上がり、臼の原理を振るい終わって再びスの座に帰る。スの完了形として濁点が付き、ズとなって収まる。スから始まってズに終わる。それが天津日嗣スメラミコトの仕事、即ち五十音言靈という鈴を振ることである。鈴の語源である。

石上神宮の伝え言に謂わく、「一三三四五六七八九十と称えて、これに鈴を結べ」と。伊勢神宮は裂口代五十鈴の宮即ち言靈五十音を祭った宮であり、石上神宮は布留の言本即ち五十鈴を振るい文明創造の曲を奏する方法を祭った宮である。

臼と鈴の語源は世界文明創造の中の日本民族の根本的なアイデンティティーに関係しているのである。（終わり）

【収載】第百四十四号（平成十二年六月）

●コトタマノマナヒ

「言靈学を学ぶにはどうすればよいのですか」とよく質問さ

れる。そこで仏教の坐禪を例に引いて説明することがあります。坐禪に入るには先ず禪とは何か、空とは、無とは何かを禪の教科書によって知ることから始まります。それで坐禪の意義を知ったら、後はひたすら坐って自らの心を見つめる事に尽きます。空とは空々漠々たる心の宇宙のことであり、森羅万象はすべて空より発現し、終わればまたそこに帰って行きます。

空は常に此処にあります。殊更に他に求めれば一生をかも空は眼前しません。常在である空を求めるということは、空を見えなくさせている自らの心の色眼鏡をはずす修行であります。禪という「無」とはこの色眼鏡を「本来の我ではない」と否定する行為のことです。

言靈学を学ぶには、先ず言靈学の教科書を読んで、人の精神生命を構成している言靈母音、父韻、親音、子音等の意味・内容、次ぎにそれら五十音言靈の整理・操作の方法、最後に五十音言靈の操作・活用による世界文明創造の原理である襖祓の行法とその結論の三貴子誕生までの心の経緯を理論的に理解することです。

その作業を終えたら、その作業によって得られた言靈に関する知識を一時脇に片付けて、後はひたすら自らの心と

その動きを見つめて行く。自らの本来の眼、赤ちゃんの眼、宇宙そのものの眼で自らの心を見、その心の動きの経路と結果があるがままに見る(実相)ことであります。言霊の教科書に述べられている母音・父韻・親音・子音の内容とその動きがすべて真実であり、一つの矛盾もないことを発見するであります。

人は言霊によって生きています。否、言霊の動きが生きていくという事なのです。だから人が生きることの内容として、曇りのない眼でそのありのままの姿を見て行くこと以外に言霊を学び自覚する方法は有り得ません。推理も想像も概念的思考も、また心霊的霊眼も用をなしません。それはみな「見ようとする眼」であるからです。見ようとする眼で見、見ようとする「屋上屋を架す」と言います。本来ある家の上に、勝手に自分の幻想の家を建てようとするに等しいのです。言霊とは人の心の宇宙の究極の構成要素であります。赤ちゃんの眼、宇宙そのものの眼で見て、宇宙の心でそれを活用するのではありません。言霊学をマスターすることにはなりません。

【収載】第四百四十五号(平成十二年七月)

●神懸かりと沙庭

最近、神とか霊とかいうものにほとんど関心を持っていなかった人が突然神懸かりとなり、神示・靈示を口ばしつたり、自動書記をしたりする現象が多くなって来た。その神示・靈示の中に言霊とか布斗麻邇とか言霊学に關した言葉が多く含まれているという。今年になってから以上のような憑霊者やその関係者の当会への訪問が三、四に止まらない。今回簡単にこの現象について解説することにしよう。

以上のような憑霊現象が多くなって来たのは何故か。その答えは簡単である。当会会報平成十二年一月号「人類開眼」でお知らせしたように、神を信じる、信じないに關係なく、この地球上に住む五十数億の人々すべての魂の奥にアイウエオ五十音言霊原理の自覚体である天照大神が天の岩戸を開いて、その姿を現し始めて来たからである。信仰崇拝の対象としての神ではなく、人間天との性能である言霊ウオアエイ五母音の中の最高次元の言霊イ、即ち言霊原理そのものの自覚の芽がすべての人々の魂の中に人知れず目を覚まして来たからである。日本各地で言霊という言葉を含む神霊現象が起ころのはその表れなのである。

神懸かりに神示と靈示がある。神示と靈示の相違は如何。

神示は神の言葉であり、靈示は人の言葉である。では神の言葉とは何か。それは日本に於いては二千年以上前、言靈原理が現実政治の根本原理として活用され、その事が社会の常識となっていた時代に皇祖皇宗の政治の経緯に関係していた人の憑依による言葉である。それに対し靈示とは二千年前以後、言靈原理が社会の表面から隠没し、現代の如く世の中の人々から言靈学の本質が知られなくなった時代に生きた信仰の立場の人の靈の憑依による言葉のことである。

神示と靈示を見分ける方法は何か。唯一つ、その黙示の中に言靈原理の内容またはその表徴の言葉が折り込まれているか、否か、折り込まれていれば神示、そうでなければ靈示である。例を挙げて説明しよう。

大本教祖出口なお女史の神示に「大千世界一度に開く梅の花。梅で開いて松で収める神の国の代が来るぞ」がある。この「梅で開いて松で収める」とは古事記冒頭の「天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は天の御中主之神。次に高御産巢日之神。次に神産巢日之神。……」の文章に相当する心の先天構造の宇宙剖判の原理を示している。何もない宇宙から初めにウ言靈が、次にアとワに分かれる言靈

学の大法則が説かれているのである。

古事記中巻に明らかな神懸かり現象の記述が見られる。それは仲哀天皇記、神功皇后の章である。詳しくは古事記または会報八十一号「底・中・上筒の男三命について」を参照下さい。神懸かりの初めの方を引用すると次の様である。「天皇(仲哀)筑紫の詞志比の宮にましまして熊曾の国を撃たむとしたまふ時に、天皇御琴を控かして、建内の宿禰の大臣沙庭に居て、神の命を請ひまつりき。ここに太后神歸せして、言教へ覺し詔りたまひつらくは、……」とある。

神に神懸かりを要請する時、昔から靈媒の傍で琴を弾く事がある。神の教えを靈媒を通じて引き出すリズムを作る働きである。また靈媒から出る神示が真実であるか、どうかを直ちに調べるために審判者が必要である。これを沙庭という。審神または探神とも書く。この沙庭をする資格は太古では言靈原理の自覚者である事であった。建内の宿禰は当時数少なくなった布斗麻邇の聖(ひじり)であったのであろう。

神功皇后を通じた神示は西の方新羅の国の討伐であった。その命令を信じない仲哀天皇は神の怒りに触れて絶命し、再び神示を請うて、その神示が「天照大神の御心、底

筒の男、中筒の男、上筒の男三命みことの神懸かり」であり、神示の内容として新羅討伐の方法が伝授された。その神示が言霊原理の内容を明らかに表徴したものであった。その神の言葉を引用してみよう。

今まことにその国を求めむと思はせば、天つ神国つ神、

また山の神海河の神たらまですに悉ことごとくに幣帛奉り、我が御魂と御船の上に乗せて、真木の灰と瓠ひょうに入れ、また箸と葉盤ひらまとと多さわに作りて、皆皆大海に散らし浮うけて、度わたりますべし

「真木の灰を瓠に入れ、……」の文章は一見子供騙だましの様に見えるが、言霊原理より見る時、天津日嗣天皇の世界文明創造の経綸の法則に則る当為の戦いであること、この故にこの神懸かりの命令に従うならば方に一つの失敗もない事を保証する神示の表徴なのである(この言霊学による説明は会報八十一号参照)。かくて神功皇后による新羅討伐は大成功を収め、これを契機として日本は第一精神文明時代から第二の物質文明時代に突入することとなった。以上見て来たように、神示とは古代に於ける日本の天津日嗣天皇(スメラミコト)の世界文明創造の経綸に基づく絶対命令の事を言うのである。

さて明治維新前後より約百五十年の近代の歴史の中で、種々の有名な神懸かり現象が記録されている。その共通の趣旨は物質科学文明時代の終了と、それに続く人類の第三文明時代の幕開けの予告であろう。中でも大本教出口なお女史の神懸かりは傑出してゐる。国常立命の神示と名乗り、物質文明時代の終焉の近きを告げ、その後神の国の到来を「世の建て替え、建て直し」として説き、その神業を可能にする「九分九厘の一厘の仕組」である言霊原理の神代よりの復活を表徴的な「型示し」の行事で予言してゐるのである。ここ百五十年間の神示中の神示と言つて過言ではない。その時以後現在に到る神霊現象はなお女史の神示の二番煎じ、三番煎じの感が深い。

ならば現代に輩出する幾多の神懸かりは全くの無駄なのであろうか。否、そうではない。幸いな事に天津日嗣の世界文明創造の原理であり、神懸かりの沙庭の根拠であるアイエオウ五十音言霊の原理が不死鳥の如くこの世に蘇った。現代に生を受け、世の人に重大な警告を発し得る境遇となつた神の憑依者は、言霊学によつてその神懸かりの沙庭に照らされて、自らに憑依した神霊の名前とその神示の意義を明らかにし、更に言霊学の勉強によつて自らの霊位

を高め、来るべき世の中のための警告だけでなく、世の中の推移のために起きるであろう一つ一つの事件の時と処と次元をも予言することが可能な精妙な靈性を養って頂きたいものである。

伊勢五十鈴の宮の祭神天照大神の神名の原典となった太古の邇々芸皇朝の女帝、天疎日向津比売天皇（アマサカルヒニムカツヒメスメラミコト）は靈妙なる巫女^{みこ}であつたと伝えられている。第二物質科学文明を環境とし、第一の精神文明を主体原理として保有して、第三の生命文明の御代を築く門出に当たり、今の世ほど崇高な御魂の神靈憑依者の出現が待望される時はないであろう。高天原成弥^{たかまはらのなや}栄。

（終わり）

【収載】第四百十六号（平成十二年八月）

●光の歴史

自分の生活の営みに関する利害をしばし脇に置いて、私達が住むこの地球上の事に思いを馳せて見ましょう。人類を取り巻く精神的・物質的な環境が人類全体の生存にとつて容易ならぬ状況に立ち到っている事に気付きます。翻つて自分自身の心の真実・実相を見つめてみましょう。自分

に接する人々や社会への批判・非難にエネルギーの多くを費やしてしまい、その「他」に対する批判の眼を自分自身に向ける時、同様の事が成立することに気付く人は極めて少ないのではないだろうか。

今、人類の現状に地獄と絶望を見、翻つて自我意識の底に自己の努力では決して償う事の出来ぬ虚偽と自意識的偽善、その結果としての死と地獄を予感することが出来る人は幸福です。何故ならその人は言霊学によつて今・此処即ち中今の一瞬の中に人間の天津罪と国津罪、言い換えると人類の原罪と自らの生活の虚妄の罪とが一つに重なり、同時に「我とは人類であり、人類とは我である」事を自らの生命の中に自覚し得る人だからです。

イエス・キリストが死んで三日にして蘇つた如く、その人の心も絶望の中に死に、後に新しい生命が蘇ります。言霊ウオの次元の従来^{すけ}の心は死に、言霊アエイの次元を視点を持つ生命に生まれ変わります。

絶望の死によつて執着と自我意識が消え去り、自らが意識で捕らえるもの一切が「存在」ではなく、「現象」なのだとなります。暗黒は一瞬の間に消え、光明の世界が現出します。この世に生まれて以来現在までの自らの一生が、楽し

かった事、忌まわしい事すべてが今・此処の中の光の出来事として浮かび上がります。光とは五十音言霊であり、自らの生が言霊の働きによる創造の一生であったことを知ります。同時に曠劫以来の人類の歴史も皇相皇宗の言霊布斗麻邇の原理に則る人類文明創造の経緯の歴史であり、光である言霊五十音の躍動するいとも合理的な光の歴史であることを知ります。

この視点に立つ時、初めて世界人類が直面する地獄と死を転換して新しい生命の世紀を建設する方策をめぐらす事が可能となります。これを九分九厘の一厘の仕組と言います。

(以上)

【収載】第四百七十七号(平成十二年九月)

平成十三年

●大被祝詞の話 その一

六月晦大被 十二月之に准ふ

集侍はれる、親王、諸王、諸臣、百官人達諸国召せと宣る。天皇が朝廷に仕へ奉る、比礼挂くる伴男、手懸挂くる伴男、靱負ふ伴男、劔佩く伴男、伴男の八十伴男と始めて、官々に仕へ奉る人達の、過ら犯しけむ雑々の罪と、今年の六月晦の大被に、被ひ清め給ふ事と、諸国召せと宣る。高天原に神留ります、皇親神漏岐神漏美の命以らて、八百万の神等と神集へに集へ賜ひ、神議りに議りたまひて、我皇御孫命は、豊葦原の水穂国と、安国と平けく知しめせと事依し奉りき。斯く依し奉りし国中に、荒ぶる神等とば、神岡はしに岡はし賜ひ、神拂ひに拂ひ賜ひて、言岡はし警根樹根立、草の片葉とも言止めて、天の警座放ら、天の八重雲と嚴の千別きに千別きて、天降し依し奉りき。斯く依し奉りし四方の国中と、大倭日高見国と、安国と定め奉りて、下津警根に宮柱太敷き立て、高天原に千木高知りて、皇御孫命の瑞の御舍仕へ奉りて、天の御蔭、日の御蔭と隠りまして、安国と平けく知しめさむ、国中に成り出でむ、

天益人等が、過ら犯しけむ雑々の罪事は、天津罪とは、あめのますひたら 放ら、溝埋め、樋放ら、頻蒔き、津刺し、生刺、逆刺ぎ、屎戸、幾許の罪と天津罪と宣りわけて、国津罪とは、いきはた 生膚断ら、しに 死膚断ら、白人胡久美、己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪、畜犯せる罪、昆虫の災、高津神の災、高津鳥の災、畜什し、まじりの 蠢物せる罪、幾許の罪出でむ。斯く出でば、天津宮事以らて、大中臣、天津金木と、本打切り、末打断らて、千座の置座に置足らばして、天津堂麻と、本刈断ら、末刈切りて、八針に取辟きて、天津祝詞の太祝詞事を宣れ。斯く宣らば、天津神は、天の警門と押し披きて、天の八重雲と、いほと 巖の千別きに千別きて岡し召さむ。国津神は、高山の末、ひき 短山の末に上りまして、高山のいほり、短山のいほりを撥き分けて岡しめさむ。斯く岡しめしてば、皇御孫命の朝廷を始めて、天下四方の国には罪と云ふ罪は在らじと、科戸の風の、天の八重雲と吹き放つ事の如く、朝のみ霧夕のみ霧と、朝風夕風の吹拂ふ事の如く、大津辺に居る大船と、へ 舳解き放ら、とも 艦解き放らて、大海原に押し放つ事の如く、おちた 彼方の葦木が本と、とかま 焼鎌の教鎌もて、打拂ふ事の如く、のこ 遣る罪はあらじと、被ひ給ひ清め給ふ事と、高山の末、短山の末より、さ

くな垂りに落ち、沸つ速川の瀬に坐す、瀬織津姫と云ふ神、大海原に持ら出でなむ。斯く持ら出で往なば、荒塩の塩の八百道の八塩道の、塩の八百会に坐す、速津津姫と云う神、持らかか呑みてむ。斯くかか呑みてば、気吹戸に坐す気吹戸主と云ふ神、根国底国に気吹き放らてむ。斯く気吹き放らてば、根国底国に坐す速佐須良姫と云ふ神、持らさすらひ失ひてむ。斯く失ひてば、天皇が朝廷に仕へ奉る、官々の人達と始めて、天の下四方には、今日より始めて、罪と云ふ罪はあらじと、高天原に耳振立てて聞く者と、馬牽き立てて、今年の六月の晦日の夕日の降の大祓に、祓ひ給ひ清め給ふ事と、請聞し召せと宣る。四国の卜部等、大川道に持ら送りて祓ひ却れと宣る。

以上が昔より朝廷に於いて年々六月と十二月の晦に行われる大祓の儀式に唱えられる大祓祝詞またの名、天津太祝詞の全文であります。この祝詞が何時頃制定されたのか、正式な記録はありません。民間に伝わる竹内文獻・阿部文獻によると、神武天皇に始まる神倭皇朝の前、鵜草葺不合皇朝第三十八代天津太祝詞子天皇がこの祝詞を制定したと伝えられています。その時は何時か。神武天皇即位より遡

ること約千年、今より三千七百年前頃と推定されます。

その後、この祝詞は年々朝廷に於いて使用され、イスラエルの王モーゼが来朝・留学した際、この祝詞の内容の骨子がモーゼに伝与された事が確かめられています。その証拠は大祓祝詞の中の「国津罪」の内容が、旧約聖書の出埃及記・利未記にその詳細な説明が載っている事であり、(お疑いまたは興味を持たれた方は是非祝詞の国津罪の項と旧約の出埃及記、特に利未記とをお読み下さい。立ち所に了解されるであります。)

その後、鵜草葺不合朝より神倭皇朝に替わってからもこの祝詞は使用され、最後に六九〇年頃柿本人麻呂による修辭によつて今日見られるような美文となつたと伝えられています。

では大祓祝詞にはどんな事が述べられているのか、を子め箇条書きにまとめておく事にしましょう

一、古事記・日本書紀に記されている邇々芸尊と呼ばれる人とその集団がこの日本列島に天孫降臨して、日本の国家建設を始めた時の歴史状況。

二、国を肇めるに当たって、その建設には如何なる基

本方針に基づき、どんな国家体制を目指したか。
三、方針に基づき理想的精神文明の国家が建設された後・歴史の進展と共に日本国並びに世界の各地に醸成されて来る種々の矛盾、罪穢の種類とその内容の説明。

四、歴史が更に進み、人類が人類文明創造の基本方針を忘れ・社会の汚濁が頂点に達した時、その罪穢を祓い、禍因を根絶して、肇国時代そのままの永遠の調和・平安を取り戻す為の、人類が頼るべき唯一無二の処置法の開示

五、その操作・処理の成功によってもたらされる平安・調和の時代は如何なる政治が行われるか、の説明。

以上の内容が簡潔・明瞭に述べられています。これについての話が進んで行く内に、読者はその教示と予言の見事に目を見張る思いがする事でありましょう。

さて前置きはこの位にして大祓の話に入りたいと思いますが、現代に生きる読者は冒頭に掲げました大祓祝詞をお読みになってどうお感じになられたでしょうか。その内容

がお分かりになりましたでしょうか。「難しくて何を言っているのか、さっぱり分からない」と言う方が大方ではないか、と思います。そのお分かりになれない理由は何か。

現代人には昔の言葉が分からない為か。否、そうではありません。ほとんどすべての現代人にとって全く耳新しい言葉布斗麻邇の原理に則り、これを土台として大祓祝詞が書かれてゐる為であります。言葉の原理に通じませんと、大祓の内容は全く雲を掴む如くその理解は困難であります。言葉布斗麻邇の学問が世の中の常識であつた昔に、大祓祝詞は書かれたものなのです。

幸いな事に私の言霊学の師、小笠原孝次氏が書きました「大祓祝詞解義」という本があります。氏はその一生を言霊布斗麻邇の復活の事に捧げ、昭和四十四年、言霊学解説の最初の書「古事記解義言霊百神」を世に出しました。次いで復活された言霊学を基礎に昭和四十五年、「大祓祝詞解義」(改訂再版)を刊行しました。大祓祝詞の全内容を解明し尽くした名文章であります。私が今からお話する「大祓祝詞の話」も先師のこの「大祓祝詞解義」を下敷きとして進めて行く事となります。

「そんな名文の解説書があるなら、それを再版して広めた

らよいではないか」と思われるかも知れません。それで済むことなら私もこれ程楽な事はないのですが、そうもいかないので。何故なら、先師の「大祝祝詞解義」は著者自筆のオフセット版で三十七頁の冊子です。その三十七頁に言霊原理の精髓を大祝祝詞の中に投入して、鮮やかに祝詞の謎解きをしましたので、言霊原理の理論に精通している方なら兎も角、言霊学に詳しくない方にとっては、大祝祝詞の難解さと言霊学の難しさが相乘されて、唯ただ「難解だ」という読後感だけが残ってしまう恐れがあります。

そこで先月の会報で「古事記と言霊」のお話の三回目を終了した事でもありますが、これより更めて言霊学の復習をしながら、大祝祝詞の解説に入って行き度いと思う次第であります。今回は大祝祝詞の話の第一回でありますので、言霊の原理が大祝祝詞の全文にわたりどの様な関係にあるのか、その要点を予めお話し上げ度いと思えます。

大祝祝詞は全文が天津日嗣天皇(スメラミコト)の人類文明創造とそのため政治について述べています。政治と申しますと、大方の人は権力・武力・財力を基盤とした政治を思い浮かべることでしよう。過去二・三千年間の世界は常に専制・民主の如何に関係なく、この権力・財力・戦力

の強権を持った政府による政治でありました。けれど各民族の神話が伝える所謂神代の時代、言霊学的に見れば、人類の第一精神文明時代に於いてはそうではありませんでした。それはどんな政治なのか、と申しますと、人間の精神とは何か、を深く洞察した言霊原理による道徳の政治でありました。

かく申しますと、「道徳で国家・世界の政治が出来る筈がないではないか」と反駁する方もいるでしょう。そこで言霊の原理というものが権力・武力等の力の政治とは違って世の中を治める立派な手段となる事を、ここで確かめて置こうと思えます。それが人類にとってこの上ない理想の世界の中であり、それによる政治が社会の安定と平和をもたらす最も確実な方法である事をお分かり頂ける筈であります。

先ず人間の魂の進化の問題を取り上げてみましょう。蝶は成虫となって大空に飛び立つまでに幼虫・蛹・成虫の三段の進化をします。人間は生まれてから死ぬまで外形は蝶ほどの変形はしませんが、心は五段階の進化をします。その進化とは人間に与えられた五つの性能を段階的に一段々々自覚して行く進化であります。その進化を人の心の住家

である母音宇宙で示しますと、下から順にウオアエイの界層の自覚の進化で表すことが出来ましょう。

人はこの世に生まれると先ず乳を吸います。成長するに従って玩具が欲しい、美しい着物が着たい、から段々よい生活がしたい、名誉がほしい、大勢の人を支配したい等、欲望が大きくなります。この様な五官感覚に基づく欲望の段階を言霊ウと呼びます。この欲望を人生の最大の関心事として一生を送る人が如何に多い事でしょうか。この行為から社会の産業・経済が成立して来ます。

人の心の進化の第二段階は言霊オであります。ここから現出する人間の行為は人が経験する幾多の行為の現象と現象との間の関係を調べ、それを法則化する事、広く言いますと学問の事であります。現象間の関係法則を求め、個別の現象から一般の法則を求めることを事とします。精神と物質の科学はこの所産です。

第三の進化段階を言霊アと言います。これより現出するものは感情現象であり、これによって生まれ出る人間の社会的行為は芸術・宗教活動です。この進化段階の宇宙を思索することによって宗教的悟り、魂の救われ・自由を実現することが出来ます。禅ではこの次元自覚の世界を「空」と

呼びます。人間精神現象がそより生じ、またそこに帰って行く元の宇宙のことでもあります。仏教の言葉借りると、進化の第一段階の人を衆生、第二を声聞、第三を縁覚と申します。縁覚とは人間の経験知識の關係の何たるかを知ることによって、その知識が現出する元の宇宙の相を自覚し、魂の一応の自由を得た境地であります。

進化の第四段階を言霊エと言います。この次元宇宙から発現する人間行為は実践智・道徳智です。人が何事かの処理を必要とする時、今までの三段階、欲望と経験知識と感情の三つをどの様にコントロールすれば最良の処置法が得られるか、の実践智の段階です。仏教修行の言葉で言えば、第三の言霊アの悟りで一応の魂の自由を得て、自らは救われた、しかし世の中には心の束縛のために苦しんでいる人が多勢いる。何とかしてそれ等の人々を導き、自由な境地に救ってあげたい、と利他の行に発心する人、これを菩薩と呼びます。自分のためにどうしたらよいか、ではなく、人のために如何にしたらよいか、を学ぶ修行です。利他の修行を通じて、やがてはその積んだ徳のおかげで将来、仏と成る事が約束される菩薩、これを仏教で因位の菩薩と言います。ただ一人の自分を救うこと、これは比較的易しい

事と言えます。けれど無限とも思える多勢の苦悩を救う事の完成は気が遠くなる程至難の業でありましょう。はつきり言つて生身の身体を持つ因位の菩薩がその修行の延長上で成仏することは不可能な事なのです。

精神進化の第四段には右の因位の菩薩の自覚とは全く異なる別の精進の道があります。仏道はこれを果位の菩薩の道と呼んでいます。因位の菩薩が多勢の人々を救う事によつて、長い精進の後に仏に成る事を目指す修行の道であるのに対し、果位の菩薩とは、仏である身が衆生済度の目的のために身を菩薩と交じて下生した菩薩の事です。普賢・勢至・観世音等の菩薩がこれに当たります。仏教でははつきり述べませんが、因位の菩薩が人々を多勢救う功德を積む菩薩であるなら、果位の菩薩とは自ら具備する仏の徳によつて国家・人類全体を救済する大乘中の大乘たる菩薩の事でありませぬ。

人間精神の進化の最上の第五段は言霊イの自覚段階です。この次元宇宙より発現する人間の性能は意志または生命意志と呼ばれるものです。この意志というものは、自らは現象として現れることはありませんが、その見えない働きである八つの父韻が、今まで述べて来ました言霊ウオア

エの四次元宇宙に働きかけ、それぞれの宇宙より合計三十二(4×8)の現象子音を現出させます。と同時に、現出した現象を言霊の結合という方法で表現する(日本語)という文明創造の根本土台となる性能の次元でもあります。人間は如何なる境地を開拓し、心を進化させようとも、それだけで進化を自覚した事にはなり得ません。その進化した境地の内容を言葉によつて表現し得て初めて自覚の証明が得られます。仏教の得度・済度の度という字は渡すこと、即ち登りつめた境地を言葉に渡す(度)事によつて表現するの意であります。そして人間精神の最高の進化段階は生命意志を構成する五十個の言霊によつて組み立てられ、それ以外のものは存在しません。それ故にこの言霊イの次元の自覚の境地は言霊五十音の結合によつて事物の真相を表現する言葉、即ち日本語によつてのみ表現・自覚の完成が可能なのであります。太古の日本がアオウエイ五十音言霊の原理によつて作られた大和言葉を日常使用する国家として、その国名を日(霊)の本と呼ばれた所以であります。

以上、人間精神の五段階の進化を言霊原理によつて説明いたしました。心の進化の最終段階である言霊イの自覚の方法は、古事記の「襖被」に示されています。即ち言霊原理

によつてのみ精神の最高自覚は完成されます。これ以外の自覚の道はありません。この襖祓の言霊原理に基づいた大祓の祝詞でありますから、聖書ヨハネ伝に「初めに言葉あり、言葉は神と共にあり、言葉は神なり」と示される生命の言葉として人類文明創造の原動力となることをお分かり頂けると思います。五段階の精神進化を簡単、手短かに説明いたしましたので納得頂けなかつた方もあろうか、と考へます。補足の意味で私の以前の体験を一つのエピソードとしてお話し上げ、御参考に供し度いと存じます。

昭和五十年（一九七五）頃、私は言霊学の先師小笠原孝次氏の家で一人の外国の若者と出会いました。名はジョン・スターバック、国籍はカナダ、年齢は二十一才と記憶しております。その後、先師の家で度々顔を合わし、次第に親しくなりました。彼は身長二メートル近い大男で、頑丈な体格をしていて、眼は澄み、如何にも好感が持てる青年でした。親しくなるにつれて彼について種々な事が分かって来ました。アメリカ生まれ、幼い時から絵を描くのが巧みで、また一人だちしたら人間の心の勉強をしたいと思つていた事、などです。十八才頃、兵役を忌避して、家や土地を売り払い、一人だけの家族である母親と共にカナダに移

り住み、そこで大きなアパートメントハウスを買い、そこから得る収入で母親が一生生活出来るようにし、二十才になつたのを契機に母親の許しを得て、一銭も持たずに念願の心の勉強の為に東洋に旅立つて来たという事でした。

東京での住家は明治神宮内の森の中、登山用の寝袋を持ち歩き、一ヶ月の生活費は千円から二千円の間、その金は一月に一度、銀座の街頭に立ち、人の似顔絵を描く事で一人宛千円を稼ぎ、食糧は一日六勺の玄米を腰にぶら下げた小さいフライパンで炒り、小さい袋に入れて持ち歩き、食事の時間の節約の為に歩きながらその玄米を指で摘んで数粒づつ口に入れ、形がなくなるまで噛んでから呑み込むように食べるとの事。玄米の他には少量の山野草をゴマ油でいためて食べるだけだ、というのです。これでは一月間の食費が千円から二千円というのも領けます。

彼は一週間か十日に一度、先師を訪れ、言霊学の話聞いていました。教材は昭和四十四年に刊行された「古事記 解義言霊百神」の完全英訳本「KOTOTAMA (THE WORD SOUL) THE PRINCIPLES OF HUNDRED DEITIES OF THE KOIKI」(昭和四十八年刊)であります。彼が日本語をほとんど解しない事もあって、先師は言霊学を得意の英

会話で懇切に教え、彼はその教材の本の余白に赤ペンの細かい字で熱心に書き込みをしていました。彼が辞した後で、先師は「今まで訪ねて来た外国人はもとより、日本人にも見られない程理解が早い。まるでイエス・キリストの再来のような男だ」と感心していた事を思い出します。

親しく話をするようになって直ぐに分かった事は、この若者が既に言霊アの境地にいるという事、禅でいう「空」の心を悟っている事でした。その悟りのキツカケが少々変わっているのでお知らせしましょう。彼スターバックは十代後半になって、山であるインディアンの酋長と知り合ったそうです。人間の心の勉強に興味があった彼は酋長に「東洋の宗教が説く空の境地に入る方法を知っているか」と尋ねました。酋長は「お前が生命いのちがけで求めるなら、その方法を教えよう」と答えたそうです。彼が「是非」と頼むと、酋長は彼を山の頂上に連れて行き、其処に腰を下させ、一粒の薬を与え「私は山を下る。私がいなくなったら、この薬を呑み込め。そして静かに眼を閉じていろ。暫くしてお前の心に起こること、それが空だ」と言つて下りて行きました。スターバックはこの薬は多分麻薬だろうと思つたそうです。でも迷う事なく薬を呑み、そのまま眼を閉じ静か

に坐っていました。

時が経ちました。それは短いような、永遠の如く長かつたような感じがしたそうです。眼を開けて見ると、意識ははっきりしています。何も起こらなかったのです。そう思つた時、「空が分かつた」氣になつたそうです。酋長の言葉を信じるなら、その何も起こらなかった事とは、「何も起こらない事が起こつた」事になります。それが空だと悟つたのです。「分かつたか」突然つひ後で酋長の声がありました。「分かつたよ」とスターバックが答えました。「何も起こらない事が空、起こる事が実相」と分かつたのでした。彼と酋長は共に大空に向かつて大きく笑つたのだそうです。

以上が一人のアメリカ生まれの若者スターバックが二十才にならぬ内に空の悟りを得た物語です。彼の澄んだ眼、その率直と真摯な態度はこの空の悟りより来ている事は確かでした。このエピソードの前にお話しました五段階の魂の進化の中のウオアの三段階を、彼は先師を訪問する以前に既に済ませてしまつていた事になります。彼の言霊学勉強のための先師への訪問は更に半年程続きました。そのある日、何時ものように先師宅で会つたスターバックの手に、常に持参していらした「KOTOTAMA(THE WORD SOUL)」S

本が見えませんが、「何故持つて来ないのか」と尋ねました。彼はニッコリ笑つて、右手の人差し指で自分の頭を差しました。「本の内容は全て頭の中に入った」という事なのでしょう。そしてその日の先師の話が終わつた後で、彼は先師に次の様に英語で告げました。「長い間親切にコトタマを教えて頂いて有り難う御座いました。お陰様でコトタマの学問の理論を理解することが出来ました。私は故郷を出る時から一度はインド・ヒマラヤのヨーガの聖者の下で瞑想をしたと思つていました。そこで私は教えて貰つたコトタマの学問をどう活用したらよいか、を見付け度と思ひます。近い内にお暇乞ひに來ます。」先師は「貴方はよく勉強しました。以前よりの念願ならそれもよいでしょう。インドで分からなかつたら、また日本へおいでなさい」と言ひました。その傍らで私は彼に「何時行くのか」と尋ねました。「切符が手に入り次第」と言ひます。「金は……と尋ねると、笑つて「必要なら手に入る」と答えます。……二日後、何時もの如く大きなリュックサックを背負ひ、先師宅に現れ、「切符が手に入ったので今から行きます」と別れを告げに來ました。アメリカ国籍のヒッピーの友人がインド行き切符を買つた直後に陸軍に入隊せよの通知が本

国から届き、「切符は不要になつたから、君にあげる」と言つて呉れたそうです。先師と私に「御機嫌よう」と言ひ、彼は強い印象を残して去つて行きました。

数カ月が経つたある日、先師の処に一通の外国郵便が届きました。差出人の名前がありません。開封すると一冊の小冊子が出て來ました。表紙に英語で「ヨーガ」とあります。ありきたりのヨーガの解説書です。表紙の裏の余白にインクの細い小さい字で次のように書いてあります。「インド・ヒマラヤの山中で素晴らしいヨーガの聖者に会う事が出來た。このヨギは数十年前、真実そのものを知つた。けれどそれを告げる言葉がない。今の言葉で言えば全てが嘘となる。表現の法が見付かるまで口をきく事はないだろうと言つた以後、一言も発しない。然し素晴らしい顔と眼をしてゐる。私はこの聖者のそばで心ゆくまで瞑想に入る。」スターバックから來た手紙であることは直ぐに分かりました。その時、先師は次の様に述べ懐したのでした。「スターバックには気の毒な事をしました。こうなるのも運命さだめなのでしょうが、スターバックに対しては、彼が日本語で日常會話が出来るようになるのを待つて言靈学を日本語で説くべきでした。彼がヨーガ聖者の下で、瞑想によつて言靈イ

の創造意志の高みまで魂を進化させたとしても、聖者と同様に、その次元の唯一の表現方法である五十音の言霊とその五十音の結合による日本語を知らなければ、永遠の沈黙の中に沈んでいなければならぬでしょう。今後は外国人に対して外国語で言霊を説く事は止めましょう。」：

以上がジョン・スターバックなる若者の物語です。この物語を通じて読者が、言霊とその法則の人間精神構造の中に占める位置と次元とその様相、またこれから始まる大祓祝詞による世界の政治の実践が可能となる理由について御理解下さる参考となれば幸いです。アオウエイ五十音言霊によつて結界された清浄無垢な人間の心の最奥の領域を昔、玉垣の内津御国・磯輪上の秀眞の国・敷島の大和の国と呼びました。その名はまた日本国の名ともなりました。この名の示す心を自らの心とし、世界人類の心を自らの身体として、我即人類・人類即我として立つ天津日嗣の政治の内容、それが大祓祝詞なのです。

次号より大祓祝詞の文章の解説に入ります。

(次号に続く)

【収載】第百五十二号(平成十三年二月)

●大祓祝詞の話 その二

大祓の儀式は宮中に於いてどの様に行われていたか、と申しますと、大宝元年(七〇一)の大宝律令の神祇会に「凡そ六月、十二月晦日の大祓は東西(大和、河内)の文部祓刀を上り、祓詞を読む。百官男女を祓所に聚集し、中臣祓詞を宣り、卜部解除を為す」と記されていて、また延喜格(九〇七)にては、この時「御麻」「荒世、和世」「壺」等の「御贖」の儀式が行われ、その時、宣陽殿の南頭に於いて奏せられる宣命が大祓祝詞である、と言われています。

宮中に於ける右の儀式がどの様なものか、筆者現在その資料を持ち合わせていません。今はただ、右の文章の中の主な語句について分かつている事のみを左に記して御参考にご供します。

律令 ◇律令とは律と令。わが皇朝時代に於ける法典。

律は罪人を罰する法、令は細大の制度を規定したものの。

格 ◇のり、おきて。規則、特に皇朝時代律令を執行するため時勢に応じて発せられたもの。

荒 あら 世 よ ◇六月祓の時、御贖物のために神祇官から奉る

あらたえの衣。

和 わ 世 よ ◇六月及び十二月のみそかに行われる宮廷の儀

式に、天皇の身長を量る竹。または節折の贖物として奉る服、すなわち和妙の称。

あがもの ◇罪をあがなう料として祓の時に供えるもの。

節 ふし 折 おり ◇昔、宮中で六月・十二月のみそかに、荒節・

和節の竹の枝をもつて、天皇・皇后・皇太子の丈の寸法を量つて行う祓。

荒 妙 ◇織目の荒い布。

和 妙 ◇織りの細い拷たえ(絹布類の総称)

さて唯今から大祓祝詞の現代語による説明に入り度いと思えます。大祓祝詞は文章の一節々々を切らずに書いてありますので、何処までが一節なのか、意味が分かりませんと節の区切りもはつきりしません。そこで一節々々を前もつて区切り、書いて行く事にいたします。

集侍うごなはれる、親王みこ、諸王おほきみ、諸臣まつかみ、百官人達もものつかさびと諸國召せと宣る。天皇が朝廷に仕へ奉る、比礼挂くる伴男とものを、手懸挂くる伴男たすきか、靱負ふ伴男きよのを、靱佩く伴男たすき、伴男の八十伴男と始め

て、官つかさ々に仕へ奉る人達の、過ら犯しけむ雑くそ々の罪と、今年の六月晦の大祓に、祓はらひ給ひ清め給ふ事と、諸國召せと宣る。

以上が大祓祝詞の序文に当たります。この序文から解釈・説明を始めることになりましたが、ここでお断りして置かねばならない事があります。先月、大祓祝詞の話を始めようとしたら、会員のYさんが、現在の各神社で称えていらつしやる「大祓おほはら詞ことば」(神社本廳蔵版)を筆者に持つて来て下さいました。その文章を読みましたところ、上述の大祓祝詞の序文が全部削除されてしまつています。「大祓詞」の文章が大祓祝詞だと思つている方には、誠に奇妙に思われるのであります。この事についての事情をお話申し上げることにいたします。

本来、大祓祝詞は先にもお話しいたしましたように、天津日嗣天皇が日本国家建設の方針、世界の将来に対する予見、並びに世界の人々の中に起こるであろう罪穢の内容の説明とその罪穢の修祓の方法等を国民に教示した、天皇の国民に対する宣言であります。それ故、大祓祝詞を読む大中臣(総理大臣)は天皇の前で、天皇を背にして立ち、文武

百官を前にして「天皇の宣言はこの様なものですよ」という様に読んだものであります。

それが現在では、神社神道や新興の宗派神道に於いては、神官が神の方を向いて、神に奏上する形式で祝詞を称えるようになりました。祝詞を称える人の向きが百八十度逆転しました。これは今より二千年以前、人類文明創造の原器であつた言霊布斗麻邇の原理が隠されて以来、それに代わる神社神道が創設され、神道が礼拝の形式を外国伝来の儒教・仏教を真似た事から始まつたためであります。日本の古神道では、神である言霊アオウエイの天の御柱を心中に齋く(五作る)事を目的として、神を拝む(おろがむ)事はありませんでした。言霊原理を神として、伊勢神宮の御祭神として祭つて以来、神を対象とする信仰の形式が始まつたのであります。そのため、信仰の形式としては大祓祝詞の序文は全く適当ではありません。そこでスツパリと削除という事になつたのであります。

祝詞の文章の説明に入ります。

集付あつける、親王みこ、諸王おほきみ、諸臣まへつゝま、百官人達もものつかさど諸国召せと
宣る

集侍はれる、とは「此処に参集になられた」の意。親王みことは、大宝令で、天皇の兄弟・姉妹及び皇子・皇女の称号。明治憲法では、皇子以下皇玄孫までの男子の称号。諸王おほきみとは親王以外の皇族(九条家本延喜式)の意。百官もものつかさどとは多勢の官職にある人の意。文全体で「此処にお集まりになつた親王初め皇族方、またお役人の方々、お聞き下さい」という事になります。

天皇すめらみが朝廷みかどに仕へ奉る、比礼挂ひれかくる伴男とものを、手襷挂たすきかくる伴男とものを、鞆負たもふ伴男を、劔佩たちく伴男を、伴男をの八十伴男をと始めて、官々つかさに仕へ奉る人達の、……

この文章は、天皇が政治を知らしめず朝廷に、役人として務めている人々の四種類の役職について述べる所であります。その四種類とは第一に比礼挂ひれかくる、第二に手襷挂たすきかくる、第三に鞆負たもふ、第四に劔佩たちく、のそれぞれの伴男をであります。文章を読んだだけでは、現代人には全く何の事だかお分かりにならないでしょうが、言霊学の立場で見ると明瞭に理解出来ます。それぞれを次に説明していきます。

今まで幾度となくお話しして来た事がありますが、人の心は五段階の次元宇宙を住家としています。五段階即ち五重

の層を住家としますので、人間の住む所を五重、つまり家と言う訳です。この世に生まれた赤ちゃんが付与されている人間性能はアオウエイの五母音の重畳で表されます。この五母音の縦の並びが、天皇(スメラミコト)の人類文明創造の政(マツリゴト)の場合はアイエオウ(天津太祝詞音図)と表されます。天皇の知らしめず政庁の役職の仕組みも人間性能と同様五段階となっています。この五段階の役職の内容から見ますと比礼挂くる伴男以下の役職が理解されて来ます。

大被祝詞の序文には天皇の政庁の役職として比礼挂くる伴男以下四伴男が書かれています。政庁の仕組みが五段階だ、と申し上げましたから、四伴男では一段が欠けることとなります。その一段は何か、と申しますと、そこが天皇御自身のいらっしゃる政(マツリゴト)の座という事となります。政庁の役職の言霊的順序は天津太祝詞音図のアイエオウの縦の並びで表されます。この五母音の並びに従って天皇と四伴男との仕組みを上より並べますと、天皇(ア)、比礼挂くる伴男(イ)、手懸挂くる伴男(エ)、勅負ふ伴男(オ)、劔佩く伴男(ウ)となります、五段階の役職の内容について次に説明して行きます。

天皇(スメラミコト) 言霊ア

大被祝詞に示される日本朝廷の政治の実際のやり方を述べたのが、古事記神代の巻の伊耶那岐の大神の「禊祓」であります。その「身禊」の章の冒頭の文章を引用しますと、「ここを以ちて伊耶那岐の大神の詔りたまひしく、吾はいな醜め醜めき穢き国に到りてありけり。かれ吾は御身の祓せむ」とのりたまひて、笠紫の日向の橘の小門の阿波岐原に到りまして、禊ぎ祓へたまひき」とあります。この文章の伊耶那岐の大神とは、単に生命意志の主体である伊耶那岐の神ではなく、主体である伊耶那岐の神と客体である伊耶那美の神とが一体となった宇宙身・世界身としての伊耶那岐の大神である、と申し上げました。また文章の中の「御身」とは、単に伊耶那岐の大神の精神的身体というのではなく、伊耶那美の神の領域である黄泉国即ち外国で生産される種々の精神的産物を見聞し、経験してしまつた伊耶那岐の神の身体という意味でありました。禊祓とは単に伊耶那岐の大神自身の祓いというのではなく、伊耶那岐の大神の心を心とし、外国産の文化の経験をわが身体としての禊祓でありました。それは言霊布斗麻邇の原理に則る人類

文明創造の行為であります。

大祓祝詞にあります天皇の政庁に於ける地位は右の古事記の禊祓の文章によって明らかに示されます。「御身の祓へせん」とは、あたかも母親が赤ちゃんを抱き、自らの身体と同様に育むように、外国文化を摂取し、育てることです。大祓祝詞に於ける天皇は国民という子を抱く母親の如き慈愛を以って見そなわします。これを天皇の大御心と言います。即ち朝廷の五段階アイエオウの次元機構の中の言霊アが天皇の地位であります。言霊アの天皇の下に、イエオウの四次元の役職が置かれるのであります。

比礼挂くる伴男 言霊イ

比礼とは霊顯ひれとも書きます。霊である言霊が眼で見え顕われるようにしたもの、の意で、神代文字、麻あ邇に名なの事です。「挂かく」とは掲げるの意。「比礼挂くる」とは五十音言霊図、または言霊原理によって世間の生産物、文化を検討するの意となります。世界の文化といいますが、ウオアエの四段階の別があります。言霊ウに属する人間性能より産出される現象の構造・時所位は天津金木音図に参照してその実相が調べられます。以下、言霊オの文化には赤珠音図

が、言霊アに属する文化には宝音図が、そして言霊エの文化現象には天津太祝詞音図が適用され、検討が行われます。比礼挂くる伴男とは以上の如く、政治の鏡である五十音言霊図を掲げ、この鏡に則り諸文化現象を検討し、その実相を見定める役職の事であります。

手襷挂くる伴男 言霊工

手襷とはまた手次たすきとも書き、古代手の指を次々に折ったり、伸ばしたりして数を数えることでもあります。伊勢五十鈴宮は五十音言霊をお祭りする宮であり、奈良の石上いそのかみ(五十神)神宮は五十の言霊を操作・活用する五十の手法を祭る宮であります。その石上神宮に昔から伝わる「一二三四五六七八九十と数えて、これに玉を結べ」という言葉があります。五十音の言霊の動きを数で示す時、この数を数霊かずたまと呼びます。この数による動き方を手の指の動きで示しますことを手襷たすき(手次)と言ったのでした。でありますから、比礼挂くる伴男が、各地で生産されて来る諸文化を、五十音図に照らしてその実相を明らかにしたもの、次にどの様に摂取し、社会一般の福祉にどうしたら役立たせることができるか、の言霊原理の活用によって、即ち手の指を折

り伸ばしすることによって見定め、決定する役職が手懸掛くる伴男であります。即ち言靈工の実践智の仕事です。

韃負ふ伴男 言靈オ

韃やまとは矢を入れて背負う道具です。矢は人に向かつて飛んで行くもので、人の言葉の言葉、言靈に譬えられます。比礼掛くる伴男、手懸掛くる伴男によって、言靈原理に基づいて国民に発布される命令が決定されますと、それをそのまま言靈理論としてではなく、国民に理解され易い比喻・表徴または種々の概念的な言葉による法律・法則として国民に伝える役職のことです。これは言靈オの働きです。

劔たち佩く伴男 言靈ウ

韃負う伴男の韃が実際の矢の容器ではなく言葉の表徴であつたように、この劔たちも武器としての太刀ではなく、霊的な判断力である言靈または節刀の意味であります。韃負う伴男によつて宣布された社会の法律・法則を人間社会の中で国民に接することによつて現実に執行する役職の事です。国の中の集団または個人に法律を執行する場合、それぞれ事情が異なり、同じ情況のものなど何一つありません。

せん。それに対応する執行者のその時、その場の適切な判断が不可欠です。劔たちとはその場の判断力の事を指す言葉であります。法律が一般社会に直接に触れる場での仕事でありますから、言靈ウの役職と言われます。

太古の天皇の知らしめず朝廷の政治機構を表す天津祝詞音図の五母音、アイエオウにおいて、最上段のアを天津日嗣天皇の座とした時の、天皇の下に従う比礼掛くる伴男、手懸掛くる伴男、韃負ふ伴男、劔佩く伴男の四伴男の役職の内容は以上の如くであります。この四伴男の役職の内容を頭に入れて置いて頂いて、大祓祝詞を読んで行きますと、最後に出て参ります「被戸四柱の神」と同様の内容を持ち、しかも古代の政治が如何に国民大衆の気質にびつたり適合していたか、がお分かり頂けることとなります。次の文章の解釈に移ります。

宮つみや々に仕へ奉る人達の、過ら犯しけむ雑くま々の罪と、今年みなつちの六月晦の大祓に、被かひ給ひ清め給ふ事と、諸もろ國召もちせと宣る。

右の文章は単に何気なく読みますと、それだけで分かつ

たように思われます。これより前の文章から続いて「天皇を始め、四伴男やその他の役人達の、過ちを犯した事から作るいろいろな罪を、今年の六月末日の大祓の儀式に於いて、祓い清めるから、その事について皆さんお聞きなさい」という意味に受け取れるであります。

けれど大祓祝詞の序文を、現代人が常識に従って右の如く受け取ってしまいますと、古代から数千年続いて来ましたが大祓の本来の意味は全くお分かりにならないで終わることになります。それはどういう事なのか、と申しますと、文章の中に出てくる「罪」に関する解釈に問題があります、現在単に「罪」といえば、人を殺したり、物を盗んだり、だましたりする事と思います。大祓に後章出て来る天津罪、国津罪の中の国津罪と呼ばれる罪は現代同様、そういう罪も勿論含まれます。しかし大祓が本来その祓いの主たる対象とする天津罪と呼ばれる罪はそのようなものではないのであります。ではどんな罪なのか、次に説明いたします。太古に於いて、官職にある人も人間でありますから、いろいろな罪を作ることであつたであります。他人に不快な思いをさせたり、喧嘩をして人を傷つけたり、詐欺・横領の罪などもあつた事でしょう。けれど官人としてもつ

と大きな罪は職務上の罪であります。太古より日本の朝廷の政治の最重要事は世界または日本の文明の創造の中樞機関としての仕事であります。世界あるいは日本の各地に於いて産出・発明されて来る思想・信条・主張・主義・陳情・訴訟等を受け付け、それらの事柄の事情を十分に生かし、歴史創造上の材料として吸収・消化することが出来たか、どうか、が最も重大な事であります。この作業が十中九まで達成されても、残された十分の一の積み残しは政治の禍根となり、世情不安の元となります。政治にたずさわる人にとつて、この事が最も留意すべきことでありましょう。大祓の儀式の主な目的はこの罪の払拭にあつたのであります。これらの罪穢の詳細は後章述べられる事となります。以上で大祓祝詞の序文の説明を終わり、大祓の本論に入つて参ります。

高天原に神留ります、かむつま 皇親神瀛岐神瀛美の命すめらがむつみむらぎかむらみ 以下、八百万の神等と神集へつど に集へ賜ひ、神議りに議りたまひて、あがすめのみこと 我皇御孫命は、とよあははら 豊葦原の水穂園と、あまのくに 安園と平けくあまのくに 知しめせと事依し奉りことよま き、よま 斯く依し奉りし園中に、荒ぶる神等とば、神岡はしに岡はし賜ひ、はら 神拂ひに拂ひ賜ひて、こと 言岡はし

磐根樹根立、草の片葉とも言止めて、天の磐座放ら、天の八重雲と厭の千別きに千別きて、天降し依し奉りき。

大祓祝詞の話を始めるに当たり、序文の次に、祝詞の全体を五つの節に区切りました。右の文章がその第一節の天孫降臨によって日本国家の建設をはじめた折の国土の歴史的情况を述べた箇所であります。文章を区切って説明していきます。

高天原に神留ります。皇親神漏岐神漏美の命以下、神話の文章通りに訳しますと、「高天原神界にいらつしやる、天皇の大元の創造親神、神漏岐・神漏美の神様の命令によって、…」となります。この高天原を地球上の地理の問題にしますと、多分印度ヒマラヤ、チベット、その他アフガニスタン、パキスタン等の高原地帯が考えられます。また高天原を言霊学によって形而上の精神領域といたしますと、頭脳の中核にあつて、天名十七言霊によって構成されている心の先天構造のことも解釈出来ます。大祓祝詞の作者はこれ等形而上、形而下の内容を双方組み合わせた意味に使つたと推察されます。その推察の理由は解説が進

むにつれて御理解頂けると思っています。

神漏岐・神漏美の神漏ろは神室即ち神の家の意です。家は五重で五階層の重畳を意味し、神漏岐は言霊アオウエイの主体を表す五母音を、神漏美は言霊ワヲウエキの客体を表す五半母音を指示しています。そして縦に並ぶ五つの母音はその中の言霊イが他のアオウエ四母音を統轄しておりますので、神漏岐は言霊イである伊耶那岐の神に当たります。同様に神漏美は言霊キである伊耶那美に当たります。伊耶那岐の神（伊耶那美の神）は言霊並びに言霊原理の神でもあります。

そこで「高天原に神留ります、皇親神漏岐神漏美の命以下」とは「太古に於いて、アジアの高原地帯に大勢の聖（靈知）達が集まり、人間の心の先天構造はどの様な働きをしているか、研究を進め、終に人間の精神構造を形成する言霊布斗麻邇の原理を発見・完成させました。そしてその原理の自覚者の命令によって…」という意味である事が分かります。

八百万の神等と神集へに集へ賜ひ、神議りに議りたまひて日本の神道では神様の数をよく八百万と表します。辞書

では極めて多い数のこと、とあります。言霊学では心を構成する言霊の数五十、その典型的な運用・整理法五十、計百の原理といます。しかし五十の言霊の幾つかを五十通りの組合せ方で物事の現象を表現しますと、八百万どころか、無数の真実が現れて来ます。そこで八百万の神と申します。かくて「八百万の神等を神集へに集へ賜ひ、……」とは、「言霊原理の自覚者（神漏岐神漏美）の命令で、言霊原理の諸法則のすべてを含めて検討した結果として」の意となります。

我が皇御孫命は、豊葦原の水穂国と、安国と平けく
知しめせと事依し奉りき

皇孫命を邇々芸の命と呼びます。皇孫と邇々芸とは同様の意味だと申しますと、不審に思われる方もいらつしやる事でしょう。神道で皇祖というと天照大神の事です。その子は天の忍穗耳の命、そのまた子が邇々芸の命となり、邇々芸の命は天照大神の孫に当たります。祖から見て孫は第三次的な生命です。邇々芸とは「二の二の芸術」という事で、これも第三次的な芸の意です。言霊原理の運用である言霊エの神は天照大神です。その原理の第二次的産物は言霊即

ち言葉がそのまま物事の実相を表す大和言葉です。次にその大和言葉の実相そのままの人間社会を作る政治活動は第三次的な芸術という事になります。言霊原理から数えて、原理に則る文明社会建設の政治は第三次的な芸術という事が出来ましょう。皇孫邇々芸の命とは、その第三次的である言霊原理がそのまま社会の実相として表れた社会・国家の建設者の名なのであります。

「豊葦原の水穂国」の事を従来の国語学は「豊かに葦が繁り、稲の瑞穂が実る国」即ちこの日本国と解釈します。しかし始めからその様に解釈したのでは、日本の国を肇めた意義は全く理解されません。日本の国家を肇め、文明を創造して行くには、肇国・建設のための大前提があるのです。その前提となる言霊布斗麻邇の原理を表現する芸術作品としての国家の建設が日本肇国の精神なのです。その意味はこの国家の創始者である邇々芸の命の名にも示されます。そして豊葦原の水穂国はその大前提となる目的の形而上的な内容を示した言葉なのであります。

豊葦原の豊の字は太古の人名や土地名に多く見られます。豊とは十四の事で十四個の言霊アイエオウ・ワ・チキミヒリニイシを指します。この十四言霊は人の心の先天構

造を構成する十七言靈の中の代表言靈十四個の意味です。また東洋思考構造を表す数靈八を示す図形(図153-A)、と西洋的思考構造を表す数靈六を示す図形(図153-B)、その双方を統轄することが出来る世界で唯一の思考原理を持つ国家である事を示すために8+6=14の数靈を表す言葉でもあるのです。

図 153-A

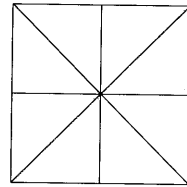
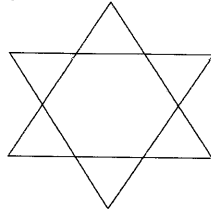


図 153-B



名といたします。そこで建国の大方針が豊葦原と示されます。原とは図示された場という事です。

水穂国みずほのくにの水穂とは陰陽(水火)と解釈出来ます。原理方針

(陰)と出来上がった社会形態(陽)とが完全に一致している、事を示します。国とは組んで似せるの意、または区切って似せるの意でもあります。一般なるものを、言葉に組み、または区切って、特殊なものと限定した事を意味します。日本国と言えれば他の国とは区別した日本国家の意であります。また水穂は瑞穂みづほと書く場合があります。言靈図の中のそれぞれの言靈(イの音)が瑞々しく実り、生き生きと生気が満ちている国とも解釈出来ます。

豊葦原の葦原とは、その世界唯一のトヨの原理の言靈図上の説明であります。大祓を行う朝廷の政治の原則を示す天津太祝詞五十首言靈図(図153-C)を掲げます。古代の日本の政治は、この音図に於けるア段(天皇の大慈悲の大御心)とイ段(言靈原理)を政治の方針の中核として成立します。その事を示すために音図の中の言靈アと言靈シを結んで

図 153-C

天津太祝詞音図

ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	ア
キ	シ	イ	ニ	リ	ヒ	ミ	キ	チ	イ
エ									エ
ヲ									オ
ウ									ウ

以上の意味を踏まえますと、「豊葦原の水穂国を、安国と平けく知しめせと事依し奉りき」とは「精神の先天構造の法則に基づいて言靈の生氣漲る国となるにふさわしい処へ降って行って、その土地を平和に治めなさい、と皇孫邇々芸の命に委任なさいました」と解釈することが

出来ます。

以上の邇々芸の命の天孫降臨の事を古事記は次の様に伝えていきます。

天照大御神……この豊葦原の水穂の国は、汝の知らさむ国なりとことよさしたまふ。かれ命のまにまに天降りますべし。また「……に脊肉の韓國と笠沙之前に求ぎ通りて詔りたまはく、此地は朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり、かれ此地を甚と吉き地」と詔りたまひて、底津石根に宮柱太しり、高天原に氷木高しりてましましき。

かく古事記が伝えますように、世界の屋根といわれるヒマラヤ、アフガニスタン、チベット等の高原地帯から、人間精神の究極原理を自覚・保持した靈知りの集団が、その原理に基づいた精神文明豊かな国家の建設を目指して、この日本列島に天降つて来たのであります。（現在の古事記の神話は「麋肉の韓国を笠沙之前に求ぎ通りて……」の箇所を書き変えております。ご注意下さい。）（次号に続く）

【収載】第百五十三号（平成十三年三月）

●大祝詞の語 その三

斯く依し奉りし國中に、荒ぶる神等とば、神問はしに問はし賜ひ、神拂ひに拂ひ賜ひて、言問ひし磐根樹根立、草の片葉とも言止めて、天の磐座放ら、天の八重雲と巖の千別きに千別きて、天降り依し奉りき。

邇々芸命と呼ばれる聖の集団の所謂天孫降臨が何時頃の事であったのかは、はっきりとは分かっていません。多分、数千年及至一万年位前の事と推定されます。また、この集団が自覚・保持して日本国肇国の精神の基盤となつた布斗麻邇言靈学は何時その確立に成功したか、これもはっきりとは分かりませんが、天孫降臨以前、数千年の長い間の研究により降臨の時より前に完成された事は事実でありましょう。

では、言靈布斗麻邇の学を自覚・保持した聖の集団が高原と呼ばれる地球の高原地帯から、政治を行うのに適した平地に降つて来る以前の日本や世界の状況はどうだったのでしょうか。人類が「人の心とは何か」の究極の答えを出したのが言靈の学の完成でありますから、それ以前の人間社会の状況は決して平和豊潤なものではなかつた事が推測

されます。古事記はこの様子を「豊葦原の千秋の長五百秋の水穂の国は、いたくさやぎてありけり」と表現しています。人間の欲望と感情の赴くままの生活、または、力の強いものが力により統率する社会が展開していたものと推察されます。または高天原に於て布斗麻邇の原理が完成される以前の、不完全な生命理論を持つて降って行った人達の統率する矛盾に満ちた社会が存在したのでありましょう。「人間とは何か」の解明された真理を保持した集団の降臨があつて、人類は初めて人類文明創造という意図を持つた歴史の第一歩を踏み出す事が出来たと云えるでありましょう。

斯く依り奉りし国中に、荒ぶる神等とば、神
 同はしに同はし賜ひ、神拂ひに拂ひ賜ひて、：

神漏岐・神漏美である言霊原理の完成・自覚者が、皇孫邇々芸命と呼ばれる聖の集団に安らかな良き国を建てよと委任した国土の中には、荒ぶる神の行いをする人達が満ちていました。荒ぶる、の語源はアラの音図が示される思想を運用・活用するという事です。言霊学上、言霊

図 154-A

	木	金	津	天					
ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア	
ヰ									イ
ウ									ウ
エ									エ
ヲ									オ

ウである五官感覚に基づく欲望性能を人間の五種の性能の中心に置いた心の構造を示す五十音言霊図を天津金木音図といいます(図154・A参照)。この音図で示される思想の内容が上段のAからラまでの展開で表される事からアラ(荒)の音図と呼ばれます。また、「ふる」とは運用・活用するの意でありますので、この性能を中心に置いた行為を身上とする思想の持主を「荒ぶる神」と言うのであります。即ち自らの持つ腕力、武力、金力、権力等を自負して社会の生存競争を勝ち抜いて行おうとする思想・主義の持ち主のことです。古事記の神話で言うならば、天孫降臨以前に

この国を治めていた須佐男命の靈統をひく
 大国主命、事代主神、建御名方神等の神々
 を指します。

降臨した聖の集団は、従来そこにいた所謂荒ぶる神達と戦争をしたのではありません。荒ぶる神の生存競争の権力闘争思想と、聖の集団の自覚する生命本然の精神構造の根ざした言霊布斗麻邇の原理による政治と、どちらが人間の住む社会を統治する方法として適当であるか、をお互いに討議したの

であります。この作業を古事記は「言こと向むかけ」と呼んでいます。

「神問はしに問はし賜ひ、神拂ひに拂ひ賜ひて」とは以上のような討論があり、その結果、権力闘争思想より生命本具の原理である言霊の原理の方が、民衆の統治の手段として比較にならぬ程合理的である事を在来の荒ふる神達が認め、統治の実権を降臨の聖の集団に明渡したという事になります。この統治の実権の譲渡を古事記は「国譲りくにやうじ」とい

います。
「言問ひし磐根樹根立」の「言問ひし」とは右に述べた討論を仕掛けた事を言います。天孫の側から仕掛けたのか、荒ふる神からかはどちらとも取れますが、結果としてお互いの討議となつた事は変わりありません。「磐根いはね」とは昔の東洋思想の五行・五大の思想のことであります。磐根は五葉音に通じます。人間本具の心の構造の要素の中で、言霊学で謂うなら大自然である五母音宇宙のみに拘泥して、文明創造に関しての人間の主体の智慧を示す八つの父韻については言及することが少ない思考・主義のことであります。

「樹根きね」の樹は気で感情論の事と受取られます。天孫降臨以前に行われていた土着信仰に根ざしたものの考え方の事でありましょう。「磐根樹根立」の「立」は断ちの謎です。その

時以前に各地各所で実際に行われていた五行思想や感情論・信仰思想等を、討議の末に、それ等は生命の本義に沿わない不完全な考え方だ、と否定して、それ等の実行実践を了解の上で廃止し、世の中から一掃した事でありました。

「草くさの片葉かさはをも言止めて」の「草」は「種々くさくさ」の意。「片葉」は「書いた言葉」という事。言霊原理に基づいて作られた神代神名文字ではない概念的思考の文字の事です。また延いては、それ等の文字で綴られた種々の思想の書物でもありません。それらの言葉、文字、思想の一切を人間社会から一掃し、使用を停止させたのでした〔註一参照〕。かくて旧約聖書にある如く、「全地は一つの言葉、一つの音のみなりき」〔創世記〕の精神生命の原理の言葉で統一された世界が誕生したのであります。

〔註一〕かく言うど、現代の読者は、極めて強制的に、また強権的な言語、文字、思想の統制と受け取られるかも知れませんが、けれど決してそうではありません。各地域、民族の言語・思想の内容の特徴を見極め、それを摂取して、更に大きな合理的な文化の担い手である言語乃至文明の中に了解の下に統合して行くなれば、何の抵抗もなく受け入れられるのでありましょう。または、「一

つの言葉、一つの音」とは、各地の言語はそのままに、麻邇の言葉、文字を公式の用にのみ限定して世界の正式の言語として制定した、とも考えられます。

「天の磐座放ち」の磐座は五十葉倉の意で、五十音言霊を組織して入れた倉、即ち言霊原理の事となりません。天の磐座とありますので、

原理の中の天津磐境である言霊で構成された精神の先天構造の原理であるとも取れます。「放ち」とは世の中に向かって発表し、流布したの意。そこで「天の磐座放ち」とは「弱肉強食の混乱した生存競争の中に向かって、人間生命本具の言霊によって構成された精神の先天構造の原理を開示・発表して、社会統一の政治の光を掲げた」の意となります。

「天の八重雲を巖の千別きに千別きて、天降し依し奉りき」の

「天の八重雲」とは「先天構造の

図 154-B

天の八重雲				
タ	チ	テ	ト	ツ
カ	キ	ケ	コ	ク
マ	ミ	メ	モ	ム
ハ	ヒ	ヘ	ホ	フ
ラ	リ	レ	ロ	ル
ナ	ニ	ネ	ノ	ヌ
ヤ	イ	エ	ヨ	ユ
サ	シ	セ	ソ	ス

図 154-C

出雲八重垣					
カ	サ	タ	ナ	ハ	マ
ク	シ	チ	ニ	ヒ	ミ
ケ	ス	ツ	ヌ	フ	ム
コ	セ	テ	ネ	ヘ	メ
		ト	ノ	ホ	モ
					ヨ
					エ
					オ

中の八段に重なった雲」の意。雲とは天空にむくむく涌き出るもの、の意で人間天与の根本智性のリズム、即ち八つの父韻、または父韻の働きによって生まれる三十二の子音の並びの事であり（図154-B参照）。「巖の」とは「清浄な」または「おごそかで權威のある」の意です。「千別き」とは「道別き」の意で、利害、真偽、美醜、善悪または当・

不当をはっきり区別することです。天孫降臨以前の日本や世界の生存競争社会にも種々のルールがあった事でしょう。このような弱肉強食の社会的ルールを言霊を以って表示すると金木音図となります。その父韻の並びはキシチニヒミイリとなります。現代学校で使われている五十音図であります。この精神構造は天孫降臨以前の大国主命の社会と同じであり、この社会制度の原理を出雲八重垣（古事記）と呼びます（図154-C参照）。「巖の千別きに千別きて」とは右の出雲八重垣の原理で治められている世の中に、天の八重雲の生命本来の調和をもたらず統治の方法を投入して、その善悪・当否を次々と立て別けて行く事であります。弱肉強食の暗黒の社会に、光明輝く天の八重雲の英智の統

治の光が投入されるならば、暗黒は瞬時にして消滅の運命をたどることとなります。この手順を「嚴の千別き」といいます。

人類の長い歴史創造の過程で、人類の生命を脅かす世の中が現出した時、それを平等・調和の社会に転換させる方法は常に唯一つしかありません。それが「天の八重雲を嚴の千別きに千別き」する事であります。社会文明創造の精手手順を「チキミヒリニイシ」の時置師の並びに組み交えることであります。この精神操作は大祓祝詞の後章「天津金木を本打ち切り末打ち断ちて…」と大祓祝詞の根本原理として再び同様の事が述べられる事となります。

以上の文章の解説をまとめて書きますと、次の様になります。

「以上述べましたように統治の委任されました国土の中で、従来からの統治をしておりました弱肉強食の権力政治を方針としておりました人達に、その様な政治のやり方で今後もやって行つてよいのか、と疑問を投げかけ、また間違つた方針を討論によって改めさせ、その討論によって従来行われていた自然主義や感情論などの不完全・不合理な主義による政治のやり方を断念させ、またそれぞれの地方の生

命の根本法則に基づかない言語や文字や文化をも納得の上で廃止させ、それに代わつて人間の精神生命の先天構造に則つた言霊布斗麻邇の法則を世の中に発表・開示し、社会の隅々にまで行き渡らせ、布斗麻邇による政治の大方針であるタカマハラナヤサの時置師を適用して、その時までの世の中の混乱の原因となつていた金木思想のカサタナハマヤラの政治の不適當である事を明らかに人々に納得出来るように道理を説くよう、委任された道の実行に取り掛かつたのであります。」

大祓祝詞の次の文章に入ります。

斯く依し奉りし四方の国中と、大倭日高見国と、安国と定め奉りて、下津磐根に宮柱太敷き立て、高天原に千木高知りて、皇御孫命の瑞の御念仕へ奉りて、天の御蔭、日の御蔭と隠りまして、安国と平けく知しめさむ。

以上の如く人の心と言霊の究極の真理である五十音言霊布斗麻邇の原理を自覚・保持して、この地球上を生命本具の合理性に叶つた、平和な国土とするよう委任を受けた邇々芸命靈知りの集団は、高天原と呼ばれた高原地帯から何

処に降りて来たのでしうか。前にも書きましたように、古事記に「ここに齋肉の韓国を笠沙之前に求ぎ通て…」と書いてある事から、朝鮮半島を通つて九州に来たという事になるであります。その経路については、種々異論のある処でありましたが、聖の集団が「此処は朝日の直刺す国、夕日の日照る国なり、かれ此処ぞ甚と吉き地…」とありますように、世界統治の中心地となる終着点と決定しましたのは、まぎれもなくこの日本列島でありました。以下、大祓の文章を小別けして解釈して参ります。

斯く依し奉りし四方の国中と、大倭日高見国と、安国と定め奉りて

祝詞の文章はここから新しい章に入ります。今までで、祝詞の序文に続いて第一章の天孫降臨の時の日本と世界の歴史的な状況と降臨する聖の集団との交渉について述べられました。これからは第二章の日本国肇国の目的とその根本原理について述べられることとなります。

「倭」は「大和」とも書きます。平和で合理的な調和がとれている、の意です。「日高見」の日は靈で言霊または言霊原

理のこと。「高見」は国家の政治の原理として高く掲げるの意。「大倭の日高見国」全体では、生命本具の法則に基づく言霊原理を統治の指標として高く掲げ、世界全体がそれを手本に仰ぎ見る事によつて、大調和が保たれている中心となる国、といった意味であります。この事から「四方の国中と」の四方の国とは全世界の国々という事になります。天孫降臨した邇々芸命聖の集団が日本列島を本拠として世界の統治に乗り出し、遂に言霊布斗麻邇の原理に基づいて全世界の平和をもたらし、人類の第一精神文明時代を築き上げた事を簡単な文章で表現したものであります。では、その精神文明時代の政治を担当する人の心構えはどんなものであったのでしょうか。それが次に取り上げられます。

下津磐根に宮柱太敷き立て、高天原に千木高知りて

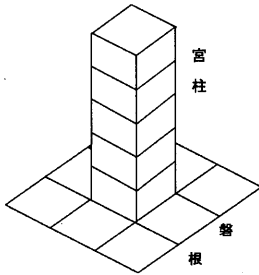
大自然の生物としての人が生来授かっている人間性能、即ち生まれたばかりの赤ちゃんの精神性能を表した五十音言霊図を天津菅麻といひます。清々しい心の衣という意味であります。この音図の母音の縦の並びは上よりアオウエイとなります。「下津磐根」の「下津」とは、この母音の並び

の一番下である言霊イ段となります。このイの段に「磐根」即ち五十葉音の五十音言霊が展開し、存在しています。古代に於ける布斗麻邇の原理による政治の要諦は、先ず「人間とは何か」の最初の認識である人間天与の精神構造を表わす天津菅麻音図の自覚から始まります。

人の心を言霊イの次元で見ると、そこにはアオウエイ五十音言霊が存在するだけで、これより多くも少なくもなく、また、他の何者も存在しません。人間の心は五十個の言霊によって構成されます。仏法を求めて旅する三蔵法師の供をする孫悟空は阿彌陀様の掌（たなごころ）に乗せられ、それから外へは行く事ができません。掌とは田の名の心、また田とは五十音図の事であり、それが人間の心の土台です。この土台の上に人間の文明創造の営みが展開されます。

「宮柱太敷き立て」の宮柱とは、神の家（御屋）の柱、即ち人間が人間としての自覚の内容を表わす五母音を柱と見立てた事であり、（図154D参照）。人間はこの五母音の柱によって一切の物事を判断することによって生きています。「太敷き立て」の「太」とは布斗麻邇即ち五十音言霊の原理という事。「敷き」は磯城（五十城）の意で五

図 154-D



十音言霊の事。「宮柱太敷き立て」の全部で「五十個の言霊を土台として、その上に五十音言霊の原理の自覚による人間の判断力を柱として立て」の意味となります。アオウエイの五母音の縦の並びを古神道では天之御柱、伊勢神宮本殿下に立つ「御量柱」と呼んで表徴しています。また神道五部書には「一心の霊台、諸神交通の本基」などと説明しています。人間の自覚された根本的判断力であります。

次に「高天原に千木高知りて」であります。「下津磐根」が古代政治の土台認識であり、「高天原に千木高知りて」はその政治の方法の最終結論です。高天原の名称は五十音言霊

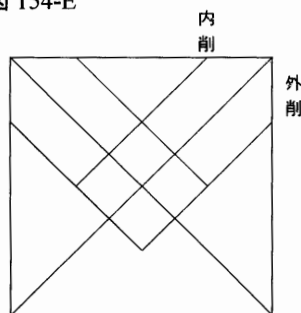
図の上段の父韻がタカマハラナヤサと並ぶ天津大祓祝詞音図を語源としています。古代政治の要諦は天津菅麻の人間認識を土台とし、その上に文明創造の政庁の組織を天津大祓祝詞が示す如くに作れ、というのであります。

伊勢神宮の本殿の屋根の棟に鯉木（内宮は十本、外宮は九本）が棟に対して直角に並びます。そしてその棟の両端

にそれぞれ二本の木が立ち上がっています(図154・E参照)。内宮は内削ぎ、外宮は外削ぎです。これを千木と呼びます。千木は道木の意であり、道理の気とも受取られます。鰹木は数招ぎの意です。両端の千木の道理の気が動きますと、その間の鰹木で示された数の根源の智性である父韻が活動して現象子音を生み出します。また千木は「契り」の意でもあります。両端の千木が父韻によつて結ばれて現象子音を生みます。伊勢神宮の祭神天照大神は日本並びに世界の文明創造、即ち言霊エの神です。その精神構造の父韻の並びはタカマハラナヤサです。その活動によつて生じる子音とは世界の文明の創造の事となります。

右の道理を「下津磐根に宮柱太敷き立て、高天原に千木高知りて」というのです。人間が生来持つて生まれた天津菅麻音図を土台として、人間の最高の営みである文明創造の政治の序の組織を制定するとき、先の序文で示されましたアイエオウの天津太祝詞音図に従った朝廷の役職の五段の順序が出来上がります。即ち、天皇(スメラミコト)

図 154-E



Ⅱア、比礼挂くる伴男Ⅱイ、手襷挂くる伴男Ⅱエ、鞆負ふ伴男Ⅱオ、鞆佩く伴男Ⅱウの五段階のことであります。

皇御孫命の瑞の御舍仕へ奉りて、天の御蔭、日の御蔭と隠りまして、安国と平けく知りぬさむ。

皇御孫命の瑞の御舍仕へ奉りて、と言いますと「皇孫邇々芸命の美しい御舍に奉仕する」と解釈して当然です。しかし大祓ではこの解釈は適当ではありません。形而上的精神的な意味を言っているのです。「舍」とは、昔、言霊五十音を粘土盤の上に神代文字で刻み、それを焼いて瓦としました。「言は神なり」でありますので、明らかに神を顕わすの意で「あらか」と呼びました。また甕とも甕神(御鏡)ともいいました。即ち五十音言霊布斗麻邇の原理のことです。言霊原理に仕えるとは原理を最高の規範とし政治を行うの意であります。皇御孫命とは、

ここでは単に天孫降臨した邇々芸命というのではなく、言霊原理から数えて二の二、即ち三次的な芸術である社会建設を行う代々の天皇の意と取った方が適当でありまし

よう。

「天の御蔭、日の御蔭と隠りまして」の「天の御蔭」は言霊、
「日の御蔭」は数霊と考えるとよく理解できます。「隠りまして」とは「書き繰る」の謎であります。五十音言霊は伊勢五十鈴宮にお祭りしてあります。その五十音言霊を操作する方法五十は、奈良の石上（五十神）神宮の数霊の作用を示す「日文（二三）」として祭られています。祝詞の序文にありますように「天の御蔭」は「比礼挂くる伴男」の役職であり、「日の御蔭」は「手襷挂くる伴男」の役目となります。五十音言霊を整理・運用する操作の動きが数霊という事なのです。

また、次の様にも言う事が出来ましょう。天の御蔭、日の御蔭の蔭を影と書けば「光り」のこととなります。すると、天の光は言霊、言霊は霊でありますから、言霊の動きは「霊駆り」で、霊の動き、即ち日の御蔭となります。「天の御蔭、日の御蔭と隠りまして」とは「言霊と数霊とを書き繰って」の意となります。

以上、大祓祝詞の第二章である「日本国肇国の目的と統治の方法」の文章の解釈は次の如くまとめられる事が出来ます。

「天孫降臨以来、統治の委任を受けました邇々芸命とその子孫である代々の天津日嗣天皇は、従来の生存競争の世を支配していた人達を言霊布斗麻邇の原理を以って言向けやわし、次第に全世界と、その中心となる言霊原理を国体とする日本の国とを平和な国に建設して行つたのであります。これが人類の第一精神文明時代の始まりでありました。その統治の方法といえますのは、人間性を重んじ、人間天与の性能を示す天津菅麻音図の自覚を土台とし、その土台の上に人間の判断力の自覚であるアオウエイ五母音の柱を心中に打立て、この人間性の土台と判断力を運用することによって、更に世界統治の規範（鏡）となる天津大祝詞音図の自覚に入ること、これが天津日嗣天皇の心構えであります。この天皇の自覚の内容を自らの心と仰ぎ、朝廷に仕える役職にある人達は言霊と数霊の法則に従って政治を行い、世界を平和に治めて行つたのでした。」

天孫降臨と呼ばれている邇々芸命集團の日本建国と全世界の「一つの言葉」としての統一の時期を約八千年前としましょう。その時から言霊布斗麻邇の原理に則る人類の第一精神文明の時代が始まりました。世界は天津日嗣天皇の高

遠・嚴肅な人類歴史創造の経綸の下に精神文化の花咲く素
晴らしい時代が続きました。その時代は約五千年間続いた
のであります。

今より三千年及至四千年程前、人類の第一精神文明は爛
熟期を迎え、人々は自らの内なる精神内の真理に根差した
平和な文明の時代を謳歌すると同時に、漸く自らの外なる
物質の真理に関心を向けようとする新しい兆^{きざし}が見え始め
たのであります。それは「生めよ、殖やせよ、地に満てよ」
の地球上の人口の増加、それに伴う食糧増産、産業経済、
交通の発達等が要望された結果でありましょうか。その要
望は言靈ウ（五官感覚に基づく欲望）と言靈オ（現象間の関
係を方式化する研究・経験知）の問題として取り上げられ
る事となります。人間が自らの外に向ける関心と外なる真
理の探求、即ち物質科学の研究は物事を分析・破壊するこ
とから始める学問です。そして、この物質文明が急速に発
育する基盤となる土壌は生存競争の社会であります。

以上の如き人類社会の精神徴候を察知した大倭日高見国
（日本）の朝廷では重要な会議が何回も開かれた事でしよ
う。その結果、朝廷に於て人類文化創造の方針を大きく転
換する決定がなされたのであります。それは人類の第一精

神文明時代より第二物質文明時代への転換であります。そ
の転換の方針を最も確実に実現する為の手段として、第一
精神文明時代を創造した基礎原理である五十音言靈布斗麻
邇の学問を、人類社会の表面から隠没させ、人々の表面意
識より忘却させることであります。その結果、精神の五次
元性能の共生・調和は失われ、言靈ウとオのみの他の性能
との協調からの逸脱・独走が始まります。それは聖書の所
謂「禁断の木の実を食べた」事であり、経験知と欲望の自我
意識が生まれることともなります。天孫降臨以前にそうで
あった如き、地球上に弱肉強食の生存競争社会が現出する
でありましょう。そして、人類の第二の文明である物質科
学はその泥沼の如き混乱の社会の中から進歩・発展して来
るに違いありません。

物質科学文明創造のための方針として、精神文明の原器
である言靈原理を一定期間社会から忘却させるといふ朝廷
の決定は、一種の「賭」であったでありましょう。その事に
よつて人類はどれ程の困難に遭遇するか計り知りません。
しかし、この決定は単なる賭ではありません。「人の心と
は何か」を熟知し、「神ともなり獣ともなる」人間の業を知
り尽くしている靈知りの集団が決断した「人類の第二の物

質科学文明を最短期間に完成させる」ための最良の方法であつたのです。

言霊原理の社会からの隠没を近い将来に実行する事が決定した頃、日本朝廷に於いて、先ず大被祝詞の作成が行われたのであります。鵜草葺不合皇朝三十八代、天津太祝詞子天皇の時と伝えられます。次に精神文明の成果の日本より外国への輸出が抑制され、終に中止されました。今から三千年程以前のことと推定されます。この政策が実行されるに従つて、予想された如く世界人類の中に種々の悪徳による罪穢れが醸成されて来ました。人類はその第二の物質科学文明の時代に突入して行つたのであります。大被祝詞の文章は、その發生して来た人類の罪の内容の説明である第三章に入ります。

(次号に続く)

【収載】百五十四号(平成十三年四月)

●大被祝詞の話 その四

大被祝詞の第三章に入ります。この章は前号で述べましたように、人類の第一精神文明時代から第二の物質科学文明時代に入り、その目的である物質科学文明を創造する為の方便として、弱肉強食の生存競争社会を現出させた結果、

社会に起つて来る種々の罪穢れについて説明する章であります。先ずこの章の全文を載せます。

国中に成り出でむ、天益人等が、過ら犯しけむ雑々の罪事は、天津罪とは、畔放ら、溝埋め、補放ら、頻蒔き、津刺し、生剥、逆剥ぎ、屎戸、幾許の罪と天津罪と宣りわけて、国津罪とは、生膚断ら、死膚断ら、白人胡久美、己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪、畜犯せる罪、昆虫の災、高津神の災、高津鳥の災、畜仆し、畜物せる罪、幾許の罪出でむ。

以上が大被祝詞の罪についての文章の全部です。読んで直に分かることですが、祝詞は人類の中に現れて来た罪穢れを天津罪と国津罪に区別して述べています。先ず、この天津罪と国津罪の相違についてお話し、次にそれぞれの罪の内容の説明に入ることといたします。

天津罪を辞書で見ると「須佐男命が天上で犯したいいろいろの罪。畔放・溝埋・桶放・頻蒔・串刺・生剥・逆剥・屎戸等」とあり、国津罪には「わが上古の罪過の一。高天原に起原を有する天津罪に対するもので、生膚断・死膚断など十三種ある」と説明されています。神話の中での説明とし

受けて生まれた時から背負っている罪と言いますように、天津罪とは人間の心の営みが行われる精神の領域の拠って立つ土台である社会の精神土壌全体の調和を根本から混乱させている罪という事なのであります。人間精神または社会精神の土台を乱す罪が天津罪であり、その不安定、不調な土台の上にあるが故に、助長された自我主張が惹き起こす表面的な罪が国津罪という事が出来た。

さて、次は天津罪の中の個々の罪について説明して参ります。大祓祝詞には畔放ち、溝埋め、桶放ち、頻蒔き、串刺し、生剥ぎ、逆剥ぎ、屎戸の八つの罪が説かれています。

畔放ち—

古事記の神話では、天照大神は菅田を耕していらつしやいます。また神衣を織っていらつしやいます。田も衣も縦横に線を引いた形である所から、五十音言霊図表に基づいて言霊を運用し、人類の歴史を創造して行く事を表徴しています。天津罪の「畔放ち」とは五十音図表の言霊を仕切っている線、即ち畔を取り去ることを言います。五十音図の言霊の縦の配列は五つの次元の相違を、横の配列は八つの父韻による実相変化の律を表しますから、その仕切りであ

る畔を取り払う事とは文明創造の営みの秩序を破壊することと受け取られます。

溝埋め—

溝とは水を流すため地面を細長く掘つたものを謂います。五十音言霊表の運用を潤ぼす生命の流れの通り路を埋めて言霊の気の働きを妨害すること、と思われま

桶放ち—

桶とは水を導いて送る長い管、またはせき止めた水の出口に設けた戸で、開閉して水を入りさせるもの、の事と辞書にあります。人間の生命の流れは母音より八つの父韻を通り半母音に向かって流れます。アよりワ、イよりキ、エよりエ、オよりヲ、ウよりウに流れ、それぞれ歴史を創造します。その流れの緩急が程よく行けば社会は常に平穩無事でありますが、母音より半母音への流れ路が取り払われ、また緩急の調節が出来なくなると、社会の進歩は急変または停滞することとなります。これが桶放ちであります。

頻蒔き—

穀物の種子を播いた上に重ねてまた種子を播き、穀物の

生長を害すること、と辞書にあります。天照大神の菅田は音図向かって右から左へア・タカマハラナヤサ・ワの順で種子が播かれます。その事で物事は初めより終わりに向かって滞る事なく遂行されます。それが例えば、タから始まり、タカマまで来た時、マに表徴される事態が既にほとんど完了してるのに、その過程の百パーセントの完了に執着して、マ・マ・マと何時までもその段階の行為を繰り返して、先に進まないような事態に陥る状態を指している事でありましょう。

串刺し

人間の文明創造活動を言霊によって示す言霊五十音図表は縦五列、横十列の言霊の並びがあります。縦に次元の順序、即ち位置師を、横に実相の移り変わりの変化のリズム、即ち時置師・処置師の働きを示します。この縦横の順序や変化の推移を示す言霊の並びを、あたかも団子に串を刺すように固定してしまい、社会がその時処位に依じて、自由に新しい文化を作って行く事が出来ないよう規制してしまう事、これを串刺しと言います。信仰や信条、または社会的哲学、倫理学、経済学等の経験的知識に基づいて制定さ

れた道徳や国家体制、憲法、法律等は往々にしてこの串刺しという天津罪を犯す事となります。近代に於ける世界の共産体制の崩壊などもこの串刺しによる国家社会の硬直化がその原因と考えられます。

生剝

生命活動を表わす五十音図表の中の縦の五母音の一つ乃至二つの並びを剥ぐように抹殺してしまふ事。即ち生命活動として当然具備されている性能を何らかの理由の下に無視してしまふ事。これが生剝です。例えば近代共産体制にあって「宗教は阿片なり」の教義の下に言霊アに属する信仰性能を否定してしまつた等がこれに当ります。人間の生きた生来の性能活動を社会から抹殺する罪であります。

逆剝

逆剝は性剝さびぎであります。性さびとは現象の実相を決める八父韻の働きの事です。逆剝とはこの八つの父韻の並びの中から一つ乃至二つのものを無視・抹殺する罪のことであります。例えば信仰行為に於いて、タカラハサナヤマと並ぶ父韻の並びの中から、信仰に於いて最も必要である筈の主体性の確立を表わす言霊タの自覚を抹殺し、教祖の教えを

そのまま暗記させ、教団の利益にのみ奉仕させるよう洗脳する行為等がそれに当りましょう。最近の宗教団体による詐欺行為などはその典型であります。また近年の教育にみられる「偏差値」による受験勉強なども逆剥ぎの傾向が十分窺えます。双方共、信仰または教育の真の目的を成就する手順の中の何らかを無視した事の結果であります。

屎戸一

古事記神話に「大嘗に聞こしめず殿に屎まき散らし」とあります。屎くそとは組くみむ素そで五十音図表を構成しているそれぞれの言霊のこと。五十音図の縦横の並びの順序の如何を考えず、バラバラにして播き散らしてしまふ罪であります。須佐男命が高天原に於ける天照大神と月読命との三貴子の協調体制から離脱し、高天原の精神構造を表わす天津太祝詞音図の組織をバラバラにして、自らが求めようとしている物質世界の法則を探ろうとして、その構成に躍起となった様子、即ち「須佐男命、依さしたまへる国を知らさずて、八拳須心前に至るまで啼きいさちき」がこの罪に当ります。

以上、大祓祝詞の天津罪の一つ一つについて説明して来

ました。御理解頂けたでありますか。この天津罪について一つ付け加えておきたい事があります。天津罪といわれるそれぞれの罪の内容は、ここ千年、二千年の歴史の中では、それが悪い事だと思われず、当然の如く行われてきた事なのであります。「大道廢れて仁義あり」と言われます。「大道」と呼ばれた言霊布斗麻邇の原理が社会の表側から隠没した後、人間社会の政治・道徳の判断をするに当り、人間天与の判断能力(言霊工)を忘れ、その代用品として各家の法律とか「何をすべし」「何をすべからず」の規則によって善悪の判断をせざるを得なくなりました。そして、その代用品である、第二、第三的な規則による人間行為の規制の世の中が長く続く事によって、人々はその規則以外に善悪判断の規準はないものと思ひ込んでしまいました。第二、第三的な規準でありますから、人々は時によってその定められた自らの法律を社会全体が遵守出来ない事態も起こることとなります。「超法律的措置」という言葉が使われます。この時、人々は「何が良い事か、悪い事か」の判断が分からなくなります。この様に現代の人々に何が良く、何が悪いか分からなくさせる原因となるもの、それが天津罪という罪なのだ、という事が出来るのです。「人間とは

そも何者ぞ」という根本原理である言靈布斗麻邇の学問が復活して、ここに初めて天津罪の内容が明らかとなりました。

次に国津罪の説明に移ります。国津罪として大祓祝詞には、生膚断ち、死膚断ち、白人胡久美、己が母犯せる罪、己が子犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪、畜犯せる罪、昆虫の災、高津神の災、高津鳥の災、畜仆し、蠱物せる罪の十三の罪が挙げられています。

これらの国津罪について大祓はただ十三の罪を列記するだけで、罪の内容については何一つ説明しておりません。しかし、前に述べましたように、旧約聖書の中の特に利未記にはそれぞれの内容の懇切な解説が載っています。大祓祝詞と聖書の利未記という想像もつかぬ地球の正反対の側に位置する国の出来事の記載が、まるで判で押しした如く一致している事は、太古の世界の歴史を再編成する大きな手掛かりになる事は間違いないありません。時には大祓と利未記を対比させながら国津罪を説明して行きます。

生膚断ち、死膚断ち――

生きている人、また死んだ人の肉体を傷つける事の罪と解されます。モーゼの十戒に「汝、殺すなかれ」と書かれています（出エジプト記）。

白人――

辞書にしろなまずのある人。一説に今の白子の類、とあり。通説はないようであります。それが旧約聖書の利未記十三章を見ると、その説明が詳しく載っていて、癩病患者であることが分かります。大祓とモーゼの五書の関係を知る上で参考となりますので、此処で引用します。「エホバ、モーゼとアロンに告げ言ひたまはく、人その身の皮に腫あるひは癩あるひは光る処あらんにもし之がその身の皮にあること癩病の患処のごとくならばその人を祭司アロンまたは祭司たるアロンの子等に携へいたるべし、また祭司は肉の皮のその患処を観るべし、その患処の毛もし白くなり且その患処身の皮よりも深く見えなば是癩病の患処なり祭司かれを見て汚たる者となすべし……」（利未記十三章一―三）

胡久美――

贅肉の意で「らば」または「瘤」の意、と辞書にあります。

聖書に「エホバ汚れたる者」と定めています。

己が母を犯せる罪、己が子を犯せる罪、母と子と犯せる罪、子と母と犯せる罪――

この様な近親相姦の罪について大祓はただ四つの事柄を続けて挙げてゐるに過ぎませんが、旧約聖書には詳しく説明されています。その一部を載せます。「汝等凡てその骨肉の親に近づきて之と淫するなかれ我はエホバなり 汝の母と淫するなかれ是汝の父を辱しむるなればなり彼は汝の母なれば汝これを淫するなかれ 汝の父の妻と淫するなかれ是汝の父を辱しむるなればなり……」（利未記十八章六～八）この説明から直ちにギリシヤ神話のエヂプス・コンプレックスを思い出す方もありましょう。

畜犯せる罪――

大祓のこの罪を利未記には「汝獣畜と交合して之によりて己が身を汚すこと勿れまた女たる者は獣畜の前に立てて之と接ること勿れ是憎むべき事なり」（十八章二三）「男子も獣畜と交合しなばかならず誅さるべし汝らまたその獣畜を殺すべし婦人もし獣畜に近づきこれと交らばその婦人と獣畜を殺すべし是等とはともに必ず誅さるべしその血は自

己に帰せん」（二十章十五～十六）

昆虫の災――

先師小笠原孝次氏は蝗の災の事であろうと解しました。利未記には「凡ての人を汚すところの匍行物に捫れる者……」（二十二章五）と記されています。匍行物が何であるか、今のところ分かっていません。

高津神の災――

高津神と言うと、直ぐに思いつくのは天津神の事であり、天津神とは先に述べましたが、清浄無垢な高天原神界にある神を、即ち五十音言霊の事を言いますが、高津神とはそういう清浄な神界ではない、種々の因縁によつて常に流転して止むことのない、また浄化されない霊の世界の魂のことであります。

高津鳥の災――

人と人との間を往き来して飛ぶ言霊のことであります。古事記の「天の鳥船」といえば、人の言葉を構成している五十音言霊のそれぞれの内容の事であり、高津鳥とは清浄な言霊の自覚の裏付けのない、偏頗な経験知識に基づい

た主張・主義の言葉を指します。この言葉も人と人との間を飛び交って人を迷わせ、世間を騒がせる原因となります。偽宗教者、狂信者、政治的煽動者等の言動はすべてこの類のものであります。

畜^{けもの}は
畜^{けもの}は

牛馬豚等の四足動物を殺し、食用とすることを言うのでしよう。太古日本人は獣肉は食さないと聞いています。古書「ウエツフミ」には獣肉を食べると血が粘^{ねば}ると書いてあるそうです。

蠱^{まじ}物^{もの}せる罪^{つみ}—

蠱とは辞書に「あやしい術で人を呪い害を加えること。まじなつて人を病ましめ、苦しめ、死なせること」とあります。一般に「まじない」の事であります。利未記に「憑^{つく}鬼^{おに}者^{もの}または卜^{うら}筮^{ひし}師^しも恃^{たも}みこれに従^{したが}う人あらば我^{われ}わが面^{かほ}をその人にむけ之をその民の中に絶^たつべし。」「(二十章六)また申命記には「汝^{なんぢ}らの中間^{うち}にその男子^{おとこ}女子^{むすめ}をして火の中を通らしむる者あるべからずまた卜^{うら}筮^{ひし}する者邪^{よこしま}法^{ほう}を行^なふ者禁^{まじ}厭^いする者魔^{まじ}術^{じゆつ}を使^{つか}ふ者法^{ほう}印^{いん}を結^{むす}ぶ者憑^{つく}鬼^{おに}する者巫^{かん}覡^{たひ}の業^{わざ}をなす者死者に詢^うくことをする者あるべからず 凡^{みな}て是^{こゝろ}等の事

を為す者はエホバこれを憎^{にく}みたまふ」(十八章十一十二)とあります。

前にお伝えした事ではありますが、鵜^う草^{くさ}葺^ぎ不合^{ふあ}皇^{こう}朝^{てい}六^む十九^{じゅう}代^{だい}神^{かみ}足^{あし}別^{わか}豊^{とよ}鋤^あ天皇^{てんかう}の時^{とき}、ユダヤ王^{おう}モーゼ^{もーぜ}来^き朝^{てい}、その帰^{かへ}国^{こく}するに当^{あた}り天皇^{てんかう}モーゼ^{もーぜ}に詔^{みことり}して曰^{いは}く「汝^{なんぢ}モーゼ^{もーぜ}汝^{なんぢ}一人^{ひとり}より外^{ほか}に神^{かみ}なしと知^しれ」と竹^{たけ}内^{うち}古文^{こぶん}書^{しょ}に記^きされてい^ます。この勅^{しつ}語^ごにありま^すように、五十^{いそ}音^{おん}言^{ごん}靈^{れい}学^{がく}は「人^{ひと}とは神^{かみ}であり、同^{どう}時^{とき}に人^{ひと}である人^{ひと}」なのだ^らと教^{おし}えてい^ます。その神^{かみ}であるべき人^{ひと}が我^{われ}でもなく神^{かみ}でもない怪^{あや}しい、卑^ひしいものに自^{みづか}らの運^{うん}命^{めい}につ^づいて教^{おし}えを請^こう事^{こと}など「以^{もつ}ての外^{ほか}」の事^{こと}でありま^す。人^{ひと}としての尊^{そん}嚴^{げん}も汚^{けが}す行^{こう}為^ゐであります。易^{えき}を説^{せつ}明^{めい}する「易^{えき}経^{けい}」の中^{なか}にも「易^{えき}を知るものは占^{うら}わ^ず」と警^こめてい^ます。

以上でモーゼの五^ご書^{しょ}と関^{かん}連^{れん}させ^た大^{だい}祓^は祝^{しゆ}詞^じの国^{こく}津^つ罪^{ざい}の説^{せつ}明^{めい}を終^おえることといたしますが、こ^こで附^つけ加^かえて申^まし上^うげたい事^{こと}があります。大^{だい}祓^はが国^{こく}津^つ罪^{ざい}の一つ^{ひとつ}一つ^{ひとつ}を簡^{かん}単^{たん}に列^{れつ}挙^げしただけなのに対し、旧^{きう}約^{やく}聖^{せい}書^{しょ}は神^{かみ}エホバの言^{ごん}葉^{えつ}として詳^{しょう}細^{さい}に説^{せつ}明^{めい}してい^ます。「大^{だい}祓^はに於^おける人^{ひと}間^{かん}の罪^{ざい}の内容^{ないよう}は旧^{きう}約^{やく}聖^{せい}書^{しょ}を御^ご覧^{らん}下^{くだ}さい」と言^いわんばかりの関^{かん}連^{れん}性^{せい}が窺^{うかが}えま

す。にも拘わらず旧約聖書には大祓の天津罪に関する記事は何一つ見出し得ない事であります。と言う事は、葺不合朝の神足別豊鋤天皇はモーゼに天津罪に関する事を何も教えなかつた、と解するべきなのであります。

竹内古文書には「鶺草葺不合皇朝五十八代御中主幸玉天皇の時、支那王伏羲来朝、之に天津金木を教う」とあります。しかし伏羲に教えたのは言霊原理の天津金木そのものではなく、天津金木の原理を陰陽概念と数に置き換えた法則を伝えたのです。伏羲はこれに則り易を興しました。同様、「葺不合皇朝六十九代神足別豊鋤天皇の時、ユダヤ王モーゼ来朝、天皇これに天津金木を教う」とありますが、ここでもモーゼに教えたのは天津金木そのものではなく、金木原理をヘブライ語と数霊の法則に置き換えたものを伝えたに違いありません。それが世に謂われるユダヤの「カバラ」なのであります。旧約聖書の五書に大祓の天津罪に関してこの記述がない事は以上の理由にあると考えられます。

人間には天与の五つの性能があります。アイウエオ五母音言霊で表わします。その五つの性能の一つ一つを中心に置いて音図として、矢張り五種類の五十音図が作られます。

天津菅麻(イ)、天津太祝詞(エ)、宝(ア)、赤珠(オ)、天津金木(ウ)の五種類です。これ等の音図は人間天与の性能表現の真相に従って同じ五十個の言霊をそれぞれ並べたものでありますから、五つの音図の中のどれ一つを知っても、思索によつて外の四つの音図の構造を推定し得る可能性がありましよう。神足別豊鋤天皇はその辺の消息を熟知した上で、モーゼには天津金木そのものではなく、ヘブライ語と数霊の法則に脚色・変化させて教え、その法則によつて以後三千年にわたる世界人類の物質科学文明創造とその成果を手段とする世界の再統一の事業を委託したのでした。民族特有の言語の法則という特殊なものに置き換えたユダヤのカバラの原理でありますから、これを如何に操作し、想像を逞しくしても元的人类共通の精神原理布斗麻邇には到達不可能な事であります。ユダヤによる人類の第二物質科学文明成就の暁、その事業の手段である弱肉強食の生存競争の社会が遭遇する人類社会滅亡の危機を回避するただ一つの方策・原理である言霊布斗麻邇が大本教祖の謂う「九分九厘の一厘」の仕組となる皇祖皇宗の深謀遠慮を、大祓祝詞のこの天津罪、国津罪の説明の章に明らかに見ることが出来るので有ります。

さて三千年の昔、皇祖皇宗の宏護こうごによる第一精神文明より第二の物質科学文明創造の時代に転換が行われて、物質科学文明の發達の基盤となる生存競争社会は時と共にその弱肉強食の相を濃くして行きました。それにつれて競争社会の中に現れる人間の罪穢も深く大きくなって行きました。物質科学文明は私達の眼前にある如く、その絢爛けんらんたる姿を現しました。正に完成間近を思わせます。と同時にその文明の培養土壤である競争社会の行き着く果として、地球大気汚染、地球温暖化、人類の精神荒廃は人類全体の生存をも脅かす大罪となつて現れて来ました。今こそ人類全体に蔓延つた罪穢を、人類全体が自らの罪穢であると自覚し、自らの罪の払拭に取り組まないならば、三千年の長い間幾多の犠牲を払つて築き上げた物質科学文明社会も、人類全体の生命と共に消滅しなければならぬ事態を迎えました。

折も折、この人類が罪穢を罪穢として自覚させる「人間とは何か」を示す鏡であり、その罪穢の祓いを予告した大祓祝詞の基礎原理である言靈布斗麻邇が二千年の闇を破り、不死鳥の如くこの世の中に太古の第一精神文明時代の姿そのままに甦つて来ました。この原理によって予告され

た大祓の内容はすべて解明され、眼前の地球人類の危機を回避させるいとも現実的で人類に許されたただ一つの大祓の実行方法が人類自らのものとなつたのであります。「大祓祝詞の話」はこれより大祓の眼目である、その人類の罪穢の修祓の方法の開示である第四章に入ります。先ずその方法を示す第四章の文章を掲げます。

天津みやこと宮事みやごと以もらて、大中臣、天津金木と本打切り、本打断ちぎらて、千座ちくらの置座おきくらに置足おきくららはして、天津菅麻すがそと、本刈り断ちぎら、本刈切りて、八針やっぴに取辟とりさきて、天津祝詞あまのりごとの太祝詞事ふたりのごとを宣のたまれ。

(以下次号)

【収載】百五十五号(平成十三年五月)

●大祓祝詞の話 その五

人類の第二物質科学文明時代が始まり、その文明創造促進のための方便として作り出された生存競争社会の中に現れて来ました人々の罪穢が、人類全体の生存の危機をもたらす事となつた現在、危機回避の唯一の手段である大祓の方法の開示を披露する祝詞の第四章に入ります。

大祓といわれますから、罪穢を祓うためには、今日地鎮祭や開所式などで見られますように、神前に供えてある幣

(ぬき)を持ち、神主さんが参集した人々の前に立ち、その幣を左右に振ってお浄めをする事と思われるかもしれせん。または人々の心の中の罪穢を調べ、良い内容はそのままに、悪い内容は悔い改めさせて罪穢を無くすというキリスト教の懺悔の如き方法と思われる方もいらっしゃるかも知れません。罪穢の祓いと言え以上のような事が常識であると今日では思われています。けれど日本の布斗麻邇の原理に則った罪穢の祓いは今日の常識とは全く違つたものなのであります。現在、私達の眼前に展開している人類社会存続の危機を転換して、第一、第二と続いた人類文明を更に飛躍させて人類の第三文明時代の創造を実現させる唯一の方法である大祓でありますから、これよりその大祓の内容を出来る限り詳細に説明して参り度いと思ひます。先ずはその大祓の修祓の方法を字句を遂つて説明し、次にその精神的内容の説明に入ります。

斯く出せば

弱肉強食の生存競争の世の中が進み、その果にこの地球上が人間の住むに耐えない程生命の危険が増大した時には、の意であります。

天津宮事以らて

天津はこの場合政治と司る朝廷の、の意でありましょう。宮事の宮とは靈屋みやの意で、言靈の家即ち五十音言靈図を言います。天津宮事以ちて、の全部で「人類文明を創造する政庁である朝廷に於ては、政治の根本原理である五十音言靈の原理を操作・運用することによって」の意となります。

大中臣なかつくみ

大祓の行事の最高責任者は政治の中心におられる天皇です。大祓の行事の対象となる人は宮中のお役人であり、また、国民・民衆であります。大中臣とは天皇と役人・民衆の中間にあつて、天皇の司る大祓の儀の代行者として取り仕切る人、今の行政府の総理大臣に当る役の事であります。

天津金木と、本打ち、木打断らて、

この文章の解釈が従来は最も困難であつた箇処であります。天津金木の内容が不明であつたためであります。言靈学が復活して天津金木が言靈五十音図の事であることが判明し、この文章の意味も明らかになりました。天津金木とは音図に向かつて最右端の母音の縦の並びがアイウエオと

なり横の十言靈がア・カサタナハマヤラ・ワと並ぶ五十音
図の事であります。現代の学童が学校で教わる五十音図の
ことであり、言靈学によれば人間の言靈ウの次元から発現
する人間性能である五官感覚に基づく欲望現象を人間に与
えられた五性能の一番中心に置いた時の人間の心の構造を
五十音の言靈で表した音図の事であります。この天津金木
音図を「本打切り、末打断ちて」とあります。音図に向かっ
て右の母音から物事が出発し、八つの現象子音の実相の変
化を経過して、最後に向かつて左の半母音に到ってその物
事は終結します。でありますから、「天津金木を、本打切
り」といえば音図の本である五母音の縦の並びを音図全体
から切離してしまうという意味であります。「末打断ちて」
とは天津金木音図の半母音の縦の並びを切離してしまう事
となります。

千座の置座に置き足らばして

千座ちくらとは道の倉の意です。生命の道理の構造と言った意
味があります。「置き足らばして」とは、生命の道理に合う
ようにすべてを置いて見て、という事。即ち「天津金木音
図」で示される人間の欲望を中心とした五十音図の中で、母

音と半母音の列を切り離し、その母音と半母音の列と中間
に展開しているカサタナハマヤラの八行とを、生命の道理
を示す構図の上に当てはめて置いて見て」という事であり
ます。この作業が実際にはどの様なものか、は後程説明い
たします。

天津菅麻すがそと、本刈断ち、末刈切りて

天津菅麻とは天津菅麻音図の事で、人が生まれたばかり
の天与の心の構造を表す五十音言靈図の事があります。菅
麻とは「すがすがしい衣」の意で、生まれたばかりの赤ちゃ
んの心の衣の事です。「本刈断ち、末刈切りて」とは金木の
時と同様に天津菅麻音図の母音、半母音の列を音図から切
り離してしまう事でもあります。

八針に取跡きて

天津菅麻音図の両端の母音・半母音の列を音図から切り
離し、残った縦の八つの現象音の列を一行ごとに裂いてば
らばらにしてしまつて、という事でもあります。

天津祝詞の大祝詞事を宣れ。

天津大祝詞音図に示されている如く、即ち母音の縦の列

アイエオウ、音図の一番上の横の列アタカマハラナヤサワの精神構造が示す行法によって天津金木、天津菅麻の精神を宣り直してみよ、というわけであります。

以上が三千年にわたる生存競争時代を通して積もりに積もった人類のコンプレックスである罪穢を修祓する大祓祝詞の謂う方法であります。この大祓祝詞が天津太祝詞子天皇によって制定されて以来、約四千年近い間、宮中に於いて六月と十二月の末に年に二回、天皇の御前に宮中に奉仕するすべての役職にある者を集め、大中臣がこの祝詞を称え、天下に向かって宣言して今日に至ったのでありますが、制定された当時は兎も角、生存競争が熾烈となったここ二・三千年間に於いては祝詞を称える行事は続いていきました。が、実際に大祓の修祓が実行された事は一度としてなかったものであります。宣言はあっても実効なし、即ち「今にやるぞ、時が来たならば大祓が行われる」と年に二回、宮中に於いて宣言されながら唯の一度として実行されなかったのがこの大祓祝詞の罪穢の修祓なのであります。

それは何故か。大祓祝詞の罪穢の祓いの方法を真に必要なとする人類文明上の「時」が来なかつたためであります。と

共に日本人の大先祖であります皇祖皇宗の歴史創造の経綸上、この大祓の実行を必要とする迄の期間、大祓の真の意味を明らかにする根本原理であるアイエオウ五十音言霊の原理が宮中の天皇を初め、日本人・世界人類の意識の表面から全く忘却されてしまったからでもあります。この期間、人々は大祓祝詞の意味を知る事なく過ぎたのであります。そして大祓の精神内容を呪示・表徴する神宮による鹿爪よぶらしい演戯・狂言様の仕草の儀式が行われて来ました。それは実際に大祓の実行を必要とする時が来るまで、大祓の精神内容を後世に伝える為の手段・演戯に過ぎないものであります。

聞く所によりますと、過去千年にわたり皇室・宮中の罪穢の修祓を委任されて来た阿倍の清明に始まる土御門神道の大祓の行事の中には祝詞の「八針に取辟きて」の所で、種々の色に染め分けられた布を八つに「ヒーツ」と音を立てて裂く仕事が行われているそうです。その様な仕草によって大祓の行法の真の意味を呪示・表徴したものと考えられます。けれどそれは時が来たならば大祓の真法の精神内容を後世に伝える手段なのであって、布を八針に引き裂いたか
らと言って罪穢が消え失せるものでない事は勿論の事であ

りましょう。

二十一世紀を迎え人類が第一精神文明、第二物質科学文明に次ぐ第三の文明を創造すべき時が来ました。第一精神文明の基礎原理であったアイエオウの五十音言霊布斗麻邁が昔あったそのままの姿で復活しました。その事によって大被祝詞の精神内容も手に取る如く分かって来ました。「来るぞ、来るぞ」と四千年近い間、予言されてきた大被祝詞の全人類の罪穢を祓い大いなる力を実行に移す時となったのであります。言霊原理に則り、その行法の内容を説明して参ります。

西暦でいう二十世紀、二十年の間に積もり積もった人類の罪穢を祓う方法の開示であり、大被祝詞の最も重要な個処でありますから、分かり易く一行か二行の文章で力強く表現出来ればこれに越した事はありませぬ。現にこの手段開示の祝詞の文章は「斯く出でば……」から「天津祝詞の大祝詞事を宣れ」と美文でもつ

図 156-A

天津金木									
ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	アイ
キ									ウ
ウ									エ
エ									オ
ヲ									

天津菅麻									
ワ									ア
ヲ									オ
ウ									ウ
エ									エ
キ	ニ	リ	ミ	イ	ヒ	シ	キ	チ	イ

天津太祝詞									
ワ	サ	ヤ	ナ	ラ	ハ	マ	カ	タ	アイ
キ									エ
エ									オ
ヲ									ウ

て簡単に表現してあります。しかし、この美文を現代人が容易に理解する為の説明はそう簡単には参りません。その一字一句の説明の段となりますと、人間の精神の精密な部分部分の内容を網羅した龐大な組織にわたっているものだからであります。そうでありますから御面倒でも少々難解で長い説明にお付合い願う事となります。

先ず大被の対象となる天津金木音図と天津菅麻の説明から始めます。図 156・A を御参照下さい。天津金木は先にお

話しましたように、人間の持つ五つの性能の中の言霊ウの次元より発現する五官感覚に基づく欲望性能を五つの性能の中心に置いた精神構造を表わした五十

音言霊図です。即ち独走を始めた須佐男命の音図なのです。人類が第二の物質科学文明創造の時代に突入して、外国で

は三千年前、日本では二千年前、精神文明の中心原理であった言靈布斗麻邇を政治の面に適用することを停止してしまつた事で、時を経るに従い、弱肉強食の生存競争が熾烈となつて来ました。人間の欲望性能が他の人間性能すべてを欲望達成の手段としてしまい、その世相は現代まで続いていきます。この二・三千年間は言靈ウの性能が他の人間性能との協調を捨て、独走した世間相を現出させました。「勝てば官軍」力の強い者勝ち」の世の中となりました。天津金木は今日までの社会を表徴する最も適切な音図という事が出来ます。古文書に「天皇モーゼに天津金木を教える」とありますように、金木音図の言靈の横の並び「カサタナハマヤラ」はその自覚に立つものは「百戦闘うも危うからず」(孫子)とある如く、絶対無敵の戦法の所有者となります。旧約聖書にエホバ神の「我は戦いの神、嫉みの神、仇を報ずる神」の宣言が見られるのも、ユダヤ民族が天津金木に依るカバラの原理の所持者なるが故であります。この様に天津金木という音図は一にも二にも戦いの音図であり、この音図だけを新入学の小学生に教える現代日本はまた欲望と戦いの戦場としての日本と言う事が出来ます。

次に天津菅麻音図について説明しましょう。菅麻とはす

がすがしい心の家の意味で、先に書きました如く生まれたばかりの赤ちゃんが天与に持っている心の構造であり、まだ人工的なものが混じっていない大自然の心という事が出来ます。その五母音は天である言靈アを上、地である言靈イを下に、その間にやがて人為の性能が加わるであろう言靈オ・ウ・エが中に入る事となり、縦にアオウエイが並び事は御理解頂けることと思えます。菅麻音図を図で御覧下さい。母音イと半母音ヤとの間にチキシヒイミリニの八つの父韻が並べてあります。言靈イ・ヤは人間の創造意志であり八つの父韻はその意志の働きの振動ともいふべきもので、その父韻が母音アオウエの四次元の宇宙実在に働きかけて現象である子音を生みます。ところが生まれたばかりの赤ちゃんは創造意志を持つてはいませんが、まだその創造活動をほとんど発動はしていません。人為的活動をしていません。そこでこの図に書き表した父韻の並びは父韻の作用の四音チキシヒを右に、反作用のイミリニを左に並べました。実は与えられてはいますが、活動していません。すから、その並びはどう書いても構わない事になります。全く菅麻音図とは大自然の中の人という生物の心の構造図なのです。人間のすべての営みの現象はこの菅麻音図にあ

る五十音言霊によって構成されますから、菅麻音図とは人間生命の一切を創造する親神である伊耶那岐の神の音図と呼ばれます。それは人間の営みの善悪、美醜、真偽、得失がそこから生まれて来ますが、この音図はそれから全く超越した次元であります。

以上、天津金木、天津菅麻の両音図について説明しました。次に天津金木を取上げて「千座の置座に置足らはして」があり。天津菅麻の下に「八針に取辟きて」が書かれておりますが、これは大祓祝詞を最終的にこの文章に修飾したと伝えられます柿本人麻呂が祝詞の文章を称え易い美文調にする為に、詩的表現を用いましたので、その正確な内容から言えば「天津金木を、本打切り、末打断ちて、天津菅麻を、本刈断ち、末刈切りて、千座の置座に置足らはして、八針に取辟きて、天津祝詞の大祝詞事を宣れ」となるのであります。「千座の……」と「八針に……」の操作が金木と菅麻の双方の音図に掛かるのでなければ、大祓の修法の意味が通らない事に依ります。

さてこれより大祓の精神内容に立入ることといたしますが、先ず気が付きます事は、方便として現出された生存競争の時代の特徴である「我良し」の心の根本となる天津金木

音図が修祓の対象となる事は容易に理解できる事でありますが、人間の心の営みのすべての根源法則である伊耶那岐の神の音図である天津菅麻が修祓の対象となる事は中々理解し難い事でもあります。大祓祝詞の文章だけからでは理解不可能に近い事です。

大祓祝詞全体の内容が古事記神代の巻によって呪示された言霊布斗麻邇の原理の復活によって初めて解明されました如く、大祓の天津菅麻の修祓の理由も古事記の「身禊」の章における「禊祓」の手順の克明な開示に照合する時、初めて明らかに理解されるのであります。と同時に古事記の言霊原理による「禊祓」によって大祓の修祓の真意が明白に浮かび上がって参ります。（「古事記と言霊」の「身禊」その二参照）。

古事記神代の巻の「身禊」の章は、言霊百神の七十四番目の伊耶那岐の大神より百番目の須佐男命までの二十七の神名によって、大祓の修祓の方法を詳細に述べています。今、大祓祝詞が述べる天津金木、天津菅麻を天津太祝詞に宣り直す方法は、古事記の禊祓では「大禍津日神、八十禍津日神より神直日神、大直日神、伊都能禿」にかけての手順で心行くまで明白に説明されています。その古事記が示す内

容によつて大祓の修祓の意味を明らかにしましょう。

大祓も古事記の禊祓も、世の中に現れて来る種々の罪穢を、国家や朝廷が定めた規則に照らし合わせて、その善悪、美醜、真偽、得失等を調べ、それによつて裁判の如く判定を下すという事ではありません。では調べないのか、と申しますとそうではありません。綿密に調べ、社会に現出して来る一切の物事の実相を明らかにします。ただ違ひますのは調べた事をそのまま論うのではなく、その物事が国家・社会の歴史の流れの中にあつてどの様な時処位を持つてゐるか、その物事を社会の変化・文明の中に吸収する時、どの様な変化をするか、を見極め、更に物事の責任者にどう説明し、命令すれば進んで納得し、生甲斐を感じてくれる事が出来るか、が勘案され、その結論が当時に至上命令として発表されるのです。如何なる善悪も、美醜も、真偽も、得失も、一切を捨てることなく、国家・社会・人類の文明創造の材料として摂取され、善悪・美醜……を超えた双方に新しい歴史生命として甦えらせるのです。コンプレックスである罪穢は歴史創造の中に吸収され、新しい生命となつて生まれ変わります。これが大祓の修祓の方法であり、古事記禊祓の手順であります。

この時、大祓祝詞の謂う天津金木は、その「我よし」の生存競争の自我意識は新しい産業・経済・学問の社会創造の流れに汲み上げられる事によつて自我は消失し、その才能が社会建設の奉仕精神として生まれ変わるでしょう。では言霊が存在する言霊イの次元の構造を示す天津菅麻音図はどうなるのでしょうか。言霊原理はこの時、大祓実行のための基本原理であることに違ひはありません。けれど基本原理であるが故に、行法の前面に主張される事はなくなり、緑の下の力持ちの役に甘んじる事となります。古事記禊祓に於いて創造意志である言霊イの言霊原理は大禍津日神として規制され、その隠れた役目に甘んじる事によつて大直日（言霊ウ）、神直日（オ）、伊都能売（エ）の絶対真理への道が切拓かれることとなります。（以上の自我意識の葛藤の消失による人類文化の創造の精神内容は大祓の次の章で詳説されます）。

この処の消息をもう少し説明します。言霊布斗麻邇の原理が復活し、この原理によつて禊祓をしようとする時、この言霊原理を鏡として社会の種々の物事を新しい歴史創造の材料として吸収しようとする時、ともすると「言霊原理に拠ればこの様にするのは当然だ」と、原理の説明とそれ

による説得に終始し勝ちとなります。これは言霊原理の存在を認めた者には当然のように思われますが、古事記禊祓ははつきりとこのやり方を否定します。これは言霊原理を鏡としないのではありません。鏡とした上で更にこれを禊祓の方法として腹の中に呑み込み、その上で物事の現在から新しい歴史創造の役に立つ生命を吹き込む言葉を与えて生かして行くのです。言霊原理を振りかざす事は「大禍津日」の「大禍」^{おほまが}になります。その大禍を心の中に秘めて、新生の言葉を与えて「津日」即ち日である言霊の示す真理の結果(日)に渡す(津)言葉(至上命令)を発動すること、これが古事記の禊祓であり、大祓の天津太祝詞事、即ちタカマハラナヤサの天皇(スメラミコト)の御稜威^みなのです。

そこで「斯く出でば……」から「天津祝詞の太祝詞事を宣れ」までのこの章の全訳を書いてみましょう。

人類社会の罪穢が積もりに積もって社会崩壊の危機が迫った時には、政治の庁である日本の朝廷に於いて、天皇の政治の代行者である大中臣は、生存競争社会の基本精神構造である天津金木音図の中から、主体を表わす「我良し」の觀念の母音の列アイウエオを切り離し、利害・損失のみを追求する目的としてのワキウエヲ半母音を切り離して、母

音と半本の間^間に挟まれた、物事が始めから目的に行き着くまでの現象の経過を表わす八つの子音の並びを列毎に切り裂いて、歴史創造の自由な発想の原点に帰り、人間生命の道理に基づく天津太祝詞のタカマハラナヤサの禊祓の手順に改めて宣り直すこと、また時代転換のために甦^{よみがえ}って来た天津菅麻である言霊原理を歴史創造の基本法則に据えながらも、縁の下の力持ちの役目に留め、大禍津日より伊豆能売への発想の転換を成就させて、そこから湧いて来るタカマハラナヤサの御稜威の光の下に、社会の一切の物事を人類文明創造の材料として撰取し、これに新しい生命を与えて歴史を推進させ、その創造の光の中に罪穢が必然的に消滅して行くよう務めなさい。これが天津祝詞の太祝詞事です。

以上、四千年程前、人類歴史の将来に備えて制定された大祓祝詞の罪穢の修祓について説明いたしました。四千年の昔に現代の人類が迎えるであろう社会崩壊の危機を予言し、更に弱肉強食の天津金木思想を人間生命本具の平和の社会に転換し、その時に復活して来る言霊布斗麻邇の原理の運用に誤りなきよう大祓祝詞と古事記による言霊の

原理を遺して下さった私達日本人の先祖の深謀と遠慮に心より感謝の念を禁じ得ません。

外国に於いては三千年前、日本では二千年前、言霊の原理の世の中の政治への適用が停止されました。神話の謂う、言霊原理とその活用である天照大神の岩戸隠れとなりました。太陽である天照大神(言霊イ・エ)は隠れ、日の光の反射光である月読命(ア・オ)と独走の須佐男命(ウ・オ)の二つのみの世界となりました。日である天照大神が隠れ、その代役を果したのは月の光の月読命の宗教・哲学・芸術活動でありました。月読命と須佐男命はこの三千年間、それぞれの分野に拠って産業発展と環境問題、戦争と平和等の社会問題で事ごとに対立して来ました。ところが、その対立の構図は生存競争時代の精神構造を言霊を以て表わす天津金木音図それ自体に見ることが出来ます(図156、B参照)。

金木音図を縦線で半分づつに仕切り、その向かって右の上の列を見ると、アカサタナとなり、これは「明かき悟りの田を成せ」と読めます。これは正しく宗教の心を表わします。即ち大自然の心である菅麻音図に帰ろうとする心です。また、その中心に言霊ヌが入ります。音図の向かって右半分を主基田と呼びます。

音図の向かって左半分の上段はハマヤラワとなり、これは「端をまとめて八つに並べて和せ」と読めます。これは正しく物質科学探求の心です。音の左半分の真中に言霊ユが入ります。そこでこの音図の半分を悠紀田と呼びます。

宮中に於いては毎年新嘗祭に、また、天皇一代に一度の即位の時の大嘗祭に主基田、・悠紀田の御殿を形どり、予め

国内に主基・悠紀の田を定め、そこから獲れる新米の稲穂を天皇自ら主基殿の月読命と悠紀田の須佐男命に言霊を表わす稲穂(イの名の穂)を献じて、ここ三千年の月読と須佐男の対立の構図が実は皇祖皇宗の物質科学探求のための言霊学による経緯なのである事を告げ、「物質科学文明成就の暁には天皇自ら言霊布斗麻邇の原理を以て、三千年の月読・須佐男の対立に終止符を打ち、第三の文明時代建設を親裁するぞ」との予告なのです。この行事も大祓祝詞と同様、物質科学文明時代の終わりに当り、人類の危機を転換

図 156-B

		天津金木								
		ワ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	キ									イ
	ウ		ユ					ヌ		ウ
	エ									エ
	ヲ									オ

する方法の予告であり、同時にその実行法の呪示と云う事が出来ます。
(次号に続く)

【収載】第百五十六号(平成十三年六月)

●会報表題変更のお知らせ

言霊の会の会報が今月にて百五十七号となります。昭和六十三年七月に第一号を創刊以来、先月平成十三年六月号に至る満十三年間、一回の休刊もなく、今月にて十四年目に入ることとなります。これも読者の皆様の御鞭撻と御協力の賜と心より感謝申し上げます。

第一号の冒頭、創刊の言葉として――

世界は唯一の空間の拡がり

世界は唯一の歴史の流れ

世界は唯一の人類の集まり

世界は唯一の真理の動き

の先師小笠原孝次氏の言葉を掲げ、人類の究極の精神真理の探求とその普及のために号を重ねて参りました。お陰様にて言霊学最終結論を生む古神道言霊学「禊祓」の行法の詳細な解明を成就し、言霊学の理論的体裁は略十分に備える

事が出来、日本民族伝統の布斗麻邇の原理は此処に不死鳥の如く甦ったのであります。創刊十四年目を迎えるに当り、会報の表題を「言霊研究」から「コトタマ学」と改め「研究」より「実践」の目標に向かい、創造の第一歩を踏み出す事といたしました。

読者の皆様の従来に変わらぬ御鞭撻と御指導を賜りますようお願い申し上げます。

平成十三年七月

言霊の会

読者の皆様

●大祓祝詞の話 その六

前号にて大祓祝詞が予言・宣布して来た人類の罪穢の大穢の精神的 content について解説いたしました。その修祓とは、人々の犯す罪穢の一つ一つを対象としてその内容を明らかにし、その上で罪穢が従来行って来たように「汝等悔い改めよ」と改心・懺悔させる事によって罪穢を祓う事ではなく、世の中の人々の心の中にうっ積する種々のコンプレックスを歴史創造の中に取り込み、これは心の光、即ち言霊の光の言葉(霊葉)による新しい生命を与えて、罪穢を消滅させて行くことだとお話しました。謂わばその大祓の内容

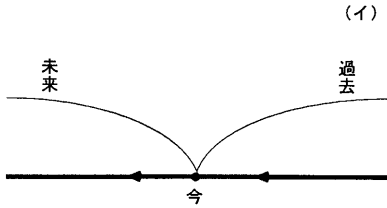
のキーワードは「創造の光」でありました。御理解頂けたてありましようか。

今号では、初めにその御理解を更に深めるため、大被祝詞の大祓いの内容を言霊原理そのものの立場から、人類歴史創造の言霊の光の言葉が何故人々そのその罪穢を消滅される事が可能となるか、お話し申し上げてみたいと思います。

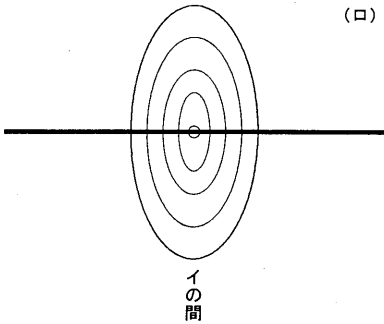
その「何故可能か」を最終的に御理解頂くために、言霊の基礎原理・法則をいくつか予備知識として取り上げることといえます。

第一に「時」とは何かという事です。現代人は過去・現在・未来と時は流れて行くと思っております。これが常識でしょう。しかし、その時の中に生き、生活を営む人はただ時の中を流れて行くというだけでは説明出来ないことがあります。人間は「今」に生きています。今以外に生きてはいません。「若者は未来に羽ばたく」と言い、「老人は過去に生きる」と言います。

図 157-A



が、未来に羽ばたこうと希望を燃やすかは未来に於いてではなく、今です。老人が過ぎし良き時代を回顧するのも今なのです。人間の生命は今に生きています。人間の心の最も奥の単位である言霊は、イ次元の間である「今」に存在します。これを「永遠の今」と呼んでいます。ですから図157Aを御覧下さい。時を現す図は(イ)となりますが、実際には(ロ)図なのです。煎じ詰めると、一切のものは「今」に備わっているという事が出来



いるという事が出来ま
す。この消息を禪は「一念普ねく観ず無量劫、無量劫の事即ち今の如し」と言っています。過去数十年、数百、千、万年……人類の経験はすべての人間の心の中に詰まっております、必要次第で現在意識に甦って来ます。

過去ばかりではありません。心の中の人に人間の将来のすべての可能性も詰まっています。一つの希望・計画の成

功・不成功も「今」の中に見ることが出来ます。以上の事を言霊学原理に示される如く展開・活用するならば、「今」に備わる人間の一切の記憶・意識を赤珠音図の父韻キチミヒシニイリの順に並べば、人類の歴史が現出して来るでしょう。更にその記憶・意識を太祝詞音図の父韻チキミヒリニイシの順に並べば、人類の将来相とその予言が掌たなごころを指し示すが如く明らかになるに違いありません。以上の如く、今とは言霊イ次元の道(いのち)の間(ま)なのであり、人間の一切が存在する間なのです。

第二として、大祓の修祓の対象として取り上げられている天津金木について話を進めます。神話で謂う天照大神の岩戸隠れ以来、歴史的事実としては神倭朝十代崇神天皇による天皇と三種の神器との同床共殿制度の廃止以来、世界は須佐男命の言霊ウの五官感覚に基づく欲望性能が他の現象界である言霊オアエの三次元領域をも支配する天津金木の社会一色の世界となりました。言霊オ(学問)、言霊ア(宗教・芸術)、言霊エ(政治・道徳)の天与の三性能は、言霊ウの欲望を達成する為の手段としてのみの存在となりました。言霊ウは他の三次元と協調して働くべき人間性能であるべきものが、今や完全に言霊ウの独走により他の三性能

は言霊ウの傘下に入ってしまった観があります。その状態が更に西欧に於いては三千年、日本に於いては二千年間続いています。この様な社会相を変革して、第一精神文明と第二物質科学文明との協調による人類の第三文明の時代を切り拓く為に先ず注目すべき仕事は、独走し、更に他の人間性能を支配している言霊ウの天津金木思想の修祓でなければならぬでしょう。天津金木が大祓されれば、必然的に人間の他の三性能言霊オアエも五次元並列の平等の關係を取り戻す事となります。大祓祝詞がその修祓の最初に天津金木を挙げたのも以上の理由であつたからでありましょう。

大祓祝詞が制定された四千年近い昔に、日本人の大先祖である皇祖皇宗はこの事情を予見し、大祓祝詞を制定し、その修祓の第一に天津金木の名を挙げました事は、言霊布斗麻邇の原理による世界人類の歴史創造の御経綸が如何に素晴らしいものであるか、頭が下がる思いがいたします。

第三に申し上げ度いのは、大祓の対象として挙げられている天津菅麻についてであります。天津菅麻五十音言霊図とは言霊原理の構造の基礎となる人間に与えられた五十音言霊という素材を生まれた時の、まだ人間知性が働き出る

以前の不確かな状態で並べた音図であります。この音図を出発として人間の言霊ウオアエ各次元の精神活動の音図が完成されて来ます。すべてを生み出す根本の言霊図でありますから、創造神は伊耶那岐命の音図と呼ばれます。これは伊耶那岐の大神が言霊原理の最終結論を成就する行法である「禊祓」を始めるに当り、その行為の基盤とし、拠り所とした「つぐくし 竺紫の日向の たちばな 橘の小門の あはぎはら 阿波岐原」の事であります。

伊耶那岐の大神は禊祓を開始するに当り、先ず対象となる一切のものをこの菅麻音図上に照らし合わせて、その時処位・実相を見極め、その見極めた内容を更に自らの内面性真理である建御雷の男の神という音図上に置き足らわして一切の新しい生命を与えて行き、その実行方法の誤りない事を極める事によって、言霊原理の総結論である三貴子(みはしらのうずみこ)を手にしたのであります。

以上でお分かり頂けると思いますが、古事記の禊祓に於いて天津菅麻は、その禊祓の実行以前の準備作業として物事の実相や時処位を決定する用を果たす基礎の役目となります。禊祓の実行は更に建御雷の男の神という八咫の鏡完成以前の、謂わば伊耶那岐の大神の内面にのみ自覚された

建御雷の男の神、即ち仮初めかりよの言霊原理の鏡に参照して行われるのであります。大祓祝詞が大祓の対象として天津菅麻を取り上げますのは、その音図が禊祓の準備段階に於ける必要を述べ、その音図に照合された物事の実相、地処位の見極めが直ちに善悪、美醜、真偽、得失の裁定・判断に直結されて、それが禊祓であると思われることを否定したかったからに他なりません。禊祓も大祓も一定の原理に基づく諸事物の善悪……の裁判ではなく、一切を文明創造の光の中に抱擁することによって罪穢・コンプレックスを解消させることだからであります。

第四として大祓の対象となる罪穢の善悪(エ)、美醜(ア)、真偽(オ)、得失(ウ)の相違とは何かについて考えてみましょう。三十年以上昔、私が言霊学の先師、小笠原孝次氏の門を叩いて間もなく、私は先師に「この世に神というものがあるとする時、何故人間に悪があるのですか。神があるなら、世の中にこれ程多くの悪がなくて社会文明を創造して行く事が出来ないものでしょうか。」師は言いました。「お答えしましょう。その前に貴方に一つ質問します。悪とは何ですか。明瞭に言って下さい。」私は言いました。「例えば人を殺すことです。」戦争で敵兵を大勢殺して勳章を貰

った人がいます。どういう事でしょう。」「私利私慾で人を殺すこと、これは悪です。」「戦争で自国の利益を守るために宣戦を布告し、何万、何十万人の人々を殺し、戦いに勝ち、大英雄と讃えられた大統領がいます。殺さなければ我が身が殺される場合もあります。これについてはどう思いますか。」「問答をしている間に私は何だか分からなくなってきました。勢い込んだ口振りが当惑に変わりました。その時、師は次の様に教えてくれたのでした。

「本来悪は無いものなのです。謂わば光に対する影かげのようなものです。影ばかり見ている人には影があたかも実在するもののように思われるでしょう。けれど影は本来無いものです。光が当たれば瞬間に消えてしまいます。影が何処かへ行ってしまったのではありません。悪も本来無いものです。心の光が当たれば、その瞬間に消えてしまいます。何処かへ移動していなくなった訳ではありません。ですから悪は本来存在しません。強いて言うならば、悪は善が何であるかを人間が分かるためにのみ假に存在する、という事が出来るでしょう。」「

この教えを聞いている間に、私の心は深い感動に包まれて行きました。師は善悪についての話をされました。け

れど美醜・真偽・得失の相違についても略同様の事が言い得る事に気が付いたのであります。先師のこの教えはそれ以来、私の脳裏に留まり、「古事記と言霊」に於ける「禊祓」並びに本講大祓祝詞「太祝詞事を宣れ」の内容解明に決定的な判断の基礎となつたのであります。

先師が教えてくれた「光と影」の内容を、言霊原理による人類文明創造を呪示する古事記「禊祓」の章では、事細やかに「大禍津日、八十禍津日……大直日・神直日・伊豆能売から綿津見三神、筒の男の三神」の処で説いております。その間の消息を此処で簡単に復習して、大祓の眼目を言霊学ゴトノミナによって説明する準備の第五といたします。

古事記の禊祓に於いて黄泉国よみくにの文化を人類文明創造の材料として撰取する場合、道の長乳歯の神より飽昨の大人の神までの五神の働きて黄泉国の文化の実相が詳細に調べられ（古事記と言霊参照）、次に奥疎の神より辺津甲斐弁羅の神までの六神の働きて、撰取される黄泉国の文化の現状と、撰取された後にどの様に変わる事になるか、が調べられます。次にその様に変わらせる事を可能にする方法が求められます。そこに現れるのが八十禍津日の神、大禍津日の神の二神です。この二神の働きは共に文化創造に欠く事

が出来ない基礎原理ではあるが、飽くまで基礎原理であり、縁の下の力持ちの役目に留まる事が確認されます。この二神の内容が禊祓または大祓の重要な眼目の部分となりますので、簡単に説明します(図157-B参照)。

五十音言霊図を上下に型どった百音図から両側の母音と半母音を除いた間の八十音は、物事の現象に関係する音です。この八十音は上下が中間の横線を境として対称となります。この上下対象の音図

は何を意味するか、と申しますと、そこから古事記の八十禍津日の神の内容が浮かび上がって来ます。横線を境に対称となる一音一音は同じ音であり、同じ実相を表わし、姿としては何ら変わるわけではありません。では何故上下に別れるのか、といえますと、上は光の世界であり、下は影の世界であるからです。光の上段は高天原天国であり、言霊原理自覚の世界であり、大祓で高山たかやまと呼ばれる領域で

図 157-B

八十現象子音	アイエオウ	高山	高天原 光の世界 自覚
	ウオエィア	短山	黄泉国 影の世界 無自覚
	ワ		
	キ		
	エ		
	ヨ		
	ウ		
	ワ		
	ウ		
	ヲ		
	エ		
	キ		
	ワ		

す。それに引替え、光のない下段は黄泉国地獄であり、言霊原理無自覚の世界、大祓で短山ひさまと呼ばれる領域です。

同じ音、同じ姿でありながら、どうしてこうも違うものとなるのでしょうか。実の所、この世の姿は唯一つ図の上段の姿以外には何もないのです。それが違ったものになるのは、人類が禁断の実を食べ、天照大神が岩戸隠れして以来、人々は自らの心の光の自覚を失い、光の言葉を忘れてしまったからです。概念という便利そうな観念に基づく言葉を喋るようになり、その言葉で構成された見地から物事を見る時、物事の

光の当らぬ影ばかりを見ることがとなり、当然物事の実相を明らかに見る事が不可能となります。「葦の髄から天井のぞく」業ごうを背負わされてしまったのであります。

では、どうしたら闇の中に閉ざされたものを光の世界に導くことが出来るでしょうか。古事記の禊祓を更に辿って行く事とします。八十禍津日の神の働きで人間の心の光と影の対称の絡線かろくせんが明らかにされました。この対称が明示さ

れても、それだけで影から光の世界に行けるものではありません。また大禍津日の神の所で説明されているように、言霊原理（菅麻首図）を土台とする言霊法則を学べば光の世界は開ける、と分かっても、すべての人々にその原理の自覚を促す事が出来る訳ではありません。それが為に、八十禍津日も大禍津日も「禍」として直接にそれによって光の世界に導く事は不可であると規制され、八十禍津日も大禍津日も禊祓を行う基礎原理であるに留められます。そして禊祓成就の真法として神直日（オ）・大直日（ウ）・伊豆能売（エ）の三神が登場します。闇から光へ導くために八十禍・大禍は基礎原理に過ぎないから駄目であり、津日即ち日に渡されます。日は霊で言霊であり、光の言葉の事です。その光の言葉に渡す方法が神直日・大直日・伊豆能売の三神であります。そして、これ等三神ならば黄泉国の文化一切を高天原の光の世界へ導く事が出来るのだ、との確認が底・中・上の三綿津見の神によって出来上がり、そこで日に渡す実際の光の言葉の配列が底筒男（エ・テケメヘレネエセ・エ）中筒男（ウ・ツクムフルヌス・ウ）上筒男（オ・トコモホロノヨソ・ヲ）の三神であり、その光の言葉配列成就による禊祓を行う基礎原理の結論が、天照大神・須佐男

命・月読命の三貴子（みはらしのうずみこ）であります。

以上の事でお分かり頂ける事と思いますが、世の中の事を闇から光の世界（高天原の創造世界）に引き上げる方法は、それらの物を光の言葉、即ち言霊原理（言霊イ）に基づいた言霊操作の智恵（言霊エ）より出る言葉を与える事なのであります。世の中の言霊ウ・オ・エ次元に展開する物を、その姿を何ら破壊することなく、そのままの姿で影から光の世界、黄泉国より高天原へ引上げ、物が実際に存在する真実・実相の世界の歴史創造の材料として生かし、新しい生命に蘇らさせる唯一の道が光の言葉（言霊イ）なのです。

少々難しい話が続きました。右の禊祓の方法を後世に伝えるために、天神様と尊ばれる菅原道真が作ったと伝えられるおとぎ噺「桃太郎」についてお話ししましょう。「昔々、おじいさんとおばあさんがいました。おじいさんは山に柴刈りに、おばあさんは川へ洗濯に行きました。……」と話は始まります。このおじいさんとは伊邪那岐命のこと。おばあさんは伊邪那美命と言います。おじいさんとおばあさんが合さって一人になった姿を伊邪那岐大神と言います（古事記「身禊」の章参照）。おじいさんは山に柴刈りに行き

ました。山とは下図157-Cの八父韻原理のこと。柴とは靈葉、現象子音言靈のことです。先にお話しました心の光と影の処で、影の世界から光の世界へ物事を引上げる唯一の道は言靈原理に基づいた現象子音（靈葉）の事と申しました。おばあさんは川へ洗濯に行きました。川とはアからワ、エからエ……と流れる竺紫の日向の橘の小門の阿波岐原の川の瀬、即ち伊耶那岐大神が禊祓をした川の中つ瀬の事です。洗濯とは勿論、伊耶那岐大神の人類文化創造の「禊祓」を謂います。

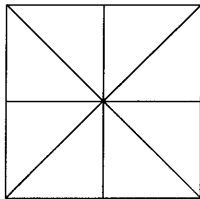
川上から大きな桃が流れて来ました。桃は百の事で、言靈百神の古事記の原理の事。この原理がおじいさんの柴、即ち靈葉である現象子音言靈の配列（綿津見・筒男）の確認によって完成され、言靈百神の原理が完成し、その中からこの原理を運用・活用する言靈エの完成体である桃太郎が誕生します。桃の原理の総結論である三貴子の中の桃太郎（長子）である天照大神のことです。

桃太郎（言靈エ）は犬（イ）、猿（ウ）、雉（オ）、熊（ア）を家来とし、おじいさん（岐）とおばあさん（美）の作った岐美（黍）団子を持って鬼が鳥を征伐します。鬼とは言

靈オの似、即ち黄泉国の文化のことでもあります。めでたし、めでたし。

大祓祝詞の「天津祝詞の大祝詞事を宣れ」という事を、現代に生きる人が実行する場合、現実どんな事を為し、またどんな事が起こるのか、を説明するに当り、その予備知識を五乃至六箇条にわたり準備をして来ました。これ等の予備知識を心に留めながら、この現実の社会に起こつて来る一切の出来事を撰取・処理して、人類文明創造のための材料として新しい生命を与える言靈原理に基づく現象子音で綴られた言葉を発表して、一瞬の今・今・今の此処に於いて業縁の闇の世界から光の高天原の世界に引き上げることによって罪穢を消し去つて行く方法如何を更めて述べて見ましよう。

図 157-C



天津宮事以下
天皇（スメラミコト）が人類文明創造の政治
を行うに当つて……

大中臣、天津金木と、本打切り、未打断らて

天皇の代行者である大中臣は、ここ三千年間、他の人間性能との協調を拒否し、独走して他の性能(アオエ)すべてを自らの言霊ウである欲望達成のための手段として来た天津金木思想の内容とその手段(カサタナハマヤラ)を大中臣の心の中にすべて理解して、……

千座ちくろの置座おきくらに置き足わして

大中臣の心中に自覚している言霊によって構成された生命の原理(五十音言霊図)に照らし合わせて、眼前の出来事の内容、並びにその出来事が起こって来た歴史過程等を、今・此処の一瞬に働く八父韻ア・カサタナハマヤラ・ワの配列に於いて把握し、……

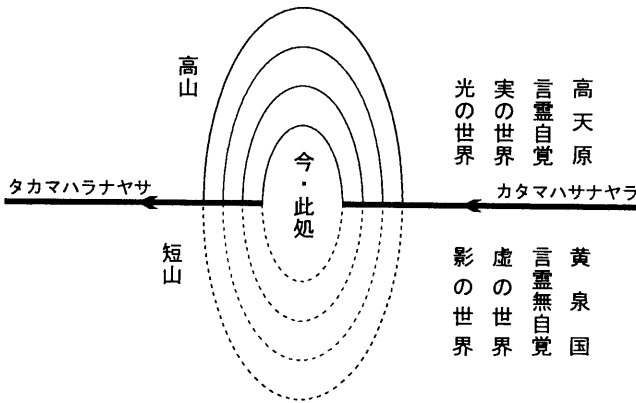
天津菅麻と、本刈断ら、本刈切りて、八針に取替かききて物事を処理するに当り、どの様な方法をとるかを決定する心の構造の原図である菅麻音図の母音と半母音を除いた後の八つの父韻の道理に基づいた、物事を対象として外に見る対処の思考方法を一切御破算にし、白紙に戻し……

天津祝詞の太祝詞事と宣れ
その上で、天皇御自身と全世界が一つの身体であるとの

自覚の立場に立ち、眼前の世界で起こっている出来事がすべて天皇御自身の過去身が「そうなれ」と命じた所の結果であり(ア・カタマハサナヤラ・ワ)、天皇御自身の責任であると受け留め、その結果の全内容を材料として、天皇の大御心の内容

である天津太祝詞音図に基づく歴史創造の方法ア・タカマハラナヤサ・ワから発する言霊子音の光の言葉で、それに新しい生命を賦与し、実行の叶う手順を示しながら

図 157-D



「かくせよ」の命令を発令する事でありませう。その天皇の
御心の言葉は、眼前の出来事を一瞬々々、その場で影から
光へ、破壊から創造へ、混乱を調和に、悲嘆を歓喜に、暗
黒世界を光明世界に変え、世の中の罪穢は一瞬々々歴史創
造の中に消えて行く事になります。

以上、「天津宮事以ちて……天津祝詞の太祝詞事を宣れ」
の大祓操作の言霊原理による説明を申し上げました。言霊
五十音は今・此処（中今）に存在します。その言霊五十音を
一瞬の次元イの間に於いて操作する天津宮事の政治は、歴
史の中に起こる種々の出来事の時処位並びにそれが起こつ
て来た由来のすべてを言霊図によつて把握し、撰取して、
それ等を材料としてスメラミコトの歴史創造の法則、ア・
タカマハラナヤサ・ワの天津太祝詞の順序に置き換える光
の言葉・現象子音の言葉の命令を下す事によつて皇祖皇宗
御経綸の歴史を創造し、その創造の瞬間としての光の中に、
過去のコンプレックスである罪穢は必然的に消滅して行く
事となります（図157、D参照）。

（以下次号）

【収載】会報百五十七号（平成十三年七月）

●大祓祝詞の話 その七

先月号において大祓祝詞の眼目とも言うべき「天津祝詞
の太祝詞事を宣れ」の文章の言霊原理による説明が完了し
ました。大祓祝詞の罪穢の修祓とは個々人の行為の善悪の
判定・裁判のことではなく、世の中に集積される罪穢を人
類文明創造の材料として撰取し、言霊原理に基づく光の言
葉、即ちタカマハラナヤサの歴史創造の行為の中に取り込
んで行き、影を光に、悲嘆を歓喜に、混乱を調和に転換し、
皇祖皇宗の人類歴史創造の経綸を推進して行く事でありま
した。

「天津祝詞の太祝詞事を宣れ」の意味が以上の如く解明さ
れ、御理解を頂きますと、その個所に続く大祓祝詞の文章
は一貫した筋が通つたものとして理解する事が可能となつ
て来ます。先ず大祓祝詞の解釈を次に進めることにしまし
よう。

斯く宣らば、天津神は、天の磐戸を押し披きて、天の八
重雲と巖の千別きに千別きてて聞し召さむ。国津神は、高山
の末、短山の末に上りまして、高山のいほり、短山のいほ
りを澁き分けて聞しめさむ。

斯く宣らば——

大赦とは天皇（スメラミコト）の人類歴史創造の光の中に影である罪穢を自然消滅させることであると宣言される、という事であります。

天津神は——

先に天津罪とは人間頭脳内の言葉の原理、即ち言霊原理の秩序を乱す形而上の罪であり、国津罪とは個人や人間社会の秩序を乱す個人的な形而下の罪であると言いました。天津神とはその天津罪に対応する言葉で、言霊の原理を自覚して、その原理・法則を活用して社会の政治を司り、人類社会の歴史創造に直接携わる人のことでもあります。

天の磐戸を押し抜きて——

磐戸は五十葉戸の事であります。五十音言霊の原理・布斗麻邇は長年月の間、社会意識の底に隠されていきました。神倭朝第十代崇神天皇による三種の神器と天皇との同床共殿（床を同じくし殿を共にする）制度の廃止の事実であります。この決定以来、日本の朝廷の政治は言霊布斗麻邇の原理に頼ることのない、弱肉強食社会に於ける権力政治に

移行することになりました。その結果、わが国伝統の精神原理は日本人の潜在意識の底に隠れ、生存競争社会が現出し、その社会土壌の中から人類世界の第二の物質科学文明が花咲いたのであります。この人間生活に便利な科学文明は誠に結構な物質的恩恵を与えて呉れる半面、この生存競争社会を人類生命存続の危機という想像もつかない運命の中に人々を叩き込むことになりました。正に人類文明転換の時であります。この時に当り、数千年来朝廷に於いて称えられ、予言されて来た大赦祝詞の「天津祝詞の太祝詞事を宣れ」の大宣言に応えて、天津神が立ち上ることとなります。即ち法華経の「從地涌出の菩薩」の譬の如く、復活した言霊布斗麻邇の原理を学び、これを活用して人類の第二文明時代を第三の生命文明時代へ転換する偉業に携わる人々が世の中に輩出し、その結果、この地球上に大昔にそうであつた如く天津日嗣天皇（スメラノミコト）の人類文明創造の朝廷が成立し、精神と物質双方の究極の真理を備えた平和にして豊潤な社会が建設されて行くこととなります。

天の八重雲と嚴の千別きに千別きて聞き召さむ。——

天の八重雲については祝詞の始めの所で説明しました。それは天津太祝詞音図の八父韻の並び、タカマハラナヤサの順序が示す生命の調和をもたらす根本原理の事であります。「天の」は先天構造の意。八重雲はそのタカマハラナヤサの先天構造から現出する生命調和の法則のこととあります。「嚴の千別きに千別きて」とは御稜威(嚴)の道理(千)を諸々の黄泉国の文化それぞれの上に投入して、生命調和の道に摂取して行く事とあります。「千別け」とはそれぞれの内容を生命の道理の構造の中に取り込んで行く事、と言った意味です。「聞し召さむ」とは、天皇の宣言を聞いて、その内容を理解して、その趣旨に沿った行為でお答えするの意とあります。

図 158-A

		アイエオウ	ウオエィア
高山	短山	ワ キ エ ヲ ウ	ウ ヲ エ キ ワ
高天原	黄泉国	自覚	無自覚

政治の下に、その恩恵を受ける国民の事があります。

高山の末、短山の末に上りまして——
短山のルビに「みじかやま」と書いてある古い祝詞の文章に出合う事があります。意味は変わりません。高山・短山の事は先月号にて触れましたが、ここで再び説明することとしましょう。言霊原理の結論である天津神籬、天津太祝詞図の母音は上よりアイエオウと並びます。この並びを上下にとつた百音図を作りますと、上下の中央の横の線を境に言霊図は全く対称形となります(図158, A参照)。この百音図を昔、百敷の大宮と呼びました。この百音図を構成する対称の上下の音はいずれも同じ音であり、実相も同じであります。その状況は全く違って来ます。上は光の世界、下は影の世界、上は高天原、下は黄泉国、上は言霊自覚の世界、下は無自覚の世界であります。

天津神が五十音言霊の原理を活用することによって朝廷の政治を行う人であるのに対し、国津神とは天津神の行う

こうお話ししてもお分かり難いかもしれませんので、仏教

の六道輪廻の教えを例に引きましよう。(図158・B参照)。この図は人間の心の進化の順序、下からウオアエイを上段にとりました。仏教ではその進化を衆生(ウ)、声聞(オ)、縁覚(ア)、菩薩(エ)、仏陀(イ)と教えます。下段はそれと対称的に上から人間(ウ)、修羅(オ)、畜生(ア)、餓鬼(エ)、地獄(イ)と示されます。上段は仏教自覚の世界で、下段は無自覚の世界。上下対称のそれぞれは行為の内容は似ていますが、境涯は全く極楽と地獄の違いとなります。(ア)の項を例にとりましよう。上段の(ア)は縁覚の悟りの次元です。心の一切の束縛から離れ、心の自由を得た初地の仏の自覚の境涯です。ところが、下段の(ア)は畜生界であります。自由に振舞うこと畜生の如く、大小便を垂れ流し自由、善悪の識別もなく傍若無人の行動となります。他の(イ)(エ)(オ)(ウ)の諸次元についても同様な事が言えます。自覚の有無、光の有無が創造もつかない相違をもたらす事を御理解頂けるでありますようか。人間とはその心掛けによって神ともなり、また、獣にもなるとはこの事を言うのであります。またこの人間の分際を知り尽くした皇祖皇宗の人類歴史創造の経綸の御苦心も窺い知ることが出来るというものでありますよう。

「高山の末、短山の末に上りまして」の高山の末は言霊アであります。言霊アの境地に視点を置くと物事の実相を最もよく見ることが出来ます。

高山のいほり、短山のいほりと澁き分けて聞しめさむ。

「高山のいほり、短山のいほり」とは五百理の意で、五(アイエオウ)を基本原理として組み立てた百音図の法則の事でありませう。そこで高山のいほりとは、百音図の中の上段の原理、短山のいほりとは下段の原理という事となります。「澁き分けて」とは「書き分け」の謎です。上段の法則と下段の法則とを書き分けるとは如何なる事なものでしょうか。上段は言霊原理自覚・活用の高天原の世界の原理であり、政治を行う方の物の見方、即ち言霊原理そのものの世界的事了です。下段は言霊原理

図 158-B

天上
六道

仏	陀	イ
菩	薩	エ
縁	覚	ア
声	聞	オ
衆	生	ウ
人	間	ウ
修	羅	オ
畜	生	ア
餓	鬼	エ
地	獄	イ

を自覚せず、黄泉国の物の考え方、即ち概念的知識を基本とした考えを以って生活を営む人々の集まりであります。

政治を行う場合、朝廷の政庁に於いて、言霊原理に則り「かく為せ」の方針が決定されましたも、その上段の決定をそのまま国民に示しましたのでは、言霊原理を自覚しない国民の側はその内容・方針・目的が理解出来ません。そこで「書き分け」が必要となつて来ます。言霊原理から見た真実の宣言を、国民全体が理解し、喜んで受け入れ、実行出来るよう、世間的な言葉、即ち概念的な言葉に書き返して発令されます。これが書き分けであります。こうする事によつて天皇（スメラノミコト）の政治が広く国民の生活に適合し、国民は喜んでこれに従う事となります。即ち「聞しめさむ」となる訳であります。概念的、経験的な知識による言葉から発想された方針や計画がそのまま概念的な言葉を以って発表される時、その政治を受ける側の経験知識との齟齬・誤解が生じ、混乱が生じます。光が当らぬ影の領域の政治に付きまとう混乱・騷擾はすべてここに帰因します。けれど言霊原理に則つた光の言葉を書き分けた概念的な言葉の宣言には誤解を生む余地はありません。「光と影」として前号で詳しく説明いたしました。

大祓の文章を先に進めます。

斯く聞しめしてば、すめみま 皇御孫命の朝廷と始めて、あめのした 天下四方の国には罪と言ふ罪はあらじと、みなじ 科戸の風の、天の八重雲と吹き放つ事の如く、朝のみ霧夕のみ霧と、朝風夕風の吹掃う事の如く、天津辺に居る大船と、おちかた 舳解き放ら、とも 艦解き放らて大海原に押し放つ事の如く、おわたのはら 彼方の禁木が本と、と 焼録の軟録もて、のこ 打掃う事の如く、のこ 遣る罪はあらじと、おちかた 被ひ給ひ清め給ふ事と、——

斯く聞しめしてば——

大祓祝詞の眼目である「天津祝詞の太祝詞事を宣れ」が実行され、天津神である朝廷に於いて政治を取り行う人達は復活した言霊の原理を以って黄泉国の文化の上に投入し、そのすべてを人類歴史創造の糧とし、吸収して行く事によつて大祓の宣言の趣旨にお答えし、国津神である一般国民は朝廷の言霊原理による新しい政治が国民に理解出来るよう、その内容を平易な文章に書き直された法令によつて納得し、従う事になるならば、……という意味であります。

皇御孫命の朝廷と始めて、天下四方の国には罪と云う罪は在らじと、――

数千年にわたり朝廷に於いて、六月と十二月の年二回、予言されて来た大祓の宣言が実行に移されることになりますと、天孫降臨と神話に謳われます言霊原理の自覚・保持者、靈知りの邇々芸命の集団が、この日本に国を肇めて以来の天皇の政庁を始めとして、全世界の国々には、長い間に溜まっていた諸種のコンプレックスである罪は消え去ります。そして、三千年にわたる暗黒の時代とは全く違つた新しい文明時代の幕が切つて落される事となります。では大祓が毎年宣言・予言され、その基礎原理である言霊の原理が社会の表面から隠没していた長い歴史の時代は、日本の朝廷はその間如何なる経過・変遷を経て来たのか、を振り返つてみましょう。それについて恰好の先師の文章がありますので、敬意を表し此処に引用することとします。

その昔、行われた天孫降臨は、世界の高天原地方から生命の主体の原理を把握した覚者神人の団体が、平地に降つて、合理的な国家社会を地上に創設した事であった。その人類最初にして然も永劫不変、天壤無窮、万世一系の道義社会の責任者、

指導者、経営者が天津日嗣天皇として、全人類に祝福された伝統を、その間必要な或る時期には天の岩戸隠れ、入涅槃の過程を辿りながら、また時に当面の経綸の企図方針に応じて、幾度が皇朝の变革維新を行いながら、三種の神器であるその原理そのものの伝統は、今日まで連続として悠久一万年に亘る歴史を経過しつつ、高天原日本のうちに継承保全して来た。これが皇御孫命の朝廷の歴史を通じての真姿である。

天皇が毎年行つて来た新嘗祭及び大祓の「御贖の儀」は一代に一度行われた即位式大嘗祭の儀を小規模に繰り返す式典であつて、「御麻」「節折り」「壺」等の儀式がある。この祭典に執行されるすべての仕草（動作）と、これに用いられるすべての器物は、悉くこの不変不滅、恒常普遍の伝統の原理を形と動作を以つて示し現した黙示であり、呪事呪物である。すなわち此の仕草と器物は文章（言葉）を以つて示された大祓祝詞に内蔵されている原理と一体をなすものであり、また言霊五十音布斗麻邇であるこの原理を同じように呪文を持つて黙示してある古事記、日本書紀の内容ともまた同一の意義を有するものである。呪文呪事を呪文呪事と知つてその謎を釈いて、その真態を現す時、神道とは唯一の系列の布斗麻邇三種の神器の原理であることを知る。

崇神朝に於ける三種の神器の同床共殿廢止以来、正法が隠

没している像法末法の二千年間に於ける天皇の最も重大な仕事は、斯の如き黙示（呪文、呪事、呪物）として示されている原理の意義を式典の形を以つて継続保持することにあつた。それはやがて再びこの原理の実体を以つて、いづれ新しく創造される人類の第二の文明である科学をその原理の中に統合摂取し、またその像法末法の間には發生した罪穢すなわち社会内容の矛盾撞着を贖い修被するための人間性の不滅の原理を、祭典の形で今日まで保存する事であつた。二千年の経過の後今日世界に罪穢が横溢充滿し、矛盾混乱が頂点に達して、再び新たな天孫降臨すなわち天の岩戸開きが必然である歴史的な時期がいよいよ廻つて来た。

宮中や神宮に於ける呪事である儀式祭典の動作は猿芝居だと評されている。その本物ではない芝居の仕事だけを、中実をわきますえずに、よい年寄達が衣冠ものものしく、鹿爪らしく勿体ぶつて、何時までも繰り返し演じているだけで事が済む時代ではない。「五串立て御酒おへまつる神主のうずの玉影見ればとほしも」と古歌は押掄している。呪文呪事の謎を釈き、芝居の型を黙示本来の生粋の姿である言霊に還元して、以つて言葉と文字で示す神の顕示たらしめて世界に開明する時である。

全人類の精神的な至宝であり、凡そ人間たる以上、民族人種の区別なく、誰でもが持つて生まれているが故に、人類の共通普

遍の財産である三種の神器、言霊布斗麻邇を把握運営する責任者は、渺くとも過去三千年、祖先の努力と守護によつて原理の連綿たる伝統を保持して来た天孫民族日本人である。この時の日本人が蹶起して、今日までの岩戸隠れの時代のものとしての朝廷あるいは政府とは、その存在と意義と使命を異にする世界の高原原日の本の政庁、法庁、教庁を新たに復元建設し、この原理の内容をみずから聞召し自覚し、全世界に普く釈き明して、比類なく優秀なこの道理を以つて、劫未澆世の極に到っている人類社会を大被する時、歴史は此処にその三千年にわたる自然生活（天津菅麻）、生存競争（天津金木）の渾沌が整理されて、人類文明は永劫不変の調和を実現する新しい時代に向かつて、輝かしい第一歩を踏み出すこととなる。（小笠原孝次著「大祓祝詞解儀」二十八〜九頁）

長く先師の文章を引用いたしました但祝詞の「斯く聞しめしてば」とは、この引用した文章が示す如く、皇御孫命の朝廷が二万年にわたる変遷の歴史の末に、大昔に在つたと同様の政治の機構と内容を整え、世界人類の第三文明時代建設に向かつて機能し始める事を意味しています。祝詞の此処より以下の文章は、その在来の天皇の政庁・教庁が

活動を開始する時には次の如くなるぞ、という事を述べることとなります。

科戸の風の、天八重雲と吹き放つ事の如く、——

古事記上つ巻「子生み」の章に風の神、名は志那都比古の神とあります。言霊フのことです。心の先天構造の内容(志)のすべて(那)を言葉(都・靈屋子)とする働き(比古)の事であります。人間頭脳内で心の先天構造(十七言霊・天名)が活動を起し、それが先ず何なのか、イメージが形成され(未鳴)、次にその未鳴に言葉が結び合わされ(真名)、次に口腔にて発音され(神名)、現実の言葉となって空中を飛びます。この様に人間頭脳内の正系の働きによって発音・自覚された言葉によって天津日嗣天皇の人類文明創造の政治の訓令(天の八重雲)が全世界に向かって発表され(吹き放つ)、各地に滞りなく伝えられるように、という意味です。

朝のみ霧夕のみ霧と、朝風夕風の吹掃う事の如く、——

高天原の言霊布斗麻邇の原理に則った実相そのままを表わす言葉ではなく、黄泉国の個人々々の経験知識の言葉に

よる社会には必然的に歪みが生じ、世の中全体が霧に包まれた如くに真実の相が把握出来なくなります。そこに陰陽(朝夕)の塩盈つ珠、塩乾る珠(父顔)の操作宜しき政治の運用によってその霧を吹き払い、明るい実相に満ちた世の中を実現することのように、意であります。

天津辺に居る大船と、軸解き放ら、艫解き放らて大海原に押し放つ事の如く、——

天津辺とは港のこと。大船の軸とは船の船首、艫とは船尾のことです。では船は何を表すかと言いますと、仏教で謂う大乘・小乗、即ち人の心に乗せる乗物の事であります。伊勢神宮の御神体である八咫の鏡を乗せている船形の台、これを御船代と呼びます。大船とありますので、大乘の乗物の事で、祝詞の大船は大船中の大船である人間精神の最高の構造を示す天津太祝詞音図のことです。地球人類を乗せて、物心共に豊かで調和のとれた世界歴史創造の海を航海するべきこの精神の大船は、ここ一・二・三千年の間、船首も船尾も港の岸壁に繋がれて海に乗り出す事がありませんでした。天照大神は岩戸深く隠れてしまいました。代わって須佐男命(八拳劍)と月読命(九拳劍)という船がわが

もの顔に大海原を往き来していたのです。大船である五十音図の船首とは五母音の並びの事であり、船尾とは半母音の並びの事です。御承知の如く須佐男命の八拳劍の判断力は主体を表わす母音の並びと、客体を表わす半母音の並びの双方の自覚を欠きます。月読命の九拳劍の判断力は主体である母音の自覚はありますが、客体である半母音の自覚がありません。須佐男命の物質科学は主体を捨象し、客体を抽象して、主体と客体との間の現象だけを追及します。月読命である宗教・芸術は主体の自覚はありますが、客体についての決定的結論は出す事が出来ません。宗教・芸術が世界人類全体の問題に結論を示すことが出来ずにいるのも、この理由からです。この暗黒の二・三千年間、船首が真直でない、船尾の舵がしっかりしていない船が歴史創造の海を右往左往していたという事が出来ます。人類生存の危機が迫って来たのも当然であります。

この時、天照大神の天津太祝詞音図である十拳の劍という完璧な判断力を備えた大船中の大船を、船先の綱も鰯綱も解いて、いよいよ世界人類六十億人を乗せて第三文明時代の大海原に出航させる事となるのです。日本の古歌はこの事を次のように称えております。

なかきよの とおのねふりの みなめさめ
なみのりふねの おとのよきかな

彼方の繁木が本と、焼鎌の教録もて、打拂う事の如く、遠る罪はあらじと、

「彼方の繁木が本」とは並んで生えている木の枝が無数に分かれて茂り、何処が幹でどこが枝だか見当がつかなくなつた状態の事です。茶の木は枝の先の茶の葉を摘み易くするために、枝先を円形に切り揃えます。そのため枝は四方八方に枝を分け、枝と先との区別がつかなくなります。茶の木林などと呼びますが、これは複雑な哲学理論が入り組んで序論と結論の区別がつかない事に譬られています。この元も先も分らない枝を、「焼鎌の敏鎌即ち鋭い鎌でもって、混み合っている枝をバサバサ切り拂ってしまふように、個人の経験に基づく哲学理論のアイマイさを斬り拂ってスッキリと序論・結論をはっきりさせてしまえば、という意味であります。「焼鎌の敏鎌」という鋭い鎌(カマ)とは、古事記子音創生の順序、タトヨツテヤユエケメ、クムスルソセホへ、フモハヌ、ラサロレノネカマナコのカマに当ります。この「カマ」とは、人間の心が言葉となり、空中を飛び、

人の耳の中に入り、復唱され（ノネ）、それが何を意味するか、心中に煮つめられます。その上でその内容（ナ）が明らかになり、結果（コ）が確定され、言葉としての現象が終結します。カマとは釜で、煮つめる道具でもあります。言葉の内容を煮つめる釜（カマ）、煩雑な枝を切り拂う鎌（カマ）、そこに言葉発生の正系の順序を経た言葉が、複雑な黄泉国の経験知の言葉を判別して行く厳正な作用を汲み取る事が出来ましょう。

以上のように、皇御孫命の文明創造の政庁の言霊原理に則った政治の布告が、その内容の実相そのままに世界の人々に伝わり、何の疑念もなく人々が第三文明時代建設の使命に喜び勇んで発進して行く事となるならば、人々の心中にわだかまる一切の罪穢は消えてしまう事になりますから、の意であります。そうなりますと、朝廷の政治の布告が作成され、人々に伝えられ、結果がどの様になつて行くか、第三文明時代の政治状況が次に明確に述べられます。大祓祝詞の総結論であります。

高山の末、短山の末より、さくな垂りに落ち、沸つ速川

の瀬に座す、瀬織津姫と言う神、大海原に待ら出でなむ。
斯く持ら出で往なば、荒塩の塩の八百道の八塩道の、塩の八百会に座す、速開津姫と言う神、持らかか呑みてむ。斯くかか呑みてば、気吹戸に座す気吹土主と言う神、根国底国に気吹き放らてば、根国底国に座す速佐須良姫と言う神、持らさすらい失ひてむ。

以上、柿本人麻呂の美辞麗句の詩的表現によつて新しい四人の神名が出て来ました。これが第三文明建設時代に於ける政治の内容を示したものだとは読んだだけでは到底理解し難いことではありますが、解説を進めて行く事にしましょう。

〔収載〕会報百五十八号（平成十三年八月）

（以下次号）

●大祓祝詞の話 その八

アイエオウの五十音言霊布斗麻邇の原理が昔あつたと同様の姿で復活し、天津日嗣天皇の世界の法庁・教庁・政庁がこれまた太古にあつた如く新しく創設され、この政庁の言霊原理に基づく人類の第三文明の創造が開始され、その歴史創造の中に長い間溜りに溜つた人類の罪穢が消滅して

行きます。その有様は「日本人の大祖先が神鳴り(雷鳴)と
 喩えました人間の言語の先天構造を正確に自覚した頭脳か
 ら発する朝廷の文明創造の指令が世界の各地に行き渡り、
 緩急宜しきを得た政策が世界の暗雲を吹掃うように、また
 天津太祝詞の大乗の精神法則が世界人類を包み込んで、新
 しい歴史創造の大海に乗り出して行くように、言霊原理に
 よる正しい判断によって世界の複雑怪奇な混乱の自己主張
 の論理が一扫されてしまうように、世界を覆いつくした罪
 穢が残らず払われてしまいます。

ではこの様な新しい時代の政治とは如何なるものなのでしょうか。その状況が大祓祝詞の最終結論として次に述べられる事となります。この結論を示す大祓の文章は前月号の末尾に掲げましたので、その文章について詳しく解説して参ります。

高山の末、短山の末より、さくな垂りに落ち、――

柿本人麻呂特有の美文調に心奪われて読んでしまいます

図 159-A

アイエオウ	高山	ウオエイア
ウオエイア	短山	アイエオウ

と、その文章に隠された言霊学の意味を見逃し兼ねません。
 天津太祝詞音図を上下にとった百音図(図159-A参照)の母音は上よりアイエオウ、ウオエイアの十音となります。上の五音の属する領域が高山、下の五音が短山に属します。その高山の末は言霊ア、短山の末もアです。その言霊アとは天津日嗣天皇(スメラコミト)の座であります。天皇からその慈眼で見る世界人類のすべてを大御宝(おおみたから)または大御田族たからといい、天皇は人類と一体であり、この一体となった時の天皇を御身(おおみま)と呼びます。

天皇の坐ます座より「さくな垂りに落ち」とはどういう事か、と申しますと、辞書は「さかさ落しに流れ落ちる」とあります。状況だけから解釈すればその通りでありましょうが、これに言霊の意を付け加えますと、「咲く名足りに落ち」となります。咲くとは心の表面にいつぱいに言葉として表現されることで

す。「な」とは名で、物事の内容を意味します。「垂り」は「足り」の意で「十分に」という事です。「さくな垂りに落ち」全

部で「心の内容が十分に言葉として表現されて下に伝えられ」という意味となります。

沸つ速川の瀬に座す瀬織津姫と云ふ神、——

言霊原理に基づく世界の文明創造の政治は、天皇を頂点とする百敷の大宮である朝廷から一瞬の懈怠・逡巡もなく諸種の指令が発せられます。その指令が「さくな垂りに発令され、速川の瀬となつて流れ下るように行行に移されます。瀬とは音図に向かつて最右の母音より計画が八つの父韻の意図のままに行行・実施され、最左の列である半母音で結果が出て指令は目的を達します。その実行の行為がアイエオウと順々に下に向かつて伝達されて行きます。ア段の天皇の座から発せられる指令が先ず直ぐ下のイ段に下の所にいる神が瀬織津姫というわけでありませう。

この瀬織津姫神(言霊イ)に続いて速開津姫神(エ)、気吹戸主神(オ)、速佐須良姫神(ウ)と四柱の神々が出現します。神道で祓戸四柱の神と呼ぶ神であります。天皇(ア)より指令が天津太祝詞音図の母音の順序アイエオウと下達されて行く状況がこれから詳しく述べられる事となります。かく申しますと、この四柱の神の内容と順序が、祝詞

の一番初めに出来ました「比礼挂くる伴男(イ)、手襷挂くる伴男(エ)、靱負う伴男(オ)、劔佩く伴男(ウ)と対応している事にお気付きの方もいらつしやいませう。祓戸四柱の神とは天皇より発令・下達される指令が朝廷の四つの役職を経過して、実際の国民の中で如何様に実施されて行くか、即ち言霊布斗麻邇の原理による新時代の政治の内容が述べられているのであります。祓戸四柱の神と呼ばれる社会の罪穢の被いとは、新時代に於ける文明創造の政治そのものである事が結論づけられて行きます。

瀬織津姫の瀬を織るとは音図に向かつて右の母音より左の半母音に向かつて流れる八父韻の生命の流れ、言い換えますと、五十音図の母音の並びを空間に、母音から半母音に向う父韻の並びを時間にとり、空間と時間の交差する彩(音図・心の衣)を織り成して行く働き、これが瀬を織るといふ事になります。言霊原理に則つて人間の生命活動は五つの音図に作成されます。天津菅麻(イ)、天津太祝詞(エ)・宝(ア)・赤珠(オ)・天津金木(ウ)の五つであります。大祝詞の眼目はイアオウを中心に据えた四つの音図を検討して(大祝詞の文章には天津金木と天津菅麻の二つだけしか記されませんが)、それを材料として人類文明を創造

するために天津太祝詞音図に宣り直すことであります。天皇から発せられる指令は先ず、瀬織津姫神（此礼挂くる伴男）の所で音図に照らして如何なる内容かが検討されます。

大海原に持ち出でなむ。

音図上の検討が終了しますと、一般社会への発令が決定します。社会へ広く発令することを「大海原に持ち出でなむ」と表現したのであります。何故その様な表現を選んだのか、と申しますと、それは人麻呂特有の美文調「荒塩の塩の八百道の八塩道の、塩の八百会に座す：」という文章に続けるためであります。即ち「大海原に持ち出でなむ」から「海の塩」の言葉を引き出そうとした訳です。

斯く持ち出でなむば、——

天皇の命令が言霊原理に則つて沙庭され、検討されて、庶民社会に発令することが定まりますと、という事です。すると事はその次の段階である速開津姫神の所へ廻されます。祝詞の初めにある「手襷挂くる伴男」の仕事が始まります。

荒塩の塩の八百道の八塩道の塩の八百会に座す、速開津

姫という神——

速開津姫神とは速く（速）明らかに（開）目的に渡す（津）能力を秘めている（姫）役割（神）と謂つた意味であります。音図上で検討された天皇の意図即ち社会の現状を文明創造推進のためどの様な変革を実施すればよいか、そのためにどの様な手段・手順をとつたらよいか、が検討・確定されます。瀬織津姫で決まつた原則を、その実現のための方法が定められる段階の仕事です。それは言霊工の速開津姫（手襷挂くる伴男）の仕事という事が出来ませう。

では速開津姫神がいる「荒塩の塩の八百道の八塩道の塩の八百会」とはどんな処なのでしょう。どんな処と言つても、地理上の場所ではなく、精神的な場の事です。「荒塩の……」は人麻呂の美辞であります。この言葉の中核となるのが「塩」の一字です。塩を四穂と取れば、イエアウ五母音の中のエアオウの四音、即ち実際に世の中を構成する四つの次元の事となります。この四つが世の中の世の語源となります。塩を機と取りますと、適当な機会という意味です。天皇からの指令が瀬織津姫の働きで音図上で検討されますが、ここまでは原則的な形式にとどまります。この決定を流動している世の中の最も適当なチャンス捉

え、状勢を变革し、文明創造を推進するか、は言靈工（英智）の働きです。言靈学でいえば、四つの母音に対する八つの父韻の働きかけの機会を常に見極めている事が要求されます。どんなよい政策も、その施行のチャンス逃したら、またその時の情勢判断を誤ったら、何の効果も挙げられません。「荒塩の塩の八百道の八塩道」即ち複雑に流動する世の中の状勢の中で「ここぞ」という一瞬に社会全体の実相を捕捉し、そこに適当な施策を実行する実践智（言靈工）の能力、これが速開津姫神の働きです。

持らかか呑みてい。

「成る程」よし今だ「チャンスは此処だ」と自ら納得することです。言靈工の能力はこの様に機（潮時）を自らが納得出来る程に機敏であることが必要とされます。天皇の座から発せられ、瀬織津姫の処で言靈図に基ついて検討された指令が、此処速開津姫神の処で社会の流動する現状とマッチする様、そして変革・創造の確実な気運となるよう計画が練られます。

斯くかか呑みていば、気吹戸に座す気吹戸主という神、根国底の国に気吹き放らてい。

速開津姫の処で時機・状況に則した指令の言葉が発せられますと、次に気吹戸主の処へ下されます。気吹戸とは心（氣）が言葉として発音される（吹）処にある戸、平たく言えば人間の咽喉の事です。咽喉の働きで言葉が外界に飛び出して行きます。気吹戸とは息吹が飛び出る門であり、また咽喉とは宣る門で同じ意味となります。言葉が飛び出るところを、祝詞の初めには矢が弓から飛び出る事に喩えられて、靱負う伴男（オ）と呼ばれています。この社会に向かって発せられる言葉は、瀬織津姫・速開津姫の働きで言靈原理の則った指令が、気吹戸主の処で一般社会の国民に理解出来るような法律、道徳、訓示の言葉に組み替えられて発表されます。前号に説明されました「高山のいほり、短山のいほりを揆き分けて」の作業が行われ、国民に伝えられます。「根国底国に気吹き放ちてむ」の根国底国とは太祝詞音図の母音の並びアイエオウの最下段であるウ段のことです。言靈原理によつて正確に検討された天皇の指令が、一般国民に通用する言葉に書き直されて、最下段（ウ次元）の大衆社会に発表されます。気吹き放つとは発表・伝達されるの意であります。

斯く気吹き放らば、根国底国に座す速佐須良姫はやさすらひめという神、持らさずらい失ひてむ。

根国底国に在る速佐須良姫とは政治上の恩恵を受ける一般大衆のことです。世の中が變つて第三文明時代となつても、この次元に属する人々の実相は變つてゐることはありません。速佐須良とは「さすらう」「放浪」「流転」の意味であります。私の先師の言葉借りますと『曠劫よりこのかた、常に没して出離の期なしと観ず(教行信証)と親鸞は云つたが、神を知らず、仏に遭はず、天津日嗣の経綸を知らず、世界に対する自己の位置と意義を知らず、みづから輪廻を解脱する力なく、またみづからが輪廻していることの自覚のない大衆の境涯が速佐須良姫である。』

ではこのような一般大衆(速佐須良姫)に朝廷の指令をどのように伝え、自ら進んで遵守させるか、といひますと、祝詞の初めに出て来ました朝廷の役割の最下段(言靈ウ)に在る劔とほ佩く伴男が働く事となります。劔とほと言ひますと、精神的には判断力の表徴であります。けれど政治的には劔とほは権力に通じます。天皇からの指令が最終的に下りて来て、一般大衆に接する処に劔佩く伴男がいます。指令がどの様に伝えられ、守らせるか、は劔佩く伴男の判断に委ねられ

ます。そして人々はその適切なお役人の判断によつて喜んで法律に従ひ、協力するようになります。けれど大衆の中にはどうしても趣旨を理解せず、抜け道を考えたり、反抗する者も出ることでしょう。その場合の劔とほは止むを得ず権力の行使という形で現れます。即ち罰則が適用される事となります。

第二文明時代の政庁は、その頂点より人民に接する役人まで、すべてが権力構造という事が出来た。けれど新時代の政庁の構造は頂点より最下段に到るまで公平無私の仁慈の政治です。それでも私慾のため反抗する人へのみ権力の行使となります。権力と言われるものの意義が最小限に留められます。

持たさずらひ失ひてむ、とはどういう事なのでしょう。一般大衆は何事にも熱し易く冷め易いと謂われます。何時の時代にも変わることはありません。天皇からの指令が社会の平和と福祉をもたらし、大衆は幸福の日を過ごし、鼓腹撃壤の歌を歌いますが、何時の間にかその幸福な日常に馴れ、終に忘れてしまいます。政治を行う人々の日夜の勞苦など少しも考えません。全く心許無く薄情もとの様に見えるが、良き政治の下ではそれでよいのであります。人々が

一つの法令のもたらす好結果に馴れ、マンネリ化が始まろうとする時には、また新しい指令が下りて社会の雰囲気を一変することになるからです。かくて政治の渋滞は起こることなく、一般大衆は世の中に何事も起こらない事に安心して暮らし、政治とその政治の立案・施行者の存在すら余り関心も持たぬ事となるわけであります。大衆が政治に関心を持つ事こそ非常事態の証拠といふべきかも知れませんが。

以上、新しい時代の政治の様相について大祝詞の結論の文章を解説いたしました。現代という第二物質科学文明時代の終わりに当る国際・国内双方の政治のエゴむき出しの緊迫した状況に比べて、今、申し上げました来るべき新時代の繊細にして鷹揚な政治状況は考えただけで楽しくなるではありませんか。

大祝詞の骨子となる部分は此処で終わり、祝詞は一気に終章に向かいます。その文章を左に掲げます。

斯く失ひてば、天皇が朝廷に仕え奉る、官々の人達と初めて、天の下四方には、今日より始めて、罪と云ふ罪はあらずと、高天原に再振立てて聞く者と、馬牽き立てて、

今年の六月の晦日の夕日の降の大祓に、祓ひ給ひ清め給ふ事と、諸國し召せと宣る。四國の卜部等、大川道に持ら送りて祓ひ劫れと宣る。

天皇(スメラミコト)が主宰する朝廷で仕事をする文武百官が、それぞれの心中の高天原に於いて耳振り立てて聞くべきもの、と言えば、アイエオウ五十音霊音図、布斗麻邇の原理であります。これを天の斑馬(ぶちこま、まだらこま)と呼びます。百敷の大宮と呼ばれる天皇の朝廷の政治とは、天の斑馬という天津太祝詞音図上の政策決定に始まり、それを時宜に適した民衆の理解し易い言葉に書き分け、政策を隅々まで浸透させ、それぞれの地域から世界全体まで人類文明創造を推進させることに終わります。「馬牽き立てて」とは、二千年前の崇神天皇による言霊原理の隠没以前に於いては、六月と十二月の大祓の儀式の式場で斑馬である太祝詞音図の縦の各行を「タチテトツ・ン、カキケコク・ン、マミメモム・ン……」と言葉に出して朗誦し、百官に聞かせた事を言っています。竹内古文獻にその記事が載っていると聞いています。「夕日の降」とは夕日が傾く時の意。「四國の卜部」とは朝廷のある都より見て四方に

ある国の意。卜部とは大祓の儀式を司る役人の事でありま
す。

以上、長い間大祓祝詞の解説をして来ました。祝詞に使
われる用語が言霊原理に照らしませんと意義不詳のものが
多く、その一つ一つに注釈を加えながらの解説であります
ので、思わず八ヶ月を要することとなりました。その長い
期間のお話となりました事で、読者の皆様には大祓祝詞全
体の文意が一貫した筋道の通つたものとして御理解頂けな
かったのではないかと、思います。そこで大祓の文章を現
代人に理解できる言葉で、文章の途中で何らの用語の注釈
を加えることなく、お伝えしようと思ひます。平易な言葉
にするため文章が簡単となり、時に奇異に感じる方もある
かと思ひますが、祝詞の内容には変わりがない事も申し上
げておきます。

六月末日の大祓 十二月もこれと同じ

今日の儀式にお集まりになつた親王様、皇族方、諸大臣達、
その他朝廷の各役人方、これより申し上げる事をお聞き下さい。

天皇が主宰なされる朝廷にお仕えする言霊原理の奉持者、原理の
活用による政策立案者、政策を法令化する人達、その法令をも

つて一般国民に接する役人達、その他大勢の役職にある者達を始
めとして役所に務めるその他の人達が、政治上また日常に犯した
種々の罪穢を、今年六月末の大祓によつて祓い清めますから、皆
謹んでお聞き下さい。数千年乃至一万年の昔、太古と呼ばれる
時代に地球上の高原地帯に於いて人間の心と言葉の究極の原理
を発見し、後世神漏岐・神漏美の命と神話で呼ばれるようになつ
た私達日本人の大先祖に当る方が、大勢の言霊原理の自覚者を
一堂に集め、相談した結果、言霊原理を第一次的、その原理
に基づいて事物に名を付けることを第二次的、その言葉に相應しい
合理的な社会を第三次的な芸術として理想の社会・国家を建
設する責任者（神話で邇々芸命と呼ぶ）を地球上の平坦地、
日本の土地に派遣し、言霊原理に則つた平和な国家を創建せよ、
と命令したのです。またその日本の地に下つて行つたなら、その地に
以前から「我よし」の力を振う人々を正当で合理的な言葉の論
理で説得し、彼等が主張する間違つた論理や感情論を一切説破
して、天降つた聖達が自覚している心の先天構造の真理を発表し、
その先天構造から現出する社会創造の政策を宣布するように委
任し、命令したのでした。この様に委任されました邇々芸命とい
う日本の肇国者であり世界人類文明の創始者は世界の国々との
日本の国とを平定し、人間天与の精神支柱を言霊アオウエイと

確認し、その上で人類文明創造の原理として言霊アイエオウを高く掲げた政治の庁を創建し、この日本の国を世界の高天原として言霊原理の道理そのままの政治機構を打ち建てたのでした。また日本朝廷の創建者邇々芸命の天津日嗣を受け嗣ぐ代々の天皇（スメラミコト）の神聖な朝廷にお仕えする人達は政治の原理として言霊布斗麻邇を奉戴し、その原理を数霊を以て正確に活用・運用することによって日本国と世界の国々を、現代の各民族の神話が「神代」と呼んでいる五千年の長い年月の間、平穩無事に治め、人類の第一精神文明の時代を創造したのです。

時は移り、人類の第一精神文明の時代は終わり、物質科学研究を目的とする人類の第二物質科学文明時代に入ります。この時代の目的追求を促進するための方便として第一精神文明の中心法則であつた言霊原理は社会から隠没されました。そのため年月の経過と共に日本と世界の国々との中に於いて「生めよ殖えよ地に満てよ」と増加する人々の中に種々の罪が発生して行きます。それらの罪の中で五十音の言霊法則を乱す形而上の罪とは畔放ち、溝埋め、桶放ち、頻しばしば時ときき、串刺し、生剥ぎ、逆剥ぎ、尿戸等のものであり、他人や社会に迷惑をかけ秩序を乱す形而下の罪として生膚断ち、死膚断ち、白人胡久美、己が母を犯す罪、己が子を犯す罪、母と子と犯す罪、子と母と犯す罪、獸類を

犯す罪、蝗大量発生まじないの罪、不浄霊能力の罪、人を迷わす言葉の罪、獸を殺し、禁厭まじないをする罪等々の罪が発生して来るであります。そして第二物質科学文明の終末期には、世の中に人々の罪が満ち溢れ、社会の混乱が收拾つかない程に立ち到ることでしょう。

そういう事態になつた時には、日本の朝廷に於いては言霊の原理に則り、第二物質文明時代の指導精神原理である天津金木音図の構造を解体して生命本然の構造に見合うよう変換し、また人間が生来付与されている大自然の心の構造である天津菅麻音図を解体して真の文明創造の原理にはならない事を確認し、その上で人類文明創造の大法である天津太祝詞音図の手法タカマラナヤサに宣り直して見なさい。そうするならば、第一精神文明時代のあつたと同様の言霊布斗麻邇に基づく世界の政庁・法庁・教庁である御稜みいつ威輝く日本の朝廷が再び世界人類の上に創建され、その朝廷に於いて政治を行う人達は五十音言霊の秘法を宣布・活用して、世の建直しの政策を立て、次々に世界に発令・伝達する事に務めるようになり、その政治の恩恵を受ける国々の国民は、言霊原理に基づく政策を、原理を自覚出来ない人々にも理解することが出来る言葉に書き直した法令によって理解・得心して喜んで新しい時代の生活を楽しむ事となるでしょう。

このような新しい人類の第三文明時代が創造されて来ますと、

天津日嗣天皇の朝廷を始め世界の国々には、文明創造の原理の光に包まれて罪という影はすべて消えてしまい、心の構造の原理に基づいた世界政治の政策が次々に発令され、言霊父韻の法則を見事に使い分けた判断が世の中の暗黒を吹き掃つて、第二文明時代に使用されなかつた天津太祝詞音図という大船の原理が世界の人々を乗せて第三文明創造の大航海に乗り出すこととなり、世界を覆つていた複雑怪奇な思想理論が言霊原理の先天と後天の明快な構造理論によつて整理されて行きます。こう言われる如く世界の人々の罪という罪は消えて無くなつてしまふように日本の朝廷の政治は行われますが、そのやり方は次の様なものであります。

天津太祝詞音図の母音はアイエオウと並びます。そのアの位にいます天津日嗣天皇から文明創造に充分な内容を持つ命令が下りますと、その位の次のイ段に位する五十音言霊図を自覚する人々（瀬織津姫）によつて沙庭・検討され、社会への発令が決定されます。すると次のイ段に位する役目の人々（速開津姫）は、時々刻々と映り変わる世界の状況に適合するように命令の内容・発令の時期等が充分納得出来るまで検討・決定されます。次に言霊才の段階に（氣吹戸主）移され、命令は一般国民が理解し易い法令・法則に書き直され、社会に発表・伝達されます。

最後の言霊ウの段階にいる世界の大衆は（速佐須良姫）その人情溢れる細やかな配慮の法律の下に、新時代の生活を楽しみ、安楽な生計を営むことが出来ます。法律は何時しかその目的を達すると忘れ去られます。そうなる前に時宜に適した次の法律が発令される事となります。

政治の状況がこの様に激まない時代となりますと、天津日嗣の朝廷にお仕えする官職にある人々を始めとして、世界の四方の国には、罪という罪は人類文明創造の光の中にすべて消え去りますから、高天原の朝廷の天の斑馬まんばと言われる天津太祝詞音図ひんごを齊しく称えながら、今年の六月末日の夕日の入日の大祓の清めの言葉ことばを皆さん、謹んでお聞きなさい。都の四方の国の大祓の儀式の責任者もそれぞれの地方にこの趣旨を持ち帰つて人心の滞りとどまりのない様務めなさい。（終わり）

【収載】会報百五十九号（平成十三年九月）

言霊学随想

●道と器

易経に「形而上は之を道と謂い、形而下は之を器と謂う」とあります。平易に言えば「精神的な真理を道と謂い、その内容を器物で象徴したものを器と謂う」という事です。

例を挙げて説明しましょう。日本皇室に伝わる宝に三種の神器があります。劍(草薙劍)、曲玉(八坂の勾璣)、鏡(八咫の鏡)の三種です。器でありますから、易経にありますように精神的な何かの道を象徴しているに違いありません。既刊「コトタマ学入門」に詳述しましたように劍とは人間天与の判断力の事。昔の劍は両刃でありましたから、片方は太刀(断ち、分析)、もう片方は劍(連気、総合)を表わします。先ず人の心を太刀の判断力でトコトン分析して行くと究極に五十個の言霊を発見します。この五十の言霊即ち人間精神の究極の要素を五十個の勾璣で象徴しているのです。次に劍のもう一方の連気で心の五十個の要素を総合し、人間最高の文明創造の精神構造(天津太祝詞音図)

を造ります。この象徴が八咫の鏡というわけです。

右に挙げました形而下の器が象徴する形而上の道が言霊原理の復活によって明らかとなった一例であります。最近言霊の会に於て「道と器」の結び付きとして誠に興味深い出来事がありましたのでお知らせ申上げる事といたします。

平成十三年五月の或る日、当言霊の会の会報購読会員であるYさんから電話を頂いた。電話の内容は「以前、官幣大社であった神社に、春秋の大祭に際して天皇家から勅使によって下賜される器物が手許にあるのですが、その構造が言霊原理から見ると何か意味があるように思われるのですが、一度見て頂けませんか」というのです。私も大層心を惹かれ承諾しました。五月二十五日午後、Yさんは白い布に包んだ白木の箱を持参し、早速拝見しました。白木の箱と見えたのは、実は白木の柳の木を細工した切口が三角形の棒を、釘も接着剤も用いず、棒に細い穴を明け、白い細糸を通して板状に組み、四側面と上下の六面を作り、箱形としたものでありました。Yさんによると、側面の四つの角に位置する変形の三角棒を二本と数えると、全部で百本の三角棒を編んだ長方形の箱という事になる、と言いま

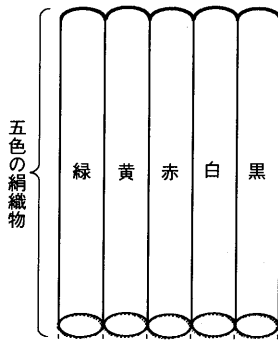
す。この箱を見て、またYさんの話を聞きながら、私はこの精巧な箱が言霊原理に照らして何を意味するのか、が明らかになって来るのを無言の裡に「成程、成程」と頷いてい

に目も覚めるような鮮やかな五色の絹の巻物が目に飛び込んで来ました。向かって左から緑黄赤白黒の順の直径三センチメートル、長さ三十センチメートル程の絹の染め布を

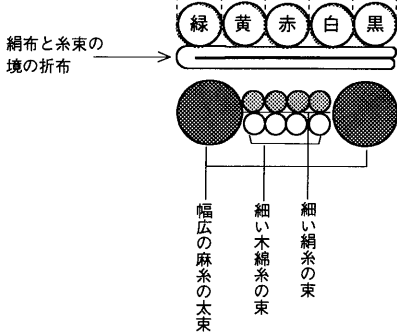
①三角棒



②上から見た図



③横から見た図



巻いたものです(図161・A②参照)。

更にその五巻きの絹布の下を見ました。境となる長い布を折り畳んだもの下に、布ではなく糸の束が見えました。左と右の端は麻の太い幅広の糸の束で、晒してないものと見受けました。その太い麻の束に囲まれるように上下二段に四束づつ、計八束の糸束が並べてあります。上段四束が絹糸、下段四束が木綿の糸と見受けられました(図161・A③参照)。

ました。(図161・A①参照)。
Yさんが箱の蓋を開け、中の物を取り出しました。初め

の箱は縦四十センチ、幅二十センチ程、高さ二十センチ程と思われました(正確に計測したわけではありません)。

以上上段の五本の絹の染め布と境となる折布を挟んで下段の太い麻糸束二、細い絹と木綿糸の束(無色)八、計十本の束とを収納した柳の白木製

由緒ある天皇家よりの御下賜品を拝見している内に、私
は心の底から深い感動が起こつて来るのを感じました。そ
れは天皇家の一般の社会人には見る機会がない秘蔵品を見
せて貰つた事の感激……、そうではありません。もつと奥
深い意味を持つ事への感動でありました。「いよいよそう
言う時が来たのか……。」という言い知れぬ時代到来に対す
る感動であります。

日本人の大先祖、皇祖皇宗の壮大な人類歴史創造の御経
論の下、人類の第二物質科学文明創造のための方便として、
言霊布斗麻邇の原理は社会の表面から隠没しました。二千
年前の崇神天皇の時であります。しかしその隠没は人間の
忘却であつて喪失ではありません。物質科学文明の完成の
暁には、再び言霊の原理はこの世に復活することとなりま
す。その為、朝廷に於て種々の施策が講ぜられました。そ
の一つが宮中に於ける祭礼・儀式の様式の工夫でありま
す。即ち言霊原理復活の暁、その眼で見れば太古は宮中に
於いて同様の原理に基づいて政(まつりごと)が行われてい
たのだな、と思わせる証拠となるよう祭礼の様式、そこに
用いられる器物の形についての工夫が行われたのです。今、
目の当りに見る元官幣大社である神社の大祭に天皇家より

の勅使によつてもたらされる御下賜品を一見して、その表
徴する内容がアイウエオ五十音言霊の原理そのものである
ことが十二分に理解されたのでした。この御下賜品の箱と
その中の絹布と、絹と木綿と麻の糸の束の形式が何時頃制
定されたのか、は不明です。けれど室町時代の宮中の祭典
を司るお公卿さんの日記に「宮中の大嘗祭その他の祭典の
様式の意味が全く分からなくなつてしまつた。」とある所
から考えると、式典様式が室町時代より余程以前に制定さ
れた事は事実でありましょう。明治天皇、昭憲皇太后に始
まり、多くの先輩諸氏の努力によつて受継がれて、現在の
言霊の会に到る伝統の言霊学復活の研究によつて、略、百
パーセント太古と同様の姿に甦つた言霊布斗麻邇の原理
と、長い長い年月、宮中に秘蔵されて来たその象徴物であ
り、またそれが皇室よりの御下賜品であることが明白であ
るものが、即ち言霊原理の形而上の道と形而下の器が、言
霊の会の一室に於て出会つた事です。これは誠に感動の
一刻でありました。

御下賜品の箱とその内容物が言霊原理そのものだ、と言
う理由は言霊を学ばれる方には直ぐお分かりの事と思いま
すが、次に簡単に説明することにしましょう。先ず③図よ

り始めます。晒しも染色もしない麻糸の大きい束が左右にあります。加工しないという事は人為でなく大自然を表わします。両側の二つの大束は人間天与の精神構造である天津菅麻音図、即ち伊耶那岐神の五十音図の母音アオウエイと半母音ワウエヰを表徴します。それに挟まれた上下二段の小さい糸の束は八父韻です。上の四束は人間の創造意志の能動のリズムである父韻チキヒシ(塩^み盛^みつ珠)を示し、下の四束は受動のリズム父韻イミニリ(塩^み乾^みる珠)を表わします。以上の構造を持つ伊耶那岐神の天津菅麻を素材として、言霊操作の末の結論となる天皇(スメラミコト)の人類文明創造の精神構造を示す天津太祝詞音図即ち天照大神が誕生します。

図161・A②はその天津太祝詞音図の母音の並びを表わしています。人類文明創造は大自然ではなく、人為に属しますから糸を織り、染色した布を以て示されます。緑黄赤白黒の順は言霊を色霊で表わしたもので、アイエオウの母音の柱を表わします。(実は白はウ、黒はオで順序が逆です。過去何時の時代か、言霊の原理が不明となつてからの人為ミスと考えられます。)③の伊耶那岐神を親として②の天照大神が誕生する構図は、伊勢神宮本殿の中央に八咫鏡(天

照大神)、その本殿中央の床板の真下に心柱(伊耶那岐神)が立てられているのと同様であり、また祝詞の「天津磐根に宮柱太敷立て(菅麻音図)、高天原に千木高知りて(太祝詞音図)」とも一致しています。

最後に図161・A①の柳の白木の箱の話に移りましょう。これがまた驚く程巧妙な表徴物です。箱材の柳はイヤナギで伊耶那岐を意味し、その百本の棒は、五十個の言霊と五十通りの操作法、計百の言霊の原理を人類文明創造の政治の原理とする日本天皇の朝廷、即ち百敷の大宮を表徴します。三角形の棒は「みかど」で朝廷を表わします。

以上が旧官幣大社の祭祀時に天皇家より賜る御下賜品の構造の言霊学的内容のすべてです。形而上の道である言霊原理と、その道の隠没に当たって製作された形而下の象徴である器とが、千数百年乃至二千年の歳月を経て、此処に再会しました。今年五月二十五日に起こったこの事実は、人類の第三文明時代創造の大いなる歩みの中の一里塚として、今後の人類歴史に大きな指針を与えることとなりましょう。(以上)

【収載】第百六十一号(平成十三年十一月)

●太初に言あり

新約聖書ヨハネ伝は信仰の書というよりはむしろ哲学書
というべき文章で始まっている。

「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき。この言は太初に神とともに在り、萬の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるはなし。之に生命あり、この生命は人の光なりき。光は暗黒に照る、而して暗黒は之を悟らざりき」

英語の聖書では、この太初に言あり、の言に the Word と大文字を使っている。またロゴス (logos) なるギリシヤ語を用いている書もあると聞く。日常一般の言葉と区別するためであろう。古代、この「言」をマナ (mana) と呼んだ。旧約聖書に「マナとは神の口より出ずる言葉なり」と書かれている。このマナの事を仏教で摩訶と呼び、ヒンズー教でマヌといふ、「マヌの法典」なる古文書が遺されている。日本語では麻邇といひ、その法則を布斗麻邇と呼んでいる。マナは古代に於いては世界語であった。

では「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」と聖書にある言とは如何なる言葉なのであろうか。その

内容について聖書は勿論、仏教もヒンズー教も全く触れていない。外国に起源を發する宗教によってはその神即言の内容を知ることが不可能なのである。では全く不可能なのか、と言うとうそではない。日本民族伝統の古神道言靈学が明快にその内容を百パーセント解明してくれる。

言靈布斗麻邇の学は人間の心の究極の要素が五十個である事を解明した。この心の要素五十個のそれぞれを、私達が現在使っているアイウエオ五十音の清音の単音一つ一つと結んでこれを言靈と呼んだ。それは心の最小単位であると同時に言葉の最小単位でもあるもの、即ち言靈である。それはまた心と言の単位が一体となった実相の最小の単位でもある。日本語はこの物事の実相の最小単位である言靈を組合わす事によつて事物の実相を表現した。それ故、古代日本語(ヤマトコトバ)は事物の実相そのままを表現して誤ることがなく、その他の説明・解説を必要としない。「神惟ら言挙げせぬ国」と謂われる。

さて「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」の神とは何か。辞書を引くと「人間の宗教心の対象となる、超人間的な威力を持つもの」と簡単に説明している。「人間の宗教心の対象となる」からには人間生命活動のすべて、

人事百般がそれによって創造・規制され、しかも「超人間的な」ものとして人間の五官感覚意識では捕捉出来ない威力を持つもの、というわけである。以上の条件を十二分に満たし、信仰に依らずにその存在を確かめ、自覚可能なものはあるであろうか。世界に唯一つある。言霊十七個によって構成される人間精神の先天構造を示す言霊学の天津磐境いはふと、その活動によって現出して来る人間精神の後天構造、アイエオウ五十音言霊によって構成された人間精神の全貌を表わす天津神籬じみろぎである。この人間精神の先天と後天の原理・法則を古神道言霊学は単に布斗麻邇と呼ぶ。哲学的に謂えば人の心のアルファであり、オメガである。天津磐境は人間の内観によってのみ直観される、人事百般創造の根源となる心の先天構造であり、天津神籬は磐境によって産み出された心の後天現象である人事百般の原理・法則である。この磐境と神籬とが人間の英智によって認識された宗教心の対象となる神の実体であり、現実相に他ならない。

此処で話を転じることにしよう。常に言う事であるが、物事の実相は一つである。それが如何に複雑極まる状態にあるように見えても実相は一つしかない。この嚴然たる事

実を前提として考えてみよう。或る事件について十人の識者に状況をどう見るか、尋ねて見る。すると十人十色それぞれ違った答えが返って来るに違いない。一つの出来事について人の頭数だけの答えが返って来る。何故か。人それぞれ物事を観察して判断する基準がまちまちだからである。判断の基準を形成する人それぞれの経験知識が相違するからである。

人はこの世に生れ、長じる過程でいろいろな経験を積み、それに基づく知識を身につける。生れや人生経験によって境遇も異なるから、それぞれの経験知識が相違する。その為、一つの出来事についての見方も異なり、状況判断も異なり、対処方法の意見もまちまちとなる。これはやむを得ない事であり、その為の物事処理の決定手段としての民主主義が尊重される、という事に落ち着く。この様に見て来ると何の疑問も起って来ないようにも思える。しかし、しかしである。此処で「物事の実相(眞実の姿)は唯一つである」という初めに帰ってみよう。すると何の疑問も起らぬ事が不思議に思えて来るではないか。唯一つの事を人々それぞれA B C D E F ……際限なく多様に見ていることになる。こんな変な、不合理な事はないと思わない人は、何

処かで、誰かに、何かに騙たぶされて いるのではないか。佛典法華經に次のように説かれて いる。「佛の言葉は異なることなし」佛と佛とのみいまして諸法の実相を究「尽す」と。

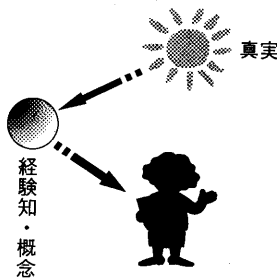
以上の真実一つ、それを見る目は十人十色の現実を日と月に譬たとえて説明してみよう。人にとってどんなに複雑に見える状況も、実は唯一つの真実である。複雑に見えるのは、人がそれを観察するのにいくつもの概念、即ち幾多の經驗知を総動員して尚不足と思うからであるに過ぎない。

真実は一つしかない事に変わりはない。その一つしかない真実を太陽に譬えよう。太古、人は太陽を直視して真実を直ちに見極めることが出来た。しかし或る時から、正確に言くと日本では二千年前、言霊の原理が隠没して以来、聖書で謂えばアダムとイヴが蛇へびに唆そとされて禁断の実を食べた(図162Aを参照)。月の光が太陽の光の月面による反射光なのだ、という事すら忘れてしまった。人は眼前の出来事が重要であればある程、自らの經驗知を総動員し、物事を月面の凸凹で反射させ、煩雑に、更に薄暗くして自らの

判断を狂わせて行つた。その結果、物事の処理には論争が付きものとなり、貧困、戦乱、狂気は世の常となった。人が真実を見なくなった結果である。

物事の觀察を煩雑にした理由はもう一つある。そもそも人間生命とは心でもなく、体でもない。心であり、同時に体でもあるもの、である。心と身体が別々にあるのではない。心身一体が生命である。この事を古事記神話は次の様に説いている。「天地初発の時、高天原に成りませる神の名は天の御中主の神(言霊ウ)。次に高御産巢日の神(言霊ア)。次に神産巢日の神(言霊ワ)。「人が何かをしようとす時、心の宇宙に何か分かれぬが一点の光が点る。言霊ウである。昔の人は言葉の事を神鳴り(雷鳴)と呼んだ。ゴロゴロと鳴る言葉の元はピカッと光る雷光である。言霊ウとはその雷光の初光だという事が出来る。この何か分かれぬ初光に人の思惟が加わると、

図 162-A



その瞬間、言靈ウの宇宙は剖判して言靈アとワの宇宙に分かれる。宇宙剖判である。主体と客体、私と貴方、初めと終わり、心と体、積極と消極、能動と受動……である。この消息を老子は「一、二を生し……」という。二は元々一であったものである。これを忘れて物事を分かれた二を出発点として考える時、生命の実相、物事の眞実は既に失われてしまう。人間の生命活動を片や、心、靈……等で見る時、または体、物、状況……等で観察する時、双方共眞実から離れた相を見ることとなる。眞実を見る為には、見たものを出発点、原点とした上で、憶測を^{なま}遠うしなければならなくなつた。眞実に到達不可能が常となる。元来一つのものを、見る者と見られる者、心と体、靈と体に分けて、そこから観察を始めてしまつた結果である。既に起つてしまつた状況をのみ観察し、そこからその事態を起こした人の心を憶測しても、眞実を再現することは難しい。また起つた状況の裏を靈視して物事を論^{あやつら}つても、「当るも八卦、当らぬも八卦」である。太古に於いては、靈能者の神懸りの傍には必ず眞実を見分ける眼を持った沙庭者^{さには}がいた事を忘れてはならないであろう。

以上述べたように人々は、日本に於いては二千年前、外

國に於いてはそれより更に前から、物事の眞実相を見る事を忘れて来た。それよりもつと悪い事には、人々は自分達が眞実の姿を見ていないのだという事に気付いていなくなつたのである。時はめぐり、人類の第二物質科学文明時代は終わろうとしている。科学文明創造のための方便として創出された生存競争社会はその終局を迎え、自己崩壊寸前の状況を呈している。この劫末の世を迎え、人々は自分たちが直面している世界の危機という眞実相を直視すべき時である。自分達が騙され続けて来た事に気付き、目を醒まさねばならぬ時となつたのだ。

ではどうしたら物事の眞実相を何らの媒介もなしで見る事が出来るか。更にその見ることが出来た眞実相を「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」の言葉で人に伝える事が出来るか。この問題を言靈学による人間精神の進化の事で説明しよう。

蝶はその一生の中で三態の変化を遂げる。幼虫、蛹、成虫(蝶)である。これを変態(metamorphosis)という。人間には一生の中で姿態の変化はない。けれど魂は五態の変化を遂げる。但しその変化は自然に変化するわけではない。魂の変態に対する意志と努力が必要である。魂の進化・変

態は次の様である。

人の心は五つの次元の宇宙に住む。その次元は進化の順に母音を当てるとウオアエイの五段階である。人はこの世に生を享けると先ず母親の乳を吸う。美味しいものが食べたい、美しい服が着たい、金持ちになりたい、名誉が欲しい……等、五官感覚に基づく欲望の次元であり、この次元の人間性能は言霊ウの宇宙から発現する。またこの性能が社会的に産業・経済活動となる。人の性能とはこの言霊ウだけだと思つて一生を終る人も多い。進化の次の段階は言霊オの宇宙から発現する学問・知識を求める性能である。言霊ウの世界で経験した事柄の間の関連法則を求めめることで、近代科学はその所産である。

進化の第三段階は言霊アの次元、これより発現する人間性能は感情であり、この感情性能の昇華は宗教・芸術活動となつて現れる。そしてこの次元の活動・努力の究極に於いて、人間の上述の三性能が発現して来る根元の宇宙の存在を知る。自らの生命の本体が宇宙そのものだ、と知る。人は今までの経験知の眼で物を見るのではなく、宇宙そのものの眼で見ることが出来る。この眼で見ることにより物事はその実相を現わす。人は月の媒介を通すことなく、直接

に太陽の真実相を真正面に見ることが出来るようになる。人は神の存在を知り、美の根源に出合う。仏教はこの次元の悟りを初地の仏と呼ぶ。

第四の進化段階は言霊エであり、これより発現する人間性能は、選択知、学問的には英智と呼ばれるものである。今まで出て来た第一、第二、第三段階の人間性能を、物事を処理する上でどの様に塩梅あはばしたらよいか、を選択する智慧である。この性能は第二番目の経験知が知識と呼ばれるのに対し、智慧といつて区別される。この次元から社会的には政治・道徳の分野の性能が現れて来る。

人間の魂の進化についてのこれまで四段階の説明は、厳密には言霊学に拠らずとも言及し得る所であるが、これより始まる精神分野は文字通り言霊学のみが解明し得る独特の心の領域である。この随筆のテーマ「太初に言あり」の言は言霊学による解明によつて初めて人間の自覚に達し得る言葉なのである。説明を進めよう。

人間精神進化の第五段階、最終段階は言霊イの次元である。この次元からは人間の意志、正確に言うと生命創造意志というべき性能が発現する。言霊ウオアエの四次元性能が社会の中でそれぞれの活動分野を持つているのに対し

て、この言靈イの性能は直接には世の中の現象として現れることはない。現れる事はないが、縁の下の力持ちの如く、人間の心の働きの奥にあって、ウオアエの性能を発現させる原動力となる。言靈イはその実際の働きである八つの父韻としてウオアエの四次元宇宙に働きかけ、人間精神の一切の活動現象の究極の要素である三十二個の子音を産む。

言靈学により人間精神の全体を示す五十音言靈図に於いて、言靈イは縦に五つの母音の締めくくりの存在として他の四母音を統轄し、横に八つの父韻の働きを発現させ、他の四母音に働きかけて三十二個の現象子音を生ぜしめる。

母音、半母音、父韻の先天構造の言靈十七個、その先天構造の活動によって生じる後天現象の要素三十二個、計四十九個の言靈(他にそれ等言靈音の神代文字化として一個)を、一個または数個結合させることによって言葉即実相、文字即涅槃ねはんと謂われる実相ズバリの言葉が形成される。言靈イとは母音宇宙の総師そうしであり、また八つの父韻の原動力であり、同時に人間生命活動に関して一切の物事にその名を附与する宇宙全体の創造主神なのである。言靈五十音はこの言靈イの次元に存在し、イの次元にはこの五十音言靈以外の存在はない。そしてこれ等五十音言靈とその法則に

よって創造された唯一の言語、それが古代日本語、大和言葉である。新約聖書ヨハネ伝の冒頭を飾る「太初に言あり」の言とは五十音言靈の事であり、その五十音によって組立てられた日本語こそが世界唯一の「物事の実相を何の説明も要せずそのまま人に伝えることが出来る言葉」なのである。

以上述べた最終段階言靈イの次元の意義・内容を踏まえて第四段階の二次元の説明を加えよう。先に言靈学によらない言靈エの選択英智を、言靈ウオアの人間性能を事件処理に当てどう塩梅するかは智恵と説明した。その際、塩梅する智恵は人それぞれに賦与された智恵であり、その智恵の一般共通の法則については言及しなかった。その理由は世の中にその普遍的法則を論じる教えや学問が極めて稀まれであり、あったとしても(易经の如く)その法則なるものは曖昧なものであった。しかし言靈学に於いては極めて嚴格に表示される。人の世の中に於ける四次元のウオアエの性能現象は、その母音に働きかけて現象を生む原動力となる八つの父韻の順序によって区別され決定される。それぞれの次元に対する働きかけの八父韻の順序に誤りがあれば、その次元の行為は成立しない。この法則は物質科学の法則

と同様の正確さを持つ。言霊母音ウオアエに働く八つの父韻の順序を列挙して置こう。言霊エの選択性能とは、実は母音に対して八父韻のどの配列を働きかけさせるか、を選択する性能のことなのである。

言霊ウの次元 ↓ キシチニヒミイリ

言霊オの次元 ↓ キチミヒシニイリ

言霊アの次元 ↓ チキリヒシニイミ

言霊エの次元 ↓ チキミヒリニイシ

以上新約聖書ヨハネ伝の冒頭に記された「太初に言あり」の言の実体を言霊学によって説明して来た。人間の生命活動の一切は人間精神の進化の最終段階にある生命創造意志の法則であるアイエオウ五十音言霊布斗麻邇の原理によって創生され、命名され、総合されて、人類社会が形成され、人類永遠の歴史創造へと繋がって行く。人間社会の良きものも悪しきものも、美しきも穢れたるも、合理も不合理も、強きも弱きも、すべてが「神と偕なる言」即ち言霊布斗麻邇の光の下に昇華されて、人類の栄光の歴史の中に生かされて行く。

「萬よろの物これによりて成り、成りたる物に一つとして之に

よらで成りたるはなし。之に生命いのちあり、この生命は人の光なりき」のヨハネの言葉は日本に復活した言霊布斗麻邇の学によって証明・成就される。
(終り)

【収載】第百六十二号(平成十三年十二月)

平成十四年

言霊学随想

●生命

心と体が一つになったものが生命であるのではない。生命が先ずあって、そこに人間の思惟が加わる時、生命が心と体に分かれるのである。分けるから分る。分けなければ永遠に分らない。これが人間の思惟の持つ業である。主体である心と客体である体を両方向に調べ、共に究極の構造に到達した時、初めてその構造が掌の表と裏として相似形を成す事が分る。この時、主と客双方の真理を踏まえ、心の原理である言霊の次元イ（親音）の自覚に立つ時、心と体を両輪とした生命それ自体を観想によって知る事が出来る。生命が生命を知るのである。古事記は伊耶那岐の大神と呼ぶ。

【収載】第百六十八号（平成十四年六月）

●言霊学と信仰

私の言霊学の師、小笠原孝次氏は言霊の学を学ぼうと師

の門を叩く人に対し「貴方は何か信仰をなさっていますか。信仰なさっているならその信仰を、なさっていないのなら貴方の身近な確かな信仰に入り、そのそれぞれの信仰を卒業して来て下さい」と告げるのが常であった。

信仰を卒業するとは如何なる事か。自力信仰で言えば、例えば仏教禅宗の「空」を自覚する事であろう。「色即是空、空即是色」と知って自らの心の本体が宇宙そのものであると知る事である。自我意識が実在ではなく現象であるとする事です。他力信仰で言えば、キリスト教や浄土真宗の謂う「信心の決定」のことであろう。「善人なを往生す、いかにいわんや悪人をや」と悪人正機を知り、弥陀の御手に深く抱かれて自分の事を知ることであり、またパウロの「今よりは我生くるに非ず、イエス・キリスト我が内にありて生くるなり」の如く、身の内にイエス・キリストの復活を知る事である。以上の如く「信仰の卒業」とは信仰の対象である神仏と自我が一体となること、仏教で言えば初地の仏となり、キリスト教ではアノインテットと呼ばれる境涯の事である。

信仰を持たずに一生を過ごすのも一つの人生である。信仰に身を捧げるのも一つの生の営みである。であるのに師

は何故言霊学を志す人々に信仰とそれよりの卒業を奨めたいのであろうか。今・此処に簡潔にその理由を解説し、布斗麻邇勉学者の参考に供することにしよう。主として二つの理由がある。

この世に生をうけてより自我の五官感覚に基づく欲望の追求に一生を費やす人、或いはその欲望追求の経験の間の法則を求めて学問探求を仕事とする人(言霊ウ・オの境涯)、またそれ等欲望と経験知識探究の生活の中の矛盾に気付き、信仰によって自らの心の種々の束縛から脱却して平安を望む人(言霊アの境涯)、それら言霊ウオアの境に在って努力する人々はその日、その時の雰囲気によって一喜一憂して心は揺れ動いている。揺れ動く自らの心で動いている社会を見ても、社会の真実の姿、所謂物事の真相を見極める事は困難である。この人達が物事の矛盾に遭遇する時、必ず喧々囂々の論争が捲ぎ起る。唯一つしかない物事の真相を見極める眼を持ち得ないが為である。

物事の真相を見るためには、自らの自我意識を形成する言霊ウ・オの経験知識と、自らの「救われたい」心の束縛を脱して、完全な心の安心、「我即宇宙」を実現することである。所謂言霊アの修業の卒業である。言霊アの修業からの

卒業は即、言霊学入学の門に通じている。人それぞれの持つ経験知識によって形成された視点から、人が生れた時から授かっている宇宙の視点に移行することが出来るのである。以上が第一の理由である。

言霊学の門をくぐると、それまでの信仰で神仏と呼んでいた信仰の対象が、言霊アの純粹の愛・慈悲の世界と、その世界の内容である言霊五十音とその法則である布斗麻邇の原理(言霊イ)と、その原理に基づいた人類文明創造の手段(言霊エ)という呼名に変わる。神と言ひ、仏と言ひ言葉が実はここ人類歴史三千年間の方便の世の假りの名であった事を知る。信仰に於て神仏として自己を超越した外に仰ぎ見たものが、実は自らが生来与えられていた五つの性能言霊母音イエアオウの宇宙であると知る。それは自らの心の住家である心の宇宙の構造を知ることである。

人間生来の性能の根元であるイエアオウ五母音が自らの心の住家であることを知る事によって、神仏を自らの外に信仰の対象として仰ぎ見ている時には自覚が不可能であった次の事項の認識が明らかに開ける可能性が生れて来る。

イ、キリスト教によって「父の名を崇めさせ給え」と祈り

の究極の願望であつた創造主の名が実は人間の心の最奥に働く生命創造意志、言霊イの實際の智性のリズム、言霊チイキミシリヒニであるとしり、その働きの内容を人間自身の心の中に内観することが出来る。

ロ、言霊父韻と母音との交流によつて生れ来る現象の真相単位三十二の子音の確認が可能となる。

ハ、人間の全精神構造を父韻・母音・子音の五十音図として自覚して、その原理の最高の活用法である人類歴史創造の手段である襖祓の大業を自覚し、皇祖皇宗の経綸に参画することが出来る。

ニ、人間の歴史創造の営みの一切は架空なる神仏の爲す業ではなく、平々凡々たる我等人間に課せられた崇高な使命であることを知る。

以上が先師小笠原孝次氏が言霊学を志す人々に示した「信仰を卒業して……」の第二の理由である。(以上)

【収載】第百六十九号(平成十四年七月)

●アイエオウ

夜更けて心静かに自らの言霊オウの心を見つめる。そこは欲望と経験知識が交錯し合い、煩惱交々起り、地獄相の中に心がのたうち廻っているのを見る。自らの力でこの地獄から抜け出る事など到底出来るものではないと知る。煩惱具足の凡夫、地獄は一定住家ぞかし(歎異抄)。地獄から抜け出し得ないと思ひ知つて、抜け出そうとする努力の精も根も燃え尽きてしまった。この時、小さい惨めな自分を肅然と照らしている光を仰ぐ事が出来る人は幸福である。「幸福なるかな、心貧しき者。天国はその人のものなり」(マタイ伝)。その光は言霊学によつて地獄の底まで照らす言霊アの愛といつくしみの光であると教えられる。更に言霊学は言霊アの心の内容として言霊イの生命(イの道)の原理とその法則を、またその法則に基づく言霊エの、この世の全存在を何一つ損う事なく撰取して人類文明創造に役立たせる実践の力をも教えてくれる。人の心の中にアイエオウの天之御柱が蔽かに立っている事を知る事が出来る。「煩惱の大海に入るに非ざれば、一切智の宝を得ることなし」(維摩経)。この天之御柱から見る時、自らが長い間もがき苦しんで来た言霊ウオの矛盾相が、姿そのままに生命の調和に包まれて合理的な営みなのであつたと知る。

この柱は皇祖宗宗の世界人類文明創造の原器である。第三生命文明の世はこの原理に基づいて創造される。それは平凡なる人間が平凡なるが故に許され、委属された人類救済の大業である。「日月の照らすを要せず、羔羊灯火なればなり」(黙示録)。羔羊の灯火とは五十音言靈布斗麻邇である。……夜明けは近い。

(以上)

【収載】第七十号(平成十四年八月)

●言葉と生命

仏教の禪宗に無字の行というのがある。「無門関」という本に「參禪は須らく祖師の関を透るべし、妙悟は心路を窮めて絶せんことを要す。……如何が是祖師の関。只だ者の一箇の無の字、及ち宗門の一関なり」とある。無字の行とは、どんな行なのであろうか。

人はこの世に生まれて来た時には何らの知識も持たない。自我意識もない。生長するにつれて「ああすれば、こうなる。こうすれば、ああなる」という経験知識を身につける。更に大きくなると、その身につけた経験知識の総合体を自我だと思ひ込む。と同時に何事の判断もその自我の経験知識を基準として生活するようになる。ところが、経

験知識は人によって千差万別である。だから物事の判断も人によって違って来る。論争が起り、論争はお互いの自我意識を強め、闘争が激しくなる。小は夫婦間の争いから、大にしては国家間の戦争をも惹起する。人間の悩みの原因は大方其処にあらう。

自我意識が本来の人自体であるのではない。人は宇宙から生まれた宇宙の子である。神の子、仏の子である。自我意識とは生まれてから身につけた経験知識の総合体を自身だと錯覚した虚妄の自分であるに過ぎない。禪宗の無字の行とは、心中に蟠るこの自我意識を構成する自分自身につけた経験知識を「無」と否定して行く事である。心が覚え、信用して考えごとの鏡とした経験知識を一つ一つ否定し、終には生まれたままの赤ん坊の心に帰って行く退歩の学問である。

さて自分の心中にある経験知に対し「無」の否定を始めようとすると、「自分がよいと思つて集めた知識なのだから、否定する事もそんな難しい事ではあるまい」と大方の人は思う。しかし実行して見ると中々そうは行かない。「人前でお世辞を振り撒く程卑劣な事はないと思う。だからそういう人を見ると、途端に不愉快になった。しかし今、考え

て見ると一概には悪い事と断定出来ないのかも知れぬと反省するようになった。けれど、お世辞タラタラの人を目前にするると依然として不愉快になってしまふ」という様な事は誰もが思い当たる事である。反省し、心の中で自分の一つの経験知に対して「無」と命令しても、そう容易に「はい、左様ですか」と承知してはくれない。経験知識を集めて身につける事より、それを反省によって否定することの方がむしろ大変な行なのかも知れない、とそこで気が付くのである。

お世辞がどうの、こうのという社交道徳ですらかくの如しである。自分が一生を通して心中に築き上げた信仰・信念・信条等の否定に至っては、その困難は思い知られよう。「自分の信仰・信条も無字の対象としなければならぬのか」と驚く方もいるかも知れない。しかし無字の修行から言えば、どんな立派な信念・信条でも、それが立派だと思えば思う程、その否定は大切なのである。如何に立派な事でも、それが胸中にある限り、無字で言う「無一物」ではあり得ないし、「汝等、ひろがえ翻りて幼児の如くならざれば、天国に入るを得ず」(マタイ伝)の幼児にはなり得ないからである。

自分の心の中にある経験知識を「もうお前は使わないよ」と宣言しただけでは済まない。努力・工夫を要する行である事を御理解頂けた事と思う。ある事を信じるのも容易な事でないと同様に、それを心中に否定することも簡単には成し遂げることは出来ない^と知る事が出来る。他人の心の中なら兎も角、自分の心の中の存在を否定するのに四苦八苦するのは何故なのか。この事実^に思いを凝らし、検討を続ける行手に「言葉と生命」という命題が顔をのぞかせて来る事となる、という事を申し上げて、先ずは次の問題に入る事にしよう。

今までは無字の行を始めた時の人の思いについての話であったが、次に人がある経験知識を否定し、自分の意志が促さぬ限り、その知識が自らの心の主屋を占領することがなくなつた時の事を考えてみよう。「親に孝行する事は人の道である」の信条を持つた人がいた。親に不孝をする人を見ると「人非人」と罵ののしつた。反省によって「親への孝」の思いは自分に言いさかず言葉であつて、人を責める為のものではない、と知つた。この変化の心情から、自分が「孝行」と思つて行つた行為が必ずしも親にとって良き事ばかりではなかつた事にも気が付いた。他人の親に対する態度

の見方も幅広く、柔軟なものに変わって来たのである。その人自身が「親に孝」の觀念の束縛から解放された結果という事が出来る。

仏の教えに「煩惱即菩提」の言葉がある。虚妄の自我から主張され、他との争いの原因となる各自の經驗知識(煩惱)も、無字の反省によって、退歩の学によって悟った本来の自己、宇宙の子、神仏の子としての眼で見るならば、その經驗知識は、形も内容も一切そのままで菩提の言葉に生まれ変わる、というのである。林の中の枝が垂れ下がった暗い、気味悪い夜の道も、朝日が昇れば新緑もまばゆい、氣持のよい散歩道だと知る事が出来る。

これまで日常生活の苦惱、所謂煩惱からの脱却を言靈アの宗教信仰の立場から検討を試みて来た。それはまた言靈学の門に入る必要条件としての行でもあった。これからは言靈学の立場即ち言靈エイの次元からこのア字・無字の修行を見直してみよう。

古神道言靈学は死を説く事がない。死はないからである。では人が肉体を失った後の生とは何か。言葉である。肉体を持っていた時にその人が発した言葉として永遠の生を生きる事となる。何処に生きるか。現在に生きる人々の心の

中に、正確にはその心の今・此処に生きるものである。心に蟠る經驗知識を無字によって否定しようとしても、容易に主屋から引き下がることのないのは、それが単なる知識であるのではなく、心中に生きる先輩諸氏の生きた言葉であるからだ。忠孝の道德の知識は二千年余以前の中国の孔子の儒教の心である。孔子がその人の中に住んで、言葉として生きているのである。社会主義一辺倒の人の心中にはマルクス、エンゲルスが住んでいる。その他、地球上に肉体を持っていた人々はすべてが同様に言葉として現在の中今に永遠の生を生き続けているのである。人は決して死ぬ事はない。この事実を煩惱否定の行の中で言靈学が教えてくれるのである。

無字の宗教修行によって自我意識を超える時、言靈アの愛の光の中に自我意識を形成していた言靈ウオが包まれていた事を知る。人間天与の判断力の柱が言靈ウオアと立つた事である。人は宇宙の子、神の子であると知る。しかしこの宇宙の子、神の子と思う人類意識から社会活動を始める時、活動の根柢をその時まで否定して来た各自の經驗知識に再び置かねばならない。信ずべき宇宙、神、仏の内容は曖昧であり、人により、宗派により悉く相違するからで

ある。ア次元の愛だけでは個人は導く事は出来ても、人類の文明創造の先導者となることは不可能なのだ。これを言霊学から見ると如何になるであろうか。信仰の行でウオアの心の柱が立つ時、言霊学ではそのア次元の光の内容である言霊イの五十音言霊と、言霊エのその言霊布斗麻邇の原理の活用法を同時に知ることとなる。言霊ウオアエイと並ぶ人間の心の進化の全段階の自覚が完成する。言霊イとエは人類文明創造の原理である。それ故に人類一万年の歴史の真相を知る事が出来る。この時、人々は宇宙の子、神の子であると同時に、日本の皇祖皇宗の人類文明創造の役割を分担している命であり、同志である事を知る事が出来る。宗教に於ける個人の「安心」と同時に、言霊学によって人類愛に根差した第三文明時代創造の使命(命)をも自覚することが出来る。

更に言霊字に根差したア字(無字)の行は、宗教的な行が単に虚なる自我意識よりする煩惱の克服であるのに対し、その自我意識の内容である諸種の経験知識がそのままの姿で、自らの言霊イの道、即ち生命の躍動する内容であり、糧であるとする事が出来る。自らの生命とは人類の過去一切の行為の表徴であり、記録である言葉の総合体なのであり、

自分自らが全人類の生命と一つなのだという自覚に導いてくれる。これは取りも直さず天津日嗣スメラミコト(天皇)の出現である。

また更に、古事記神代巻の禊祓の原理に基づき、人が言霊アイエオウの天之御柱の自覚の下に、全世界各地で生産される諸文化の一切を自らの精神的身体(御身)とし、その自らの禊祓(文明創造)を行う時、即ち生命がイの道(言霊イ)に基づく言霊エの実践)の実行に入る時、その人は自らの生命の内容と真相を自らの中に直観する事が出来る。生命が自らを知るのである。そしてその生命とは言葉であり、言霊なのである事を知る事となる。ヨハネ伝の「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」は此処に於て実現する。言葉こそ生命なのである。(終わり)

【収載】第百七十三号(平成十四年十一月)

著者略歴

島田正路 しまだまさみち

1925年 東京銀座生まれ

1963年 故小笠原孝次氏に師事し言霊学を学ぶ

1987年 「言霊」著出版（絶版のため文中の「言霊」参照部分は
他既刊書参照）

1988年 「言霊の会」創立、毎月会報発行

1995年 「古事記と言霊」著出版

1999年 「コトタマ学入門」著出版

2007年 「コトタマ学 会報集成書 上巻・下巻」著出版

2009年 12月28日没。享年84歳

コトタマ学 会報集成書下巻

第百号（平成8年10月号）～ 第百七十三号（平成14年11月号）

平成19年7月23日 第一版発行

平成24年2月23日 第二版

著者 島田正路

発行所 言霊の会

〒145-0062 東京都大田区北千束1-14-14

電話 03-3723-1105

振替 00120-3-653594 言霊の会

HP <http://www.futomani.sakura.ne.jp>

印刷所 昇美印刷株式会社

Copyright©2007 Masamichi Shimada

落丁・乱丁はお取替えいたします。